奇跡爆発！ 90年代マット界に学ぶガオ！

kamipro

紙のプロレス

MMA & PRO-WRESTLING

enterbrain MOOK

2010
146
特別定価940yen

『1993年の女子プロレス』に真打ち登場！

国民的主婦が
デンジャラス・クイーンと
呼ばれていた頃——。

北斗晶

明るく、楽しく、激しかったゴールデン時代

199X

武藤敬司

福澤朗

小島聡

金原弘光×高山善廣×エンセン井上

U・ドラゴン×T・G・サスケ

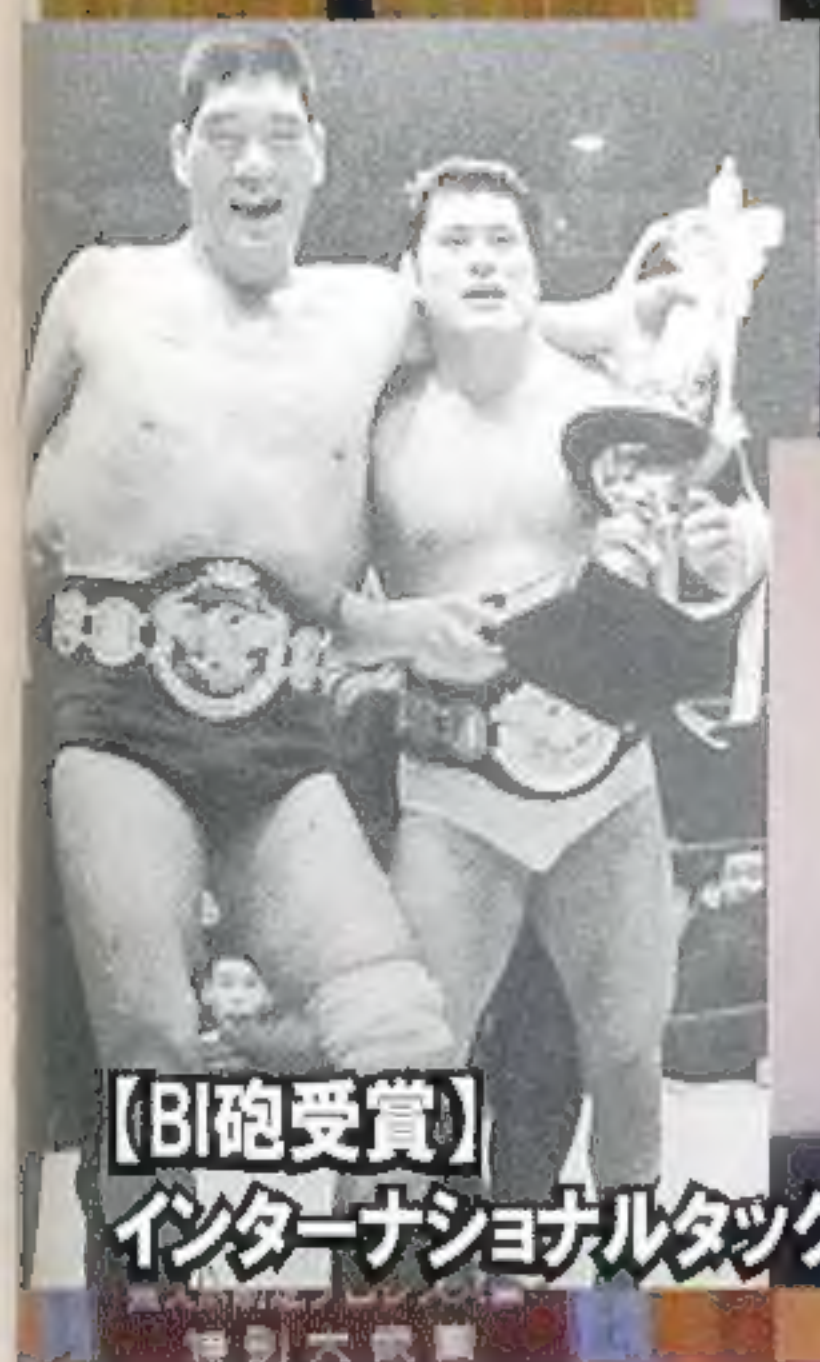
玉ちゃんの変態座談会

山田英司

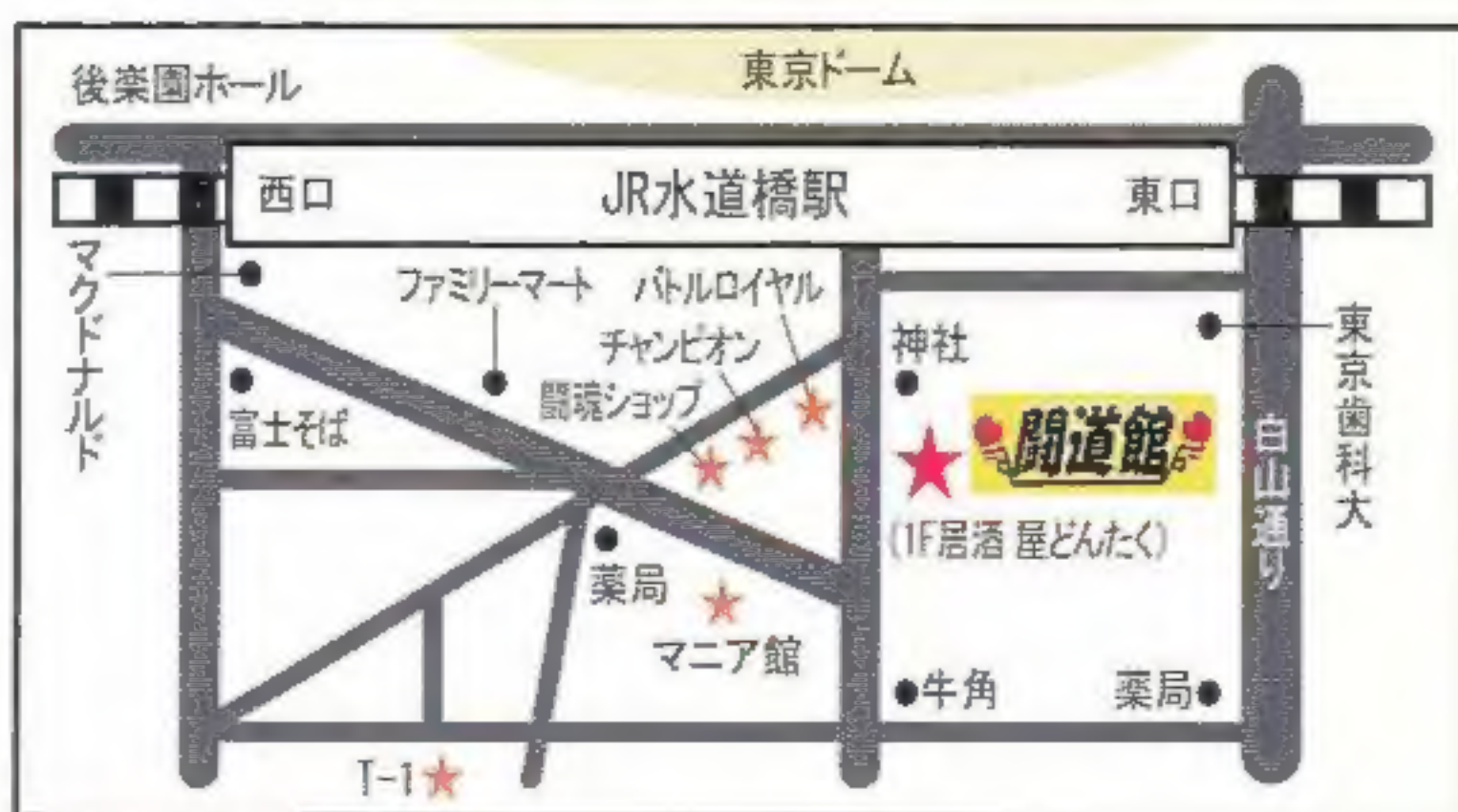
杉作J太郎

田村潔司

デビル雅美

伊藤政則

後楽園ホール
東京ドーム
西口
JR水道橋駅
東口
マクドナルド
ファミリーマート
バトルロイヤル
チャンピオン
闘魂ショップ
富士そば
神社
闘道館
(1F居酒屋どんたく)
東京歯科大
白山通り
薬局
マニア館
牛角
薬局
T-1

格闘技プロレス買取販売!世界最強の品揃え!
闘道館

2010 No.146 CONTENTS

表紙写真／道忠之　表紙イラスト／五木田智央

特集 90年代

麗しのマット界黄金時代にジャストミート！

90's

kamipro Special

Columns

明るく、楽しく、激しかった黄金時代

イチ・イチ・キュウ・ゼロ!! 今号の特集テーマは「1

破壊と建設のエンターテインメント1990年代

イチ・イチ・キュウ・ゼロ!! 今号の特集テーマは「１９９０年代のプロレス・格闘技」です！

90年代といえば、現時点でプロレス最後の黄金期であり、一方、格闘技はプロ興行が確立されていった時代でした。

プロレスからは昭和のストロングスタイルの風景は遠くに消え、四天王プロレスの激しさはあのジャイアント馬場に「（凄すぎて）解説できない」と言わしめた。ドームプロレスやインディー団体など、百花繚乱のプロレス模様が見えました。

格闘技はプロレスから格闘技への展開を図るダイナミズムに満ちあふれていた。アマチュアに目を向けると、実力はありながら「さまよえる格闘家」と呼ばれた男たちの炎がふつふつと燃えたぎり、ヤオガチ論争で便所に監禁されたマスコミもいた。とかくド熱い時代――。プロレスも、格闘技も、既存の価値観を次々と破壊し、新しい価値観が続々と生み出されていった。

つまり、90年代のプロレスと格闘技の両方に通じるのは「破壊と建設」のおもしろさであったと言える。ただ破壊していったわけではない。建設を含んだ破壊だったから充分に見応えがあったのだ。

２０１０年現在のプロレス格闘技はどちらも煮詰まった状況にある。ただ破壊している、壊してると評されても不思議ではないが、いまこそ90年代の建設と破壊から何かを学ぶべきだ。明るく、楽しく、激しかったゴールデン時代から――!!

ノストラダムスも予測不能だった世紀末！ あの素晴らしい10年間をもう一度!!

マット界クロニクル 1990-1999

協力／buggy近藤

90

- 3・1 ユニバーサル・レスリング連盟旗揚げ。
- 8・4 FMWで世界初のノーロープ有刺鉄線電流爆破デスマッチ、大仁田厚vsターザン後藤が行なわれる。
- 10・18 天龍源一郎を中心にSWSが横浜アリーナ2連戦で旗揚げ。
- 12・1 UWFの松本大会で出場停止中の前田日明を交え、「一致団結をアピール。しかし、これが同団体の最終興行となる。
- 12・2 猪木がイラクのバグダッドで平和の祭典を開催。

91

- 3・4 藤原喜明を中心に藤原組旗揚げ。
- 4・1 北尾光司がSWS神戸大会でジョン・テンタに「八百長野郎」発言。
- 5・10 髙田延彦を中心にUWFインターナショナル旗揚げ。
- 5・11 前田日明を中心にリングス旗揚げ。
- 6・21 世界格闘技連盟W★ING旗揚げ。
- 8・11 蝶野正洋が第1回G1クライマックスを制覇。
- 12・7 正道会館の佐竹雅昭、角田信朗がリングスに初参戦。

92

- 2・9 松永光弘が後楽園ホールでバルコニーダイブを敢行。
- 6・19 SWSが長崎大会を最後に解散。
- 7・14 天龍を中心にWAR旗揚げ。
- 8・22 三沢光晴がスタン・ハンセンを下して三冠ヘビー級王座初戴冠。
- 10・23 髙田が北尾からハイキックでKO勝利。

93

- 3・16 ザ・グレート・サスケらがみちのくプロレス旗揚げ。
- 4・2 全日本女子プロレスを中心に夢のオールスター戦開催、神取との死闘を制した北斗晶がブレイク。
- 4・30 K—1グランプリ初開催、ブランコ・シカティックが初代王者となる。
- 5・3 新日が福岡ドームに初進出。
- 6・25 佐竹がドン・中矢・ニールセンを下す。
- 8・2 新日が両国7連戦を開催。
- 9・21 船木誠勝を中心にパンクラス旗揚げ。
- 11・11 第1回UFCがコロラド州デンバーで開催。ホイス・グレイシーがトーナメントで優勝。
- 12・5 Uインターが神宮球場初進出、髙田がベイダーを破る。

94

- 1・4 天龍が猪木に勝利、BI砲をフォールした唯一の日本人となる。
- 2・15 Uインターが一億円を積んで記者会見。他団体エースにトーナメント出場を呼びかけるが、誰も参加せず。
- 3・2 WAR両国大会に大仁田が参戦、タッグマッチで天龍にフォール勝ちを収める。
- 4・3 安生洋二が「いまの前田日明には200％勝てる」と発言。
- 4・16 新日がジュニアオールスター戦「スーパーJカップ」を開催。サスケやハヤブサなどインディー勢が活躍する。
- 5・1 猪木がファイナルカウントダウン開始。初戦でグレート・ムタを破る。
- 5・5 FMW川崎大会で天龍が大仁田にノーロープ有刺鉄線金網電流爆破デスマッチで勝利。大仁田は1年後の引退を宣言。
- 5・7 WWFが横浜、名古屋、大阪、札幌の4都市で『マニア・ツアー』を開催するが、どの会場も閑古鳥が鳴く結果に。
- 7・29 バーリ・トゥード・ジャパンでヒクソン・グレイシーが初来日。
- 11・20 全女が最初で最後の東京ドーム大会開催、V☆TOP WOMAN日本選手権トーナメントで北斗晶が優勝。
- 12・7 安生洋二がヒクソンに道場破りを仕掛けるが返り討ちに。
- 12・10 K—1のリングで初の金網によるバーリ・トゥードマッチが行なわれる（キモvsパトリック・スミス）。
- 12・17 パンクラスが両国2連戦で初代キング・オブ・パンクラシスト決定トーナメント開催、フランク・シャムロックが王者に。

95

- 4・2 『週刊プロレス』が国内13団体を集めて、東京ドームで「夢の懸け橋」を開催。
- 4・20 バリジャパでリングスの山本宜久がヒクソンに敗北する。
- 4・28 猪木が「平和のための平壌国際スポーツ・文化祭典」を開催。2日間の興行で38万人を動員する。

社会の出来事

90

- 2・14 ローリング・ストーンズが初来日コンサート。
- 3・15 ミハイル・ゴルバチョフがソ連の初代大統領になる。
- 3・26 映画監督の黒澤明が米アカデミー賞特別名誉賞を受賞。
- 7・28 アルベルト・フジモリがペルーの大統領に就任する。
- 8・2 イラクがクウェートに侵攻を開始する。
- 10・3 西ドイツに東ドイツが編入されるかたちでドイツが統一。
- 11・21 任天堂製造のゲーム機スーパーファミコンが発売される。
- 12・2 秋山豊寛が日本人初の宇宙飛行士となる。

91

- 1・17 多国籍軍のイラク空爆開始により湾岸戦争勃発。
- 4・1 日本で牛肉・オレンジ輸入自由化が始まる。
- 5・15 お立ち台ディスコのジュリアナ東京がオープン。
- 6・3 雲仙普賢岳で大火砕流が発生。
- 6・17 南アフリカ共和国でアパルトヘイトが廃止される。
- 10・14 ミャンマーのアウン・サン・スーチーがノーベル平和賞を受賞。
- 11・24 クイーンのフレディ・マーキュリーが死去。
- 12・25 ソビエト連邦が崩壊、ゴルバチョフ大統領辞任。

92

- 4・25 シンガーソングライターの尾崎豊が死去。
- 6・15 日本でPKO法が成立する。
- 7・5 「電波少年」シリーズが放送スタート。
- 7・25 バルセロナオリンピックが開催。柔道で吉田秀彦が金、小川直也は銀メダルを獲得。
- 8・24 韓国と中華人民共和国が国交樹立。
- 10・23 天皇・皇后両陛下が初の中国訪問。

93

- 1・20 ビル・クリントンがアメリカ大統領に就任。
- 1・27 曙が外国人力士として初めて横綱に昇進。
- 5・15 サッカーのJリーグが開幕。
- 5・29 北朝鮮がノドン1号を試射。
- 8・9 非自民・非共産連立政権である細川内閣が発足、これにより55年体制が崩壊する。

94

- 4・8 ニルヴァーナのボーカル、カート・コバーンが死去。
- 4・28 羽田孜内閣が成立。
- 5・1 F1・サンマリノGPでアイルトン・セナが事故死。
- 6・27 オウム真理教によって松本サリン事件が起こる。
- 6・30 自民、社会、さきがけ3党の連立による村山富市内閣が成立。
- 7・8 北朝鮮の国家主席である金日成が死去。
- 10・13 大江健三郎がノーベル文学賞を受賞する。
- 11・22 セガがセガサターンを発売する。
- 12・3 ソニー・コンピュータエンタテインメントがプレイステーション発売する。

95

- 1・1 世界貿易機関（WTO）が発足。
- 1・17 兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）が発生する。
- 3・20 オウム真理教によって地下鉄サリン事件が起こる。
- 4・9 青島幸男が東京都知事に、横山ノックが大阪府知事にそれぞれ当選。
- 5・16 オウム真理教の教祖、麻原彰晃こと松本智津夫逮捕。
- 8・8 村山内閣改造内閣が発足する。

マット界の出来事

12・10 K—1のリングで初の金網によるバーリ・トゥードマッチが行なわれる（キモ vs パトリック・スミス）。
12・17 パンクラスが両国2連戦で初代キング・オブ・パンクラシスト決定トーナメント開催、フランク・シャムロックが王者に。

95

4・2 『週刊プロレス』が国内13団体を集めて、東京ドームで「夢の懸け橋」を開催。
4・20 パリジャパでリングスの山本宣久がヒクソンに敗北する。
4・28 猪木が「平和のための平壌国際スポーツ・文化祭典」を開催。2日間の興行で38万人を動員する。
5・5 大仁田がハヤブサを相手に引退試合を行なう。
7・23 馳浩が参院選で当選。同じく出馬した猪木、高田は落選する。
10・9 東京ドームで新日vsUインター全面対抗戦。武藤が高田に勝利。
12・9 当時Uインター所属だった田村潔司が、K—1のリングでパトリック・スミスにアルティメットルールで勝利。

96

4・13 石川雄規を中心に格闘探偵団バトラーツ旗揚げ。
3・10 K—1にミルコ・タイガー（現・クロコップ）が初参戦、ジェロム・レ・バンナに勝利。
7・22 小橋健太（現・建太）が田上明を下し三冠ヘビー級王座初戴冠。
9・11 Uインターに川田利明が初参戦、高山善廣から勝利を収める。
10・18 K—1がテレビでゴールデンタイムに初の生中継。
11・16 新日を退団した馳が全日に入団。
12・11 FMWの駒沢大会で大仁田が1年7カ月ぶりにカムバック。
12・27 後楽園ホール大会を最後にUインターが活動を停止。

97

2・2 WCW帰りの蝶野がnWoジャパンを結成。以降、空前のnWoブームを巻き起こす。
2・7 高橋義生がUFCでヴァリッジ・イズマイウを敗る。
4・12 小川直也が東京ドームでプロデビュー、橋本真也から勝利。
5・4 元Uインター勢がキングダムを旗揚げ。
5・14 高木三四郎を中心にDDT旗揚げ。
5・11 ウルティモ・ドラゴンが闘龍門を旗揚げ。
8・2 全女の武道館大会中に井上京子らがフリー宣言。これを端緒として経営不安が表面化、選手の離脱が相次ぐ。
10・11 『PRIDE・1』で高田がヒクソンに敗れる。
12・21 『UFC in JAPAN』で桜庭がマーカス・コナンを破り、「プロレスラーは本当は強いんです」と発言。
12・21 リングス福岡大会で田村が前田を破る。

98

1・4 長州力が東京ドームの5人掛けマッチで引退。
3・15 桜庭がPRIDE初参戦、ヴァーノン・"タイガー"・ホワイトを破る。
2・18 元・全女の広報だった小川宏がアルシオンを旗揚げ。
4・4 アントニオ猪木が東京ドームのドン・フライ戦で引退。
4・30 冬木弘道が大仁田を破り、これ以降FMWはエンタメ路線へ。
5・1 全日が初の東京ドーム大会を開催、メインで川田が三沢を下す。
7・18 小川が安生とK—1のリングでUFO特別ルールで対戦、反則負けとなる。
9・7 K—1が「ジャパンシリーズ」の定期開催、および日本テレビでの放送を発表。
10・11 高田が『PRIDE・4』でヒクソンと再戦するも返り討ちに遭う。
10・24 UFOが小川をエースに両国国技館で旗揚げ。
11・28 大仁田が新日に殴り込みをかけ、長州に対戦を迫る。

99

1・4 小川が橋本にセメントマッチを仕掛け、試合後に大乱闘に発展（結果は無効試合）。
1・31 ジャイアント馬場が入院先の病院で逝去（享年61）。
2・20 ジャンボ鶴田が引退を発表。
2・21 前田がアレキサンダー・カレリン戦で引退。
4・10 蝶野vs大仁田で新日本プロレスが初の電流爆破デスマッチを行なう。
4・29 みちのくを退団したスペル・デルフィンらが大阪プロレス旗揚げ。
5・3 三沢が全日の新社長に就任。
6・24 藤波辰爾が新日の新社長に就任。
5・29 宇野薫が佐藤ルミナを修斗世界ウェルター級王座決定戦で破る。
7・4 小川がPRIDE初参戦、ゲーリー・グッドリッジを破る。
10・3 佐竹雅昭が武蔵戦での判定を不服としてK—1撤退発言。
11・14 『UFC—J』の会場で安生による前田襲撃事件が勃発。
11・21 桜庭が『PRIDE・8』でホイラー・グレイシーを破る。

1・1 世界貿易機関（WTO）が発足。
1・17 兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）が発生する。

95

3・20 オウム真理教によって地下鉄サリン事件が起こる。
4・9 青島幸男が東京都知事に、横山ノックが大阪府知事にそれぞれ当選。
5・16 オウム真理教の教祖、麻原彰晃こと松本智津夫逮捕。
8・8 村山内閣改造内閣が発足する。
8・25 マイクロソフトがWindows95英語版を発売する。
11・4 イスラエルのラビン首相が暗殺される。
12・8 高速増殖原型炉「もんじゅ」のナトリウム漏洩事故が発生する。

96

1・11 橋本龍太郎内閣が成立。
2・14 羽生善治が史上初、将棋のタイトル七冠達成。
2・16 菅直人厚生大臣が薬害エイズで血友病患者に直接謝罪。
6・21 セックスピストルズが再結成される。
6・23 任天堂がNINTENDO64を発売開始。
7・3 ボリス・エリツィンがロシア大統領に就任。
7・5 世界初のクローン羊「ドリー」がスコットランドで生まれる。
7・19 アトランタオリンピックが開催される。日本は金3、銀6、銅5のメダル獲得。
9・28 民主党結成、菅直人と鳩山由紀夫が代表人を務める。
12・17 ペルー日本大使公邸人質事件が発生する。

97

2・10 神戸連続児童殺傷事件（通称・酒鬼薔薇事件）が起こる。
2・19 事実上の中華人民共和国の最高権力者、鄧小平が死去。
4・1 消費税が3%から5%に増税される。
4・13 タイガー・ウッズ、黒人初のゴルフ・マスターズ・トーナメント優勝をはたす。
7・12 映画「もののけ姫」（宮崎駿監督）が劇場公開される。
8・31 ダイアナ皇太子妃が交通事故で死去。
11・16 サッカー日本代表がW杯初出場を決める（ジョホールバルの歓喜）。
11・24 山一證券が自主廃業する。
12・1 地球温暖化防止京都会議が開催される。

98

2・7 長野で冬季オリンピックが開催される。
4・1 日本版金融ビッグバンがスタートする。
4・10 北アイルランドとイギリスが和平合意。
5・5 インドネシアで暴動発生。
5・11 インドで24年ぶり2度目の核実験を実施。
5・28 パキスタンがインドに対抗して初の核実験。
6・27 クリントン米大統領が北京訪問。
7・25 和歌山毒物カレー事件が発生する。
7・30 小渕恵三内閣が成立。
8・22 夏の甲子園において、横浜高校の松坂大輔が、史上二人目となる決勝戦でのノーヒットノーランを達成。
8・31 北朝鮮がテポドン発射、三陸沖に着弾する。
9・6 映画監督の黒澤明が死去。
11・27 セガがドリームキャストを発売。

99

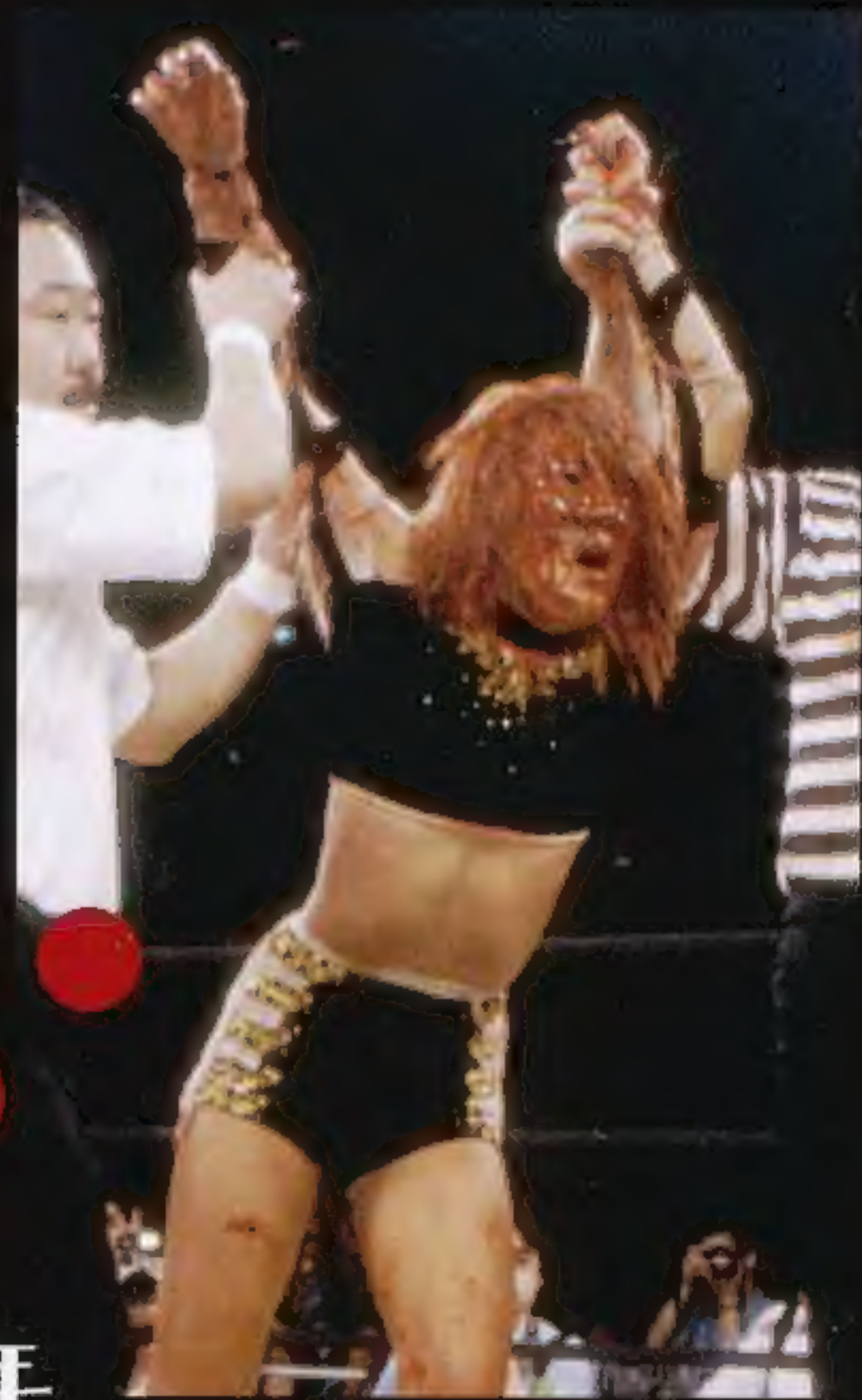
1・1 欧州連合に加盟する11カ国で、ユーロが銀行間取り引きなどの通貨として導入される。
1・25 コロンビアで大地震。死者1000人以上。
3・3 日本銀行がゼロ金利政策を実施。
3・24 コソボ紛争への制裁のため、NATO軍がユーゴスラビアを空爆。
4・11 石原慎太郎が東京都知事に当選。
4・20 アメリカ合衆国コロラド州の高校で、生徒二人が銃を乱射し、のちに自殺（コロンバイン高校銃乱射事件）。
6・1 ソニーが子犬型ペットロボット「AIBO」の発売を開始。
7・23 全日空61便ハイジャック事件が起こる。
9・8 池袋通り魔殺人事件が発生。男が通行人を次々に襲い二人死亡、6人が重軽傷。
12・9 歌手の宇多田ヒカルがデビュー。ファーストアルバム『First Love』が売り上げ日本新記録を樹立。
12・31 エリツィンが大統領を辞任。

『1993年の女子プロレス』に

真打ち登場！

北斗晶の対戦相手は、かつてジャッ
言いました。
ったらそう言ってください。
プロレスやってた頃は。でもそれは
は、それがかえっておもしろかった

アタシがデンジャラス・クイーンと呼ばれていた頃

1993年の女子プロレス

北斗晶

「1993年の女子プロレス」についに真打ち登場! 誰かといえば、いまや国民的主婦タレントとしてテレビ等で大活躍の北斗晶である。東京ドーム、横浜アリーナ、両国国技館とビッグマッチを連発した90年代前半の女子プロシーンにおける象徴的存在ともいえる北斗が"デンジャラス・クイーン"と呼ばれた女子プロ時代を赤裸々告白! もちろん、聞き手は熱狂的な北斗ファンとしても知られる柳澤健氏です!!

聞き手/柳澤健 構成/阿修羅チョロ 撮影/渞忠之 試合写真/平工幸雄

1993年当時の全日本女子プロレスは、男子を含めても、間違いなく世界一の団体でした。

何千人もの応募者のなかから選ばれ、年間200試合以上を闘うハードな旅のなかで鍛え上げられたエリートたちが、己のプライドのすべてを懸けてトップを目指します。

すでにトップにいる者は、その地位を守るために危険な技をあえて繰り出し、トップを目指す者はそのために重傷を負い、ときには生命の危機にまで直面しても、くじけることなく「リングの上で死んでもいい!」と覚悟を決めて復帰してきます。

これはもう〝仕事〟ではありません。男には、そんな恐ろしいことはできません(小橋建太は例外)。全女を観るということは、「仕事を超えた恐ろしい何か」を観ることであり、一度観てしまえば、その危険な魅力から離れることはできないのです。

団体対抗戦は、閉鎖された空間のなかで陰惨な闘いを強いられてきた全女の選手たちを解放しました。

全女の選手たちは、体格、身体能力、経験、スタミナのすべてが劣る他団体の選手たちを自在に操り、翻弄して、プロレスの楽しさを存分に味わいました。

「全女がイチバン!」であることは誰の目にもあきらかでした。けれども、他団体と闘うときの全女の選手たちは、全女内部で闘うときに比較して、どこか弛緩していたことも確かです。

そんななか、ただ一人凄まじい緊張感を漂わせていたのが北斗晶でした。

1993年4月2日・横浜アリーナで行なわれた夢のオールスター戦。

女子プロでいじめたりするのは
トップじゃなくハンパなヤツら

北斗晶の対戦相手は、かつてジャッキー佐藤をリング上で完膚なきまでに叩きのめし、文字どおり「心を折って」引退に追い込んだ神取忍でした。

誰もが認める柔道の実力者を相手に、北斗はプロレスの技をほとんど使わず、殴る蹴るだけで闘いを挑みました。放送席の机の上でパイルドライバーを食らい、大量に出血した北斗でしたが、パンチの応酬の末に、ついに神取をフォールします。

3カウント。観客は北斗の勝利を喜ぶというよりも、むしろ神取の敗北に驚きました。会場が静まり返るなか、マイクを渡された北斗の悲鳴にも似た声が響きます。

「神取、聞こえるか。おまえにはプロレスの心がない。プロレスは、プロレスを愛する者しかできない。柔道かぶれのおまえに負けてたまるか！」

当時『スポーツ・グラフィック・ナンバー（Number）』編集部に在籍していた筆者は、北斗の言葉に衝撃を受け、『Number』で女子プロレス特集を作ることになります。

インタビューと写真撮影を行なったのは、北斗が神取との再戦に敗れた数日後でした。

いま皆さんがご覧になっている『kamipro』の表紙写真は、そのとき、消忠之カメラマンが撮影したものです。

インタビューのなかで北斗はこう言いました。

「1993年の女子プロレスは、これからもずっと語り継がれると思うし、そのときには私と神取の名前が必ず出る」

あれから17年以上が経ちました。

現在、筆者は『kamipro』誌上で「1993年の女子プロレス」という連載を続けています。

北斗晶は正しかったのです。

北斗 （練習生のプロテストを終え、事務所に駆け込んできて）遅くなってゴメンねー！

——いえいえ、忙しいところをありがとうございます。今回の『kamipro』は90年代特集ということで表紙が北斗さんなんですよ。私が『Number』の編集部にいた頃に北斗さんが表紙で女子プロ特集を作ったんですが、そのときの写真なんです。

北斗 （当時の『Number』を見ながら）若いねえ、アタシ（笑）。腹の肉もないなぁ……（しみじみと）。

——アハハハハハ！

北斗 でもアタシ、女子プロレスのこと詳しくないんだけど、大丈夫？

大丈夫です。全女時代のことを聞かれるのはうれしくないですか？

北斗 いや、べつに大丈夫ですよ。

——僕は、いわゆるプロレスマスコミの人間ではないので「そんなこと聞くなよ」という常識みたいな線がわからないので、答えられない質問だったらそう言ってください。

北斗 たぶん、アタシは誰よりもプロレスを知らない人の取材を受けてますから。一般世間のママ雑誌から赤ちゃん雑誌まで取材を受けてるんで大丈夫です（笑）。

——そうですよね（笑）。早速ですが、たとえば長与（千種）さんは女子中高生のスターだったけど、長与さんは最後まで嫌だったのは、男性ファンにプロレスを観てもらえなかったことだと聞きました。逆に北斗さんは、プロレス界のなかではカリスマだったんですけど、当時、一般社会ではまったくの無名だったじゃないですか。

北斗 そうだね。

——ところが、いまや北斗さんはお茶の間の人気者です。お金もあって、ナイスガイの旦那様もいて、かわいらしいお子さまもいる。とにかく、すべてのいいところを持っていった女として、女子プロレス界のワン・アンド・オンリーの人だというのが一般的な見方だと思います。

北斗 そうなのかなあ？ 正直、そのときそのときが必死だから。よく「先々の夢はなんですか？」とかって聞かれるけども、ホントに一日一日がいい日ならいいっていうか。親になり、よそ様の子どもを預かって育ててあげたり、社員を食わせていかなきゃならないっていう立場的なものもあると思うんだけど。

なるほど。

北斗 ただ、ただ一つ言えるのは、いまと比べたら、その頃はもっとガツガツしてたよね。

——ガツガツしてた？

北斗 もっともっとガツガツしてた。プロレスやってた頃は。でもそれは自分に対するガツガツだったわけよ。当時、『Number』の表紙をやったときも、このときの自分をありがたいとは思ってなかった。

——そうでしたか。確かに、凄いプロレスラーではありましたけど。幸せそうには見えなかったですね。

北斗 だから、「もっと上を」って感じで、当時はその日その日をありがたいとは思ってなかったんだよね。

どうしてですか？

北斗 必死だったかといえば必死だったのかもしれないけど、若かったんでしょうね。「まだ何かできる。これもできる」っていう思いが強かった。あのときといまが一番違うのはそこかな？ いまは自分を待っててくれる人も大切な家族もいる。たとえば、三沢（光晴）さんのことを例に挙げると、「リングの上で死んだんだから本望だろう」って言ってた人もいたけど、アタシからすると、ふざけたことを言うな、と。三沢さんには家族もいた、子どももいた。三沢さんだって絶対、リングを降りて愛する家族のもとへ帰りたかっただろうとアタシは思う。そういうふうに思えるようになった自分は、人間としても（昔より）大きくなったんじゃないかなって。

——ええ。

北斗 当時だって、自分を生んでくれた親もいれば、家族もいたわけだけど、それに気がつかないからこそ、いくらでもムチャができたのかもしれない。いつもガツガツして、誰かが出てくればジェラシーもあったからね。つまんない妬みやひがみも多かったと思うのね。観てる人にとっては、それがかえっておもしろかったのかもしれないけど（笑）。

——本当にそうだと思います。若い頃、北斗さんと堀田（祐美子）が会社からプッシュされて、たしかデビュー2年目でWWWAタッグを獲ったじゃないですか。あのときは会社からクラッシュ（・ギャルズ）の次のエース候補として売り出されたと思うんですけど、ベルトを獲ったら恐ろしいイジメがあったと北斗さんは著書で書いてましたよね。

北斗 あったね（笑）。だけど「クラッシュ」とは書いてなかったでしょ？

——個人名は出てなかったですね。

北斗 なんで「クラッシュ」って書いてなかったかというと、おもしろいもんで、そこまで上の人はいじめたりはしないの。やるのは中途半端な人間。

——そういうもんなんですか？

北斗 そう。だって、上の人たちは自分を築いてるわけじゃない？ クラッシュとかは、もう大スターだもん。若いのがベルトを獲ったぐらいで動じる地位の人じゃなかったから。ベルト獲ったときに一番冷たかったのは、中堅の人たちだよね。

——ああ、なるほど。

北斗 いまは40越えてるから言えるけど（笑）、まあ、ハンパなヤツらよ！ それでアタシは思ったね。ハンパな人間ではダメだな、と。やるんだったらとことんやれ、と。

——WWWAのタッグベルトを堀田さんと二人で獲った。わずか12日後に、ゴンゴン（小倉由美）と永堀（一恵）と防衛戦をやることになり、セカンドロープからのツームストン・パイ

アジャ・コングがいなかったら女子プロはなくなってたと思う

北斗晶

ルドライバーを食らって北斗さんは首の骨折という重傷を負うわけですが、その間、ブルさんやコンドル（斉藤）さんたちと一緒に脱走したじゃないですか？

北斗　あったねぇ……（しみじみと）。

——その12日間に何があったかを教えてください。

北斗　べつに徹底的にいじめられたというわけじゃないんだよね。ただ、当時の女子プロレスは派閥も凄かったし。なんか軍団ごとにあったから。

——デビル（雅美）さん派とジャガー（横田）さん派みたいな感じで？

北斗　ジャガーさんはもういなかったから。当時は一番上がデビルさん。クラッシュもいたし、ダンプ松本とか、大森（ゆかり）さんとかもいたし。あれ、（ジャンボ）堀さんはもういなかったかな？　……アタシ、今年43歳だよ（笑）。さすがに昔のことは明確には思い出せないなぁ。

——思い出せる範囲でかまいませんから（笑）。

北斗　女子プロレスのときって、けっこういいかげんなこと言ってたけど、いまみたいにマスメディアに出るようになると、いいかげんなこと言えなくなるんだよね（笑）。

——大丈夫です、『ｋａｍｉｐｒｏ』はマスメディアでは全然ないですから（笑）。

北斗　アタシは、そのときは大森さんの付き人だったんだけど、そうすると大森さんの軍団にいるコたちは、ほかの軍団の人からはよく思われない。反対に、アタシが入ってる軍団のコたちは、あんまりほかの軍団をよく思ってなかったり。……そうやって考えると、政界に似てるね（笑）。

——そうかもしれませんね（笑）。

北斗　でも、松永（高司）会長がよく言ってたよ。「仲良しじゃダメなんだ」って。「憎しみ合いで悪口の言い合い。そんなときが一番おもしろいんだ」って。

——会長も、全部わかったうえで煽っていたんでしょうね。

北斗　それもあるだろうし、黄金時代を築いてた時代っていうのはホントに凄かったらしいよ。それもよく会長が言ってた。

——北斗さんたちの時代にかぎらず？

北斗　かぎらず。デビルさんあたりはずっと見てきたんじゃないかな？　アタシなんかは黄金時代って言われたのを2回経験してるわけじゃない？　クラッシュ・ギャルズの頃と、アタシたちの頃。ドン底になってから這い上がった時代。正直、アジャ・コングが要だったと思ってる。

——中心にいたのはアジャ・コングだった？

北斗　地方とかに行けば、お客さんはみんなアジャ・コング観たさに来てたわけだから。そういうお客さんに「アジャだけじゃないんだ」ってことでつかんでいったから。クラッシュが辞めたあとって、どこ行ってもガラガラな時期があったんだけど、アジャがいなかったら地方なんかお客さんを入れられなかったよ。

——そうだったんですか。

北斗　それをみんな過信してしまうのね。アタシもちょっと前だったら「アタシがいたから、あの時代は凄かったんだ」って思ってたと思うし、たとえばブル中野も「アタシが凄かったからだ」と思ってたと思う。でも違うよ、アジャだよ、あの時代は。

——へぇ～、そうだったんだ！

北斗　豊田真奈美でもないんだよ。それはアタシは実感してる。アタシの記憶だと、「きりり」ってジュースのコマーシャルがあったでしょ？

——ありましたね。アジャ様と瀬戸朝香が一緒に出てましたよね。

北斗　そうそうそう。テレビのコマーシャルに決まったりして。テレビの影響力の怖さっていうのはその頃から気づいてたのよ。クラッシュというスターがいなくなったあと、地方でお客さんが入ってたのはアジャ・コングのおかげ。アタシとしては、神取の前にアジャ・コングがいたからこそ、いまのアタシはあるなっていう部分もあるのよ。

——なるほど。

北斗　後輩だけど尊敬してた。あのダメな時代にアジャ・コングがいなかったら、女子プロはとっくになくなってたと思うよ。

——そういうことなんですね。結局、マリンウルフ（北斗とみなみ鈴香のタッグチーム）が思ったように売れなかったじゃないですか？

北斗　売れるわけねえじゃん、あんなの！（笑）。

——アハハハハハ！　その後、豊田真奈美や井上京子のような凄い選手が出てきた。その頃の北斗さんは、試合順も下げられたりして本当に荒れてた、と聞きました。凄く危ない技をかけて井上京子やバイソン木村をケガさせたり。で、「いいかげんにしろ」と怒った今井（良晴）リングアナと北斗さんがつかみ合いになったっていう話を今井さんから聞いたことありますけど、それはホントですか？

北斗　殴り合いにはなってないね。アタシが今井ちゃんを呼び出したのは事実。「リングアナのクセに何、生意気なこと言ってんだ？」って（笑）。そうしたら、今井ちゃんも言いたい放題言ってきて。だからいまでも仲良くできるけども。

——今井さんもおもしろい人ですよね。

北斗　おもしろいっていうか、もともと悪いヤツじゃないからね。でも、いまとなってはよかったんじゃないかね。「コノヤロー！　ムカつくな」ってヤツがいっぱいいた。いっぱいいたからこそ抜け出られたっていうか。……「つかみ合い」っていうか、つかんだのはアタシだね（笑）。

——地方会場でもひどい野次を飛ばしたお客さんをブン殴ったこともあったって聞きますけど。

北斗　あるある。よく殴ってたねぇ（笑）。

——やっぱりそうなんですか（笑）。どういうことをされると、大事なお客さんに手を出すんですか？

北斗　場外乱闘にいったときに、胸を鷲づかみにするヤツとかがいて、「何しに来たんだ」みたいなね。当時のアタシはプロレスに対するプライドが凄かったから。プロレスっていうか、女子プロレスに対するプライドだよね。「これは演劇でもなければ宝塚でもない。プロレスなんだよ」っていう。……いやあ、いま思い出しても、当時のアタシの天狗っぷりったら凄かったよ（笑）。

好きなプロレスラーは「猪木、北斗、広田」と常日頃から公言する柳澤氏。今回の取材には対抗戦時代に購入した北斗、下田美馬、三田英津子のラス・カチョーラス・オリエンタレスのサイン入りTシャツ姿で登場。ちなみにこの日初めて袖を通したそうです。ラスカチョ万歳！

アリー
ッかけ

——具体的にはどんな感じだったん

「どうなってんだろう？」って思って、

うかわかってたと思うけど、「もう怖

94年11月20日に女子プロとしては最初で最後となっている東京ドーム大会を開催した全女。この大会では「V☆TOP WOMAN」と題し、8人参加の1DAYトーナメントが行なわれ、決勝戦でアジャを下した北斗が優勝。当時WWWA王者のアジャは北斗にベルトを手渡すも、北斗はこれを拒否し、アジャの腰に強引にベルトを巻きつけ抱き合って号泣！

北斗晶のライバルといえば、やはり神取忍。二人は93年4月2日、全女横浜アリーナ大会で壮絶すぎる大流血戦を展開。死闘を制した北斗は、この試合をきっかけにデンジャラス・クイーンとして大ブレイク。しかし、その裏では……。

——具体的にはどんな感じだったんですか？

北斗 男子プロレスラーだってアタシに勝てるヤツはいないって思ってたから。それは闘ってじゃないよ。まあ、（アントニオ）猪木さんは別だけど、女子だけじゃなく、男子も含めて、当時闘ってるプロレスラーのなかではアタシが絶対に一番だと思ってた。

——さすがですね。いつ頃が一番プライドが高かったんですか？

北斗 やっぱり、メキシコから帰ってきて北斗晶になってからじゃないかな。神取とやったあと……あ、でも神取と最初にやった翌日には「もう辞める」って言ってたんだよな（苦笑）。

——えっ、神取戦の翌日に引退するって言ってた？

北斗 おもしろいんだよ、松永家って（笑）。話が飛んじゃうんだけど、オールスターをやったときの横浜アリーナではアタシと神取がセミファイナルだった。で、メインは豊田たちだった。

——そうでしたね。

北斗 アタシも大流血したんだから早く病院に行けばいいものを、スタッフとかも忙しいじゃない？　だから、最後まで会場にいたの。でも傷口を見たらだんだん広がっていくのよ。あれだけバックリと切れると。

——あのときの流血は凄かったですもんね。

北斗 巻いてたタオルも真っ赤になって絞れるほど血が出て、めまいがしてきたの。凄い出血だってわかったから、田口かほると一緒に目黒まで戻って病院に行ったんだけど、すぐに縫われたの。それで家に帰って「どうなってんだろう？」って思って、包帯剥がして傷口を見たら凄いことになってて。目も凄い腫れてるし、そのときに初めてプロレスが怖いと思ったんだよね。「もう嫌だ」って。

——プロレスが怖いと思った？

北斗 そう。鏡を見て女に戻ったの。たぶん、それまでは女を捨てたっていうより、女を忘れて闘っていたのが、「こんなになっちゃってどうしよう？」って思ったわけよ。それで明日「辞めよう」って言おうと思ってたら、会社から電話があったんだよね

——誰からだったんですか？

北斗 俊マネージャーからだったんだけど、電話に出たら「北斗、凄いぞ！」って言うんだよね。

——亡くなった俊国さんですね。

北斗 俊国さんは「北斗凄いぞ、取材が殺到してるぞ。早く来い！」って。もう喜んじゃって喜んじゃって（笑）。

——アハハハハハ！

北斗 会社には自転車で行ける距離だったけど、「ちょっと待ってください」ってこともなく「早く来いよ。みんな待ってるからなぁ」って電話を切られて（笑）。で、アタシもすぐに事務所に行って、国マネージャーに「お話があります」と。すぐ隣にSUN族っていう、まずくてゴキブリが出るレストランがあったんだけど（笑）。

——ありましたねぇ（笑）。

北斗 そこの陰で話をして。もう国マネージャーには、アタシが何を言うかわかってたと思うけど、「もう怖くなったんで辞めたいと思う」って言ったんですよ。首の骨折ったときだって怖いとは思わなかったのに。

——首を折ったのに怖くなかったんですか！

北斗 そのときの試合を全然覚えていないこともあったんだろうけど、神取戦のあとは心底怖いと思って、「もう辞めたい」って言ったんだよね。全女という会社は辞めるという選手を引き止めたりはしない会社なのよ。会長の信念なんだろうけど、チコさん（長与千種）とかが辞めるって言いに行ったときも「そうか。ごくろうさん」っていう感じの人なのよ。

——決して引き止めたりはしないっていいますよね。

北斗 会社の方針はそんな感じなんだけど、国マネージャーは、「やれ」とも「辞めるな」とも「ごくろうさま」とも言わず、ただひと言、「おまえがいなくなると俺は寂しいよ」って言ったんですよ。

——そうなんですか。

北斗 「でも、もう決めたことですから」って言ったんだけど、「いまは昨日のことでケガもあるし、興奮してるところもあると思うから。おまえが気が済むまで休んでいいから。巡業も俺が責任持つ」って言われて「わかりました」でその場は終わったの。

——その後は？

北斗 それからは、一切引きこもりよ。

男子も含めて、当時のプロレスラーでアタシが絶対一番だと思ってた

ンガン家に電話がかかってきて。最初の頃は電話線を抜いちゃって誰の電話にも出なかったのね。だけど、親が死んでるんじゃないかと思って心配して家に来たりもしたから、留守電の声を聴いてから、出られる人には出るみたいな生活を続けていて。そしたら、1週間も経たないうちに国マネージャーから電話があった(笑)。

——どんな内容だったんですか?

北斗 「北斗〜、いるんだろう? 出てくれ、国松だよ〜」って(笑)。しょうがないから出たんだけど、たしか岡山からだったかな? 「興行師が、おまえが出ねえと金払わないって言ってんだよ」って(笑)。

アハハハハハハ! さすが全女ですねぇ(笑)。

北斗 「言ってることと違うじゃないですか!」って言ったんだけど、バカっぷりに負けたっていうか(笑)。「来ないと、えらいことになっちゃうんだよぉ〜」って言われて。それで仕方ないから行ったんだよね。

——仕方ないから行った?

北斗 抜糸もせずに行ったのを覚えてる。とにかく行って、会場の扉を開けたら、それこそアジャが受けてたような声援を受けたの。「ウワ〜〜〜!」って。自分では何が変わったかわからないけど、何かが変わってた。

——そこからは凄いことになった、と。神取とやる前、アジャ様とブル様が凄まじい抗争をしていたときは、北斗さんはどのようにご覧になってたんですか? 当時、北斗さんはベビーだったし、ヒール同士が凄まじい抗争を始めて、そっちにスポットライトが当たるようになってしまえば、自分たちには光が当たらなくなるというような恐怖感もあったのかな、と思うのですが。

北斗 恐怖感はない。

——ないんですか。

北斗 図々しいけど(笑)。だって、アジャとブルが半分に割れてれば、アタシはどっちとも闘えるわけじゃない? へんな話、仕事はあるんだよ。

——仕事はあるっていうのはどういう意味ですか?

北斗 だって、全日本女子プロレスに所属してるんだから。要するに仕事の枝が増えてるわけじゃない? 豊田真奈美が出てくれば豊田に噛みついてれば、そこでも話題になるし、ブルやアジャに噛みつけば、それも話題になる。……なんかハイエナみてえなヤツだな、アタシって(笑)。

アハハハハ! ヒールに転向して、ブル様との金網マッチのときに金網の上からミサイルキックを出したじゃないですか。それはブル様のギロチンがあったからこそ、あのミサイルキックがあったわけでしょ?

北斗 いや、それは関係ない。そういった技だけじゃなくて、アイデアは誰にも負けないって自信があったからね。試合を組み立てる、何かを考える、たとえばコスチュームを考える。色彩的なことを考える、そういうのは誰にも負けなかったと思う。

——そう思います。女子プロレスにセパレーツの水着を持ち込んだのは北斗さんですものね。ロッシー(小川)さんはブル様が赤いベルトを巻いていた頃の全女では「ブル様が番長で、北斗がウラ番」って言ってたんですけど、それは本当ですか?

北斗 そうかもしれないねぇ。でも、裏のほうがキツいと思うけどね(笑)。

——そうですか(笑)。ブル様が赤いベルトを巻いて、北斗さんが裏を仕切ってた頃は、どんな雰囲気だったんですか?

北斗 べつに何かを「こうしろ、ああしろ」とかそういうことをしてたわけではないけど、みんながアタシたちのことを怖がっていたとは思う。

——なるほどねぇ。

北斗 でも、当時のブル中野は、ベルトは巻いてたかもしれないけど、アジャの下だったの。ヒールとしては。

——そうか。人気としてはアジャのほうが上だった?

北斗 人気もそうだし、アジャが観たくてお客さんが来てたから。それは誰が見てもわかる。でも、ブル中野にはブル中野のプライドがあるし、向上心も凄い強い人だったからね。

——もちろんそうでしょう。

北斗 それに、自分がスターじゃなければ嫌な人。涙を流してる姿も何度も見てるし、悔しいっていう気持ちもあったと思うし。当時、テレビでヒールレスラーが呼ばれることがあったじゃない? いまでいうとお笑いの人がやるみたいな感じで。

——よくドラマやバラエティとかにも出てましたよね。

北斗 そういうときに呼ばれるのはアジャとバイソン(木村)だったから。だから、当時のブル中野はかなり苦しかったと思うよ。見ててわかったもん。そのときヒールだったらアタシにもジェラシーがあっただろうけど、当時は立場が違ったからね。

——やっぱり立場が違うとジェラシーはそれほど感じない?

北斗 そうだね。

——豊田真奈美や井上京子といった素晴らしいレスラーが下から出てきたときにも、それほどジェラシーはなかった?

北斗 そこまではなかったね。で、メキシコの話になっちゃうけど、ロッシー(小川)が一番初めにメキシコに連れていったのは山田敏代と井上京子だったのよ。それで帰ってきて、向こうの団体と提携しました、と。そしたら、今度は下田とヨッシー(吉田万里子)が行くことになったんですよ。あのコたちが飛行機に乗って飛び立った日に、アタシは地方会場に向かうバスに乗ってて、横には会長がいたんですよ。「会長、バスのなかに急に二人いなくなるのは寂しいですよね」って言ったの。そしたら会長は「そのまま帰ってこなきゃいいのにな」って言ったんですよ(笑)。

——アハハハハハハ!

北斗 ひどいこと言うなって思ったんだけど、会長は「いたってしょうがねえだろ。客を一人も呼べねえんだから」ってはっきり言ったわけよ。で、3ヵ月後に二人が帰ってきたら、今度はアタシが会長室に呼ばれて、「北

全女入門前は中野恵子時代のブル中野をファンとして応援していたという北斗。自らもプロレスラーとなってからは、よきライバルとして90年代前半の女子プロブームを牽引。プロゴルファーを目指し、海外で生活していたブル様も現在は帰国。いつか二人の対談が見てみたいYO!

1993年の女子プロレス

プロレスに関するアイデアは誰にも負けなかったと思う

度はアタシが会長室に呼ばれて、「北斗、次メキシコな」だって（笑）。

——おもしろすぎる！（笑）

北斗 ホントにギャグみたいな話なんだけど、「三田を連れて行ってこい」って言われたわけよ。で、アタシは「日本にいなくてもいいヤツをメキシコに行かせるって言ったじゃん！」って言ったら、「うん、帰ってこなくてもいいよ」って。

——え〜〜、面と向かってそんなこと言うの（笑）。

[illegible]

アタシは赤いベルトが巻けなかったからひがんでるんではなく……これ言っていいのかな？

——ぜひ教えてください。

北斗 じつは会長から「女子プロがなくなったから、おまえに赤いベルトを預かってもらいたい。おまえに

やりたい」って言われたことがあるの。だけど、「それはできない」って断った。この会社(健介オフィス)もあったし、それに「アタシは赤いベルトは巻いてないから」って言って。

——そんなことがあったんですね。

北斗　国マネージャーも亡くなる前に「おまえに巻かせたかった」って言ってくれた。でもアタシはみんなが思うほど、ほしいと思わなかった。いまやってる女子プロレスラーの人がいるからどうかと思うし、いまになってみればなんの価値もないベルトかもしれないけど、会長は一番問題を起こして、一番じゃじゃ馬で大変だったろうけど、「おまえに」って亡くなる前に言ってくれれて……。あらためて思ったけども、プロレスってなんにもないのよ。なんにもないものなのよ。わかる?

——赤いベルトが?

北斗　赤いベルトっていうか、プロレスっていうのはすべてに関して答えがない。答えようのないものなのよ……とアタシはいま思う。

——なるほどねぇ。

北斗　だって、劇でもないし、宝塚でもない。じゃあ、格闘技なのかスポーツなのかって、どれにも当てはまらないのがプロレスなのよ。すべてのものに当てはまらないのがプロレス。

——プロレスはおもしろいですか?

北斗　プロレスは……、やってるときは、おもしろいというよりも、ただ単に好きだった。

——好きで仕方がないものだった?

北斗　好きだった。好きだったね。よくプロレスマスコミの人から「悔いは赤いベルトを巻けなかったことですか?」って聞かれるんだけど、そういう思いはまったくない。なぜなら、最後のほうで、狙おうと思えば、いくらでも巻けたと思うんですよ。

——もちろんそうでしょう。

北斗　「次はアタシに挑戦させろ」のひと言で終わってたと思う。でも、ベルトを巻いてても客の呼べない人もいる。支持を得られない人もいる。「それってチャンピオンなのかな?」って思ったときがあったんだよね。若いときはベルトにこだわって「いつか、ベルトを」と思ってやってたんだけど、たぶん、一人早く、その域を超えちゃったんじゃないかな。

——なるほどね。

宝塚でも格闘技でもない。どれにも当てはまらないのがプロレス

北斗　たとえばサイン会とかで、チャンピオンよりも多くの人が並ぶ選手とか普通にあることだしね。結局はお客さんが支持したモノが一番なのよ。若かろうが歳だろうが、お客さんが支持したものが勝ちなのよ。プロレスにかぎらず、プロの世界は。

——プロ意識という部分で言えば、メキシコから帰ってきた北斗さんは"女"であることをアピールして、金髪にして、遠くからも見えるように黒いマニキュアを塗ったりとか、凄い細かいことまで目が向くようになりましたよね。以前、お話を聞いて感心した記憶があります。

北斗　その頃の女子プロレスって大きな会場でよくやってたじゃない?

——そうですね。横浜アリーナや両国国技館でも頻繁にやってましたし。

北斗　でも、メキシコはそれ以上の会場なわけ。日本よりも大きな会場でやったことがポイントだったと思う。だから、プロレスラー北斗晶の転機はメキシコだったと思う。最初に行ったときは心が腐った状態で行ってるから、「なんとかなるさ」って考えと、「どうでもいいや」って考えがあったから、辞書みたいなのも一切持っていかなかったし(笑)。3ヵ月行くから、住んでた部屋も解約して荷物は実家に全部運んだんだから。

——辞めるって決めてたんですね。

北斗　そうそう。もう、一つ、それまで自分は日本で天狗になってたけど、メキシコに行って初めて思ったの。自分は世界には通用しないプロレスラーだなって。……だからって、ほかのコが凄いってわけじゃないけどね。

——具体的には、どのへんが未熟だと感じたんですか?

北斗　プロレスもキチンとできなければ、言葉もしゃべれない。やっぱり、世界で通用するには言葉をしゃべれなきゃダメ。自分の気持ちを、リングを降りてからインタビューで答えられなかったら絶対ダメじゃない?

——ダメだと思います。

北斗　伝わらなかった部分をフォローするのが言葉なわけ。それが帰ってきてからのマイクアピールとかにつながると思う。リング上で伝えられなかったことは言葉で伝えなきゃいけないってことは凄く感じたね。

——なるほど。北斗さんのマイクは天才的ですからね。

北斗　最後の海外旅行のつもりが、まさかプロレスラーとしての転機になるとは思わなかった(苦笑)。まあでも、そこから自分の能力発揮よ!

——確かに。メキシコ遠征を経て、日本に帰ってから対抗戦の時代に大ブレイクしたわけですからね。

北斗　そうだよね。でも、おもしろいもので、このあいだTBSの『オールスター感謝祭』に出たんだけど、隣が神取忍大先生だったわけ(笑)。

——あ、そうだったんですか?

北斗　お互い歳を取ったなぁって思

1993年の女子プロレス

ほくと・あきら■本名=佐々木久子。1967年7月13日、埼玉県出身。高校中退後、全女に入門し、85年6月の岩本久美子戦でデビュー。その後は全女、CMLL、WCW、ガイア等さまざまなリングで活躍(写真はガイアで猛威を振るったヒールユニット、チーム・ノストラダムス時代の北斗)。02年4月に現役を引退。現在は健介オフィスの社長業からタレント活動、主婦業まで多忙な毎日を送っている。カリスマブロガーとしても有名 →http //ameblo.jp/hokuto-akira/

女子プロレスを復活させるには長与千種が動かなかったら無理

ったんだけど（笑）、その番組で神取がゲームに参加したんだけど、神取だけできなかったわけ。その前に決着がついちゃったから。そのとき隣にいた健介に「せっかく出てきたんだから、目立ってほしかったな」ってポロリと言った自分がいたわけよ。

——ちょっと腹が立った、と。

北斗 なんだろう？ それこそ対抗戦のときは大っ嫌いだったのに。

——そうでしょうね。東京ドームのバックステージで乱闘騒ぎを起こしたって話も聞きましたし。

北斗 大喧嘩になっちゃってね。

——なんでそんなことになっちゃったんですか？

北斗 それだけ嫌いだったから。お互いにね。だって控室でだよ（笑）。マスコミさんも入れないところでやり合ったんだから。

——それも凄い話ですよねえ。

北斗 そこまで殴り合ったり、アタシが「プロレスは怖い」って思うような原因となった人なわけじゃない？ でも、せっかく来たのに何もできなかった神取を見て、ふとそんなことを口に出した自分がいたっていうのは不思議なもんだなって（笑）。……これはずるいようだけど、アタシは神取忍の価値が落ちるのが嫌なの。

——そういう感情があるんですね。

北斗 そういう自分がいたんだよね。「アタシの神取忍でしょ」って。だから、アタシと神取忍は犬猿の仲だったけれども、神取が落ちるのは嫌。ホントに不思議なんだけど（笑）。

——わかる気がします。北斗さんといえば、さっきもおっしゃってたようにマイクの印象も強いんですが、「次の神取戦には選手生命を賭ける」と宣言して敗れた両国の試合後に「アタシの心は変わらない」って言ったとき、僕は「北斗～！ 辞めないでくれ～っ!!」と絶叫してました（笑）。

北斗 あ、そうなんだ（笑）。

——北斗さんの一連の名マイクって、試合前から「こういうことを言おう」とか考えてたりするんですか？

北斗 前から考えててどうすんのよ！ 試合だってどうなるかわかんないのに。たとえば、前から考えておいて、その試合がお客さんがうんともすんとも言わない試合だったらどうすんの、それ？ それでもカッコつけてしゃべっちゃうからどっちらけになっちゃうんだよ。

——そういう試合もよくありますね。

北斗 でしょ。プロレスって生ものなんだから、生の感情でやらなきゃいけない。だから、アタシのマイクでスゲー、ムカついた人もいっぱいいるかもしれないけど、もっともなことを突き刺すからこそ、お客さんも喜ぶんだと思うけどね。

——もちろんそうですよね。長与千種さんに話を聞いたら、北斗さんのことをモノ凄く認めていました。「女子プロレスラーで凄いのは北斗晶だけだ」って。

北斗 アタシからしたら長与千種が一番凄かったよ。

——あ、そうですか。

北斗 アタシが入ったときは、足もとにもおよばない大スターだったよ。でも、あの人が一番凄いのはプロレス的なこと。コスチュームがどうとかじゃなくて、プロレスを考える頭。プロレス頭っていうのはアタシも凄いと思う。自分で言うけど（笑）。

——いやいや、北斗さんも凄いと思います。

北斗 だけど、アタシと同じぐらいあの人は凄い。女子プロレスを復活させるのはアタシにはできない。いまは健介オフィスがあるから。あの人が動かなかったら無理。

——でも、ガイアジャパンはうまくいかなかったじゃないですか？

北斗 それはべつに社長とかがいたから。長与千種の思うように、やりたいようにやれば絶対にうまくいく。

——絶対に？

北斗 素材にもよるとは思うけど、アタシはそう思ってる。長与千種が先頭に立ってやるべきなんじゃないかって。アタシはアタシの考えで、いまは健介オフィスをやってるように、彼女は彼女でいろんなことをやってる。正直なこと言っちゃうと、アタシは長与千種にそれ（女子プロレス団体旗揚げ）をいつも言ってる。

——最近も言ってるんですか？

北斗 「チコさんがやらなかったら絶対に女子プロレスなんてうまくいきませんよ」って。「なぜ立ち上がらないんですか？」って。

——それは頭の問題なんですか？

北斗 頭よ、頭。あたりまえよ！ コーディネートする能力とか、何かを組み立てる能力。それはほかの人は一切持ってない。アタシはそう思う。

——なるほどねえ。

北斗 ただ現役時代の長与千種にはできなかったと思う。それはアタシも一緒で自分で精一杯だったから。

——そうでしょうね。

北斗 一歩引いてからこそ、発揮できる能力はあると思うよ。ひと言言ってしまうと、健介を変えていっているときに、アタシはプロレスラーよりも裏方のほうが向いてんじゃないかなって思ったの。

——大きな声では言えませんけど、健介さんは北斗さんと会ってから凄くよくなったと思います（笑）。

北斗 あ、そう（笑）。近頃思ってることを正直に言ってしまうと、アタシに一番合ってる仕事はなんだろうって考えると、プロレスでもなく、芸能界でもなく、裏方でもなく、ほかに何かあるんじゃないかって。そのことをノアの丸藤（正道）クンに話したら、「頭おかしいんじゃないですか？」って言われたけど（笑）。

——もしかして政治家とか？

北斗 バカ言わないでよ！（笑）。みんな言うんだけど、議員になりたいとかは一切ないから。

——失礼しました（笑）。

北斗 それはないんだけど、何かがあるんじゃないかって。

——では、それがなんなのか楽しみにしながら、また10年後くらいに話を聞かせてもらえればと思います！

北斗 その頃には死んでるわ！（笑）。

【10年4月9日 埼玉県・健介オフィスにて収録】

正直、北斗社長も大活躍！ 健介オフィス情報

Take The Future
～健介オフィス・ホームタウンマッチ
埼玉・健介オフィス道場
4月25日（日）開始13:00
5月8日（土）開始14:00

※4月25日（日）は北斗晶社長×中嶋勝彦のトークショーを予定

チケット料金
一般2,000円　小学生1,000円／未就学児無料

Take The Dream 2010
in郡山～健介オフィス主催興行
福島・郡山総合体育館
5月9日（日）開始13:00

主要対戦カード
［メインイベント］佐々木健介&宮原健斗vs秋山準&橋誠
［起田高志"頭力"5番勝負・巨漢編第2戦］起田高志vs吉江豊
［西川潤デビュー戦］西川潤vsベアー福田
梶原慧&泉田純至&瀧澤大志vsビッグ村上&南野タケシ&卍丸
なまずマン&菊タローvs豪&CHANGO

Take The Dream 2010
in小山～健介オフィス主催興行
栃木県・小山市立文化センター
5月16日（日）開始13:00

主要対戦カード
［メインイベント］
佐々木健介&ウルティモ・ドラゴン&梶原慧vsビッグ村上&南野タケシ&卍丸
宮原健斗vs吉江豊
起田高志&瀧澤大志vsベアー福田&豪
なまずマン&菊タローvs志賀賢太郎&CHANGO
西川潤vs大原はじめ

上記すべてのお問い合わせ 健介オフィス TEL.048-982-0960（平日10:00～18:00）http://www.kensuke-office.com/

90年代いちファイヤーな重要参考人が本誌初登場!!

四天王プロレス黄金期に

ジャストミート

全日本プロレス中継アナウンサー

福澤 朗

プ、プ、プ、プロレスニュース！　というわけで、なんと！　あの福澤"ジャストミート"朗が本誌初登場!!　90年代全日本プロレスの隆盛において欠かせない存在であった福澤アナ。『全日本プロレス中継』『プロレスニュース』に影響をされてプロレスファンになった人も多いはずだ。そんな福澤アナが見ていた90年代全日本プロレスの風景とは!?

聞き手／堀江ガンツ　撮影／乾晋也

永源さんの表情を見てると
どこにつばを吐くのかもわかってきました

——今日は90年代プロレス特集ということで、まさに90年代プロレスが生んだトップスター・福澤朗さんにお話をおうかがいすることができました！

福澤　いやいやいや、何をおっしゃいますやら。しかし、テーマが90年代ですか。僕が入社2年目の春から全日本プロレス中継担当でしたので。スタートはたしか89年4月ですね。

——入社して1年でプロレス担当ですか。

福澤　でも凄く唐突な話で、僕がプロレス担当になったのはホントに1～2週間前で、日本テレビでいま相当お偉くなっていらっしゃる"とある方"からお達しがあったんです。それで、わけもわからずとにかく会場に行ってみようということでプロレスの会場に行ったのを覚えてますよ。

——というと、それまでプロレスはまったく？

福澤　観たことなかったですね。ただ上司いわく「福澤のキャラクターはプロレス中継に向いている」ということで。でも当時は本当にまったく未知の世界でうれしさのかけらもなかったですねえ（苦笑）。で、まず最初に観に行った試合がジャンボ鶴田さんが三冠を統一したときだったんですよ。

——大田区体育館のスタン・ハンセン戦ですね。

福澤　はい。その勝利者インタビューを福澤がやるということが急きょ、大田区体育館に向かうバスの中で決まったんです。ご存知、倉持（隆夫）アナから「福澤、今日チャンピオンが決まったら勝利者インタビューをやれ」って。

——恐ろしい指令ですね。まったく心の準備ができてないのに。

福澤　だから「えー！　何もわからないんですけど、何を聞けばいいですか？」と聞きましたら、「いまの心境は？　試合を振り返っていかがですか？　これからに向けて一言お願いします。この3つを聞けばいいんだ」ということで。これはいまだして思うとスポーツ中継の原点である、現在、過去、未来なんですよね。でも、それでマイクを向けたジャンボ鶴田さんは血だらけなんですよ。

90年4月13日に東京ドームで開催された日米レスリングサミットでは、福澤アナ、若林アナ、倉持アナの『全日本プロレス中継』3大名物アナウンサーが集結。この日はなぜか馬場さんの麻雀仲間である松山千春まで解説席に！

——しかも、血みどろ汗だくですよね（笑）。

福澤　だから、いまその映像を観ても相当腰が引けてますよね。しかも、その腰が下で待ち構えてるハンディカムの正面に当たってですね、カメラを塞いでるという、テレビマンとしては失格このうえないデビューとなりました（笑）。

——そういうスタートを経て、その後は流れのままにプロレス中継を担当されたんですか？

福澤　ええ。だから当時プロレスに関する入門者向けの解説書みたいなのがなかなかなくて、子ども向けの三色刷りのですね、イラストがいっぱい描かれてルビもふんだんに振ってあるような本を隠れて読んでましたね。

——実際にやってみて、プロレス実況というのはほかのスポーツ実況とは違いますか？

福澤　イレギュラーなことが多いという意味ではほかのスポーツとは比べものにならないです。だから「プロレス中継で鍛えられたアナウンサーは、その後どこの中継を担当しても通用するようになるんだ」って自分に言い聞かせながら正当化してました。それで、結果的に本当にそのとおりになりましたからね。どんなことが起きてもそれなりに対応できる自信がつきましたよ。とくに当時の全日本プロレスは永源（遙）さんやラッシャー木村さん含めてイレギュラーなことが多かったような気がしますよね。つばを吐くとか。

——イレギュラーなことがレギュラーというか（笑）。

福澤　[illegible]日の興行で休憩前に必ず馬場さん率いるファミリー軍団と悪役商会の対戦がありましたけど、あの試合はちょうど訓練中の身としては何度も何度も実況させていただいて相当練習になったんですよ。リング外のことに対してもちゃんと視野を広げないといけないという意味でも勉強になりま[illegible]。木村[illegible]こ[illegible]は[illegible]の表情を見て[illegible]に吐くんだろうな[illegible]たよね。わかっていいのかどうか[illegible]りませんけど（笑）。

——先を読む力も身についた、というわけですね（笑）。

福澤　そうしてプロレスを徐々に理解していくと、こんなに奥行きがある世界もなかなかないなって思いましたね。たとえばプロレスはすべてのテレビ番組の制作に通じるものがあるんですよ。

——ほう。プロレス興行自体が、テレビ番組と相通じる部分がありますか。

福澤　はい。最近は芸人さんがたくさん参加される番組が花盛りだったりするんですけど、いわゆる芸人さんにしてみれば、いま自分は何を求められているのかを瞬時に察知する、司会者側としてはいま誰に振るべきか、[illegible]開するべきか[illegible]はプロレスラー[illegible]一つ間違えるとしょっぱい試合になりますし。

——なるほど。バラエティ番組なんかも大枠の台本はあっても、アドリブが求められるわけですもんね。

福澤　そうです。バラエティ番組の台本はホントに最低限のことしか書いてませんからね。

――それは確かにプロレス的ですね。ただ、たとえば倉持アナなんかはプロレスが純粋なスポーツじゃないことに凄く葛藤があったということを本でも書いてるんですけど、その点、福澤さんはいかがでしたか？

福澤 いや、僕は逆に「こんな世界があるんだ」ということに驚きを感じて、その世界観にどっぷりハマりました。理屈では通用しない展開をある程度黙認しつつ先に進むという独特の世界観、たとえばブラックハーツですよね。

――なつかしいですねぇ。全身黒ずくめのマスクマンコンビで、どっちがどっちだかわからないという（笑）。

福澤 彼らがリングを降りたところで入れ替わるというシーンがありましたけど、実際は入れ替わってるのかどうかわからないですけど、入れ替わりたいと思って動いてるわけだから実況では「入れ替わりました――！」って言うんです。だから重要なのは、どう見えるかじゃなくて、レスラーはいまどう見られたがってるのか、なんですよね。

――実況アナウンサーには、レスラーがどう見られたがっているかを察して、それを言葉にして視聴者に伝えるという役目があるわけですね。

福澤 その点、全日本プロレスというのはファンももの凄く馬場さんの価値観をわかってらっしゃって、馬場さんが振り上げた足に向かっていく外国人レスラーに独特の美しさを感じてるんですよ。で、馬場さんが振り上げた足に向かっていくスティーブ・ウィリアムスにお客さんも拍手をするんです。「きっと興行が終わるとウィリアムスは馬場さんから直にギャラを手渡しされているんじゃないか」なんて勝手に想像しながら、馬場さんの足に向かっていくウィリアムスを観てるんです。それがもの凄く感動的なんですよね（笑）。それを楽しむことができたというのは何よりの財産ですよ。

――ある意味、悪趣味です（笑）。

いだにもの凄く深い溝があるんですよ。

新日ファンと全日ファンの気質の違いってそこですよね。たとえば……

福澤 でも当時の新日ファンと全日ファンの気質の違いってそこだと思うんですよ。たとえば馬場さんの所作振る舞いで一番感動したのが、リングで闘っている外国人レスラーが解説席にいる馬場さんに対して「リングに上がれ」と威嚇するシーンがあったんです。で、解説しているわけだから絶対に馬場さんがリングに上がるわけないんですけど、馬場さんがゆっくりと立ち上がるんです。あのとき、お客さんが「うわーー！」って盛り上がって、もうそれだけで充分納得してるんですけど、さらにですよ、馬場さんがゆっくりと時計を外すんですよね！

――「やるぞ」という意思を見せるわけですね。

福澤 それがその日最高に盛り上がったシーンだったんです。結局、馬場さんは矛を収められたんですけど、それを観ただけでもお客さんは満足して帰れるという、それが全日本プロレス独特の世界観、感動しましたね。僕も「馬場さんが腕時計を外した――――！」って叫んだぐらいですから。

――そんなに興奮することじゃないだろ！ってぐらいに（笑）。

福澤 でもその寸止めの感じ、いわゆる〝じらし〟というものですよね。男なら誰もが共有できる感情だと思うんですけど、その快楽を馬場さんは少し教えてくれました（笑）。

――ハハハハハ！　先ほどプロレスはイレギュラーな世界というお話がありましたけど、福澤さん自身、実況においても自由な発想でいろいろできたというのもありましたか？

福澤 いや、最初は悩みましたよ。先ほども申し上げたように僕はプロレスを観たことがなかったんです。でも、当時プロレスのアナウンサーというのは倉持さん、若林（健治）さん、他局だったら古舘（伊知郎）さんもいらっしゃいましたけど、皆さんプロレス好きが高じてマイクを握っているという感じでしたよね。それに対して僕はどういうスタンスがいいのかをやっぱり考えたんです。そのとき物事には3つの「しんか」があるな、と。

――3つの「しんか」ですか。

福澤 一つはいわゆる進む「進化」、もう一つは深く進む「深化」ですよね。そして最後は、これは僕の造語なんですけど親しみを持ってもらう「親化」なんです。それを考えると、あきらかに古舘さんは「進化」、そして僕にいろいろ教えてくれた若林さんは深める「深化」なんですよね。あのド演歌実況とでも言うんでしょうか。じゃあ、僕はもう親しみを持ってもらう「親化」しかないだろう、と。で、プロレスは好きな方にはたまらないソフトなんですけども、じつは好きな人と嫌いな人のあ

いだにもの凄く深い溝があるんですよ。

——それは凄くわかります。

福澤　僕はまさにその溝を越えられなかったほうの人間だったわけですからね。そんななかで僕はリングサイドで初めてスタン・ハンセンのウエスタンラリアットを観たときに、「こんな感動的な、圧倒的な迫力のある技があるんだ」ということと知って、その「バチーン！」という音もさることながら、汗がブワーっとしぶきのように飛ぶ光景を、なんとかそれにふさわしい言葉でお茶の間に届けたいと思ったんです。そこで最終的にたどり着いたのが「ジャストミート！」だったんですよね。

——そこであの名フレーズが生まれたわけですか。

福澤　で、一回か二回ぐらい「ジャストミート！」という言葉を使ったんですけど、それがたまたま地上波に乗ったんですよ。それを観たプロレス記者さんが「福澤くん、あの『ジャストミート！』というフレーズは凄くいいね」と。だから「これはいけるぞ」と思いまして、それ以降、とくに打撃技がバーンと決まったときにはもう意図的に「ジャストミート!!」って実況するようになりましたね。それがやがて僕の代名詞になり、視聴者の方にも受け入れられ、ある日視聴者の方から「ジャストミートはちまき」が送られてきたんです。

——あっ、あれはファンからもらったんですか!?

福澤　最初はそうなんです。で、そのはちまきを着けて一、二回露出し、そこから「福澤ジャストミート朗」というミドルネームができ、「プロレスニュース」というコーナーができたんですよ。それで番組側が「ジャストミートはちまき」を正式に作るようになり、常に僕は露出するときははちまきを締めるようになったという感じでしたね。

ある日、視聴者の方から「ジャストミートはちまき」が送られてきたんです

——しかし「プロレスニュース」はインパクトありましたよねえ。賛否両論ありましたけど（笑）。

福澤　一部からは絶賛され、一部からは酷評され、時に本当にお叱りの分厚い手紙をもらったりしましたよ。ある日、地方の体育館に行って実況席に座ると、「福澤朗アナウンサーへ」という白い封筒が置かれ、「うわ、怖いな～」と。ここに置かれているということは会場のどこかにいるんだろうなと思いながらスタッフに持ってってもらって、だからしばらくは僕が実況するときは屈強なスタッフが実況席のうしろに座ってましたから。

——SPつきの実況（笑）。でも、なぜあの「プロレスニュース」を始めることになったんですか？

福澤　やっぱり全日本プロレス中継が深夜枠に移行したのがきっかけですよね。僕としては「このままプロレスの火を消すわけにはいかない」ということで、ディレクターと話し合って、プロレスを観たことがない人も何かこう「おやおや？」と思ってくれるようなコーナーを作ろうじゃないか、と。それはいわゆるプロレスの間口を広げるという部分だったんですけど、そういう理由で臨時ニュースさながらに「試合の途中ですが、どうしても皆さんにお伝えしなければならないことがあります！」というのをやったんです。その当時はまだ「プロレスニュース」というコーナーはなかったんですけど、それを観た竹内宏介（元・『週刊ゴング』編集長）さんが本当に「当時ニュース[illegible]と思[illegible]」[illegible]て聞きましたから（笑）。

——そのくらい異質だった[illegible]ですね（笑）。

福澤　それが、やがて当時のディレクターにそそのかされて羽目を外すようになり、言い方も「プロレスニュース」が「プップ・プロレスニューース！」になり、「プーロレースニューーース！」（語尾を上げて）になったんです。

——ダハハハ！　生で聴けてホントにうれしいです！（笑）。

福澤　ワハハハハ！　まあ、やがて報道スタジオで収録してたんで、報道局長の目に留まるようになって逆鱗に触れたわけですけどね。無許可でやってたんで。

——そんなことが許されたんですか（笑）。

福澤　報道スタジオに[illegible]カメラマン[illegible]「ちょっと回していただいていいですか？」

永源遥の"つば攻撃"はもはや全日本プロレスの名物の一つに。福澤アナも「表情を見るとどこに吐くかが想像できた」というから凄い！

ってお願いするんです。そしたら意外とこの業界のカメラマンってプロレスファンが多くて、「あれだろ？ プロレス中継のなかで急に入る臨時ニュースだろ!? いいよ、いいよ！」って撮影してくれるんですよ。

――凄い強行突破な方法で収録してたんですね。

福澤　本来なら報道局長の許可をとらないといけないんですけど、昔はテレビ局もおおらかな時代だったんで、現場の許可さえとっていればいいという感じだったんですね。でもそれがバレてしまって、それ以降外でやるようになったんですよ。当時、麹町に日本テレビがありましたから、画板を担いで一番近くの東郷公園で、そこでも許可をとらずにやってという（笑）。

――そんなゲリラコーナーだったんですね（笑）。

福澤　で、プロレスをこよなく愛される方からは「プロレスを冒涜している」というご意見もいただきましたけど、でも決して舐めているつもりはなく、プロレスファンを一人でも増やそうという気持ちがあったことは声を大にして言いたいです。結果として『プロレスニュース』を観てプロレス中継を観るようになりましたという方も本当に多かったですよ。

――いや、そういう人はかなり多いと思います。それに、時期的にも全日本プロレス自体が凄い盛り上がってたときでしたもんね。

福澤　そうですよね。今回、90年代プロレスというテーマじゃないですか。で、僕が入社したときというのは鶴龍対決花盛りで、三冠ベルトが統一されて、アジアタッグ選手権が次の盛り上がりくらいで、そしてカンナム・エキスプレスですか。

――ああ、いましたねえ、カンナム・エキスプレス。

福澤　僕の印象では外国人というのは力任せで身体がデカくて、動きに俊敏性がないという感じだったんですけど、それをことごとく覆したのが彼らだったんですよ。彼らのおかげでずいぶん僕はプロレスを「親化」させるチャンスをもらいましたね。ぴゅんぴゅん言葉をつないでいって、ドライブ感のあるフレーズでお客さんも巻き込んでいくという、うまい具合にカンナム・エキスプレスのスピード感あるプレー、のちに超世代軍と言われる小橋、川田、三沢、そういった若さのあるプロレス、それと僕の「親化」する実況とうまくマッチングしたと思いますね。

――確かにそうですね。カンナムの試合は若林さんの『演歌調』より福澤さんのほうが合ってましたよね。

福澤アナが最も印象に残っているシーンが、三沢光晴がタイガーマスクのマスクを脱いだシーンだという。首を絞めているこの写真一枚でも三沢光晴はプロレスラーとしての色気がハンパない！

カンナム・エキスプレスと〝親化〟する僕の実況がうまくマッチしたんです

福澤　だからダグ・ファーナスが対戦相手をリフトアップしたときに一番ふさわしいフレーズとして「これみよがしの筋肉」と言ったりもしたんですけどね。それから非常に感動したのは、とくに後楽園ホールなんかがそうだったんですけど、カウント2・5でレスラーが返すとなぜかお客さんがダダダダダーッと足を鳴らすんですよ。どういう意味があるかわからないですけど、お客さんがウワーッて盛り上がってる気持ちを足に託すというその行為。それをなんとかして表現したいという気持ちがありまして、最終的には「重低音ストンピング攻撃」という表現にしたんですよね。

――あれも福澤さんの命名でしたか。その名前が定着したことによって、みんながさらに足を踏み鳴らすようになりましたもんね。

福澤　さらに、スタン・ハンセンが「ウィー！」ってやると日本武道館の1万5000人のファンがみんな「ウィー！」ってやるじゃないですか。この現象をなんとかいいフレーズで表現したいというので、僕が「ウィー少年合唱団」って言ったこともありましたねえ。あれは僕のなかでも自信作なんです（笑）。

――いやホント、ピッタリでした。だから当時の『全日本プロレス中継』からは、番組全体から楽しさが伝わってきましたよね。実際、深夜としてはかなり視聴率もよかったんですよね？

福澤　ええ、よかったんですよ。それで言うと、ホントにいまだに「なんであんな公約をしたんだろう」と思う無謀な公約があって、「深夜で視聴率2桁獲らなかったら小橋建太選手のムーンサルトプレスを受けます」ということをなぜか言っちゃったんですよ。

――深夜で10パーセントって、とんでもない数字ですよね。

福澤　でも当時の勢いとしては深夜10パーセントもあながち難しくないんじゃないかと思ってたんですけど、結局1年間10パーセントを超えられずに迎えた12月。

最高平均視聴率8パーセントだったんで、「ああ、これで受けるしかないか」と。そしてそれは番組的にも受けてもよかったんです。ただ、番組のなかの僕のちょこざいな性格として、「いや、毎分視聴率は10パーセント超えましたよ」と。そういうことで「福澤、ギリギリセーフ！」「えー！」っていう展開ですよね。そっちのほうがおもしろいし、僕も「えー！」って言われたいという（笑）。その、へなちょこな感じがあの件ではうまく伝えられたかなって思いますね。

——一番おいしい展開ですよね。

福澤 それにプロレスラーのフィニッシュホールドを素人が受けちゃ、やっぱりいけないっていう意識も働きましたよね。

——そんな感じで、『全日本プロレス中継』は深夜の高視聴率番組ながら、ゴールデン進出はなりませんでしたけど、福澤アナウンサーだけは『とんねるずの生ダラ』でゴールデン進出するという素晴らしい展開でした（笑）。

福澤 本当にねえ、ちょこざいな男なんですよ（笑）。だからそのへなチョコな感じというんですか。やっぱりこの男はプロレスの王道に乗ってなかったんだなというふうに言われるとうれしいですね。ハハハハハ！

——でも『生ダラ』の司会というのは、本当にプロレス中継がきっかけなんですよね？

福澤 そうなんです。プロレス中継をとんねるずのお二人が好きで、「ジャストミートー！」って叫んでる男がおもしろいからちょっと呼んでこいって、おもに貴さん（石橋貴明）が引っぱってくれて。それが闘牛の角に「ジャストミート」するんですけどね。

——スペインでマタドール役をやって、闘牛に襲われながら、自分でその模様を実況してたんですよね（笑）。

福澤 小橋建太のムーンサルトプレスのほうが安全だったんじゃないかという感じだったんですけどね（笑）。でも、ジャストミート福澤がゴールデンタイムで花開くというのはホントにプロレス中継のおかげなんですよね。

——あれはある種プロレスのゴールデン進出です！

福澤 僕だけ進出して申し訳ない、ホントに（笑）。

ふくざわ・あきら■88年にアナウンサーとして日本テレビに入社。2年目に『全日本プロレス中継』の実況を担当し、のちに「ジャストミート!」という名フレーズで大人気に。現在は『真相報道バンキシャ!』のメインキャスターを務めるなど名アナウンサーとして幅広く活躍中!

一番印象的だったのは、三沢さんがタイガーマスクのマスクを脱いだ試合

——そんな福澤アナが、全日本プロレスで一番印象に残ってるシーンはどんな場面ですか？

福澤 これはですね、試合そのものというよりも、三沢さんというか、タイガーマスクがマスクを脱いだ試合ですね。

——90年5月の東京体育館ですね。

福澤 あれはたしか全日本プロレスが初めて東京体育館で興行をやった試合だと思うんですけど、実況は若林さんで、僕は脇でスタンバってたんですよ。で、三沢選手がマスクを脱いだときに若林さんが「あ、タイガーマスクが三沢になった――」という実況をされたんですけど、そのときにスタッフが「福澤、花道を下がるタイガーマスクにマイクを向けろ」と。「なぜマスクを脱いだのかをマイクを向けて聞け」と言うんですよ。だから僕はマイクを持って「三沢さん、なぜマスクを脱いだんですか！」って聞いたんです。でももちろんノーコメントです。で、もう一度同じ質問をしたんですけど、それもやっぱりノーコメント。だから「ああ、結局聞けなかったなあ」と思ったんですけど、でもじつはそれがテレビ中継的にはよかったんですよね。黙して語らない三沢光晴が撮れたというのが。そのときに僕は「あ、これがテレビの作り方なんだなあ」って知るわけなんですよ。

——「ノーコメント」という映像が一番ほしかったわけですね。

福澤 そうなんです。で、おそらく三沢さん自身もそこでしゃべらないほうが話題になる、僕に指示を出したディレクターもマイクを向けて黙ってもらうということが三沢さんの思いを伝えることになるということに気づいてたんじゃないかなと思うんです。[illegible]の作り方なんだなって[illegible]たね。

——すべて[illegible]ずしも視聴者にとっていいことではないと。その三沢さんが昨年亡くなっちゃいましたね。

福澤 驚きました……。ボクの部屋にはタイガーさんからいただいた三沢さんの卓上カレンダーがあるんですけど、4月がですね、三沢さんがエルボーを決めてる写真なんですよ。その三沢さんのエルボーと顔面絞めって凄く絵になるんですよね。顔面を絞めてるときの正面からの三沢さんの顔というのはそれだけでポスターになりますよ。そういうときに僕はどういうコメントを吐こうかと[illegible]えてましたね。よく苦し紛れ[illegible]コメントが「何を思うか[illegible]三沢光晴！」ったりするんですけどね（笑）。

——[illegible]顔してますよね（笑）。

福澤 ただですね、三沢さん[illegible]にならないんですよね。たまに[illegible]番組とかで笑ってる三沢さんがいたりすると、これが絵にならない（笑）。

——ダハハハハ！

福澤 そういう三沢さんもそうですが、あの全日本プロレスの空間に触れたのは本当に楽しかったですね。いい時代でしたし、あれがアナウンサーとしての僕の礎になってます。

——冒頭でお話しいただいた「プロレス中継は決して遠回りではないんだ」というのは間違いではなかった、と。

福澤 ホントにそうです。あの空間を楽しめたことが本当に僕の財産ですね。

【10年4月4日／都内・日本テレビにて収録】

90年代最強最狂のプロレス団体
UWFインター&キングダム超絶エピソード大放出!!

高山善廣×金原弘光×エンセン井上

よみがえれ! UWFインター外伝

あの大好評企画が帰ってきた!!

のちのトップレスラー、一流総合格闘家を多数輩出し、文字どおり90年代最強のプロレス団体だったUWFインターナショナル。ただ強いだけでなく、破天荒なエピソードに事欠かないこの団体の伝説を、金原弘光&高山善廣が語りまくる大好評企画が帰ってきた! 今回はUインター道場に出稽古に訪れ、柔術をもたらしたエンセンをゲストに、超絶エピソードをたっぷりお届けします!

聞き手/堀江ガンツ　撮影　乾晋也

エンセン　金原、ひさしぶり〜。

金原　(エンセンを見て) 凄いじゃん、前に会ったときと顔が全然違うよ　昔の闘う顔になってる。ずいぶん絞ったでしょ?

エンセン　93キロまで落としてる。肉はかなり落ちたね。

金原　頭もイレズミ入れたの?

エンセン　これ入れたの昔だよ。

高山　バンバン・ビガロじゃん(笑)

エンセン　違うね〜。ホントはタイで頭に神様のタトゥー入れたかった。でも、それ行く前に(大麻取締法違反で)捕まって、海外出られないネ。あと2年間無理。

高山　そんなに出れないんだ。じゃあ、(ハワイの)家にも帰れないの?

エンセン　帰れないね。でも、すべて自分のミス。反省してマス。

金原　試合は何年ぶり?

エンセン　6年前に1回、ハワイでやったけど、(本格的に)やるのは8年ぶり

高山　練習はずっとしてたの?

エンセン　弟子に教えたり、太らないように走ったりはしてたけど、闘う練習はしてなかった。でも、試合決まってから、朝も夜もずっと練習してる

——すでに気合いが入ってるわけですね。

エンセン　だから、へんなこと言うと、試合の気持ちになるから気をつけて(笑)。

金原　電話で普通にしゃべってても、「(対戦相手を)殺したいよ、殺したいよ」って言ってるからね

エンセン　ハハハハハ。

高山　昔から言ってましたよね、試合前になると「殺したいよ」って

金原　俺なんか、その気持ちを作れるのがうらやましいよね。普通できないじゃん。

エンセン　俺は楽しく、スポーツみたいな考えで格闘技できるの、うらやましいね。

桜庭とかリラックスしてて凄いね。俺は殺すモード入るし、ケンカの気持ち。

金原　昔からそう思ったもんな。試合前にエンセンの控室に行くと、もう顔がピクピクしてんだよね。

高山　俺も、一回控室に行ったら、凄いピリピリしてて「あっ、来ちゃいけなかったな……」って思ったよ。こっちは遊びに行った感覚なのに。「やっべー、俺、場違いだ」って(笑)。

エンセン　ハハハハハ！

金原　エンセンぐらいの感覚になるのも特別だと思うよ。

では、今日はつかの間の気分転換という感じで、楽しく座談会ができたらと思います！　もともとエンセンさんとUインター勢の付き合いが始まったきっかけはなんだったんですか？

高山　きっかけは金原さんですよ。

エンセン　どっかの会場で会ったよね。

金原　新日本とUインターが対抗戦やってた頃で、たしか両国国技館だね。ある関係者を通じて「修斗のヘビー級のエンセンさんが、Uインターの選手と練習したがってるけどどうする？」って言われて。そんときが初対面だよ。

エンセン　修斗は小さい人ばっかりで、俺はもう練習相手誰もいなかった。中井（祐樹）さんとか、桜田（直樹）さんとか、全然小さいし、あの頃の修斗の人は技も知らないから。もう、練習にならなかったね。で、ビデオでUインターの動き見たら、プロレスだけど格闘技の動きができてるから、ちゃんと練習してるんだなって思った。練習してなきゃ、ああいう試合できないヨ。ただ、修斗の人は俺がUインターと練習するの反対してたけどね。

——やっぱりプロレスに対する偏見があったんですかね。

エンセン　修斗のみんなもそうだし、佐山先生はとくに「プロレスとやっても練習になんない。みんなデカいだけで、何もできない」って言ってた。でも、あの動き見たら、間違いなくできると思うのに、へんだな〜と思ったよ。

高山　佐山さんはいまと言ってること違うよね(笑)。

——確かにそうですね(笑)。

エンセン　だから、みんな無視して一応行ってみようと思って。で、行ったら凄かった。

高山　無視して来るところが凄いね　普通そう言われたら、「やめようかな」ってなるもんね

でも当時、Uインターの道場に部外者が出稽古に来るって、あんまりなかったんじゃないですか？

金原　宮戸さんがいた頃はなかったよね。

高山　エンセンが来だしたのは、宮戸さんが辞めたあとだからね。

金原　もう安生さん体制だから「好きにやって」って感じだったけど、宮戸さんがいる頃「修斗とグレイシー柔術やってる選手を練習に参加させていいですか？」とか聞いたら、たぶん「何言ってんだよ、コノヤロー！」って言われてただろうね(笑)。

高山　いまの宮戸さんだったら、全然OKだけど。

金原　当時は俺らも「グレイシー柔術」っていう言葉は知ってるけど、まだガードポジションとか、そんな概念はまったくない時代だったからね、

プロレスと格闘技どっちが強い？ じゃなく「一緒に強くなろう」だった

高山　知らなかったよね。

金原　だから、ガードポジションとか柔術の動きを習いたいっていうのもあった。

——Uインターのほうもエンセンから習いたいという気持ちはあったんですか。

高山　Uインターというか、金原さんがあったというね

エンセン　ハハハハ！　そう、だから最初は金原とばかり練習してた。

高山　で、そのあと桜庭がちょっとおもしろそうだって参加して、そんな感じだよ

——〝よそ者〟が来た！　っていうような、ピリピリした感じはなかったんですか？

エンセン　ないね。凄い友だちの状態だったから「おまえなんで練習する？」じゃなくて、「全然いいよ、来て」って感じ。みんなと一緒にストレッチしたり、みんな気持ちよく迎えてくれた　「練習しよっか？」「お願いします！」みたいな。

高山　サークルみたいだったよね。

エンセン　そう、サークルみたいだった！　格闘技とプロレスどっちが強いとか、どっちが極めるとかじゃなかったね。「いい練習して動こうよ！」みたいな感じで　みんなの性格も凄くいいなって俺思ったな。

高山　ま、俺はエンセンと練習はまったくやらなかったけどね。

エンセン　ハハハハハ！　そうネ。でも、最初は高山デカくて怖かったから、俺もやりたくなかったよ。あのデカいの、いっつもウエート持ち上げてて怖いな〜って(笑)。

あのデカいレスラーは何者だという感じで(笑)。

六本木のクラブに顔パスで入れるプロレスラーは凄いと思ったヨ！

エンセン スパーリングは垣原(賢人)は二回ぐらい。ほとんど金原、桜庭とやってた。あとは松井、安生。高田さんと田村は会ったことなかった。

金原 もう田村さんはリングス移籍したあとだったからね。ちょうどエンセンが来て、安達(巧)さんも来て、練習が凄く充実してきたんだよ。

高山 安達さんとエンセンは同時期でしたっけ？

金原 安達さんはＵインター末期に来て、キングダムになってからは正式にコーチになってもらって ちょうど格闘技志向が一気に入ってきたんだよね。エンセンとは最初にスパーリングしたとき、ガードポジションからガンガン極められて、「これは凄いなぁ」って思ったもんね。あの頃はまったく柔術がわかんないからね。

――なんで極められちゃうんだろう、と。

金原 そうそう。俺らは上になられたら、亀になる動きで、そこから腕を取ったり、どんどん動いていくスタイルだから。

高山 全然違った。

エンセン 金原たち背中つけて寝ないし、自分から相手に背中を向けて立ち上がったりとか、俺は逆にＵＷＦの動きが凄い勉強になった。柔術の相手とやると、安心するところある。相手は動かないところもあるから、やっててラク。でも、Ｕインターのほうはずっと動くから、何をやっていいか迷っちゃうね。バックを取っても極めにいかないと、動くから逃げられる。動きが止まらないから、いい練習だった。

金原 俺たちは下から極めたりする動きがなかったからね

高山 前にビル(・ロビンソン)先生に「なんでプロレスは下から極める動きがないんですか？」って聞いたことがあるんですよ。そしたら、「下になったらフォールされるから」って言ってましたね

金原 確かにそうだよね 肩がマットについたらフォールされるから。

エンセン あっ、そっか！

――もともとがレスリングですからね。

高山 だから道場の極めっこで、1、2、3のフォールはないけど、そういうベースがあるから、下になっての技がないんですよ。

金原 アマレスも肩が1秒マットについたら負けだもんね。

エンセン 1年ぐらい前にプロレス観たら、下から三角絞めやろうとしてるのに、和田(良覚)さんがカウント取ってるから、おもしろいな～って(笑)。

金原 エンセンは練習後に一緒にちゃんこも食べてたよね？

高山 食べてた、食べてた。

エンセン そうね、食べた。練習して、ごはんも食べられて、「このシステムいいな～」って思った。

金原 昼間は練習して、夜は六本木に遊びに行くっていうのもあったよね。

エンセン あれは楽しかったよ！(笑)。

金原 エンセンが練習に来始めたのって、ちょうど先輩からの圧力もなくなった頃だったからさ、それまで押さえつけられてた反動で、クラブの夜遊びが大好きになっちゃったんだよね。

YOSHIHIRO TAKAYAMA × ENSON INOUE × HIROMITSU KANEHARA

高山 和田さんに「遅咲きの狂い咲きだ！」って言われてね(笑)。

金原 ホントに毎週必ず行ってたからね。

エンセン 俺の夜遊びは金原が師匠だから(笑)。

高山 それまで行ったことなかったの？

エンセン 全然行ってない 金原に誘われて行って「ああ、いいな～」って。金原、俺を悪い男にしたよ(笑)

高山 その頃、俺らは毎週末出かけて、朝まで遊んでたからね

金原 日曜日は練習が休みだから、必ず朝まで遊んでたよね。で、クラブはだいたいＵインター勢の知ってる人がオーナーやってるから、みんな顔パスで入れるんだよ、

――クラブを顔パスでしたか！

高山 ハシゴで顔パスだから！

金原 そうそう。で、それを見てエンセンが「プロレスラーは凄いなぁ！」って(笑)。

高山 そこかよ！ ってね(笑)。

エンセン ホントにプロレス凄いって思った 「いいな～」って(笑)

金原 ホント全部タダで遊んでたもんね。どの店に行ってもＶＩＰルームに入れてもらってたし あとは和田さんがセキュリティやってたから、みんなが並んでるところを優先で入れてもらったりね(笑)。

そういえば、和田さんはレフェリーやりながら、六本木の店でセキュリティもやってたんですよね。

高山 週末のバイトですよ(笑)。

金原 一晩で3～4件ハシゴするんだけど、結局、どこの店に行ってもＵインターの連中で固まって遊んでるんだよね。

高山 クラブのＶＩＰルームも、道場でちゃんこ食ってるメンツと一緒なんだよ(笑)。

ダハハハハハ！

金原 みんなバラバラに寮から出るんだけど、結局、行く場所は一緒でつるんじゃうんだよね(笑)。

エンセン 金原とかＵインターとは1～2年ぐらいずーっと遊んでた(笑)。

金原 だってキングダムができたあと、道場の場所が麻布十番だったんだよ。もう遊びに行くにちょうどいい場所なんだよ。

高山 クラブまで歩いて行けるもんね。

金原 安生さんに「なんでこんなところに道場作ったんですか？」って聞いたら、「おまえらが、よく遊ぶだろ？ 飲んで遊んだあとは、ここで寝ればいいじゃないか」って言ってたよ(笑)

――キングダムはそんな福利厚生がありましたか(笑)

金原 それで毎週、あちこちのクラブに顔パスで遊びに行ってたから。

高山 あれは狂うよね しょうがないど こ行ってもＶＩＰだから。

エンセン 俺がいま、その状態(笑)。

金原 そう いまはエンセンがどこでも顔パスなんだよね。

エンセン でも昔はＵインターのみんなの力で入れてもらってた 「ワタシも一緒だよ」って(笑)

そういう意味で、当時一番凄かったのは安生さんだったんじゃないですか？

金原 そうだよ！ 安生さんこそ、遅咲きの狂い咲きだったよね。

高山 あの頃寝てなかったんじゃないの 安生さんは平日も行ってたから(笑)。

凄いですね、安生さん。

高山 行かないのは日曜日ぐらい。店かやってないから(笑)。

エンセン ハハハハハ！

金原 あとエンセンは当時、キャバクラが大好きだったよね。

エンセン　いまも大好きです！（笑）。

金原　キャバクラでのエンセンは、凄いスイートトークでね。こっちが恥ずかしくなるくらい、優しいのよ。

エンセン　ハハハハハハ！

高山　また舌足らずで赤ちゃん言葉だから、母性本能をくすぐってるんだよ。

金原　いつもエンセンだけモテるのよ。

高山　エンセン必ず持って帰ってたよね。

金原　エンセンはナンパもしてたじゃん。

エンセン　ハハハハハ！　でも、女好きなことは、やっぱり男の印でしょ。「強くなりたい、女が好き、お金が儲かりたい」これが男じゃない。金原は強くなりたいはあるけど、女いらないになってきてるから、刀が一個なくなってるね（笑）。

金原　エンセンはいまだに全部現役なのが凄いよ

――「男でありたい、男になりたい」っていうくらいですからね

金原　前にエンセンに「男とは何？」って聞いたら、「どんなに疲れていてもSEXを頑張ることよ！」って言ってたよ（笑）。

高山　エンセンの言う「男で死にたい」っていうのは、腹上死ってことか（笑）。

エンセン　ハハハハハハ！

――前にエンセンさんは「安生さんが、メチャクチャモテるのがビックリした」って言ってましたよね？

エンセン　ビックリしたよ！　安生、いつも女と一緒だよ

高山　六本木はどこに行っても「安ちゃん、安ちゃん」って言われますよね

金原　俺さ昔、神田うのちゃんに会ったとき「プロレスラーです」って言ったら、「プロレスラーで私が知ってるの、安ちゃんだけ」って言われたよ（笑）。

――ダハハハハ！　凄い！

金原　どんだけ、凄いんだって（笑）。

エンセン　どこに行っても安生有名よ。

金原　当時はこうやっていっつもエンセンと遊んでたから、もちろん一緒に練習したのもいい思い出なんだけど、夜の遊びのほうが思い出としては強いよね

高山　俺は夜遊んでた思い出だけだから。

エンセン　そうね。練習は別でも夜は一緒に遊んでた（笑）

金原　あと六本木はエンセンの弟子のガイジンもよく一緒に行ったよね

高山　たくさんいるんだよね、エンセンがシメるから（笑）

金原　みんなボスのエンセンには凄い忠誠心なんだよ

高山　いつも青タン作ってきてね。「どうした？」って言ったら、「練習でエンセンにやられた」って（笑）。

エンセン　ボロボロまで練習して、ボロボロまで遊ぶから（笑）

金原　普段はフレンドリーで上下関係はないんだけど、ジムではちゃんとボスなんだよね。大宮のジムに行くと、みんながエンセンを慕ってるのがよくわかるよ。

高山　サル山のボスだよ。でも、格闘技ってやっぱり、そうじゃないとダメだと思う。絶対に統制とれないもん。

金原　だからいまUFC出てるジョージ（・ソテロポテス）なんかもそうでしょう。

エンセン　そう、ジョージ、凄いうまくいってるね

金原　大和魂のパンツ穿いて、UFCで凄く活躍してるよね。彼も大宮で練習してたファイターだから

――あの選手はメチャクチャ強いし、試合もおもしろいですよね。

エンセン　チャンピオンなれると思う。自分のジム、やっぱり英語だし、みんなよく来るんですよ。BJ（ペン）もジョシュ・バーネット、カーロス・ニュートン、ジョージも日本に来たとき、みんな練習に来る

――環境がいいんですね。そういう、みんなで技術交流する最初の場がUWFインターだった、と。あれからもう15年経ってるんですよね。

いまの俺の人生、全部25日のため。すべて出しきります！

金原　そうか、15年前か。

エンセン　15年前！　ヤバイな～。

高山　ヤバイよ。オヤジがいまさら試合しちゃ（笑）。

金原　でも、俺が試合してると、エンセンも試合やりたそうな顔してたんだよね。それはいつも感じてた

エンセン　試合したい気持ちあるけど、やったら死ぬと思ってたから、「やろう」っていう決断にはなかなかならなかった。だから、いま「やる」って決めてからは、（試合がある）25日のあと、ない気持ち

――25日以降のことは考えられませんか。

エンセン　25日で死んでも、おかしくない。だから、もうホントに死ぬほど、トレーニングできます。1日ずつ考えると、頭苦しくなるから、トレーニングを一個ずつクリアしてる。朝走って、トレーニングして、昼にプール。このインタビュー終わったら、また大宮ジムに行く。

金原　まだ練習すんの？

エンセン　やります。一日3回練習やってます

高山　凄いねぇ

エンセン　だから、試合観るたびに、「いいなあ、俺もやりたいなあ」と思ったけど。この苦労思うと、なかなかできなかった。でも、いまは俺の人生、全部25日のため。ほかにない！

金原　どうしてそこまでの気持ち作れるの？

エンセン　ホントはもうこういう死ぬようなことしないで、ゆっくり試合観たいと思ってた。でも、今回いろいろあって、1年半前は俺、警察署にいた。そこから立ち上がるし、もうガンジャとかそういうもの、一切やってない。あと、ファンにありがたい気持ちがある。9000人以上の署名が入ってきたね。

金原　そんなにあったの？

エンセン　取り調べのとき、普通見せてはくれないけど、取り調べの人が一人格闘技ファンで、書類の束持って「エンセン、これ全部署名だよ」って言ってくれた。俺、うれしかったよ。ホントにありがたい。ファンはいっつも「（試合を）観たい、観たい」って言うけど、それワガママだと思ってた。俺たち死ぬつもりで闘うけど、あなたたち、それをどんな気持ちで観てる？って。でも、今回はそのワガママ聞きたい。死ぬつもりの闘い見せたい。ホントはこの歳でやりたくないよ。でも、今回はファイトマネーも凄いよかった。

金原　エンセンが「いい」って言うんだから、よっぽどいいね（笑）。

エンセン　ホントはオファー来て、試合まで5週間しかない。無理と思った。でも、ジェイロックの社長、俺が捕まる前も捕まってからも、性格変わらなかった。「エンセンはエンセンだ」って。もう性格変わった人いっぱいいるよ。名前あんまり言いたくないけど、○○さんみたいに。

一同　アハハハハハハ！

エンセン　俺、不良に力あるから、「手伝ってください」って言われて、タダで全部手伝ってたよ。でも、一番苦しいときに「しばらく来ないでください」って。それで1年半経って、もう立ち上がれるのに、何もないよ。背中向いた感じ。でも、ジェイロ

たかやま・よしひろ■1966年9月19日、東京都出身　92年にUインターでデビュー　97年より全日本プロレスに参戦　ノアを経てフリーとなり、団体の枠にとらわれず大活躍　昨年はメジャー3団体のタイトルグランドスラムを達成した　196cm、125kg

えんせん・いのうえ■1967年4月15日、米国ハワイ州出身　日系4世　95年に修斗でデビュー　ヘビー級王者となり修斗四天王の一角を占める　PRIDEで活躍後、新日本プロレス、BMLでプロレスも経験した　今回6年ぶりにMMA出陣　180m、95kg

かねはら・ひろみつ■1970年10月5日、愛知県出身　91年にUインターでデビュー　キングダムを経て、リングス最後のエースとなる　リングス活動休止後、PRIDE、パンクラス等で活躍　現在はDEEPを主戦場としている　178cm、84kg

ノクの社長、変わらなかった　だから、ノー」って言えなかった。「ノー」って言えないけど、試合したくないから、俺無理なオファーしたよ　これ出せないでしょって いう金額。でも、「出します！」って言った。「あれっ、どうしよう？」って、自分で言ったから試合しなくちゃいけない（笑）

自分から出した無理な条件を國保社長がクリアしちゃったわけですね。

エンセン　俺、ホント無理と思った。でも、神様は「エンセン無理でも頑張れる」って思ったんだと思う　だったらもう死ぬ気でやるよ！　いま練習もうまくいってる。25日は一番暴れるエンセンが出てくると思う。殺してきます！

金原　前と身体が全然違うもんね。

エンセン　今回はマーク・ケアーみたいに10キロ差あったりしない　たぶん今回は力というより、スタミナとスピードと動きが大事だから、それ全部やってますから、酸素カプセルも買ったよ！

高山　へえ、自分で買ったんだ

金原　酸素カプセルいくらするの？

エンセン　定価は340万円。でも、かなり割引してもらった

高山　あれ、効きますよ

エンセン　回復凄いよ

高山　俺も入ったとき、ビックリした

エンセン　マジックみたいね　年寄りにマジック（笑）。大事それ

では、試合まであと2週間ですけど、期待してますよ

金原　応援行くよ！

高山　俺は巡業で行けないけど、頑張ってください。

金原　試合が終わってから、控室に顔出すね。試合前に顔出したらヤバイ（笑）。

エンセン　俺は26日の朝、起きれたら幸せね。25日に俺は死ぬと思ってやる。でも、好きなこともっとやりたいから、25日に死なないために、いま死ぬほど練習する。

金原　凄い気持ちだね。高山くん、そんな気持ちになったことある？

高山　死ぬとは思ってないけど、PRIDEに出たときは、かなりの覚悟を持って、切羽詰まってはいましたけどね。

エンセン　もう、すべてを懸けます。すべて出します　拳が骨折しても、絶対続けます　腕折られても続けます。そのときのケガより、あとの後悔が心配。「まだやれたじゃん」って思ったら、ずっと心苦しむ。右腕折れても、左でパンチしたらKOできたかもしれない、それは嫌だ。全部出したい　ボブチャンチン戦、負けたけど全部出したから後悔なかった。そういう試合します！

高山　じゃあ、頑張って。

金原　応援してるよ！

エンセン　頑張ります！　全部出します。じゃあ、練習戻ります！

【10年4月7日　神奈川県・聘珍楼にて収録】

エンセンの死ぬ気の闘いを見よ！

『吉田秀彦引退記念興行～ASTRA～』

東京・日本武道館

4月25日（日）開場14:00 開始16:00

主要対戦カード

吉田秀彦vs中村和裕
エンセン井上vsアンズ・"ノトリアス"・ナンセン
長南亮vsチャ・ジョンファン
小見川道大vsミカ・ミラー
中村大介vs天突頑丈

チケット料金（全席指定・消費税込）

ロイヤルVIP 100,000円　VIP 70 000円　SRS 30,000円
S席 17,000円　A席 7,000円

お問い合わせ

ジェイロック TEL.03-5485-2200

田村　なんかひさしぶりだね。

──ボクがインタビューするのは1年4

プロレスラーは強くならなきゃいけないし観客も満足させなきゃならないって思ってた

試合に出るスタイルだったからね。だか

Uが生んだ90年代最高のシュートレスラー

田村潔司

UWFバカ一代

～最高のプロレスラーがシューターであった理由～

**UWF団体にとって、プロレスから格闘技への過渡期でもあった90年代。
そんな時代にプロレスのメインイベンターとして観客を常に魅了しながら、
ここぞというときのシュートマッチで結果を残してきたのが田村潔司だ。
田村はいかにして、一流プロレスラーとシューターを両立していたのか。その秘密に迫ってみた。**

聞き手／堀江ガンツ　撮影／乾晋也　スタジオ写真／森廣博

田村　なんかひさしぶりだね。

――ボクがインタビューするのは1年4カ月ぶりですね。

田村　ずいぶん空いたね～。

――これだけ間隔が空いたのは、田村さんが1年4カ月も試合から遠ざかってるからだと思うんですけど。

田村　あ、そうか（笑）。

――ですから今日は、田村さんが毎月ちゃんと試合をやっていた、素晴らしいプロレスラーだった頃の話を聞きたいんですよ。お世辞抜きで、田村さんは90年代最高のプロレスラーの一人だと思うんで。

田村　うん、自分でもそう思う。

――思いますか（笑）。ただ、田村さんって髙田さんたちのように、プロレスの試合数をこなしているわけじゃないのに、観客を沸かせる試合ができて、若い頃は総合格闘技が存在しない時代にデビューしてるのに、ちゃんと強いじゃないですか。これがホントに不思議なんですよね。

田村　そんな強くないよ。ノミの心臓だから。

――でも、MMAが存在しない時代に若手時代を送って、強くなるセオリーなしでここまでになったというのは、やっぱり不思議ですよ。

田村　強くない俺が言うのもへんだけど、やっぱり一つのことを継続することだろうね。あとは気持ちの問題なんじゃないの。為せば成るじゃないけど。20代から30代になった頃は、試合のときはお客さんのことを凄く意識してたし、練習に関しても毎月試合をやったあと2～3日は休むけど、それ以外は24時間、練習から食事からコンディション作りには気を使ってたよ。

――そこまで気を使ってましたか。

田村　UWFは練習したことがそのまま試合に出るスタイルだったからね。だから、常に反復練習を欠かさず、あとはお客さんの目を意識して試合をする。

――それは「どんな試合をしろ」って教わるもんですか？

田村　いや、べつにどうしろとは言われないんだけど、板前と一緒で目で盗まないとダメだね。前田（日明）さんや髙田（延彦）さんの試合を観て、自分なりに考えたり。藤原（喜明）さんとかには移動中のタクシーのなかで「周りの雰囲気を見て勉強しろ」って言われたことがあるね。

――先輩の試合を観て、自分なりに観客が求める試合を作っていくわけですか。

田村　どんな試合がいい試合かっていう答えはないんだけど、俺はやっぱり動きがある試合がしたいと思ってたからさ、そのためには相手も動いてくれなきゃいけない。だから「ここでこういう技をかけたら、相手が動きやすいな」っていうふうなことを考えて技を仕掛けたりしてたよ。動きといっても「間」も必要だから、緩急は意識してた。

――相手の動きを封じるのではなく、相手が動きやすいようにしてましたか！

田村　それは相手を逃がしてるわけじゃなく、次の技へいくために動かしているんだけどね。だから道場でスパーリングやってるときでも、「こう動いてくれよ！」っていうのがある。「こう動けるように俺はやってるのに、なんで動かないの？」とかね。それが噛み合う、噛み合わないということにもなるんだけど、噛み合う選手は二手三手読みながら動く選手だね。

――噛み合う選手っていうのは、たとえば誰がいました？

田村　やっぱり一番凄かったのはヴォルク・ハン。

――やっぱりハンですか！

田村　ヴォルク・ハンとの試合はホントに先の読み合いだったからね。そういう読み合いができる選手との試合は凄くおもしろかった。逆に俺が思う動きじゃない選手には、全然違うパターンで攻めたり、異なった瞬間的な判断で試合の組み立てをしていたね。

――じゃあ、UWFスタイルのなかで、UWF流の攻めと受けがあったわけですか。

田村　そうだね。偉そうなことは言えないけど、試合を作っていく感じだったな。だからメインの試合に出るときでも、第1試合から会場を自分の目で見て、どんなお客さんの温度かなというのを、確認しながらやってたから。第2試合に出場するときは、第1試合が盛り上がってたらちょっと押さえ気味にしたりして、第3試合につなげる。やっぱり興行はずっと盛り上がるだけでもだめだから、上げて落として、上げて落としてというのが必要だからね。だから次の試合につなげるために、あえて「静」の試合も意識してやってたよ。

――そんなことまで考えて試合してたんですか！

田村　だから前の試合の人がつまんなかったら、ちょっと上げてみようかなと思ったりとか。それはべつに教わったわけじゃなく、諸先輩方の行動を見ていて、自然と身についた感じなんだけどね。

そういったプロレスの興行論をちゃんと試合に落とし込んでいたんですね。

田村　そうだね。

――でも、田村さんはリングスのエース時代、そうやってお客さんを満足させる試合をする一方で、格闘家としても強くなければならなかったじゃないですか。

田村　うん。強くなきゃならないし、表現力もなきゃならない。それが身についてないと、生き残れないリングだったからね。それに、いまでこそ純プロレスと格闘技に分かれてるけど、当時は境界線があいまいだったし、仕掛けられる試合もあったから、強さは必要不可欠だったよね。

――でも、いまの総合格闘技を観ているファンは、プロレスラーがなぜそこまで強さを求めていたのか、理解できないと思うんですよね。プロレスと格闘技では最終目的が違うじゃないですか。それなのに苦しい思いをして強さを求めた理由がわからない、という。

田村　なぜそこまで強さを求めたかって言ったらね、アホだったからだよ（笑）。

――なんですか、それ（笑）。

田村　とにかくプロレスラーとして強くならなきゃいけないと思ってたし、観客も満足させなきゃいけないと思ってて。そのために馬鹿正直に、そしてアホみたいにキツい練習してたからね。それに俺が新弟子の頃は、総合格闘技っていうカテゴリーがなかったから、プロレスラーが強さを求めるのはあたりまえだと思ってたから。

95年末、新日本vsUWFインター対抗戦に背を向け、第2回UFC準優勝者であるパトリック・スミスと一世一代の大勝負に出て勝利した田村、ここぞというときの強さは恐るべきものがある。

UWFバカ一代

動きがある試合をしたかったから二手三手先を読んで相手を動かした

――プロレスラーは強くならなきゃいけない、と信じていたからこそキッい練習してたわけですね。

田村　UWFとかUインターは、みんなそう思ってたからね。練習でもやられたら悔しいから強くなりたい。下が育ってくると、抜かれたくないから強くなりたいっていう。新弟子時代は先輩が昼と夜練習するなら、俺はそれ以外にも練習しなきゃいけないと思ってやってたし。

――でも、強くなろうにも当時のスパーリングは、いまと違って先輩が一度上になったらタップしても、ずっと上になって極めまくる練習ですよね？

田村　うん、あれがホントにキツかったよ。安生（洋二）さんとかに上に乗られて、ラッパ吹かされると、窒息死するんじゃないか、殺されるんじゃないかって思ってたからね。ほかの新弟子で、あまりにも苦しくて、安生さんの腹の肉を噛んだヤツがいたからね。俺は噛むまではいかないけど、ホントにキツかった。

――ただ、そういう練習って、いまの目で見ると「本当に強くなれる練習なのか？」って思いませんか？

田村　技術的にはまったく意味を持たない。技術向上はしないけど、ああいう練習をしていると、試合で気持ちが出るようになるんだよね。それは雑用とか、日々の生活も含めて試合に出るんだと思うけど。

――では、そんななかで総合格闘技の技術はどうやって身につけたんですか？

桜庭（和志）さんとか金原（弘光）さんは、Uインター末期ぐらいから、エンセン井上選手なんかも加わって、いまの総合と同じような練習をしてたらしいですけど、田村さんはその時代はUインターにいないわけですよね？

田村　そうだね。ただ、それなりの努力はしていたと思うよ。

――その努力の一環が、レスリングやムエタイだと思いますけど、第二次UWF時代から日体大でレスリングを習おうと思ったのは、どうしてなんですか？

田村　単純に立ってよし寝てよしのレスラーになりたかったんだと思うけど。その頃、先輩方も通常の練習以外に安生さんはキックのジムに行ったり、高田さんはボクシングジムに行ったりしてたから、俺もデビューして少し余裕ができたら、道場以外にほかの練習をしてみたいっていうのがあったんだよね。

あの時代から、日体大でみっちりレスリングをやってなかったら、その後の田村さんの実力はないですよね。

田村　なんでもそうだけど、練習って、今日習ったことが明日できることじゃないから。地道に毎日練習して、1年後2年後にようやく表現されるものだからね。だから日体大にはUWF、Uインター通して

週に2回は行ってたな。あと登戸にジム

田村　だから、中村（大介）くんにしても、

リングスでは、さまざまなタイプのヘビー級格闘家とも名勝負を展開。エースとしてリングス無差別級王者のベルトを巻きながら、シュートマッチでも結果を出していた。

週に2回は行ってたな。あと登戸にジムを出してからは、専修大学にもレスリングを習いに行ってたから。

――専修にも行ってたんですか？　それは知りませんでした。

田村　専修大は全然ツテがなかったんだけど、いきなり練習場に行って、「監督さんいらっしゃいますか？」っていうふうに、言ってやらせてもらったね。

――登戸にジムを出したあとだと、もうリングスのエースになってからですよね？

田村　うん、でも頭下げて学生と一緒に練習させてもらってた。だから、俺はアホだったんだよ（笑）。いま思うと、なかなかできることじゃないと思うから、アホだったんだろうな。

――プロのチャンピオンが、お客さんの観てないところで、強くなるためにアマチュアの学生のなかで揉まれていたわけですよね。

田村　でも、大学のレスリング部なんて、もうレスリングのプロみたいなもんだからね。その道のプロに学ぶっていうのは、悪くないことだと思ってたから。

――アホというか、ホントに純粋ですね。

田村　何も考えてなかったんだろうね。金（泰泳）さんに負けたあと、次に格闘技で1勝するまで車に乗らないってこともやったかな。自分に罰を与えて、次は絶対に勝てるようにする。まあ陰でちょこっと乗ったりしたけど（笑）。昔は山の上に住んでるときも、自転車で行き帰りして山の上だから足がパンパンになってたときもあるよ。家に帰るまで地面に足を着けない、神様はどっかで見てくれてるんだろうなって、思いながらやってたから。

――科学的じゃないからこそ、そこまでできるんでしょうね。

田村　だから、中村（大介）くんにしても、自転車で2時間ぐらいかけて、赤羽、登戸、調布の各ジムに行ってるからね。格闘技をやる人は、少なからずああいうアホさ加減が必要なんだと思うんだよな。

――なんか田村さんって、昭和の「プロレスバカ」ですよね。

田村　プロレスバカ!?　バカじゃなて孤高の天才だって。

――「空手バカ一代」と同じような意味で「UWFバカ」ですよ！

田村　確かにUWFバカだな（笑）。

――かつての極真空手家も、地上最強になれるって信じて、大山総裁の教えに則ってメチャクチャハードな練習をしてたわけじゃないですか。なんかそれに通じるものがありますね。

田村　そうかもしれない。

――そうやって、セオリーに則ってないない猛練習で実力をつけていったわけですよね。田村さんはインターのときって、後輩選手といまの総合みたいな普通に取って取られてっていうスパーリングはあんまりしてないんじゃないですか？

田村　Uインターは96年の途中までだから、そうだね。それまでは、古きよき練習をしていたから。

――やはり、それまでは練習とはいえ、後輩に極められちゃいけないっていう気持ちはありました？

田村　あったかもしれないね。道場には先輩後輩の年功序列もあったし、強さの序列もあったから。

――でも、いまはそういうのなしで、みんなで取って取られて、強くなるための練習をしてますよね。

田村　そうだね。楽しく練習できてるんじゃないかな。楽しく技術交流もできて。

それは楽しんで格闘技をやりたい人もいるから、いいと思う。でも、プロを目指す人、試合で勝ちたい気持ちがある人は、自分のなかで区切りをつけて、練習に没頭するしかないと思うから。

――孤独にならなきゃダメだ、と。

田村 あまり勧めないけど、何かを得るには何かを捨てる、そのおかげで友だちも少ないし（笑）。

――いま、田村さんはスパーリングで後輩に取られたりとか、そういう練習してるんですか？

田村 いまはジム生に合わせて、取られたりするかな。

――でも、Uインターの頃なんかは？

田村 たぶんないね。必死にやってたと思うから。ちょっとハッキリ覚えてないけど、後輩に取られたりとか、そういうことはなかったと思う。

――じゃあ、Uインターを離脱してから、上山（龍紀）さんなり、自分の弟子を相手に練習して磨いていったわけですか。

田村 そうだね。だから俺は天才なのかもしれないね（笑）。

――また自分で言いますか（笑）。そういう練習で身につけた技術で、田村さんはヘンゾ・グレイシーと試合をする前に「勝てる」と思ってたわけですよね？

田村 勝てるかどうかはわからないけど、「絶対に負けられない」とは思ってた。もし負けたら、もう二度と表を歩けないぐらいの気持ちでやってたね。

――田村さんの世代って、普段のプロレスリングをしながら、シュートに出陣するからこそ、勝敗の重みが、いまの総合と違うっていう部分もありますか？

田村 それはあるかもしれないね。でも、いまの総合でも、1試合1試合「負けたら終わりだ」って思ってるヤツもいるんじゃない？ 長南（亮）なんかからは誌面を通じてだけど、それが伝わってくる。「負けても次がある」なんて思わないで、アイツはアイツで危機感持ってやってるんだろうなって、そこだけは偉いと思う。あとのことは、あんまよく知らないけど。

――田村さんって、若手の頃から1敗の重みが大きい試合がたびたびありましたよね。たとえば、デビュー2～3年でプロボクサーのマシュー・サード・モハメッドとやったり。

田村 まあ、プロレスラーだから、負けたら道場に戻れないようなプレッシャーはあったね。Uインターの幹部は、自分のところの選手が負けたら、プロレスが負けたっていう考えがあったと思うから。

――リングスに移籍したときだって、もし負けたら地位がないわけですよね。

田村 ないね。その前のパトスミ（パトリック・スミス）戦もそうだし、リングスに入ってからの日本人対決もそうだったね。

――長井満也戦、山本宜久戦とか。

田村 あと高阪（剛）とかね。

――そのあとにヘンゾ戦があって。

田村 ヘンゾの前にフランク・シャムロック、デイヴ・メネーがあって、そのあとギルバート・アイブル、ジェレミー・ホーン、

なぜ俺がそこまで強さを求めたかといったら「アホ」だったからだよ

UWFバカ一代

パット・ミレティッチとやって。KOKは一日2試合、そのへんでもう、頭が追いつかなくなって本当にアホになった（苦笑）。

――絶対に負けられない他流試合が毎回になって、パンクしちゃう感じですか。

田村 そうだね。リングスの末期の頃は、キツかったね。階級もない無差別だし。でも看板しょってるから勝たなきゃいけないし。プレッシャーの大きい試合ばっかりだったから。身体もそうだけど、気持ちがもたなくなってきてた。

――だから、田村さんがその後、極端に試合数が減ったのもうなずけるなって思うんですよ。90年代の田村さんっていうのは、リングスルールの試合の合間に、どうしても負けられない試合が入ってくる感じで、いまみたいな競技スポーツとしてやってるわけじゃないわけですからね。

田村 それがあってのいまの俺だからね。

――だから90年代の田村さんって、最高のプロレスラーが試合で魅せながら、シュートで結果を出してたっていう意味で、あらためて素晴らしいなって思ったのが今回の企画です（笑）。

田村 ありがとう。じゃあ、トロフィーとかくれないの？

――なんでですか。「90年代に素晴らしかったで賞」とかほしいんですか？（笑）。

田村 なんか記念品みたいなものほしいじゃない。『kamipro』の堀江ガンツおじちゃんに、こんなものをもらったんだよ」って、子どもに自慢できるようにさ。

――田村さんはまだ現役ですからね。そういう功労賞的なものじゃなく、これからもっと試合で魅せてください！

【10年4月7日／神奈川・「U-FILE CAMP」にて収録】

たむら・きよし■1969年12月17日、岡山県出身。89年に第[illegible]次UWFで[illegible]。UWFインターでは高田延彦[illegible]として活躍。リングスでは前田からエースの座を譲り受けた。その後、PRIDEでも活躍し、一昨年大晦日の「Dynamite!!」では桜庭和志に判定勝ちした。180cm、84kg。

5月9日（日）開場12:30
※中村大介[illegible]
【お問い合わせ】[illegible]

浅草キッドの玉ちゃんと語る!

俺たちのリングス変態座談会

90年代のプロレスから格闘技への転換をダイナミックに展開した伝説の団体

90年代といえば、プロレスから総合格闘技への過渡期でもあった時代。
そんななかで、その変化を最もダイナミックに展開していたのが、我らが前田日明率いるリングスだ。
世界中の猛者を集めた実験的な試みによって、格闘技のいろんな可能性を探ったリングスのおもしろさを、
変態的なリングスファンが集まって語りまくります!

構成／堀江ガンツ

ガンツ 毎度おなじみ変態座談会なんですけど、今回は「90年代特集」ということでリングスをテーマに語っていこうと思います!

玉袋 いま前田日明は渦中の人だからね。ある意味、タイムリーだよ。

椎名 "前田なにがし"ですよね(笑)。

玉袋 そうなんだよ 小沢一郎が俺たちの前田を「なにがし」呼ばわりだからね。悔しいじゃねえかよ。

椎名 単純に「日明」が読めなかったっていう説もありますけどね(笑)。

玉袋 じゃあこの際、スパークリングフラッシュ時代の「前田明」に戻すか

ガンツ でも、参院選出馬っつっても、必ず波風が立つところがさすがですよね(笑)

玉袋 そうなんだよ すんなり出られちゃ、おもしろくねえよ。それで民主党とモメて国民新党に行ったら、なぜか西村修に阻まれてるっていうのがいいよな。

椎名 無我に行く手を塞がれて(笑)。

玉袋 またひとりぼっちのアキラになってるのが悔しいじゃねえかよ。だいたい民主党も池谷(幸雄)を公認して、なぜ前田を落とすかね。

椎名 まあ、扱いづらいんでしょうね(笑)

玉袋 だろうな。だいたい出馬がホントに決まったら、『YouTube』に上がってる"ブルボッコ映像"とかどうなっちまうんだよ?

椎名 あれは凄いよね。もう「おまわりさ〜ん!」って、警察呼びたくなるもん。

玉袋 あれフルボッコにしたあと、興行終わるまでスクワットやらされてたんだよな。

ガンツ 一歩間違えたら、九時事風(?)視力状態という(笑)

玉袋 現在、本名で報道されておりますってな(笑)。

ガンツ では今日はそんな前田日明率いるリングスの素晴らしさをたっぷり語っていこうと思いますけど リングスってホントにプロレスから

椎名基樹
1968年4月11日、静岡県出身の42歳。本誌の好評長寿連載コラム「サムライ三昧」でもおなじみ。リングス好きが高じて、リングス・オランダ大会も現地で観戦した格闘技系変態

玉袋筋太郎
1967年6月22日、東京都出身の42歳。子どもの頃から蔵前に通った変態プロレスエリート。かつて「フロムA」で「アキラのズンドコ応援団」というリングス応援コラムも担当。

堀江ガンツ
1973年9月14日、栃木県出身の36歳。変態座談会主催者。ロシア・エカテリンブルグにある「リングスセンター」に行ったことがあるのが自慢。そこで前田総帥に……(以下略)。

総合格闘技に変化するダイナミズムが魅力でしたよね。

玉袋 プロレスから格闘技への途中経過だったよな。

椎名 総合格闘技が確立されてないから、何をやってもいいっていうか、自由だったよね。

玉袋 とくにリングス・オランダの縛りのなさね。やめろって言ってんのにサミングやっちゃうんだよ。

椎名 あいつら悪いヤツですよ(笑)

ガンツ いま、前田は『THE OUTSIDER』をやってますけど、当時から世界規模のアウトサイダーを集めてたんですよね(笑)。

玉袋 リングス・オランダなんてよ、撃たれたヤツとか捕まったヤツが多すぎるだろう。

椎名 それと同時にオリンピッククラスのアスリートもたくさん参加してたよね。

ガンツ とんでもない人たちが集まってたんですよ。

玉袋 そんななかに、ただケンカが強いだけの武南(幸宏)が出てるっていうのが最高だよ。

ガンツ いましたね、武南(笑)。あれはいまの『THE OUTSIDER』のルーツというか、ホンマもんの大阪のケンカ屋なんですよね

玉袋 ただ、ケンカが強いだけでリングに上がっちゃうんだぜ。アスリートでもなんでもねえんだから そのれが"熊殺し"ウィリー・ウィリアムスとやってんだからな あの絵面がなんとも言えねえよな

ガンツ リングスはみんな肩書きが凄いじゃないですか サンボ世界チャンピオン、レスリング五輪代表、極真世界大会何位とか、そのなかに「青空前田道場」がいるっていう(笑)。

椎名 道場すらない(笑)。

玉袋 戦後の青空教室じゃねえんだからってよ そんな玉石混淆を束ねてたのが前田っていうのがいいよな。

ガンツ 世界中からいろんなのが集まってましたからね。

玉袋 格闘技界の稲川素子事務所って言われてんだから。

椎名 各国いろいろ揃ってますって(笑)。

玉袋 椎名先生はいつからリングス観てんの?

ただケンカが強いだけの武南がウィリーとやってるのが最高!

椎名 俺はちょっと出遅れてるんですよ 上京してきたばかりで、浪人もしてるから立場的に観られないというか。寮に入ってたから、テレビを観る時間も限られてたから。

玉袋 俺は横浜アリーナの旗揚げ戦から観てるんだけど、その前に後楽園ホールでクリス・ドールマンとディック・フライの公開練習イベントみたいなのもやってたよな?

ガンツ プレ旗揚げとして、ディック・フライがミット蹴るだけのイベントを後楽園でやってるんですからね。

椎名 でも、リングスは前田の盟友がドールマンっていうのがいいよね。信じられるボスって感じで(笑)。

玉袋 ドールマンが男気で前田についてくれたところに、グッときたよな。だいたいUWF分裂で、前田の周りに日本人が誰もいなくなって、外国人選手を頼ってネットワークを作りながら、いま外国人参政権には反対するのがいいよな!

一同 ダハハハハ!

ガンツ でも、世界中の格闘家を呼んで、新しいプロレスを作るっていうのが凄いですよね。

椎名 でも、それが成り立つかどうかはわからなかったよね。手探りだったと思う。

玉袋 それは前田が言ってたよな。海外の格闘家にUWFみたいなことをやらせるにあたっては、その国まで行って、肌を合わせて教えるんだ

って　それはソ連のレッドブル軍団を呼んだ猪木も一緒だよな。プロとはなんぞやというね。

椎名　俺は最初、リングスは雑誌でしか知らなかったから「ヴォルク・ハンっていったいどんなヤツだ？」って思ったよ。あと初期WOWOWのメインキャラクターになったディック・フライは、どのプロレスラーよりカッコよかったよね。

玉袋　フライは最高だよ。

椎名　リングス・オランダ勢はいかにもヤバそうなヤツばかりで、見た目からしてよかった。

玉袋　ウィリー・ピータースなんて、「衝撃映像」みたいな番組にも出てたからな。アマレスの試合で、審判をボコボコにぶん殴って大暴れしてる映像が流されて、よく見たらピータースなんだよ！

椎名　アハハハハ！

玉袋　でも、スタジオのコメンテーターは誰もピータースだって気づいてないんだよね。ピータースは暴れるだけじゃなくて、試合もよかったよね。強くて、客の前でやる試合ができてたんだよ。

ガンツ　華がありましたよね

玉袋　あとは実験リーグやったり、正道会館と組んだりして、リングスは革新的なことやってるんだよな。

椎名　あの時代はまだMMAが存在しなかったから、発想からして自由だったと思う

ガンツ　ミックスルールみたいなものをやって、ルールやスタイルを模索してやってましたもんね

ピータースはアマレスの試合で審判ボコボコにしてるんだよな

玉袋　だってよ、角田（信朗）いロブ・カーマンがリングスルールで実現しちゃってるんだよ

ガンツ　あの試合は凄いですよね

椎名　どんな試合だったの？

玉袋　角田さんがダウンして倒れてるところに、ロブ・カーマンが顔面にヒザ落としてるんだよ!!

ガンツ　完全に路上の技ですね（笑）

椎名　ヤバいじゃん！

玉袋　ヤバいんだよ　あれがホントのアルハトロス殺法だよ！

一同　ダハハハハ！

玉袋　角田さんの鼻がこんなに曲がってるんだもん、凄かったな～。

ガンツ　"欧州キックの帝王"カーマンが掌底ルールで出てるんですよ？

椎名　掌底ってどこまでがOKだかあいまいだもんね。

ガンツ　だから、バンデージをどこまで巻いていいとか細かいことは決まってないんで、カーマンはバンデージをカチカチに固めて出てきたんですよ（笑）。

玉袋　ダハハハハ！　乱暴な試合だよな

ガンツ　石みたいな掌でカーマンが殴ってるという（笑）

玉袋　こええなぁ（笑）　正道会館が入ってきたときはワクワクしたよな

ガンツ　一番ワクワクしましたよね、正道会館とかオランダのヤバいヤツと一緒にロシアのコマンドサンビストがいたわけですからね。

椎名　でも、コマンドサンボは乱闘とかしてないでしょ？

玉袋　ない、ロシアは礼儀正しい

ガンツ　礼儀正しいというか、コマンドサンボは鎮圧するのが仕事ですから（笑）

玉袋　椎名はヴォルク・ハンのデビューも観てないのか？

椎名　観てないんですよ。観始めたのは田村（潔司）が入ってくる前ぐらいからですね

玉袋　ヤマヨシの白パンツ時代か。

ガンツ　リングスは初期もよかったですけど、田村が入ってきてまたおもしろくなってきましたよね　田村が入ってきて何かよかったかというと、前田は「エースの座は力で奪え」っていう人だったらしいんですよ。だから、田村が入ってきたときの日本人対決はシュートだったんですよね。

玉袋　ヤマヨシとやったんだよな。でも、あのときは田村と実力差があったよな。飛びつき腕十字で極めちゃうんだから。

椎名　潰し合いの試合で、飛びつき腕十字って凄いよね。

ガンツ　だから田村が初めて『メガバトルトーナメント』に出たとき、一本勝ち、準決勝ではヤマヨシにもシュートで一本勝ち　そして晴れて新エースとして決勝戦でヴォルク・ハンと最高のプロレスを展開して敗れるんですよ！

玉袋　いやあ、いいね。田村vsハンは回転体の完成形だね　あれには酔ったよ。

椎名　腕十字でこっちの腕を取ると見せかけて、逆の腕を取るっていうのがカッコよかったよね。

玉袋　俺なんかは前田ファンだけど、リングス・ジャパンっていうのは、ヤマヨシ、成瀬（昌由）、長井と、いまいちピンときてなかったんだよ。そこに一人、TKがいたっていうのが、リングスの良心だったよな。番付は上のほうじゃなかったけど、「リングスはTKがいるから大丈夫だ」っていうのがあったからな。

椎名　高阪が『トーナメント・オブ・

荒くれ者ぞろいのリングス・オランダをしっかりと束ねていたクリス・ドールマン。この表の顔も裏の顔も強い男がいたおかげで、リングスは成り立っていたのだ

リングス・オランダといえば、やはりこの二人、ディック・フライとハンス・ナイマン。身体がデカくて、ルックスがよく、ケンカが強い。リングスを体現する選手だ

J』で優勝したとき、超うれしかったよね!

玉袋 イーゲン井上に勝ったときの喜びっていったらなかったよ!

ガンツ 当時はグレイシー柔術が無敵だと思われていた時代だから、柔術家のイーゲンに勝っただけで、夢枕獏さんはTKのこと「実力日本一」って言ってましたからね(笑)。

玉袋 そういう時代だよな。TKも体育会系だからさ、先輩を立てなきゃいけないけど、「俺のほうが強いからどうしよう?」っていうところ、あったんだろうな。

椎名 俺、オランダまでリングスを観に行ったとき、前田と同じ飛行機だったんですよ。

ガンツ オランダまでリングスを観に行ってるって凄いですね。

玉袋 ど変態だよな

椎名 そのときTKが前田の大荷物持って超大変そうでしたよ。それで前田に「読め」って言われたと思わしき分厚い本を読んでたんだけど、当の前田は『FLASH』読んでるんですよ。読書家じゃないのかよって(笑)。そのときから「一番強いのに大変だな」って思ってた。

玉袋 黙々とそれに耐えてたんだよな。そこに俺たちは乗っかったよね。TKらしいよ。

ガンツ TKは前座だった頃、モーリス・スミスとシュートで試合組まれて秒殺勝ちしましたからね

玉袋 モーリスも来てたんだよな。そっからシアトル行くわけだ。

椎名 高阪がシアトル行ったとき、やっと前田から解放されてよかったなって思いましたもん(笑)。

玉袋 俺なんてTKに直接聞いたもんね。「ホントは前田さんから逃げたんでしょ?」って。「そんなことないですよ」って言ってたけど、「そうです」って顔に書いてあったよ(笑)。

椎名 前田もインタビューで「うまく逃げやがった」って言ってたもんね(笑)。

玉袋 TKは"要"っていうか、リングス・ジャパンはダメだけど、TKがいるから大丈夫だって思ってたところに、田村が来るんだよな。そっからまたおもしろくなったよ

椎名 田村は強かったですよね

ガンツ プロレスラーとして一流なのに、ガチンコでもちゃんと強かったんですよね。

玉袋 だから田村がリングスでのし上がっていくストーリーって美しかったよ。

椎名 俺、リングスはヤマヨシvsヒクソン(・グレイシー)と、ヤマヨシvs(ヒカルド・)モラエスも燃えた。ヤマヨシが負けて、悔しくてしょうがなかったよ。

ガンツ だからリングスって、じつはバーリ・トゥードにかなり早くから着手してたんですよね。

玉袋 なんでそこでヤマヨシ出しちゃうんだっていうのはあるけどな。

一同 ダハハハハ!

椎名 でも、ヒクソン戦のヤマヨシはよかったですよ。あれでヤマヨシの株が上がりませんでした?

玉袋 上がったよ。それでリングスに戻ったあとプッシュされてな、へんな構えやっちゃって。

ガンツ 船木のマネですよね。

椎名 ダチョウ倶楽部っぽい構えだよね、「ヤーッ」って感じで(笑)

ガンツ 両手を前に出しちゃって(笑)。

玉袋 それでヤマヨシも上島竜兵さん同様、白いブリーフみたいなパンツ穿いてるわけだからな(笑)

前田日明引退試合の相手として、文字どおりの超大物アレキサンダー・カレリンを引っぱり出したリングス。これは前田リングスと、ロシアの太いパイプなしにはできなかったスーパーカードだった。

リングスが続いてたら琴欧洲は各界に入ってなかったかもな

椎名 でも、バリジャパに選手を出してるっていうだけで偉いですよね しかも、まだ修斗に佐山がいる時代でしょ?

玉袋 前田 佐山の関係を考えるとそうだよな。あと俺はリングスファンだから、成瀬が本間(聡)に負けたりするのも悔しかったよ。

ガンツ リングスで負けて、K 1のリングで再戦するんですけど、これがまた完敗なんですよ

椎名 だからリングスは早くからバーリ・トゥードとかに選手を出してたけど、内部はバーリ・トゥードへの対応が遅れてたと思いますよ。

玉袋 そうだよな 平(直之)さんとか、早くからやってたもんな。

椎名 でも、本間とか木村浩一郎とか、平も含めてそのへんって興味深くない? 日本人の初期バーリ・トゥーダー。

玉袋 木村浩一郎はリングスに初期から出てたよな。

ガンツ 最初の年の有明コロシアムで、グロム・ザザとシュートでやるんですよね。で、ザザってとんでもない実力者だったんですけど、レスリングの選手で極めがないから、20分間グッチャグチャにするのに、極めてくれないという(笑)。

玉袋 ザザいいね~。

ガンツ だって当時、オリンピック観てたら、ザザがフリースタイルレスリングで出てましたからね。リングスやりながらオリンピック出れるんですよ。あんな永島のオヤジみたいなヘアスタイルして。

玉袋 つええのがゴロゴロしてんな~。片手間でつええんだもんな。

椎名 俺、トニー・ホームが好きだったな。

玉袋 あれ田中正悟先生が連れてきたんだよな。

椎名 そうなんですか!

玉袋 映画で共演したかなんかで、それは田中正悟先生を信奉していた、竹内義和さんが言ってた。

椎名 なんかトニー・ホームはよかったよね。ブロック・レスナーと見た目だけ一緒っていうか(笑)。

一同 ダハハハハ!

椎名 俺、いつもレスナー観るたびに、「トニー・ホームに似てるな」って思うもん(笑)。

ガンツ トニー・ホームvsビターゼ・タリエルがおもしろいんですよ。

玉袋 いたね~、タリエル。リングス・グルジアだよ。

ガンツ メガバトルトーナメントの2回戦かなんかで組まれたんですけど、ホームは勝てば前田と準決勝というときなのに、タリエルが正拳でめった打ちにして、あと一回でダウンというところまで追い込んだところで、なぜか失速して逆転負けするっていう(笑)。

椎名 ま、いろんな事情があるんだろうね(笑)。

リングス・ジャパンはイマイチだけど、TKがいるから大丈夫っていうところに田村が来たんだよな

玉袋 そのタリエルが極真世界大会で上位入賞できなかったときも悔しかったよ。「俺たちのタリエル」だからな。

椎名 タリエルは風貌が冴えないのもよかったですよね。

玉袋 あれね、顔のパーツが真ん中に寄りすぎちゃってるんだよ。

ガンツ ダハハハハ！　確かに(笑)。

椎名 グルジアって国別対抗戦では活躍したよね？

ガンツ 国別対抗戦でグルジア優勝だったんですよ。

椎名 バーリ・トゥードの時代になってるのに、国別対抗戦でグルジア優勝って爆笑したよね(笑)。コーチキン・ユーリーはロシアだっけ？

ガンツ あれはロシアですね。

玉袋 いたね～、コーチキン　名前はチキンだけどつええんだよ。

ガンツ コーチキンは極真の猛者なんですけど、柔道家としてもヨーロッパ大会かなんかに優勝してて、ロシアの秘密兵器として、いきなりデビュー戦でモラエスとバーリ・トゥードやるんですよ

椎名 トローかなんかじゃなかった？

ガンツ そうです　判定がなかったんで、ボコボコにされながら20分間耐え抜いてドローだったんですよね。極真魂であきらめないという。

玉袋 そんななかでストップ・ザ・モラエスを成し遂げたのが、ノーマークのグロム・ザザだったというね。

ガンツ あのとき「ザザ」コールが凄かったんですよね。

玉袋 なんでみんなザザに乗っかってんだっていうね。完全に〝俺たちのザザ〟になってたもんな。

ガンツ あと、後期リングスではヴォルク・ハンがホントに強かったのがうれしかったですよね。

玉袋 あれはうれしかった！

椎名 KoKでノゲイラとやったんだよね。

玉袋 ハンがKoKに出るっていうとき、凄く不安だったよな。もしハンがダメだったら、俺がいままで観てたのはなんだったんだってなるからな。だから、リー・ハスデルに勝ったり、ノゲイラといい勝負したりして　あれはホッとしたな。

椎名 でも、けっこう自信満々で闘ってたよね。

ガンツ 関節技が得意かと思いきや、じつはボクシングも強かったんですよね。ロシア軍仕込みのボクシングで。そんなもんまで隠し持ってたのかって

椎名 おもいきりもいいんだよね。

ガンツ のちにハリトーノフが出てきましたけど、ハリトーノフも同じロシア軍のボクシングがベースですよね。だからボクシングテクニックがあるという。

玉袋 関係ないけど、五味のボクシングテクニックはどうなんだよ。

ガンツ ダハハハ！　そこにいきますか(笑)。

玉袋 ケニー・フロリアン戦の話になっちゃうけどよ、あんなにジャブもらわねえだろって。映画のロッキーよりもらってるよ。なんで五味の話になるかわかんねえけどよ。五味のパンチはなんにも当たんねえんだもん。悔しいよな～。

椎名 飛び込みのフックだけで勝っ

よ。ややこしい相手とやらされてさ。
ボンチョ着ちゃってさ。

玉袋 リングスはよく10年間やった

体現してたよな。俺たちは「戸締ま

ったってことで、よかったんだと思

日、運命の日じゃねえか!

リングスは選手がみんな“前田ファミリー”だったよな まさに「世界は一家、人類皆兄弟」だよ!

てた選手が苦しくなってますよね。KIDも同じですよ

玉袋 やっぱりジャブだな。「あしたのためにその1」って大事だったんだな。まあ、五味の話はいいや。リングスに戻そう。

ガンツ ハンとコピィロフがKoKで強さを証明したあとに、ヒョードルが出てきたんですよね。

椎名 やっぱり、ヒョードルは特別だよね KoKに上がってた選手でも、ノゲイラとかダンヘンは強い選手連れてきただけじゃん。でも、ヒョードルはリングス・ネットワークから出てきた選手だからね。

玉袋 それがいいんだよな

椎名 KoKで勝つために鍛えた選手ですよね。それがこれだけMMAが世界に広まっても世界最強なんだから。競輪が世界的な競技のケイリンになったら、中野浩一が世界で一番速かったみたいなもんでしょ。

玉袋 競輪もプロレスみたいな世界だからな。

椎名 そうですよ。ヨーイ、ドン!で全力出さないんだから、どうにでもできるんですよ

玉袋 中野=ヒョードルか。

ガンツ そろそろヒョードルにもカツラのコマーシャルが来そうですよね(笑)

玉袋 ヘアスタイル的にそろそろかもな(笑)

カンツ でも、リングス・オランダもアリスター・オーフレイムはいまヘビー級最強の一角にいるし、ギルバート・アイブルもUFCファイターですからね。リングス・ネットワークはいまだに凄いんですよ。

玉袋 リングス・ブルガリアってのもあったよな。あれなんて、もしリングスが続いてたら、琴欧洲は各界に行かずにリングスに来てた可能性があるよ。

ガンツ 確かにそれはあるかもしれない(笑)。

椎名 やってるよね。

ガンツ きっと窓口一緒ですよ、大相撲もリングスも。琴欧洲の来日にはリングス・ブルガリアのニコラ・ザハリエフ代表が絡んでるはずですよ!

玉袋 惜しいことしたな~。

椎名 ブルガリアとかリトアニアとか、よく知らない国っていいよね。俺、俺、ベラルーシって格闘技で初めて知ったもん。最初は「ベラルー市」かと思ったら(笑)。

ガンツ プロレスでアメリカの地名を覚えるかつてのプロレス少年じゃないんだから(笑)。

玉袋 それはあるよな。ミズーリ州なんて、ハーリー・レイスがいなかったら、一生覚えねえよ!

椎名 俺、アメリカで一番いい大学はウエストテキサス州立大学(ザ・ファンクスやスタン・ハンセン、ブルーザー・ブロディの母校)かと思ってたら、あとで凄いバカしかいないってわかった(笑)。

ガンツ カウボーイとフットボーラーしかいないんじゃないですか?

玉袋 おもしれえなあ

ガンツ あとリングスは最後のエースが金ちゃん(金原弘光)っていうのもいいですよね。

玉袋 いいんだよ~。金ちゃんだぜ。金ちゃんはいっつも苦労してんだ

よ。ややこしい相手とやらされてさ。ポンチョ着ちゃってさ。

椎名 あのポンチョってタイソンを意識してるんですよね？ それを知ったときの衝撃はなかったよ。全然タイソンに見えないって（笑）。

玉袋 ズタ袋だよ！ 金ちゃんだもんな〜。いまだに総合格闘技で地道に頑張ってるんだぜ。金ちゃん、どこまでやるの？って な。

椎名 でも、この歳になると、一番金ちゃんに心を奪われますよね。この前DEEPでやった福田力戦も立派だったよ 泣きそうになったもん

玉袋 川谷拓三的な魅力だよな。

椎名 じ系で総合やってる人ってほかにもいるけど、いまあの世代でやったら一番強いでしょ？ 絶対そうだよ。いい闘い方してるんだよ。でも、金ちゃんがエースになったときは、悪いけど「リングス長くないな」って思った（笑）

玉袋 そうなんだよな 金ちゃんだって、「俺がエースじゃねえだろ」ってわかってたと思うんだよ。いままで神輿を担いできた男だからね。乗っかるほうじゃねえんだから。でも、あの時代のリングスも俺は好きだったよ。

ガンツ リングス10周年記念のメインが金ちゃんvsマット・ヒューズですからね。

玉袋 しぶいねえ。うならすねえ

椎名 でも、客は入らないよね（笑）。

玉袋 リングスはよく10年間やったよ。もうリングスの話すると止まんねえから。

椎名 リングスは世界中から猛者を集めてるのに、なんかアットホームなところがいいんですよね。全体的に手作り感があるし ほのぼのした表彰式とか、何回飛び出す「前田結婚しろーっ！」っていうヤジとか（笑）。なんかアットホームで自由だったんだよ

玉袋 選手がみんなファミリーだったよな。「世界は一家、人類は皆兄弟」っていうね。笹川良一さんの日本船舶振興会じゃないけど、その言葉を体現してたよな。俺たちは「戸締まり用心、火の用心」のコマーシャルで育ってきたんだから。

椎名 笹川良一さんも凄い人ですよね（笑）。

玉袋 だからね、参院選で当選した暁には、前田には外交問題でどんどん手腕を発揮してもらいたいね。

ガンツ 本人も「リングス時代から国家の要人と話をずっとしてきた」って言ってますからね。

玉袋 ロシアとのパイプがあるからね。だから猪木のイラク人質解放じゃねえけどさ、北方四島一括返還を実現させてほしいよな それができるのは、カレリンとのパイプを持つ前田しかいねえよ！

ガンツ 夢が広がりますね（笑） だから、まあリングスが活動停止になったことで、いろんな可能性が広がったってことで、よかったんだと思うんですけどね。

椎名 いつもそう思わされてるんだよ。UWFもリングスもPRIDEも 時代の流れなんだなって無理矢理、自分を納得させてるけど。

玉袋 終わるのは嫌だよ。続けてくれよ、でもしょうがねえなって。だいたいよ、俺たちは前田が好きで、リングスが好きで、これが一番だって思って観てたんだよね それをさ、毎月、殿（ビートたけし）にビデオを持っていってた俺たちってかわいいよな（笑）。

椎名 アハハハハ！『オールナイトニッポン』のリスナーみたい。「殿、観てください」って。

玉袋 「今回来たロシアのヴォルク・ハンは凄いですよ！」なんつってな。そのときは殿も「あれはすげえな」って言ってくれたんだよ。めったに言わねえんだけど。

椎名 ちゃんと観てくれてるのはうれしいですよね。

玉袋 ま、リングスは終わったけど、いまでも『THE OUTSIDER』で続いてるしな。

椎名 前田はどこまでいっても大丈夫ですよ。たくましいですよ。

ガンツ そういえば、なんでも10月11日に前田が「リングス」としての興行をやるらしいんですよね。

玉袋 10月11日？ 俺たちの記念日、運命の日じゃねえか！

椎名 リングスが復活するの？

ガンツ まあ、『THE OUTSIDER』の大きな大会を「リングス」としてやるだけだと思うんですけど、そのコンセプトが最高なんですよ。

玉袋 おう、聞かせてもらおうか。

ガンツ アウトサイダーvs横須賀米軍ですよ！

椎名 米兵と不良がやるの？

玉袋 おいおい、それはもう『お笑いウルトラクイズ』だろ！

一同 ダハハハハ！

玉袋 米軍がヘリで登場してバンバン撃たれたりしてな 完全に『お笑いウルトラクイズ』だよ！

椎名 ドカーン！ って爆発してね（笑）。

玉袋 最高だよ！ マネージャー、すぐに10月11日のスケジュール押さえろ！

ガンツ これはもう見逃せないですよね（笑）。

椎名 前田はかつて米軍に1勝してますからね。六本木で（笑）。

玉袋 リングスやってる頃から、前田本人は『THE OUTSIDER』みてえなことやってんだよな。

ガンツ というわけで、10月11日を楽しみにしましょう！

玉袋 楽しみだね〜。もうキャッチフレーズは決まったな。「北方四島問題はリングスが決める！」。

一同 ダハハハハ！

ガンツ では、これから参院選もありますし、ますます前田日明に注目していきましょう！

【10年4月8日 都内・加賀屋 中野坂上店にて収録】

まだ正式に出馬は決定していないが、今夏、参院選を控えるリングス総帥、前田日明。はたして前田が世間を相手に、選挙でどんな闘いを見せるのか。この"大勝負"のゆくえは見逃せない！

ロシアとのパイプを活かしての北方四島返還に期待したいな！

私はなぜ真剣勝負にこだわり○○○を追求してきたのか

ザンス山田の90年代戦争

格闘伝説『BUDO-RA』編集長

山田英司

90年代格闘技界の生き証人、ザンス山

に言ったら「真剣勝負じゃないものはウ

編をしながら話を聞いてると という状況で、

ヤパン・トーナメントという大会があっ

90年代格闘技界の生き証人、ザンス山田こと山田英司氏が登場!! ……とは言っても、最近の読者にはなんのことかサッパリわからないことだろう。

山田英司氏とは『フルコンタクトKARATE』の元編集長であり、谷川貞治氏らとともに90年代格闘技界を耕してきた人物なのだ。いや、本当に。

山田氏の編集方針を簡単に述べると「真剣勝負以外は載せない」というもの。その姿勢のために、あの前田日明とトラブルになったことが超有名。俗に言う「前田日明女子便所説教事件」である。ヒャッ!!

この事件に関しては、『紙のプロレス』紙上において、山口日昇、柳沢忠之、谷川貞治、事情通X氏が座談会でおもしろおかしくマジメに語っているが、いったい女子便所でいったい何が起きたのか?

山田氏のインタビューの前に、谷川貞治、事情通X氏の当時の証言を中心に事件の詳細をお伝えしよう。山田氏のインタビューが10倍おもしろく読めるはずたし。

まず別冊宝島の『格闘技死闘読本』で、山田氏が「前田日明は八百長をしている」と発言したのが発端だった。

90年代を総論的に言うとしたら「格闘技マスコミの時代」だったんですよ

谷川 山田編集長のことをちょっと説明すると、この人は空手やムエタイなんかの打撃系格闘技を自ら実践していて、ムエタイのリングや空手の大会にも出ちゃう人なんです。で、不確定要素を含んだ曖昧な格闘技を嫌っていて、完全に測定可能な格闘競技しか認めない。つまり、簡単に言ったら「真剣勝負じゃないものはウチの雑誌には載せない」という編集方針ですね。

94年10月30、31日に極真会館のオープントーナメント全日本大会が東京体育館でありまして、31日に前田日明さんが来たんです。前田さんは来賓として本部席の横の隣にある席に座ってました。その本部席の斜め横ぐらいにマスコミの取材席があって、そこに格闘技雑誌の記者たちが座っていたんですね。それで表彰式が終わったあとに、ライターの人たちが血相を変えていて、「前田と山田さんがやりあってる!」って言ってたんですよ。本部席のほうを見たら前田さんが例のゴンタ顔をして、両腕を組んで凄んでるんですよね。山田さんはビックリしたような顔をしながら話を聞いてるという状況で、しばらくやりあってました。

そうしたら松井館長が来て、松井さんがそんなことになってるのに気がついてたかどうかは知りませんけど、記念撮影をしましょうということで、前田さんを舞台に上げて、八巻選手たちと写真におさまってました

山田氏か初代編集長を務めた「月刊フルコンタクトKARATE」。『格通』や『ゴン格』と並んで90年代格闘技界を牽引してきたが、他誌と比べて内容は非常にマニアック。来日前のヒクソンを表紙にしたり、「下突き」特集をやったりしてるんだから!

事情通X 記念撮影のときには山田編集長は取材席のほうに戻ってきてたんですけど、前田選手が舞台から下りてきて、どこかの雑誌の取材を受けてたんですよ。それでこの騒動は終わるのかなあと思ってたら、リングスの若手か山田編集長を呼びに来て、その若手と一緒に山田編集長が記者席を離れました。その時点で、マスコミの多くは帰ってたんですけど、一部残ってたライターの人たちは興味本位が半分と、何かあったらいけないということで、ゾロゾロとついて行きました。あとから聞いた話によると、前田さんは駐車場に来てくれということで山田さんを呼んだらしいんですよ。だけど、ライターの人たちがついてきたのがわかったからか、山田編集長を連れて女子便所に入った。その後、10分か15分ぐらいかな、前田選手の声と、二度ほど「ドン、ドン」という音がしました。そして前田さんと山田編集長編集長が出てきて、山田編集長はさすがに凍りついた顔をして出てきたということですね

その大会があった数日後にカラテ・ジャパン・トーナメントという大会があったんですよね。そこでも話題はその事件の話一辺倒で、それでいろんなマスコミの人が山田編集長に「あのときはどうだったんですか?」と聞いたときに、山田編集長いわく、「身体の大きな子どもが、自分のしゃべってることに対して、自分で興奮して、だんだんエキサイトしてきて、何を言ってるのか意味がまったくわからなかった。僕はそれに対して『どの記事のことなんですか?』『前田さん、いま自分が何をやっているかわかってるんですか?』というようなことを冷静に言ったと。それで、実際に殴られたのか」と聞いたら、「掌底が一発きた。それが壁にハシーンと当たった。もしそれが顔面に当たってうしろの壁に後頭部をぶつけてたら、私はたぶん死んでいた。それから金的にヒザ蹴りが2発きたけど、それはヒジでブロックした。本当に格闘技をやっててよかったですよ」という自慢話をされてました。

それで山田編集長は、「私は絶対に許しません。私は許したら困るんです。これからもこういうことがあるから、私は断固闘います。敵が潰れるまで闘います」と断言してました。

かくも狂った90年代格闘技界!! そして時は流れて2010年――プロレスと格闘技が完全に分離したいま、山田氏は当時を振り返って何を思うのか? 読まないヤツは女子便所に連れ込むぜ!

――1990年代の格闘技を振り返ろうということで、『フルコンタクトKARATE』初代編集長の山田さんにお話をうかがいに来ました!

山田　あれ？　谷川（貞治）くんとクマクマンボ（熊久保英幸）の対談をやったんじゃなかったっけ？

――前々号でやりました。その対談で「90年代の格闘技のことなら、やっぱり山田さんに聞いたほうがいいんじゃないか」って。

山田　つーかね、『ゴング格闘技』初代編集長の近藤（隆夫）くんに聞けばおもしろかったんですよ。近ちゃんや谷川くんとか俺って、実質的な初代編集長じゃないですか。で、初代のヤツらはみんな共通点あったんですよ。なんて言うかな、格闘技界のビジョンを持ってたの。

――「格闘技界はこうあるべき」という理想があったわけですか？

山田　そこまで大げさじゃないんですけど、90年を総論的に言うとしたら「格闘技マスコミの時代」だったんですよ。たとえば象徴的なのは、格闘技マスコミが実行委員会でやった『トーワ杯（カラテジャパンオープン）』というイベントが90年代の最初であるわけなんですね

――有名空手家がこぞって参戦したグローブ空手の1DAYトーナメントですね。マスコミがイベントを作ったという。

山田　それが一つのエポックメイキング的なことなんですよね。まずウチ（『フルコン』）ができたのが86年6月だったんですね。で、その2ヵ月後ぐらいに『格闘技通信』と『ゴング（格闘技）』が出たんですよ、たしか。俺が覚えてるのは『格通』の創刊号に、『フルコン』創刊号に載ったスケジュールページがそのまま転載されてた。

――ダハハハハハ！

山田　レイアウトも同じ。どうして気づいたかっていうと、俺、日付を間違えて書いてたんですよ。

――あー、なるほど。間違えた日付のまま『格通』に載っていた（笑）。

山田　当時『格通』を作ってた李春成さんにクレームつけたんですね。「盗作しやがって！」って。そうしたら「そのページは担当者が別なんで全然ノータッチだ」と言うんで、それで済んじゃったんですけど、だから『格通』のほうが早く出てるの、

1986年に行なわれた前田日明vsドン・中矢・ニールセンの異種格闘技戦。猪木から前田へ、プロレスの主役交代となる一戦となるも、永田さんが「（格闘技とは）ジャンルが違う！」と言い放ったり、格闘技の見地からはずいぶん手厳しい

ドン・中矢って前田と○○○をやったじゃないですか。ドンって○○○だと強いんですよね

2ヵ月ぐらい。ほんで90年に突入していくわけだ。

――ちょっと待ってください。その4年間のあいだは実質、プロ格闘技興行がなかったわけだから誌面作りはたいへんだったんじゃないですか？

山田　そう、たいへんだった。もともと俺は福昌堂にいて、そこで『武術（ウーシュウ）』っていう雑誌もやってて。中国武術界って（当時は）まだ日本にはないじゃないですか。どうやって雑誌を作ろうかっていうときに、東口（敏郎）さん、いまBABジャパンの社長ですけどね。東口さんは「事件がないから事件を起こそう」っていうことで、中国武術の大会を開こうってことで第一回全日本表演大会をやったわけですよ。俺が『武術』に関わってたから実質的には俺がやらされてたわけだけど、パンフレット作りから何から。

――あ、そんなこともやってたんですか。

山田　『フルコン』ってね、考えたら当時は俺一人しかいなくて、しかも『月刊空手道』と『武術』と『フルコン』とビデオ制作、書籍。5つの責任者だったんですよ

――スーパーエディターじゃないですか！（笑）

山田　それと比べるといまは全然、楽でね。でも、近ちゃんでも谷川くんでもそういう雰囲気だったよ。アニメの下請け会社みたいな雰囲気だった。

――それで『フルコン』としてはどんな事件を起こしたんですか？

山田　じゃあ順番にいこうか。まず90年6月、ドン・中矢・ニールセンvs佐竹（雅昭）。これも要するに全日本キックに新空手の神村（栄一）さんという方がいたわけですよ。この神村さんっていうのはプロモーターでいろんなことを仕掛けてるんですね。俺の企画にはいつも神村さんが絡んでやってるんで。

――そうなんですか。

山田　実際には神村さんがやってるようなもんなんですね。それで90年の6月にドン・中矢vs佐竹戦があったんだけど、ドン・中矢って前田（日明）と○○○やったじゃないですか。

――○○○というか、プロレスというか。

山田　それで○○○やってちゃいけないっていうことで、スポーツライフ社の松永社長がドンのことをキックに誘ったわけですね。全日本キックと契約を結んでね。本人も真剣勝負でやりたかったわけですよ。で、ドンって○○○だと強いんですね。

――え!?　意味がわかりません（笑）。

山田　藤原喜明とか山田（恵一）なんかとやったじゃないですか。あれは全部○○なんだけど、あんときはやたら強いわけですね。それで全日本キックの後楽園ホールで真剣勝負やらせたら、もうまったく手が出ないでボコボコにやられて。なんせ初戦はKO負けだったんです。それで「おめえ、真剣勝負だったら弱えじゃないか」って。

――そこでちゃんとした実力がわかったんですか

石井館長に電話したら条件も聞かずに受諾した。あの決断はさすがですよね

山田　ドンがあんまり強いヤツが相手だとやられちゃうっていうことがわかったわけですよ。それでなんとかドンを勝たせたいっていう全日本キックの思惑と、神村さんのほうで空手家を顔面ありグローブでやらせたいっていう二つの考えがあったわけですね。

　当時はまだグローブ空手って珍しかったんですよね。

山田　神村さんってもともと極真の大山道場時代の人だから、空手の顔面グローブ化をずっと考えてたわけですよ。それで「じゃあ俺は空手雑誌やってるから、ドンにちょうどいい相手を探しますよ」って言ってね

――全日本キックと神村さんの事情をくむかたちで。

山田　最初に電話したのは大道塾だったんです。東（孝）先生に電話して、俺、東先生と一緒に前田日明vsドンを観てたからね、それで先生が「けっこういい選手だ」とか言ってたんだけど、話してみたら「ドンじゃ弱すぎるからやったって意味ねぇ」って。

――そんなに評価は低かったんですか（笑）。

山田　「弱すぎるから勝っても意味がない」と。まあ俺も東先生の性格を知ってるから、どうせ断られるだろうと思ってたけど、当時は東先生の連載をやってたから立てなきゃいけなかったから、一応第一オファーは出したなっていうことで。で、俺は「正道会館なら受けるな」と思って、石井館長に電話したらその場で「オッケーです」って言って。条件も何も聞かずに。

――さすがは館長ですねぇ。

山田　館長は「わかりました。佐竹とやらせましょう」と。こっちは、佐竹だったら、ひょっとして勝てないまでもけっこういい試合をするんじゃないか。五分五分ぐらいやるかな」と。でも、指導者が気合い入ってますから。石井館長は佐竹に凄い特訓を課したんですよね。佐竹自身もビビって、試合当日、会場から帰ろうとしたらしいんです（苦笑）。それを佐竹失踪事件になる直前に石井館長が止めて。

総合格闘技の確立を目指した前田日明だったが、リングスが完全ガチンコのKoKルールに移行したのは自身の引退後。しかしブレンド時代のリングスもそれはそれで凄くファンタジーだ

――正道会館からすれば、そこまで懸けるものがあったんでしょうね。

山田　で、実際の試合ではニールセンのほうが、パンチがうまくてヤバかったんだよね。でも、佐竹が頭突きでなんとかゴマかして勝っちゃったっていう。それで正道会館の人気がグワッと上がったんだから。当時はほとんど誰も知らなかったんだけど、石井館長の決断はさすがですよねぇ

　そこで条件も聞かずに受諾するんですから。

山田　それで、その次に1990年9月にやった西（良典）vsロブ・カーマンのグローブマッチも私が保証人になっていろいろと動いたんですよ。俺は西さんと仲が良くて、いまでも一緒に練習したりしてるんだけど。ちょっとカーマン相手じゃキツかったですよね。ただ、西さんもやりたがってたから。

――当時はそういう真剣勝負の舞台が、そうそうなかったということですよね。

山田　なかったですね。で、俺としては佐竹や西さんという空手家がグローブを着けてリングに上がるっていう事実を作りたかったの。

　それはどういうことですか？

山田　そうすればグローブ空手に注目するじゃない。当時、空手界ではグローブ論争が盛んだったんです　要するに極真がそれまで最強だと言っていたんだけど、やっぱり顔面を拳で叩かないとマズいだろう、と。それで大道塾がスーパーセーフ（防具面）を着けてやってたわけですね。でも、素面にグローブじゃないかっていう流れもあったわけです。俺なんかも自分で練習してても、スーパーセーフでやっつけても相手が納得しないんですね。「いまのはよけられたのに、スーパーセーフに当たった」とか。

　顔じゃない、スーパーセーフに当たったんだ、と。

山田　それでしょうがないからグローブを買いに行って、同じようにそいつとやって当てたら、ようやっと負けを認めたの。グローブで殴られると誰もが納得するんですよ。

　そういう時代だからこそ、グローブ空手につながる仕掛けをしたんですね。

山田　そうそうそう。で、その目論見は実際に当たって、グローブが注目されたんですよ。で、アマチュアで見ていくことの重要さはそこにあって、グローブ空手の出場者が増えてきたことで、ちょうど90年に新空手の全日本大会が行なわれたんです。それで新空手には武田幸三とか強いヤツはだいたい出てるわけですよ。小比類巻（太信）も山本優弥も。

　新空手経由で選手が育っていった、と。

山田　で、その全日本大会も大成功して。その前にUSA大山があるのか。あのUSA大山カラテvs正道会館の5vs5マッチも私がちょっと動いたんですけど。

　これはどういうきっかけで？

山田　『フルコン』91年の2月号で大山茂さんと石井館長を表紙で握手させてるの

ね。それはその頃からあの大会を目論んで握手させてたわけですよ。で、これ言っちゃっていいんだろうな。ウィリー、あのときお金なかったの。

――向こうでタクシーの運転手をやっていたとか。

山田　そう。離婚して奥さんがなんだか怒って、車でウィリーの足を轢いたらしいです。

――なんて夫婦喧嘩だ（笑）。

山田　そのケガのせいでほとんど仕事ができてなくて、日本でいう年金で暮らしてるような状態で。それで（大山）康彦さんのほうから相談があってね。うちは創刊号からUSA大山はずっと載せてたからさ。

――じゃあ、ウィリーを救うためにあの5vs5は行なわれたんですか（笑）。

山田　そう。それで当時、正道会館を売り出したかったから、「くっつけちゃえば、ちょうどいいや」って。

――それでまた石井館長に電話して。

山田　そう。それで飯田橋のホテルで二人を会わせちゃったんですよ。仕掛けとしては二人が対談してるうちにそういう話がまとまったっていうことにしてあるんだけど、そんなことあるわけないじゃん（笑）。

――そうですよね（笑）。しかし、あのイベントでだいぶ格闘技の興行が変わりましたよね。

山田　そうそうそう。それであれはね、石井館長が初めて正道会館以外をプロデュースした大会になるわけですよ。会場は代々木第二（体育館）。あのとき館長は道場に寝泊まりして走り回ってたっていう感じだよな。落合の風呂屋の下に正道会館の道場を出してさ。高田馬場の道場は有名だけど、初めは落合の風呂屋の地下。そこでいつも後川（聡之）が寝てたんだけど、後川と一緒にベッドと枕と何かを買いに行ったもんな。

――そういう手伝いをすることによって、山田さんに何か見返りはあるんですか？

山田　最初の発想と同じで事件を起こさないと表紙や記事がないじゃないですか。だって、何も起きないんだもん。

――編集者が事件を起こすしかないっていうことですよね。

山田　それで事件を起こすのに誰か乗ってくる人がいないと起こせないんですよ。で、石井館長は事件を起こしてくれる人だったし、館長の考えっていうのは、儲けた金を元手に次の興行をやるわけです

山田氏いわく、ヒクソンはプロレスラーを潰すために招聘されていた！実際に「最強」高田延彦を二度にわたって倒しているから、山田氏の目論見は成功したと言える……

トーワ杯が当時なんて呼ばれてたかっていうと「K-1グランプリ」って呼ばれていたんです

で、儲けたらまた次をやる。だからいきなりK-1をやったわけじゃない。

――徐々に力を蓄えて。

山田　そのお金で翌年の92年に『格闘技オリンピック』をやるんですよ。大事なのはその前に正道会館の空手家がグローブ着けて闘ったわけですね。それと同時に大道塾は92年の7月に「THE WARS」っていうイベントをやってるんです。要するに大道塾もグローブを着け始めたわけ。そこでグローブ論争には決着がついた気がしたわけだけど。

――グローブが主流になっていったというわけですね。

山田　いまの時代では「そんなのあたりまえじゃんか」ってなったけど、当時は「スーパーセーフのほうが実戦的じゃんか」っていう人たちも多かったわけですよ。でね、ここで大事なのはトーワ杯なんですよ。トーワ杯が当時なんて呼ばれてたかっていうと、じつは「K-1グランプリ」って呼ばれてたんです。

――え？　そうなんですか!?

山田　知らなかったでしょ。これは歴史のタブーなんだけどね（苦笑）。しょうがない、見せてあげよう（トーワ杯の資料を取り出して）。ほら、K-1って書いてあるでしょ。

――あ、ホントだ！（笑）

山田　だから「K-1」って名称は「トーワ杯」が最初なんだよ（笑）。それでトーワ杯の名称がK-1グランプリだったっていうことも大事だけど、要するに実行委員会はマスコミだったの。具体的にいうと、俺とタニーと近ちゃん。

――『格通』と『ゴン格』と『フルコン』がグローブ空手のイベントを一緒に運営しましたか。そのアイデアは誰が最初に言いだしたんですか？

山田　K-1の名称を考えたのはもちろん、新空手の神村さんですよ。相談されたとき「K-1なんて名前、流行りそうもないですね」って答えたのを覚えてる。マスコミ同士はしょっちゅう飲んでいたから、飲み会が実行委員会になっちゃったわけ。

――飲み会がグローブ空手の実行委員会ですか（笑）。

山田　それで各誌で出場選手を募集して。もちろん実際には石井館長のところへ電話して「誰々を出してください」ってお願いしているわけだけど、一応応募してきたっていうことで。

――それぞれの誌面で告知すること自体がプロモーションになるっていうことですね。

山田　そうそうそう。それでいっぺんに発表しないわけ。次号ではこいつを出そうとか、「佐竹がついに参戦」とかニュースにしてね。それで佐竹とか金（泰泳）とか村上竜司とか西さんとかテコンドー王者とか。

――そんな人たちが一般応募で出てくるわけないですよ（笑）。

山田　ただ、阿部健一なんかは一般応募で来たのね、たしか。たとえば近ちゃんの仲のいい選手は近ちゃんが声かけてやっ

プロレスという名目のもとにやるのなら べつに誰が何をやろうがかまわない

てたし、だから当時の空手界の有名なヤツはみんな出てたもん。

――プロレスラーも出てましたもんね。

山田　プロレスラーは神村さんがパンクラス経由で引っぱってきたと思う。それで村上竜司とプロレスラーを当てちゃうとか。

――そういうマッチメイクも3人で？

山田　そうそう。それはべつに隠してるわけじゃなくて、堂々とマスコミがやるぞっていうことで。それで90年代の格闘技は、そのトーワ杯が象徴的だったと思うんだよね。佐竹なんかはトーワ杯で優勝して力をつけてったんだよ。

――どんどん名前も上がっていって　その前にリングスとK－1の提携もありましたよね。

山田　これはね、佐竹vs前田を真剣勝負でやりたい」と石井館長が密かに私に言ってたんです。結局組まれなかったんだけど、その前に終わっちゃった。

――長井（満也）vs佐竹で終わっちゃいましたもんね。

山田　まあ、館長としては興行のノウハウを知れただけでも充分だったんじゃないかな。前田が逃げたんだと思うんだけどさ

――逃げましたか（笑）。

山田　当然でしょう。西さんなんかは愚痴ってたけどね「俺の試合は真剣勝負で強い選手を当てられてた」って。

――西さんはグロム・ザザとか強い選手を当てられたんですよね（笑）。

山田　まぁそれは誰が見たってわかるんだろうね、ほかの試合ではあんなハデなダウンの応酬があったりしてさ。

――山田さんのなかには、格闘技が成熟していくうえではやむをえないっていう考えはなかったんですか？

山田　だからプロレスはべつにいいんだけど、疑似真剣格闘技がUWFの流れであったわけ。UWFが真剣勝負だとは誰も思ってないだろうけど、「リングスは真剣勝負だ」みたいにみんな思ってるわけじゃないですか。疑似真剣格闘技がもっと高度化してきたわけですよね　プロレスはべつにプロレスなんだから何も非難されることないじゃないですか。だけど「プロレスじゃない。真剣勝負だ」って言ってて、実際はプロレスだったらへんですよね。しかもそこに極真の世界第何位の選手が上がってそれで○○○で負けたりしてたら、それはもうアマチュアの権威が○○○のせいでグシャグシャになっちゃうわけですよ。

――アマチュアの価値観が崩れちゃうのが問題だ、と

山田　それがプロレスという名目のもとにやるのなら、べつに誰が何をやろうがかまわない、と　だけど疑似真剣勝負っていうのは、根底から格闘技界のヒエラルキーを崩しちゃうおそれがある。それはだからハッキリさせなきゃいけないっていうことですよね。だから前田日明と俺のトラブルというのはそういう流れのなかの、ある意味象徴的な話で、まぁ避けられない部分なわけですよ。向こうは向こうで「それを言われちゃおしまいだろ」みたいなのがあるだろうから。

――たとえば、UWFにしてもいきなりガチンコはできなかったんじゃないかとは言われますよね。

山田　それはキックボクシングの沢村忠でもなんでもあるわけで。沢村忠がいるから藤原敏男が出てきたわけですね。だから沢村さんのことは否定できないけれど、だけど沢村忠は極真の選手を呼んできて潰したりはしてないわけですよね。

――なるほど

山田　まぁ、やっつけてるのはタイの留学生にしろさ、アマチュアの選手を売りにして○○○をやるのはやっぱりよくないわけですよ。アマチュアを貶めることもあるし、自分を必要以上に高く見せるっていうこともあるし。まぁどっちもやっぱりおかしいわけですよ。やっぱりアマチュアの選手たちっていうのは一つずつ積み上げて階段を上がっていくものだから　その測定基準を全部ひっくり返しちゃうっていうのは、アマチュアにとって非常に許せないわけですよ。じゃあそういう流れのなかで、佐竹が前田日明をやっつけられないんだったら、本当に強いヤツを連れてきて○○○で強がってるプロレスラーをやっつけちゃおう、と。それで佐山（サトル）さんと話したときに「じゃあヒクソン（・グレイシー）呼んじゃおうぜ！」って。

――そんな理由でヒクソンを呼びましたか（笑）

山田　佐山さんの弟子の頼ちゃん（中村頼永）がロスでジークンドーを学んでいてヒクソンと知り合いだったんですよ。そんで『フルコン』94年7月号でヒクソンを表紙にしてるんですね。当時はヒクソンもまだ無名だったけど、ヒクソンを表紙にして技術モノをやったのはウチだけだと思うんだけど

――ヒクソン初来日となったバーリ・トゥード・ジャパン（以下、VTJ）も山田さんが関わってたんですよね。

山田　そもそも、なぜ「バーリ・トゥード・ジャパン」という名前になったかということですね、以前企画したトーワ杯の名称は「カラテ・ジャパン・オープン」だったんですよ。で、VTJの企画書も俺が作ったんだけど、メンドくさいからカラテ・ジャパン・オープンを引っぱるかたちで、バーリ・トゥード・ジャパン・オープンにしたわけ。

――そうだったんですか。

山田　で、ヒクソンなんかアマチュア出身だから400戦とかやってるし、アマチュアの選手の叩き上げって強いわけですね。佐竹でもなんでも結局アマチュアの大会で200戦とかやってるわけですよ。ちゃんと勝ち抜いてきたヤツの地力って相当あるんで「とりあえずヒクソン呼んじゃおうぜ」っていうことで。まぁ、そりゃヒクソンが優勝するわね。ちなみに安生洋二がヒクソンの道場に行って負けたでしょ。

――ヒクソン道場破り失敗事件ですね。

山田　あの道場マッチ、撮影してたでしょ。このときのフィルムを頼ちゃんの奥さんが日本に持ってきてマスコミに公開したの知ってる？

――はい、マスコミ向けの上映会があったんですよね　プロレス側の都合のいいように報道されないように。

山田　あれで高田（延彦）の団体が結果的に潰れちゃったもんな。で、俺と前田のト

ラブルってその頃でしょ。

——トラブルがあったのは1994年10月だから、ちょうどそのあとですね。あれって『別冊宝島』で山田さんがインタビューを受けた記事が原因で……

山田　（さえぎって）いや、だからそれだけじゃなくて、じつはこういう水面下の流れがあったっていう

——要するに真剣勝負へ至る流れのなかの出来事。

山田　必然的ですね。だから『宝島』うんぬんじゃないんですよ。で、前田がそうやってマスコミを脅したりするのは、ぶっちゃけ俺だけじゃなかったんですね。いつものことだったんだけど。

——当時はありふれた事件だったということですか？

山田　ただ、（やられた人間のなかで）俺だけが騒いだっていう　どうして騒いだかっていうと、この流れのなかで真剣勝負とそうでない団体を明白に分けて世間に知らしめなきゃいけない、と。誤解しないでほしいのは、俺はプロレスを○○だと思わないんですよ。それはいいんです、プロレスは。だけど、ごっちゃ混ぜにして「自分は強いんだ！」って言ってるヤツは、やっぱりちょっと違いますね

——前田日明のやってることがどうか、と？

山田　そうです。これはだから業界のためであり、アマチュアをはじめとする多くの格闘技修行者のためという使命感がありましたね。○○だって記事で書いちゃったり。だからちょうどその、曖昧な空間だったんすね　それは私からしたら、流れからしてちょうどいいやっていう確信犯でしたね。あのときだって前田が「ちょっと残ってろよ」っていうときに、俺はちゃんと一人で最後まで残ってたんだもん（笑）

——極真全日本大会の会場で事件は起きたんですよね。前田日明が大会ゲストで呼ばれていて。

山田　そうそうそう。

——それまで前田さんと接点はあったんですか？

山田　ありましたよ。初期の頃は取材もしてたし、そんなに仲は悪かったわけじゃないんすけど。だから、「いつかは真剣勝負をやってくれるんだろうな」と期待して応援してた時期もあったわけです。

——いわゆる興行と格闘技の過程のなかで、山田さんも「仕方ない」と思う部分はあったわけですか？

山田　そう、そこの部分を越しちゃってたっていうわけですよね。だって、90年代中期にさしかかって、UFCやパンクラス、K－1という真剣勝負の流れがあるなかで、疑似格闘技をやってるほうがおかしいでしょ？　だからこの事件は避けられないものだったんです。

——90年の前半だったら早すぎるし、99年ぐらいだったら遅すぎるし、ちょうど真ん中くらいの94年。

山田　だからそれも格闘技界の流れのなかで、ある意味象徴的な……まぁ自分で言うのもなんだけど。

——前田さんにいつ声をかけられたんですか？

山田　大会の途中に俺が前田の席へ行ったら「最後まで残ってけ」って言われて待ってたら、髙阪（剛）に「駐車場までおいでください」っていわれてね

——あ、TKが。

山田　髙阪のことは知らなかったけどね。当時はまだ有名じゃないし。で、駐車場に俺が行ったんだもん。

（前田日明との事件は）格闘技界の流れのなかで、ある意味象徴的な出来事なんです

——そこで話をする予定だったんですね。

山田　そうそうそう。でも、駐車場にも人がいるから女子トイレに移動したっていう。そういう順番でしたね。

——女子トイレで前田さんにはなんて言われたんですか？

山田　だから○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○っていうようなことだね、だって、○○○○○○○○○○○○もんって（苦笑）。そりゃそうだよね、○○○○○○だもんね。

——それに対して前田さんは？

山田　黙ってたね。なるほどっていうかね。

——で、有名なのは前田さんがパンチを出して……

山田　（さえぎって）いや、パンチじゃない、掌底、掌底。それを俺がスリップでよけたっていう　うしろが壁だから　壁にバーンって当たって。

——なんでいきなり掌底を出してきたんですかね？

山田　だから向こうが怒ったんじゃない？　だいたい、その会話はほとんど日本語になってないんじゃない。自分の言葉に興奮しちゃって……だからあんまり会話とかそういうんじゃない。

——なるほど

山田　「なんで俺が○○を知ってるのか」っていう理由は伝わったから、そこでいわゆる地団駄踏んじゃったわけですよ。要するにそうやって脅しとけば、ほかのマスコミは書かないわけですね。でも、俺はみんなに電話しまくって騒いだっていう。確信犯ですね。じゃないと、あたかも向こうが真剣勝負してるっていうことで終わったら、そこまでの流れが意味ないじゃないですか。

——その揉め事は、どうやって収まったんですか？

山田　収まってはいないでしょ。

——いや、その場です。

山田　その場はだから、あんまり収まりはしなかったですね。

——誰かが止めに入ったんですか？

山田　いや、もう無言ですよ、後半は（苦笑）

——じゃあ前田さんとは会話らしい会話はしてない、と？

山田　そう。

——掌底をスリップでよけて、それでおしまい、と。

山田　いやいや、おしまいじゃなくて、そのあとも向こうはずーっと考えてる感じですね　そういう会話のキャッチボールがある状況じゃないでしょ（苦笑）。

——で、前田さんが去っていった、と。

山田　そうだね。だから脅せば目的は達したっていうことなんじゃないですか。で、まさかそれを書いちゃったり、騒いだりすると思わないでしょうから（笑）。

——いまのファンからすれば、ヤオガチ論がそこまでヒートアップするのは想像がつかないかもしれませんね

山田　そうかもね。ただ、あの時代は白黒

【このあと"SRS"放送開始に絡んだ衝

えぇ、そうなんですか……!?

山田　いや、なんだろうね、あんまりない

K－1でもそうなんだけど、うちが耕して谷川くんが収穫しちゃうわけよ

がつかないかもしれませんね

山田　そうかもね　ただ、あの時代は白黒ハッキリさせなきゃいけない時代だった。それは頼ちゃんにもあったし、シューティングの人間みんなにもあったのね。だからそういう機会があったら事あるごとに○○○を潰そうっていう。で、あるときプロレス団体から頼ちゃんに「仕事してください」って電話があったわけだけどそれは要するに　　　をしてくれって電話があったわけね。だからUSA修斗の選手がプロレスラーをKOした試合があったでしょ。

――そんな依頼があったんですか？

山田　当然当然。そういう依頼があるけれど、全部こっちは真剣勝負で潰すわけですよ。

――2回目のVTJにはリングスからも選手が出場しましたが、あの大会にも山田さんは関わられていたんですか？

山田　ううん。だからね、K－1でもそうなんだけど、うちが結局耕して、谷川くんが収穫してっちゃうわけよ。

――なるほど（笑）。

山田　VTJにも最初は『フルコン』でチケット販売とかやる予定だった　だけど途中からタニーと（ターザン）山本さんが出てきて、『フルコン』でやっても売れないぞって言うんで『格通』でやりますっていうことで。まぁ役割分担があるからアレなんだけどね。だってフジテレビの『SRS』だって、ウチらの仲間の企画だったのよ、これも話すと長いんだよなぁ……

【このあと『SRS』放送開始に絡んだ衝撃エピソードをタップリしてくれたが、東京湾に浮かびたくないので泣く泣く割愛】

――に、に、日本テレビとはそんな因縁があったんですか!?　……なんか2003年の二派分裂って、そういうことが引き金になってるのもあるんですねぇ。

山田　そうかもしれないね。

――で、高田（延彦）さんがついに出ざるをえないっていう感じになってきたわけですもんね。

山田　高田はもちろん真剣勝負なんだけど、○○○○○○○○という話だったよね、たしか

――ええ、そうなんですか……!?

山田　　　　じゃないか、○○○っていうことだったのか。

――ホ、ホントですか？

山田　だから、たしか○○○○○○○○のはずだけど

――でも、初戦は3分くらいで決着ついてますよ

山田　じゃあ次かな。2回目かな。

――そうなんですか？（苦笑）。『SRS』の件は絶対に載せられないですけど、それもヤバイなぁ……。

山田　俺の話はだいたい載せられないと思うよ（苦笑）。まぁ、高田はやるだけいいわね。

――で、95年を境に『SRS』が始まってK－1がゴールデンタイムに昇格して、山田さんたちが耕してきたものがメディアに大きく取り上げられてきたことに感慨というものは……。

やまだ・えいじ■元「フルコンタクトKARATE」編集長、現「格闘伝説BUDO-RA」編集長。格闘技興行の花がまだ咲き乱れる前の80年代後半から、「やる側」の視点で格闘技本の編集などを手がける。プロレスファン側からは本気で嫌われた大ヒールだが、非常に熱くておもしろかった時代を結果的に演出してくれた。口癖は「ザンス」らしいけど、一度も発しなかった。なぜだ!?

山田　いや、なんだろうね　あんまりないかな　よく覚えてないな。ウチの会社がたいへんだったから、それどころじゃなかったんだよね（苦笑）。よく覚えてないな。要するにこうやって順調になったらさ、あとの出番は谷川くんでさ。こうやって花開いてる頃にはあんまり俺は関係ないんですよ。

――いま格闘技は人気がなくなってきてるって言われてきてますけど……。

山田　人気はなくなってくるでしょうね。でもね、アマチュアとプロは別なんです。アマチュアは常に動いてますよ。だからアマチュアを見てると次の来るものがわかると思いますけどね。要するに柔術のアマチュア選手層って凄く多い。それも、それこそVTJ以降だと思うけど、あの頃はもう全然シューティングなんか人がいなかったんだけど

――競技を普及させていくなかで、その敵が前田日明だったり疑似格闘技だったりということですか？　山田さんにとっては

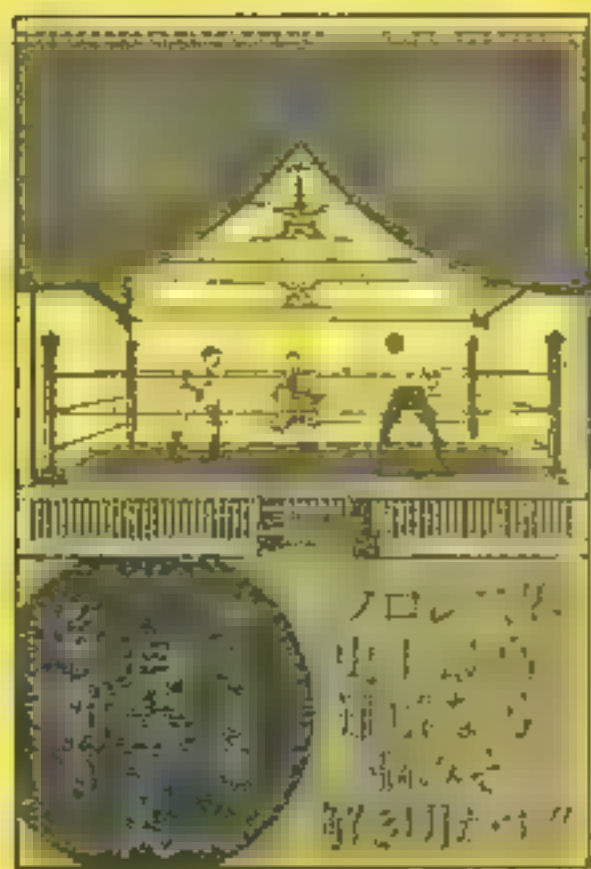
山田　その流れのなかではそうですね。それと反対の動きをするヤツがいたわけですからね

――やっぱり濃密な時期でした？

山田　いやいや、常に興味の対象は移っていくから、常に10年先を考えてるいまはいまでたいへんですよ。

――でも90年代のプロレスから格闘技に移る転換期ってメチャクチャおもしろいですね。

山田　やっぱり灰色の部分っておもしろいですよね、いまから思うと。まあ、白黒ハッキリした時点でタニーが全部持っていくんだけど（笑）。

【10年3月某日　都内・某所にて収録】

――この連載は「1993年の女子プロレス」というタイトルで、いろんな方のインタビューをしています。今回は誰よりも長く現役レスラーであり続けたデビルさんに、あらためて女子プロレスというものを教えていただこうと思って、北九州までやってきました。

デビル　私なんかでよければ（笑）。

――聞きたいことが山ほどあるんですけど、まず最初に、いまのデビルさんは何をされているのかを教えていただけませんか？

デビル　いまは普通に働いてます（笑）。アハハハハハ！

――どんな仕事ですか？

デビル　内緒！（笑）。

――内緒なんですね（笑）。2008年の12月に後楽園ホールで引退興行がありました。北九州に戻ってきたのはいつですか？

デビル　現役の最後のときぐらいからだから、もう4年ぐらい前ですかね。だいたい、2年間ぐらいはこっちから東京に試合に行ったり来たりしてた感じなので。

――どういったきっかけで、地元に戻ろうと？

デビル　一応、母が歳なんで（笑）。私は親一人子一人なんですよ。近くに親戚もいるんですけど、身体のこととかを聞いたりするとそれも心配だし、それだったらって。

――なるほど。デビルさんにまずおうかがいしたいのが、『kamipro』の読者はクラッシュギャルズのことは、なんとなく記憶にあると思うんですけど、ビューティ・ペアの頃の女子プロレスはどういうものなのかイメージが湧かないっていうのが正直なところだと思うんですよ。ビューティとクラッシュは何がどういうふうに違うかを、あきらかにしてあげることが読者には親切じゃないかな、と。なので、「1993年の女子プロレス」とは言いながらも、クラッシュ以前のお話を、この機会に聞かせてもらいたいんです。

デビル　わかりました。

たとえば、松永会長の本では「ジャッキー佐藤は天性のモノを持っていたレスラーであり、マキ上田はそれほどでもなかった」というような感じで書かれています。デビルさんは著書（『ただいま場外乱闘中！』）のなかでジャッキーさんのことを「凄く深くプロレスのことを考えていたに違いない」と書かれていて、私には非常に印象的だったんです。クイーン・エンジェルスの二人についても、「対抗戦の時代であっても非常に注目を集めたはず」とお書きになっていて驚きました。まず、ジャッキー佐藤はどういう人だったのか、ということから聞かせてください。

デビル　松永会長は「ジャッキー佐藤が天才」と書かれていたってことでしたけど、私から見れば、普通一般的にいう天才はマキさんのほうで、私もこういう仕事をやり始めて、天才というのはどういうことなのかを理解してから考えると、「佐藤さんって天才なんだな」とは思いますけど。

――そうなんですか。

デビル　簡単に言えば、マキさんのほうが天才の部類だと思います。言い方悪いですけど努力をしなくてできちゃう人。でも、佐藤さんは常に

クイーン・エンジェルスの身体能力は豊田よりもはるかに上でしたね

何かを考えながら行動をして、モノにして、それをリングの上でちゃんと実証する人。

それができるのがジャッキー佐藤さん？

デビル　はい。だから、そういう点では、ジャッキー佐藤っていう人とマキ上田っていう人は凄く正反対な人。だけど、正反対だからこそ、なおさらピッタリきたんだと思うんですよ。見た目も男っぽい人と女の人って感じで。だから、宝塚っぽいのはビューティ・ペア。クラッシュの場合は宝塚ではない……ですね（笑）。

――確かに。ルーシー加山さんとトミー青山さんのクイーン・エンジェルスの二人は身体能力がモノ凄く高かったということでしょうか？

デビル　はい。凄かった！（笑）。

――対抗戦時代に出てても、全然イケちゃう感じで？

デビル　余裕でイケるでしょう！

――身体能力の高い女子プロレスラーと聞くと、すぐに豊田真奈美という名前が浮かんでしまうんですけど。

デビル　あ〜、豊田には悪いけど、比べものになんない（笑）。

地元の最寄り駅まで『kamipro』取材班を迎えに来てくれたデビルさん。プロレスは引退したが、ミュージシャンとして、たまにライブのため東京へ行くこともあるんだとか。要チェックです！

――え〜〜っ、豊田真奈美でも全然敵わない!?

デビル　はい。二人ともはるかに上です（キッパリ）。

――それは凄いですよねえ。

デビル　さっきから凄い〝天才〟を連発してますけど（笑）、あの二人ほど、初めて見たときに「凄い」って思った人はいなかった。二人はメキシコに遠征に行っていろんな技を覚えてきて、日本のプロレスファンが見たことがないような技を出したっていう目新しさもあったんですけど、技術的なこともさることながら、技とか動きのインパクトはまるっきり敵う人はいなかった。だから、ちょっと早かったんですかね？

――そうかもしれないですね。

デビル　時代的にもうちょっと遅いときに出てくれれば、大スターだったと思います（笑）。

――そうですか。全女といえば、やはり松永兄弟のことは外せないと思うんですけど、松永兄弟のなかでも国松さんと俊国さんの対立、派閥のようなモノがあったんですよね（笑）。

デビル　はいはい（笑）。

――国松さんの派閥にはデビルさんがいて、その下には長与さんがいたりする。で、俊国さんのほうにはジャガー（横田）さんがいて、その下に飛鳥さんがいてっていう師弟関係があったと思うんですけど、簡単に言うと三男坊と四男坊が仲が悪くて、お互いの贔屓の選手を囲っていたって感じなんですか？

デビル　贔屓っていうか、もともとはA班、B班って分かれたことから始まってるんですよ。

――あ、そこから始まるんですか？

デビル　そうです。A班は俊ちゃんで、B班は国ちゃんで。A班にジャガーさんと飛鳥がいて、私と長与クンはB班だったんです。

――長与さんに聞いたら、俊国さんと国松さんで、「コイツらは俺のモノ」とか「あっちには負けるな」とか「ベストバウトを獲るぞ」みたいな、自分の選手を上にあげたいという派閥闘争があったとおっしゃってましたけど、そういった対抗意識はその頃から始まったんですかね？

デビル　やっぱり、A班、B班に分かれてからでしょうね。選手はたま

私は女子プロの世界に仕事として入ったのがよかったんだと思う

かつては一緒に暮らしていたこともあるデビルと愛弟子の長与千種。1985年8月の武道館大会では同じく師弟関係のジャガー横田とライオネス飛鳥がメインで激突。セミで対戦したデビルと長与は「二人でベストバウトを獲ろう」と誓い合い、その言葉どおり、見事ベストバウトをゲッツ！　このときの裏話は「kamipro Move」の「女子プロ外伝」をチェック！

ったもんじゃないですけどね。そんなのは関係ないんで（笑）。

――そうですよね。

デビル　ただ、普段は違う場所で興行をやってるんですけど、後楽園とかそういう会場では一緒になるんですよ。それで、一緒になったときは選手とかは「あ〜、ひさしぶり！」とか言って喜んでましたけど（笑）。

――なるほど（笑）。じゃあ、会社側が意識的に対抗意識を煽っていたわけではなかった？

デビル　そうですね。あくまでも後ちゃんと国ちゃんの兄弟対決みたいな（笑）。選手からしてみればですよ。

――そういうことでしたか。今日はいろいろとおうかがいしたいんですけど、全女には25歳定年制というのがあって、露骨な肩叩きもあったりすると聞きます。でも、選手としては当然「もっとやりたい」と思ったりするわけじゃないですか。

デビル　そうですね（笑）。

――会社としては、トップの選手にあまり長く居座られても困るという事情があると思うんですけど、たとえばマキさんは腰を痛めて引退されたようですが、ジャッキーさんの場合は「まだ辞めるには若すぎた」とデビルさんも著書で書かれていましたよね。それは、まだやりたかったってことですか？

デビル　だと思いますよ。だからこそ、ジャパン（女子プロレス）を旗揚げしたんだと思います。

――ですよね。

デビル　ただ、当時はいまみたいに、辞めたとしても団体がほかになかったんで、ある程度のあきらめと未練と闘ってたんだと思いますよ（笑）。「海外に行けばいいじゃん」って簡単に言う人もいるかもしれませんけど、その頃は海外に行くという選択は女子ではなかったですし。

――海外は常識の外にあったんですね。でも、ジャッキーさんがジャパンを旗揚げしてからは、引退したらジャパンに行けばいいという選択肢もできたと思うんですけど、そういう考えはデビルさんはありました？

デビル　ジャパンができたときはあんまり思ってなかったですね。

――全女の選手のなかには、やっぱり「あっちは二流、こっちは一流」というような思いがあった？

デビル　そのときはあったと思いますね。やっぱり、顔ぶれを見ても、最初は佐藤さん、ナンシー（久美）さん、阿蘇（しのぶ）さんの3人しかいらっしゃらなくて、あとはみんな新人なんですよ。神取（忍）選手も柔道では凄いかもしれないですけどプロレスではアマチュアですから。急にできるはずがないんですよ。

――そうでしょうね。

デビル　しかも3人で団体をやっていけるはずがないんで。そのあたりは試合を観ないとわからないんですけど、テレビとかでやってるわけではないので、試合は観られない。それでも雑誌を見たりとか、ファンからも情報が入ってくるわけですよ。あんまり聞きたくもないけど（笑）。

――そうでしょうね（笑）。

デビル　「あ〜、やっぱりね」っていう感じでしたけどね。逆に言えば、女子プロのレベルを落としてほしくないって思いが一番強かったです。

――なるほど。よく言われる言葉ですが、当時から「全女がイチバン」という思いが強かったわけですね。

デビル　そうですね。

――デビルさんは入ったときからジャッキーさんのような意識の高い人がいて、クイーン・エンジェルスという身体能力が高い人たちがいて、「やっぱり、女子プロレスはスゲー！」っていうような思いが強かったんですか？　それとも幻滅したような部分もありましたか？

デビル　自分のやることに必死だったのであまり覚えてない（笑）。そもそも私は女子プロレスの世界には仕事として入ったんですよ。

――著書でもお書きになっていましたね。

デビル　憧れで入ってないので幻滅も何もなくて。これがあたりまえの世界だったんですよ。私の場合は。まあ、いまにして思えば、それがよかったんでしょうね。

――それはあるでしょうね。全女という団体は、デビュー直後は押さえ込みから始まって、全日本タイトルまでは完全なるシュートで闘っていたと聞きました。そこも全女が凄く変わってるところだと思うんですが、それはデビルさんが入ったときからそうだったんですか？

デビル　そうでした。

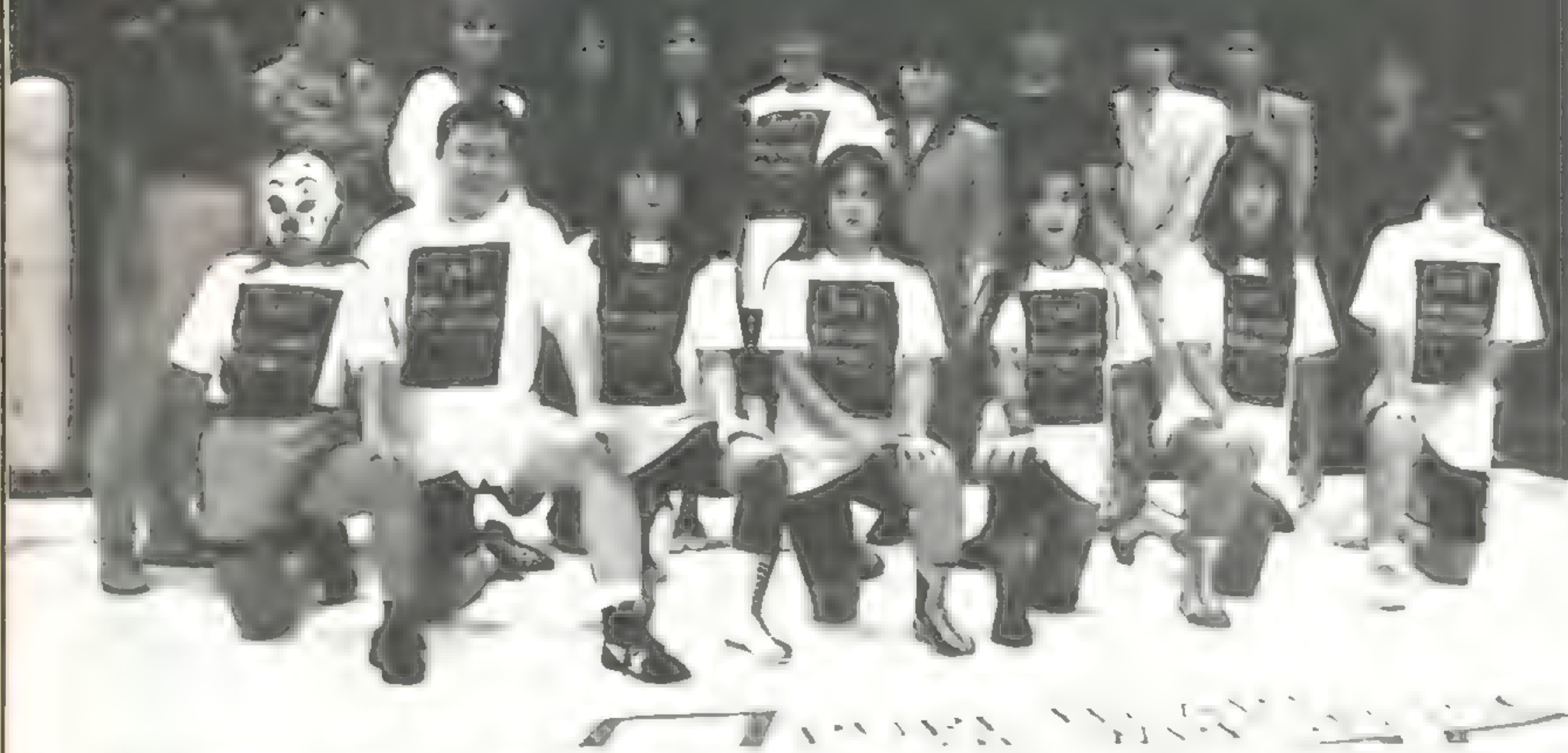
――ジャッキーさんとジャガーさんの試合がシュートだったというのは、いろいろな方から聞きましたけど、正直それがよくわからないんです。若い選手同士がお客さんに見せる要素をまったく抜きにして、押さえ込みルールのシュートの試合をすると

いうのはわかるんです。
デビル　はい。
――でも、観客に見せつつも、シュートをやるということがどういうことなのか、いまいち想像できなくて。
デビル　……む、難しい質問ですねぇ(苦笑)。
――難しいことを聞いていると思います(笑)。
デビル　だから単純に言うと、シュートなのはフォールだけですよ。
――「ここから先はシュートね」というような時間帯があるんですか?
デビル　いや、フォールするときだけ……。だから、技をやられてもフォールされないようにうつ伏せになったりする(笑)。
――そうなんだ(笑)。じゃあ、それまでの大技の攻防というのは受けることは受ける、と?
デビル　だから、そこらへんが意味のわかってる……なんて言えばいいのかな? まあ、プロとしてやってる選手と意味のわかってないペーペーの選手の違いだと思いますね。
――なるほど!
デビル　お客さんはあくまでもプロレスを観に来ているので、勝ち負けも重要かもしれないけど、いろんな面を……たとえば、その選手の持ち技だったり、スタイルだったり、いろんなものを見せて勝つのがプロレスラーとしては一番いいわけですよ。だけど、新人なんかはそういうことは一切抜けちゃうんですね。だから、押さえ込みばっかりに走るんでお客さんはつまんないわけですよ(笑)。
――じゃあ、新人であっても、お客さんを魅了しつつシュートで勝つっていうのは、やろうと思えばできるってことなんですかね?
デビル　いや、できないでしょう。それは無理だと思います(笑)。
――じゃあ、試合経験を重ねていくうちに、お客さんを魅了しつつも、最後のところだけはシュート。お互いの技は受けるけどシュートという試合が可能になってくるわけですね。
デビル　う〜〜ん、それは難しいなぁ(苦笑)。
――ごめんなさい(笑)。言える範囲でかまいませんので教えてください。
デビル　やっぱり、私たちはそのために日々鍛えてるわけで。打たれ強いというか。
――キャリアを積むごとに、いろんな意味で打たれ強くなっていくということでしょうか?
デビル　はい。やっぱり、これもプライドだと思うんですけど、相手の技を受けきってこそプロというか、そういう意識が育ってくる。「逃げないぞ」みたいな(笑)。そのかわり、やられたらやり返すっていう。
――やられたことはやり返すということは、相手の技を一つ受けたら、今度は私の技を受けてね」という暗黙の了解みたいなものがあるということですか?
デビル　いや、「受けてね」じゃなくて、「やってやる!」ですね(笑)。
――なるほど。でも、ボディスラム一つにしても、相手の協力がないとできないとよくうかがうのですが、そんなことはありませんか?

「自分が自分が」っていう選手には年に一〜二回ブチ切れてました(笑)

デビル　ないですね。よっぽど実力が切迫してればあれですけど。多少離れていれば簡単ですね。私に言わせれば(笑)。ただ、私の場合は見てくればっかりで力がないんですよ。
――えっ、そうなんですか?
デビル　はい。ただ、どういうふうに腕を差し込んだりすれば身体が挙がるかっていうのを自分の身体でもう覚えきっているので、多少抵抗されても簡単に挙げることができます。
――え〜、そうなんですかぁ!
デビル　だから、そういう力をみんな持ってるんですよ。個人個人違いますけど。どこが弱いけどどこは強い、みたいな。
――それでも、相手が「おまえの技なんか受けてやらないよ」って思えば、当然ディフェンスはできるわけですよね。
デビル　そうなると、プロレスじゃなく、ただのケンカをやってることになります。
――そういうことをされると、その瞬間、固くなっちゃうわけですか?
デビル　いや、逆に燃えますね(笑)
――「コノヤロー!」って思うわけですか(笑)。
デビル　はい(笑)。私の場合は一発ガツンとやったら忘れますけど。お客さんを置いてけぼりにしないっていうのが私のポリシーなので。自分の感情だけでやるっていうのは……年に一〜二回はありましたけど(笑)。
――年に一〜二回もあったんだ(笑)。
デビル　いわゆるブチ切れるというか(笑)。そうなったときはお客さん関係なくって感じになりますけど。
――デビルさんがブチ切れたら誰も止められないんじゃないですか!
デビル　はい(微笑)。
――ちなみに、どういうときにブチ切れてしまうんでしょう?
デビル　まあ、同じことですね。お客さんを置いていって、「自分が自分が」っていうようなことをやられちゃうと。そういうレスラーは大ッ嫌いなので。必ず言うことを聞かしてやりますけど、それでもわからないときは、ブチって切れますね(笑)。
――なるほど(笑)。話は戻ってしまうんですが、たとえば81年にジャガーさんが肩叩き状態にあったジャッキーさんにシュートで勝った試合があったじゃないですか。長与さんは僕に「あの試合をシュートにするのはおかしい」とおっしゃったんです。
デビル　あ〜、長与クンはかなり怒ってましたね(笑)。
――「横田さんはジャッキーさんを6回も7回もフォールしてたけど、レフェリーがフォールを取らなかった」と言ってました。
デビル　はいはい(笑)。
――デビルさんから見て、あの試合はどんな試合だったんですか?
デビル　いや〜〜な、雰囲気(笑)。
――嫌な雰囲気(笑)。
デビル　でも、その前の試合でオールパシフィック(選手権)を賭けて池下(ユミ)さんとミミ(萩原)さんがやってるんですよ。
――ミミさんが勝ったんですよね。
デビル　あの試合もシュートで。
――メインもセミもシュート!
デビル　だから、そっからすっごい嫌な雰囲気で。控室はどんよりしてました(笑)。
――それは二人を追い出しにかかったということなんですか?
デビル　そうですよ。
――なるほど。「弱い弱い」と言われていたミミさんも、その頃はシュートの実力もついていたということなんですか?
デビル　押さえ込みだけじゃなく、とても練習熱心な選手でしたから。
――はあ、凄いですねぇ。
デビル　だから、それも私にしてみればすっごい醜い試合のあり方で。あんなタイトルマッチはあっちゃいけないって思うんですよね。観てても気持ちよくない。
――それはそうでしょう。
デビル　試合スタートから積み上げていったものが最後の最後でメチャクチャで終わっちゃうわけですよ。なんの積み重ねも残らないで嫌な気持ちだけ残って。ミミさんのファン

柳澤氏も「数ある女子プロ本のなかでもクオリティは一番」と絶賛するデビルの半生記「ただいま場外乱闘中!」(近代映画社刊)。約15年前に発売されたこの本、見かけたら買って損はないですよ! 必読!!

私が全女の頃のタイトル戦は とりあえずシュートでした（笑）

92年9月、JWP後楽園ホールで開催されたデビル雅美デビュー15周年セレモニー。JWPには旗揚げ時から参加したデビルは、合宿等ではプロレスの指導だけではなく、選手の食事も自ら作るなど、まさに"ビッグママ"的な存在として団体をサポート。セレモニーにはJWPの選手はもちろん、ジャガー横田やミミ萩原など全女時代のライバルたちも多数来場した。

は喜びますけど、それは、ただ勝ったことを喜ぶだけであって、その試合がおもしろかったとか、そういう話題にはならないわけですよ。意味がないじゃないですか。プロレスの。

——プロレスの意味がない試合？

デビル 私はそう思います。

——「プロレスの意味」ということについてもう少し教えてください。

デビル やっぱり私としては、勝ち負けだけじゃなくて、試合を全部観て、おもしろい、楽しい、あの選手のああいうところがいいとか、そういうことを味わってほしい。理想は「全部の試合がおもしろかったけど、この人が一番印象に残ってる」とか、「あの試合が一番印象に残ってる」と感じてもらうこと。それがプロレスの醍醐味だと思ってるんで。それに、そういう気持ちを残せる格闘技は、ほかにないと思うんですよ。

——そのとおりですね。

デビル それに、お客さんからしたら、タイトルマッチっていったら凄い試合を観られると思って来てるわけじゃないですか？

——当然、期待してますよね。

デビル だけど、あのときの2試合はタイトルマッチの意味がない試合だと思いましたね。やっぱり、タイトルって名前がついてるからには、最高の感動を与えなきゃいけないし、お金を払ってもらった以上のものを、その試合でお客さんにバックしなきゃいけないと思うんですよ。

——なるほど！

デビル だからこそ、タイトルマッチは、やる選手のステータスになると思うんですよ。

——タイトルマッチを闘う選手は、料金以上のものを見せて満足させなきゃいけないという義務を背負わされているということでしょうか。

デビル そうですね。得したって思わせないと（笑）。「もったいなかったなぁ」と思われたら最悪！

——でも、全女という会社は、なぜそういうこと（タイトルマッチでのシュートマッチ）をさせるんですかね？

デビル 一番簡単だからじゃないですかね。辞めさせる口実というか。

——そういうことなんですか（笑）。ちなみに、その日の2試合は大変なことになるって雰囲気は、試合前からわかっているものなんですか？

デビル はい、わかってました（笑）。その大会の日だけじゃなくて、ちょっと前から、もうあきらかに肩叩き体制だったんで。

——でも当時のジャッキーさんって、まだ23歳とかだったんですよね？

デビル もう少し若くないですか？

——たしかそれぐらいです。

デビル でも、マキさんが辞められたのは19歳とかでしたよね。

——そう考えると、ムチャクチャ若かったんですねぇ。

デビル だから凄いんですよ（笑）。

——20歳前後の選手が肩叩きにあって、しかもシュートで負けるって感覚はよくわからないですね。まだ体力的にも落ちていないと思うし。

デビル それはそうなんですけど、当時はビューティ自体の人気が下降線になって、マキさんはその前の武道館で負けて辞められて、佐藤さん一本になっても人気の衰えは止まらなかった。となると、会社としては、頭を変えたいわけじゃないですか？

——当然そう考えるでしょうね。

デビル そのときに全女を変えられる人間というのがミミさんであり、ジャガーさんだったと思うんですよ。

——なるほど。じゃあ控室とかでも、若い選手は息を飲んで見守っていたって感じなんですか？

デビル ですね。あとはみんなセコンドについたりしてたんで。「え〜っ、肩ついてんじゃん！」みたいな。「嫌な感じ〜」って（笑）。

——やっぱり、全女って恐ろしい団体ですねぇ。

デビル 恐ろしいんですけど、団体は一個しかなかったんで（苦笑）。

——それがあたりまえだった、と。でも、凄いよなぁ。結局、ジャッキーさんはそこで引退を余儀なくされて、その後、ジャガーさんとデビルさんがWWWAのタイトルマッチをやって、レフェリーが介入して、デビルさんはブチ切れてデビル軍団解散ということもありましたよね？

デビル あ〜、ありましたねぇ……（しみじみと）。

——それはどうしてそういうことになっちゃったんですか？　なんで会社は二人にいい試合をさせてあげようとはならなかったんですか？

デビル でもあの頃って結局、タイトル戦ってシュートなんですよ。

——えっ、タイトル戦は全部シュートだったんですか？

デビル 全部というか、とりあえずシュート（笑）。

——どういうことですか、それ？　全然わからないんで教えてください。どっちが勝つか決まってないっ

てことなんですか？

デビル　はい。だから「とりあえずシュート」なんです（笑）。

――へぇ～、やっぱり凄いなぁ、全女って（笑）。いまとなっては全女時代の話をいろんな人が語っていて、"全日本"という名前がついたベルトはシュートという話はよく聞くんですけど、全女の象徴である赤いベルト（WWWA世界シングル）の試合でもしょっちゅうシュートがあったということですか？

デビル　そう　とりあえずシュートでしたね。ただ、ガイジン相手の試合は意識も違うし意思疎通も難しい。だから、"魅せる"ことを重視して勝敗を決めていたというのはありましたけど……、あっ、書いちゃダメですよ（苦笑）。

――いや、もう大丈夫でしょう。時代が時代なんで、そこがおもしろいところだと思いますよ。僕なんかがプロレスというモノを観るときは「こっちが勝つだろう」って決めといて、そのなかでどっちがお客さんを沸かせられるか、その能力を競うことこそがプロレスであると思ってますし、21世紀のプロレスファンはそういうファンが多いと思います。それはデビルさんから見ると違う？

デビル　どうなのかなぁ？　でも、とりあえず強いのにこしたことはないんですよ。

――それはそうでしょう。

デビル　いろんな見方があって当然だと思います。それを踏まえて、私は負けてもいいと……、それがプロレスのいいところで。「負けた姿が好き」っていうのもたくさんいるわけですよ。

――キューティー鈴木さんとかはそうですよね。

デビル　そうです。最初はミミさんでしょうけど。プロレスには負けの美学があるので。

　それこそミミさんはデビューから何十連敗とかしてましたけど、あれは誰が考えだしたんですか？　それとも全部シュートだったとか？

デビル　シュートだったと思います。まあ、身体がボロボロだったっていうのもありましたけど、ホントに弱かったんだと思いますよ（笑）。

　あ、そうなんだ（笑）。そんなミミさんがどうしてオールパシフィック王者になれたんですか？

デビル　とくに力を入れて押さえ込みの練習をしてましたから（笑）。だから、その日はメインの佐藤さんとジャガーさんの試合よりもオールパシフィックでミミさんが勝ったほうがビックリしました。池下さんもある種、天才なので。だからこそ、プロレスの怖さを知ったっていうか。「3秒かぁ」ってあらためて思いましたね。

――池下さんとミミさんの試合というのは、ちゃんとお客さんに見せられるような試合になったんですか？

デビル　一応、かたちとしてはヒールとベビーなんで、かたちにはなりやすかったと思うんですよね。お客さんはミミさんがいじめられるのが大好きだから（笑）。池下さんも容赦なくいじめるし、だけど急に押さえ込みになったらバタバタし始めてるうちにミミさんが勝っちゃったんで（笑）。あのときは一瞬、会場の空気が止まったと思うんですよ。

　お客さんもミミさんが勝つとは思ってなかったんですね？

デビル　いや、選手もそうだったと思います。「えっ!?」って思ったら、「カンカンカンカン！」ってゴングが鳴ったんで、「マジ!?」って、またセコンドで顔を見合わせて。私的には、メインよりもそっちのほうがインパクトはありましたね。

――なるほどねぇ。そのあと、ジャガーさんとデビルさんとの二頭体制になったと思うんですけど、著書のなかでもお書きになってましたが、「ホントにジャガーさんと凄い試合がしたかったのに、あんな試合になっちゃって」と二人のタイトルマッチを振り返っていましたが、具体的にはどういう試合だったんですか？

デビル　レフェリーの介入というか……。

――なんでその試合はうまくいかなかったんですか？

デビル　なんでというか……、正直言って、ある程度キャリアが上になってくるとシュートの意味がわかんなかった（苦笑）。

――それはどういうことですか？

デビル　「もういいじゃん！」って（笑）。やっぱり、難しいんですよ。かたちにならないというか。これぱっかりは、どんなにキャリアを積もうが、違う感情が入ってこしまうんで、

――当然そういう部分もあるでしょうね。

デビル　普段、尊敬するところもあったり、みんな、ある程度は理解してるわけですよ。先輩であろうと後輩であろうと。理解してるのに、シュートで違う意味の感情を会社に刺激されてしまうというか。

――その「違う意味の感情」という部分をもう少しわかりやすく教えていただけませんか？

デビル　だから、見せるではなく、とにかく勝ち負けだけのことにこだわらせられてしまう。アマチュアじゃないんだから（笑）。

　お客さんと勝負する仕事なのに、対戦相手とだけ勝負をさせられてしまう？

デビル　はい。うまく言えないんですけど、勝ち負けだけで片づけられてしまうのが凄く納得できないっていうか。そういう試合をさせられて、お客さんにも「おもしろくなかった」とか「なんで負けるの？」って片づけられて、結局、責任を負うのは全部選手なわけですよ。

――そうなりますよね。

デビル　当然、そこで会社に対する不信感も出てくるし。それに、そういう試合をしちゃうと気まずい思いをするわけじゃないですか？　勝ったって気持ちよくないし、負けたって気持ちよくないし。

――できの悪い試合にならざるをえないってことですよね。

デビル　はい。そういう意味もあったし、あとはみんな若かったというのあるし……、シュートはよくわからない（苦笑）。

全女退団前のカルガリー遠征でプロレスの楽しさを知ったというデビル。プロレスに開眼してからのデビルはアンダーテイカーもビックリの怪奇派スーパーヒール・デビル雅美や、『ハッスル』でのデビル夫人など、さまざまなキャラクターで大暴れ!

いまから思えば、全女時代は教習所だったんじゃないかな（笑）

まあ、みんな20代前半ですからね（笑）。

デビル　やっぱり、10年越えて初めてわかることだと思うんですけど……、最低10年やらないとプロレスはわかんないですよ（キッパリ）。

――そうでしょうねぇ。

デビル　それはホントに思いますね。プロレスのことをわかってもないのにシュートを何回もやらされて、いい試合なんてできるはずがないんですよ（笑）。で、だんだんわかってきた時期に、またそういう試合をやらされるから。

――新人の頃は押さえ込みルールがあって、そこから卒業したら、お客さん相手のプロレスをやるようになる、と。それが、トップになってタイトルマッチとかになると、またシュートでやり合う試合もしなきゃいけなくなるということですか？

デビル　はい。タイトルマッチはとりあえず押さえ込みシュート（笑）。

――凄いなぁ！

デビル　で、ガイジン相手のオールパシフィックは私が勝つ。ガイジンにベルトを持っていかれると大変なんで。また呼べるかどうかわかんないし（笑）。

――そりゃあそうですよね（笑）。

デビル　でもガイジン相手の試合は大変だったけど、魅せることに集中した試合は勉強になりました。

――そうですか。そんなデビルさんも露骨に肩叩きをされたこともあったんですよね？

デビル　されましたねぇ（笑）。私の場合は試合でどうのこうのよりも、ケガも何もしてなかったのに、ある日突然カードに名前が入ってなくて、レフェリーだったんですよ。

――ひどいことしますよねぇ。

デビル　そのときは周りの選手が怒って抗議してくれて試合ができるようになったんですけど。そういうことを普通にやる会社なので（笑）。

――観客とだけ闘わせてくれればいいのに、選手同士にシュートをさせて険悪な関係にさせたりという非情な緊張感があるからこそ、「やっぱり、全女ってスゲー」という空気があるのかな、という気もするんですけど。

デビル　う～～～～ん、どうなんでしょう？（苦笑）。

――会社にはお客さんとの闘いだけをバックアップしてほしかった、と？

デビル　そう思いますね。私は……というか、選手のためには。

――全女のあり方はいびつで間違ったやり方ですか？

デビル　一つしかないがゆえの傲慢経営（笑）。私たちは駒でしかないですから。ただの商品なんで。

――なるほど。実際、肩叩きをされたときは、「ついに私にも来たか」と思いました？　それとも「私だけはしぶとく闘うよ」って感じでした？

デビル　あんまり意識はしてなかったですけど、カードに名前が入ってなかったときに「あ～、これねぇ」とは思いましたけど。ただ、その後にカナダ遠征に行ったことで、「私はプロレスをやめない」って思ったんですよ。

――引退前の餞別のようなかたちで行ったカルガリー遠征で、馳（浩）さんや（獣神サンダー・）ライガーさんたちに会ったことで、これまで「全女のプロレス」しか知らなかったデビルさんのなかに新しいプロレス観が芽生えた、という感動的な話ですね。

デビル　そうです。デビューから10年経って、ようやくホントの意味でプロレスラーになれたというか。

――カルガリー遠征から帰ったデビルさんは、まったく違うレスラーになっていたと思うんですけど、リング上から見える光景も、遠征前とは全然変わったんですか？

デビル　見える光景というか自分自身が全部変わりましたね。いままで自分が「こうだ」と思ってたものが全部洗い流されて、見るモノ見るモノが楽しくてしょうがないんですよ。

――キラキラしている、と？

デビル　はい（笑）。それまでは仕事でやってきたけど、「あ、本当にプロレスが好きなんだ、私って」と気づいたあとは、リングに上がってもまるっきり違いますよね。ある程度、仕事だとやっつけるだけというか、プロとして意識しながらも「とにかく仕事なんだから」っていう感じで。

――お給料分だけはやりますよ、と。

デビル　そんな感じで（笑）。だけど、それからはリングに上がって、お客さんに向ける目も、「あっち行ってみようかな」とか、「ここでお客さんを沸かせなきゃな」とか、サービス精神も旺盛になってきましたね。

――全女には凄い選手もいっぱいいたし、凄い闘いもたくさんあった。僕は全女こそ〝世界最狂〟のプロレス団体だったと思ってるんですが、やっぱりデビルさんにとっては、「あれはいかん」という団体でしたか？

デビル　いや、「いかん」っていうよりも、私にとっては教習所でしたね。

――全女は教習所だった？

デビル　全女で楽しい試合ができた時期って、カルガリーから戻ってきてから全女を辞めるまでの3～4カ月だったので。それまでは好きって思ってなかったから、いまから思えば、全女時代は教習所だったんじゃないかなって（笑）。

――教習所で無事に免許を取ってから、つまり全女を離れてからが、本当の意味でのプロレスラー・デビル雅美のスタートなんですね？

デビル　そうですね。それから20年もやっちゃいましたけど（笑）。

【10年3月6日／福岡県北九州市のジャズ喫茶にて収録】

でびる・まさみ■本名＝吉田雅美。1962年1月7日、福岡県出身。高校を中退し全女に入門。1978年8月の小峰広子戦でデビュー後は全女のトップレスラーとして活躍。退団後はジャパン女子、JWP、OZアカデミーを中心に活躍。08年12月30日の後楽園大会で引退。168cm、90kg（現役時）。ブログアドレス→http://blog.livedoor.jp/devil30th/

やなぎさわ・たけし■1960年、東京都出身。慶応大学法学部卒。84年に文藝春秋入社。「週刊文春」「Number」編集部を経て03年に退社。以後はフリーとして活躍。著書に『1976年のアントニオ猪木』（文藝春秋刊）。『kamipro』では最後のブームと言われる〝93年〟の女子プロレスをテーマにした「1993年の女子プロレス」を好評連載中。

ファイナル！

萌え萌え女々苑 DX

つんくもビックリ!!?

女子プロ最後(?)のアイドルユニット

キッスの世界の壮絶舞台裏

脇澤美穂

pro』では異色の女子プロ連載として約4年間にわたり、さまざまなプ
スラーや格闘家が登場した『萌え萌え女々苑』も今回がファイナル！ 最
のゲストは、かつて全女で納見佳容との「ミホカヨ」や「キッスの世界」とし
活躍し、現在はお笑いコンビ『吉川☆ミホカヨ』として活動する脇澤美穂だ！

掟ポルシェ　構成&撮影／阿修羅チョロ　試合写真／平工幸雄　イラスト／ゴローちゃん

掟　現在、脇澤さんは相方の吉川崇さんと『吉川☆ミホカヨ』としてお笑いをメインでやられてるんですよね。

脇澤　そうです。でも、収入的にはバイトがメインなんですけど（笑）。

掟　バイトは元全女のリングアナだった今井良晴さんが店長の目黒のちゃんこ屋『時津洋』と、都内のお寿司屋さんのかけもちで。お寿司屋さんは深夜から朝までなんですよね？

脇澤　はい。でも、帰ってすぐ寝ればいいんですけど、寝れないんですよ。「なんでこんなにうまくいかないんだろう？」って考えて不安で寝れなくなっちゃって（苦笑）。

掟　お笑いの仕事はあまりうまくいってないんですか？

こちらの写真は全女の経営状況悪化もあり、多くの選手がネオレディースとアルシオンに移籍した97年の道場での一枚。このなかで現役は4名（誰かは各自調査）。かつてワッキーが脱走した際、実家に電話をして引き止めてくれたという先輩の前川久美子とは、いまでも食事に行ったりする仲だとか。

脇澤　はい。まあ、あたりまえなんですけどね。まだ2年目なんで。

掟　2年前にテレビで青木さやかさんを観たのがきっかけで、お笑い芸人を目指したんですよね。

脇澤　そうなんですよ。それまで鬱状態だったんですけど（苦笑）。なんにも夢もなくて。プロレスを辞めてから、いろいろアルバイトとかしたんですよ。普通の人になりたいと思ってたんで。「この業界にはいたくないなぁ」っていうのもあったし。

掟　プロレス界とは距離を置きたかった？

脇澤　はい。で、いろんなバイトをしたはいいものの、あんまり楽しくないなって。パン屋さんとか居酒屋とか警備員とかコンビニとか、スーパーの総菜屋とか転々として。そういうのをやりながら、普通の女のコみたいに「趣味は旅行」とか、誰かのコンサートを観るためにバイトをするとか、そういう生き甲斐がなかったんですよ。もう毎日つまんなくて。

掟　プロレスと比べれば、どこの世界も刺激も魅力もないですよね。

脇澤　田舎に戻ってお母さんと住んでた時期があって、何気なくテレビを観てたら『ロンドンハーツ』に青木さんが出ていて。もうすっごいおもしろくて。「この人みたいになりたいな」「会いたい」って思って。そう思ったら自分も芸人になるのが手っとり早いんじゃないかって。結局、プロレスとの出会いと一緒で。

掟　脇澤さんは豊田真奈美選手に憧れて全女に入ったんですよね。

脇澤　そうです。「豊田さんに会いたい」「話したい」「じゃあ、なろう！」っていう感じで（笑）。

掟　まったく同じパターンで（笑）。

脇澤　豊田さんとは横には並べたんですよ。でも今回はなかなか難しいですね。実際、青木さんにはもう会えはしたんですけど、まだ横には全然並べない状態なので。

掟　バラエティ番組では青木さんと同じリングに立ってプロレスの試合もしましたよね。

脇澤　でもそのときは素人みたいな扱いだったので、ちょっと寂しくて。でも、お笑いだからなんでもありなのかなって……、また悩みました。

掟　実際に青木さんと会われてみて、どうでした？

脇澤　想像とは全然違いましたね。

掟　青木さんはテレビとかのイメージとは違って、じつはいい人っていうのはけっこう知られてますからね。これはプロレスの世界とも似たところがあると思うんですけど。

脇澤　ホントそうですよね。ヒールが一番優しい人で、ベビーフェイスの人が性格悪いっていう（笑）。

掟　全女のなかはどうでした？言いづらい話でしょうけど（笑）。

脇澤　まさにそうかもしれない（笑）。

掟　ホントはZAPのほうがいい人だったり？

脇澤　いい人だったりしますね。

掟　全女時代はずっとZAP・Iこと伊藤薫さんの付き人をやられてましたけど、その流れもあって、昨年12月に伊藤道場の大会で一度プロレスに復帰したんですよね。一度は嫌気がさした世界に戻ってきたのはなぜなんでしょう？

脇澤　そのときはワタナベコメディスクールっていう養成所にいて、そこに通っていたとき、特技ブームがあって。

「なんでうまくいかないんだろう？」って考えて寝られなくて（苦笑）

フジテレビの女子プロ番組『格闘女神アテナ』から生まれた、つんくプロデュースのアイドルユニット『キッスの世界』。デビュー曲は『バクバクkiss』。メンバーは脇澤、納見佳容、高橋奈苗、中西百重の4人。脇澤脱退後は西尾美香が加入するも、西尾の退団により03年5月に解散。

リング上や女子プロ専門誌「レディゴン」などでの天真爛漫なイメージとは裏腹に「キッスの世界」の頃のワッキーは孤立していたという。本人は「アイドルとか言われても全然ピンとこなくて。変態と呼ばれたかった」らしい。

お笑い芸人として思うような結果を残せていない現状と、短いながらも一時代を築いた女子プロ時代の思いがクロスしたのか、インタビュー開始から15分ちょっとで突然ワッキーの瞳からは涙がポロリ。頑張れ、ミホカヨ！

掟　と、特技ブーム？

脇澤　その人しかできない特技がないとダメみたいな。誰にもできないことっていったら、私にはプロレスしかないんじゃないのかって考えて、伊藤さんに相談したら「じゃあ、おいで」って言ってもらって。でも一回引退した人が復帰していいのかって迷いもあって……。ホントにトラウマになっちゃってるんですよ、プロレスが。いまも「ネタに使え」とか言われるんですけど、仕事のために利用した感じになって申し訳なくて。

掟　復帰したものの、その後ちょっとリングから遠のいてるのは、そういう迷いもあるわけですね。

脇澤　はい。怖いんですよ。観るのも怖いですし。たまに思い出すんですけど、昔、プロレスをやってたときのほうが楽しくやってたんじゃないのかなって。納見（佳容）と一緒に組んでたときとか、『キッスの世界』とかでやってたときのほうが。「あ〜、若かったんだろうな」って思いながらも……。なんか、いまがうまくいかないから、よけいに昔を思い出して…………（急に涙ぐむ）。……いまがうまくいけばいいんですけどね。

掟　現在の仕事で何も結果を出せていないままリングに戻ると、過去の栄光を汚すようで申し訳ないってことなんですかね。

脇澤　そうかもしれないです。……ホント、悔しいッス。

掟　でも、残酷な話、お笑いの世界って笑わせたもん勝ちなところもあるじゃないですか。

脇澤　あ〜〜、でもホンット難しいです、この職業は。そういう才能が……やっぱりないんですよね（涙）。

掟　まあまあ、そう言わずに（笑）。まだ涙ぐむのは早いですよ！

脇澤　いや〜〜〜〜……（涙を拭って）。でも、このあいだ凄く落ち込んでるときに青木さんからメールをいただいて「頑張らなきゃな」と思って。凄く元気になったんですよ。一気に！　心のなかがキューっていうか、ピューって上がったんですよ!!

掟　そういう妙な擬音が出ると脇澤さんらしくて安心します（笑）。プロレス時代の話に戻りますけど、さっきも言っていたとおり、豊田さんに憧れて全女に入ったんですよね？

脇澤　そうです。でも、入ってから嫌いになったりもしました（笑）。

掟　これまたあっさりと（笑）。

脇澤　嫌いな時期もあったんですけど、タッグリーグで優勝してくれたんで、また好きになって。なんでもそうだと思うんですけど、成功すると（関係も）うまくいきますよね（笑）。

掟　気持ちの整理はつきやすいですよね。

脇澤　全女に入ったのは豊田さんに憧れたのもホントなんですけど、そのとき家を出たかったんです。親がメチャクチャで。もう亡くなったんですけど、お父さんは暴力ふるうし、お母さんはパチンコで借金作ったりして　もう嫌だなって思ってて。

掟　家を出るには住み込み制の全女に入るのが一番だった、と。

脇澤　そんな感じです。私は脳味噌がないんで、体力しかないんだろうなぁって思ってたんで（笑）。

掟　最近も国語ドリルとかやってるんですよね（笑）。

脇澤　なんで知ってるんですか（笑）。

掟　ブログで見ましたよ！

脇澤　ホントにありがたいですけど（笑）。誰も見てくれないんで。

掟　その後、平成8年組としてデビューするわけですが、その頃の全女は、すでに資金繰りがうまくいかなくなってきてる時期ですよね。

脇澤　でも、そういうのは全然感じなかったです。寮に住んで『SUN族』（全女経営のレストラン）で働いたりはしてたんですけど、月給で7万円もらえて、試合に出れば1000円。勝つと2000円とか。固定給の7万円は試合に出なくてももらえてたんで凄いなって。だって、いま0円ですもん（笑）。固定給なしのバイトなんで（笑）。

掟　確かに（笑）。脇澤さんも全女を脱走した経験はあるんですよね？

脇澤　あります。倒産前に脱走しました。仕事が全然できなくて何もかも失敗して。先輩に「なんでこんなに謝らないといけないんだろう？」って。〝すいませんノイローゼ〟にかかりました（苦笑）。

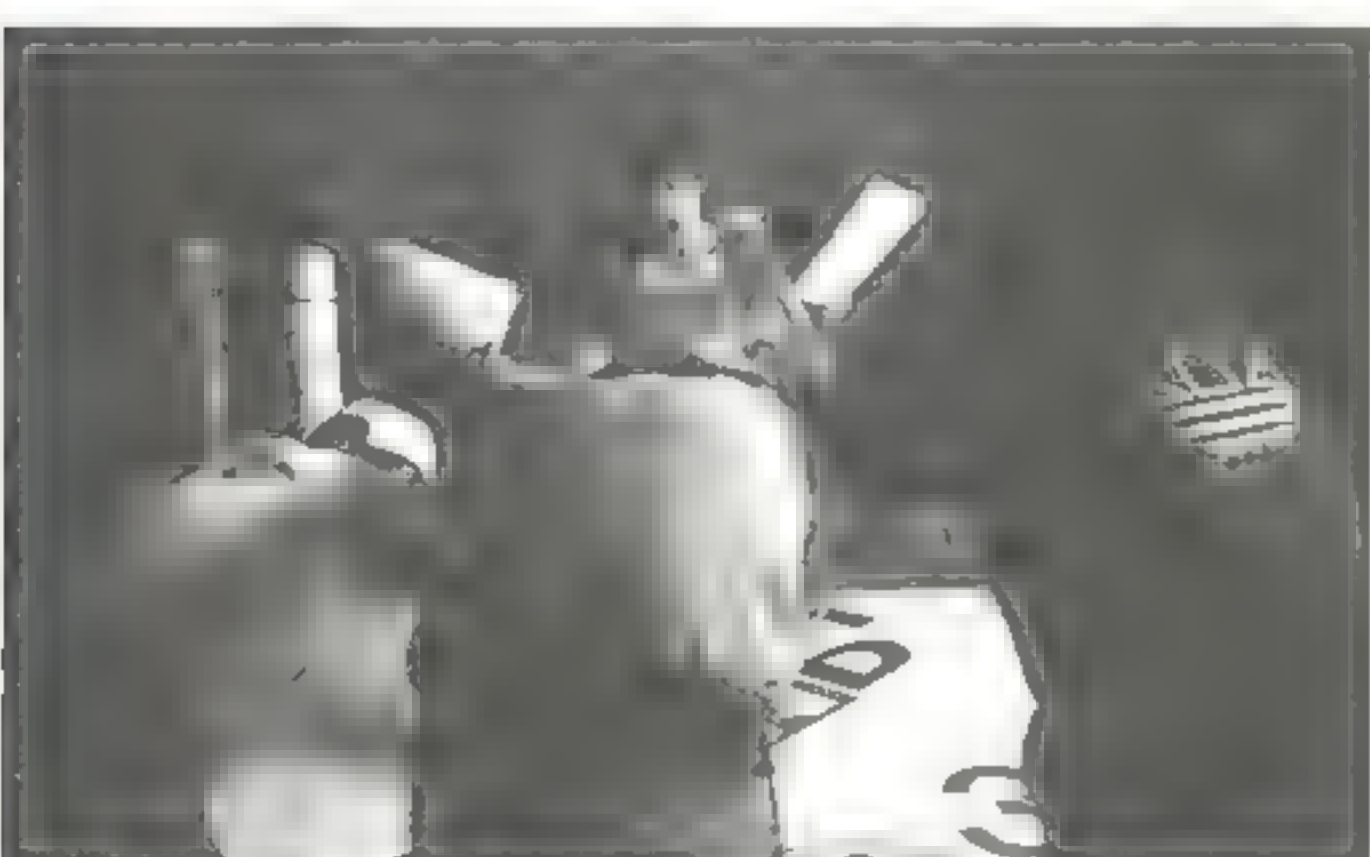
掟　全女で新人時代は「はい」と「いいえ」と「すいません」しか言っちゃいけない掟があるんですよね。

脇澤　そうなんですよ。ずっと巡業バスのなかでも立ちっぱなしで寝ちゃいけなかったりとか。「これが毎日続くんだなぁ」って思ったらもう頭がパンパンになって。……でも、よく考えたら、いまのほうが全然楽なんですけどね。そうだ、つらいときはそれを思い出せばいいのか！（笑）。

掟　気づけてよかったです（笑）。デビューして1年で全女が倒産して、上の選手がどんどん違う団体に行ったじゃないですか？　その反面、すぐに『キッスの世界』として売り出されたり、やりやすいところもあったと思うんですよ。

脇澤　そう考えると凄いラッキーでした。倒産してなかったら、ずっと私たちは出ていけなかったと思いますし。だから、私にとっては「倒産バンザイ！」です（笑）。

掟　倒産バンザイ！（笑）。自分がアイドル歌手としてデビューすることについてはどう思ってました？

脇澤　自分のなかでは「違うな」と思ってました。でも、流れに沿うし

「私は全然人気なかったです」とネガティブ発言を連発していたワッキーだが、約10年前の『kamipro』では椎名基樹、せきしろ、中村カタブツ君というワッキー好き3人の告白企画を行なったことも。人気あったって！

早く青木さやかさんの横に立てるように頑張ります!

かないのかなっていう。

掟　とくに違和感はなかったですよ。歌唱力は別として(笑)。

脇澤　アハハハハ! ただ、欲を言えば(納見佳容と)二人でやりたかったんですけど、でも4人じゃないとダメってことで。それに、仕事をやっていくうちにいろんなことがあって、4人のなかで一人になり、いづらくなり、「あ~、つまんないなぁ」って思うようになって……。

掟　天真爛漫なイメージの脇澤さんが孤立していたとは、失礼かもしれませんが意外でした。

脇澤　正直、歌はやりたくなかったっていうのもあったし、周りは「頑張って盛り上げていこう」っていう気持ちがあったのに自分だけ乗らなかったから孤立したのかもしれない。一緒に仕事してても誰も話してくれなかったりとか(苦笑)。納見は後輩だし、組んでたんで気にはしてくれてたんですけど、当時ナナモモ(中西百重&高橋奈苗)とはほとんどしゃべらなかったです。

掟　性格的に合わなかったとか?

脇澤　ナナちゃん(高橋奈苗)とはホントに仲が悪かったんです。中西(百重)とはそんなでもなくて。いまは二人とも普通に話すようになったんですけど。……『kamipro』ってナナちゃん読みますかね?

掟　読むかもしれませんけど、いまはもう仲良くなったんだから問題ないとは思いますよ。何か仲が悪くなるきっかけがあったんですか?

脇澤　あれがきっかけだと思うんですよ、新人王決定戦。その試合で秒殺で私が勝ったんですよ。試合が始まってすぐに押さえ込みで。

掟　全女の新人王は押さえ込みのガチンコっていうのは有名ですよね

脇澤　絶対勝てると思ってた私に負けて。あれから亀裂が始まったのかなって。あの頃の話は二人でも絶対にしないですもん(笑)。

掟　思い出すのもよくない、と。

脇澤　でも、私が辞めるときはナナちゃんは泣いて謝ってくれました。「私のせいでプロレス辞めるんだよね? ごめんね。辞めないで」って……「ナナちゃんのせいじゃないし、首のケガのせいだよ」って言ったんですけど……(小声で)当時は「おまえのせいだよ」とも思いました(笑)。

掟　ダハハハハ! あくまで昔の話だから大丈夫です! 実際に頸椎のケガも引退理由の一つではあったんですよね?

脇澤　そうですね。それだけじゃないんですけど、そのときはプロレスもそうだし、芸能界の裏側も見えたりして、この世界は嫌だなぁと思って。……で、結局、自分はいま芸能界にいて、裏を見ながらまた悔しい思いをしてるんですけどね(苦笑)。

掟　一番戻りたくない世界だったはずなのに(笑)。

脇澤　なのに、また来ちゃいました。青木さんを追いかけるあまり(笑)。

掟　「キッスの世界」では、つんくさんに何か言われたりしました?

脇澤　レコーディングのときに会ったんですけど、「ヘタクソ」って言われましたね(笑)。

掟　またストレートですね(笑)。

脇澤　確かにヘタクソなんですけど、当時は自分のなかでは「うまい」と思ってたんですよ。「なんでみんな笑うんだろう?」って(笑)。

掟　むしろ、うまいと思っていたことに驚いてます(笑)。『キッスの世界』はお金はもらえてたんですか?

脇澤　もらってましたね。でも、ギャラとしてはもらってないです。なんか、へんなごほうびで。旅行とか。「みんなでハワイ旅行行くよ」とか言われて、私は行っても誰とも話しもしないし、つまんないと思って日本に残ってました。でも、フジテレビの人たちはみんなの給料を心配してくれてたんですよ。松永会長が持っていかないようにって(笑)。

掟　フジテレビから直にギャラをもらえていたんですね?

脇澤　はい 出演料ってことで『格闘女神アテナ』の収録があると直接もらってましたね フジテレビの人たちはホントにいい人でしたよ。

掟　フジテレビの人はいい人(笑)。自分の周りには脇澤さんのファンってけっこう多かったんですよ。

脇澤　え~っ、ファンなんていないですよぉ~! もう寂しいもんッスよ。サイン会とかでも私のところだけ誰も並んでなかったりとか。

掟　そんなことないですよ! 引退試合のときの紙テープとか凄い量だったじゃないですか?

脇澤　あんなの一人のファンが一生懸命配ってくれただけですよ(笑)。

掟　まあ、そうなんでしょうけども(笑)。自分なんかは対抗戦のときリング外でガチっぽい展開になって、脇澤さんが率先して殴り込みにいったのを見て好きになりましたよ。

脇澤　そんなことしたらカッコいいじゃないですか、私(笑)。……いまはまるでダメな感じですけど。

掟　いやいや、そんなことないですって!(笑)。

脇澤　いまがダメなんで、また昔を思い出しちゃいますよ(ため息)。

掟　今後はお笑いを中心にやられると思うんですけど、プロレスのオファーがあれば、またやります?

脇澤　いや~、いまは練習もしてないんで。……でも、ホントに望んでる人がいるんなら。

掟　いや、いますよ!

脇澤　いや、いないですよ! 当時の記憶のままでいてほしいとか言う人も多いんですよ。実際、復帰して反感もいっぱい買いましたし。

掟　熱心なファンほどそういうものなのかもしれませんよね。

脇澤　私、傷つきやすいタイプなんで凄くヘコむんですよ(苦笑)。やる前はどんな反感が来ても平気だって覚悟はしたんですけど……。

掟　ネット上の評判なんかはあまり気にしなくていいと思いますよ。今後は『吉川☆ミホカヨ』としての活躍を期待しつつ、トラウマが晴れたら試合のほうも期待してます!

脇澤　誰も期待してないですよ!

掟　ネガティブですねぇ(笑)。

脇澤　でも、やっぱり、いまはプロレスよりもお笑いで頑張ろうと思ってるんで、早く青木さんの横に立てるように頑張りたいと思います!

【10年3月29日/都内・某所にて収録】

わきざわ・みほ■1979年10月9日、千葉県出身。豊田真奈美に憧れ、全女に入門。96年7月、川本八千代戦でデビュー。納見佳容との「ミホカヨ」や「キッスの世界」として活躍するも、01年12月の納見戦で引退。その後は紆余曲折を経てお笑い芸人に転身。現在は相方の吉川集と「吉川☆ミホカヨ」というコンビで活動中。ワタナベエンターテインメント所属。164cm、60kg。ライブ情報等はミホカヨブログをチェック→http //ameblo .p/yos.kawa-m hokayo/

掟ポルシェのバンド・ロマンポルシェ。6年ぶりのニューアルバム「盗んだバイクで天城越え」4.21初回限定DVD付き¥2700でついにリリース! 発売記念ライブは4.29(木・祝)19時~@新宿ロフト(03-5272-0382)。ゲストはバニラビーンズ、田代まさしさんとのユニット・マーシー☆ポルシェ、そしてなんと奇形児! ローソンチケットLコード:73911で様というほど発売中! 詳細等は掟ポルシェブログでチェック→http://porsche.exblog.jp/

"最狂団体"のマッチメイカーだった男が激語り！

全女がイチバーン！だった理由（ワケ）

元・全日本女子プロレス広報 ロッシー小川

女子プロレスにとって90年代といえば、対抗戦ブームにより急上昇したあと、全日本女子プロレスの倒産騒動によって一気に急降下していった10年間である。そのシーンを間近で見つめてきたのが、全女の企画広報部長だったロッシー小川こと小川宏氏だ。この小川氏に「1993年の女子プロレス」連載中の柳澤健氏が、混沌たる女子プロの10年を聞いた。

聞き手＝柳澤健　構成＝鈴木佑

全日本女子プロレス 創立25周年記念

国技館超女伝 FINAL

1990年代の女子プロレス

――全女にとって90年代は、キャバレー回りから始まった団体が東京ドームまでたどり着き、その後、崩壊に至るまでの頂点を形成した、一番ドラマチックな時期だと思うんですね。

小川　そうなりますね。

――90年代の女子プロ界を象徴するのが対抗戦ブームになるわけですが、あの頃の小川さんはマッチメイカーという立場ですよね？

小川　そうですね、自分と（松永）国松さんで決めてましたね。というか、実質的にはほとんど俺が考えてたんですよ。国松さんは一応会社の責任者だから、俺のアイデアに首を振る役っていうかね。で、国松さんがほかの兄弟に「俺が決めたことだから！」って伝えるんです。そうすると風通しがよくなるというか。

――なるほど。そもそも対抗戦の始まりは91年7月にFMWの前泊よしかと土屋恵理子の二人が大田区体育館に乗り込んできたのがきっかけです。でも、あの当時の全女とFMWはいびつな関係性に見えましたが？

小川　あのね、FMWの思惑としては全女と同格に並びたかったんですよ。最初に川崎球場でコンバット豊田と工藤めぐみがブル中野と北斗晶とやりましたけど、あの4人が同一線上にあると思ってたんです。

――その価値観は、全女としては理解できないでしょう。

小川　全女には全女のプライド、ランクがありますからね。向こうの責任者のターザン後藤と話をしても平行線で、全然カードが組めなかった。そのとき俺は「そうだ、JWPもあったな」って思ったんですよ。当時、俺はヤマモ（山本雅俊・元JWP社長）と仲よかったんで。で、JWPも巻き込んで対抗戦をやると発表したら、FMWが「もう全女とはやらない」って言いだした。全女としてはべつにそれでもかまわなかった。

――もの別れになった、と。

小川　そうしたらターザン山本！さんが『週プロ』のコラムで「この二つが交わらないのであれば、今後本誌は一切両方の団体を載せない」って書いたんですよ。

――どうしてターザンはそんなこと書いたんですか？

小川　きっと業界のためによくないと思ったんでしょう。山本さんのコラムがあったから、「これはやらなきゃいけない」という流れになって。当時のプロレスはテレビよりも雑誌のほうが影響力があった。要するに『週プロ』に載らなくなったらヤバい、と。

――仲よくせざるをえない、ということですね。

小川　でも、再開したもののやっぱり試合がぎこちないんですよ。FMWは男子までセコンドについて「頭から落とせ！」みたいな指示もしてましたからね。これはもう信頼関係が築けないと思って、試合後に俺が「FMWとは二度とやりません」と言っちゃったんですよ。それで会長に「こんなこと言っちゃいました」と報告したら、「ああ、よく言った」みたいに労ってもらって。ところが、横浜アリーナでオールスター戦をやるとなったときに、会長は全部の団体を集めたいもんだから「おまえ、またよけいなことしやがって」と言いだしたんです（笑）。

全女はエリート集団なんだけど育ち方は雑草なんですよ

力道山が日本プロレスを旗揚げする前から女子プロにたずさわり、さまざまなブームを仕掛けていった故・松永高司会長。数多くの逸話が物語るように、その計り知れないスケール感が女子プロをおもしろくさせた。

――朝令暮改。それは松永会長らしいですね（笑）。

小川　まぁ、でも結局はオールスター戦だから全団体が出なきゃいけないみたいな雰囲気になったんですよね。あのとき、LLPWはまだできたばかりということもあって、本当は参加したくなかったんですよ。でも、「とりあえず川崎体育館大会に来てくださいよ」と呼びかけたら神取忍と風間ルミとハーレー斉藤が来て、そこに北斗が一方的に神取にケンカをふっかけた、と。まあ、LLとしてはダマされたみたいな感じだったでしょうけど（笑）。

――川崎では豊田真奈美が試合開始直後に尾崎魔弓にもの凄いドロップキックを炸裂させて、危うく試合続行不可能というところまで追い込まれましたけど、ああいうことは全女とすればあたりまえですか？

小川　豊田は当然やる気だったでしょうね。全女の力をここ一番で見せてやる、と。だって当時のJWPもできたばかりで、温室育ちみたいなんもんじゃないですか？　全女はみんな修羅場をくぐって、そこから這い上がってきた集団ですから。育ってきた環境が全然違うんですよ。だから全女はエリート集団なんだけど、育ち方は雑草なんですよ。

――叩かれて叩かれて、這い上がってくるしかない、と。

小川　そうです。で、LLも巻き込んだことで対抗戦時代の幕が本格的に開いた、と。そのなかでグーンと株を上げたのが神取を挑発した北斗だったわけです。当然マスコミの話題は神取と北斗ですよ。当時、LLとの初対抗戦で北斗&三田英津子&下田美馬 vs ハーレー&イーグル沢井&半田美希という試合があったんですけど、その試合後に北斗が下田と三田をひっぱたいた。

――有名な話ですよね。北斗が「心のプロレスをしろ！」と二人に言い放って。そのセリフについて以前、小川さんに聞いたら「これから対抗戦が始まるところなのに、相手を上げておかないでどうするんだ！」って意味だとおっしゃってましたけど（笑）。

小川　うん（笑）。だって北斗にとって神取は大事な存在じゃないですか？　でもLL自体がしょっぱく見えたら対抗戦が盛り上がらない。それなのに三田と下田がここぞとばかりに張りきっちゃったんですよ。そうしたらイーグルとハーレーが全然たいしたことなくて（笑）。それで北斗の「心のプロレス」という言葉につながったわけです。まあ、北斗としては、4月2日の横浜アリーナを盛り上げたいという思いがそれだけ強かったんでしょうね。

――北斗の「おい、神取！」という発言以降、もの凄い勢いで女子プロというジャンル自体も大きくなっていきました。北斗がある意味スポークスマン的な存在となって、観る側を洗脳した部分があったと思うんです。北斗晶という人は非常に興味深い人で、たとえば井上京子なんかは「北斗さんは危ないことばかり。自分のことしか考えてない」と非難するわけですが、もう一方の声としては、チャパリータASARIやラスカチョたちの「非常によく面倒見てもら

本文中にあるように、93年の42オールスター戦の前に行なわれたLLPWとの対抗戦後、北斗はラスカチョの二人に「心のプロレスをしろ！」とビンタ！　ちなみに北斗は神取に「おまえにはプロレスの心かない！」と叫んだことも。

った」という声もあります。

小川　うん、だから二面性ですよね。本当の北斗はおせっかい焼きなんです。当時、松永会長は何か問題が起こるとすぐに北斗とブルを呼んで、「なんとかしてくれ」と二人に委ねちゃうんですよ。会社に波乱が起きないように、選手を統合してくれ、ということです。

——ブル様も北斗を頼りにしてた部分はあるんじゃないですか？

小川　あると思いますよ、当然。だって北斗のほうが頭いいんですもん（笑）。北斗は常にアンテナを張っていて、いろいろなことを考えてましたからね。長与千種と一緒です。

——長与と北斗の陰にはロッシー小川というブレーンがいたことは有名ですけど、二人はロッシー小川に取り入って上げてもらったんじゃないか、と勘ぐるレスラーはいなかったんですか？

小川　それはないんじゃないですか？　自分は広報担当だから、常にその時代の人気選手と接するのが仕事だったんです。だから、クラッシュの時代は千種とライオネス飛鳥以外とはあんまり接触してないんですよ。北斗が上がれば北斗の側近になるし。俺もビューティの頃は若手だったけど、クラッシュとの二人三脚の時代を経て、北斗の頃はだいぶ経験を重ねていたから、団体対抗戦の頃は自分にとっても一番充実した時代でしたね。アイデアもどんどん出てきたし。

——対抗戦当時の全女は、他団体に比べて圧倒的に身体能力の高いエリートが揃っていました。

小川　雑草エリートね（笑）。常に気が抜けない状況だから、対抗戦より全女内部のほうが緊張感あったんじゃないですか？　「対抗戦のほうがラク」ってみんな言ってましたもん。

——小川さんもそう思いましたか？

小川　全然とは言わないけど、あきらかに違いますよね。全女同士のときは、本当に（死と）背中合わせの試合をしてるわけですよ。対抗戦のときは相手もついてこれないし、スタイルも違うからそこまでやらなくていい。やっぱり他団体とは基礎体力の差がありましたよね。プロレスのメジャーとインディーの差ってそこだと思うんですよ。だって技はある程度までは誰でもできるんだもん。ただ体力は鍛えてなきゃダメだから。

——その当時、小川さんが他団体で評価してた選手は？

小川　LLではイーグルと紅夜叉ですね。だから、二人を組ませてウチのタッグリーグ戦に出したこともあったし。JWPだと誰だろう……福岡かな。福岡は原石というか、なんとかしてあげなきゃいけない存在。だからジャパングランプリにも出しましたしね。でも、全女側はおもいきりはできないんですよ、壊れちゃうから。

——風間ルミなんかはいつも「全女は上から目線だった」と不満そうですけど、やっぱり他団体と交渉するときには「うちは全女なんだぞ」というプライドはありましたか？

小川　う～ん、意識はしてなくても当然そうなりますよね。だって全女なんだもん（笑）。会社の歴史とかいろんなものがあるんだから「おたくとは違いますよ」っていうね。どうしても交渉がまとまらなくて「じゃあ出なくてもいいです」と言ったことが過去には一回ありました。これは最後の奥の手ですけど。

ビューティ、クラッシュ、対抗戦。これを全部経験しているのは俺だけ

——やっぱりあの時代は、完全に全女に主導権があったわけですね。

小川　逆に言えば、全女主導じゃないと成り立たない。仮にほかの団体が主導になったとしても「どうしてくれるんですか？」っていう話ですから。

——対抗戦時代の物騒なエピソードとして、東京ドームのときのイーグルには「北斗を潰せ」っていう指令が下っていた、という噂を聞きました。

小川　うん、そうみたいですね。イーグルというかセコンドがそういう指示を出したみたい。だってイーグルは、ノーザンライトボムで負けたら、すぐに起き上がってサッて帰っちゃったもんね（笑）。普通はそんなのはありえないですよ。

——なんでそんなにLLと堅くなっちゃったんですか？

小川　お互いの価値観の違いじゃないですか。揉めようと思って揉めてるわけじゃなくて。

——でも、JWPとは友好関係が築けたのに。

小川　JWPは「うまくやるためには全女と一緒に歩んだほうがいい」という考えなんですよ。ヤマモはわりと損して得を取るという手法の人だから。LLっていうのはやっぱり女社会だから、男社会とは違うんです。

——なるほど。それはわかりやすいですね。女には論理や損得勘定が通用しない、と。

小川　風間ルミは社長であっても、やっぱりレスラーですから、そこには客観性がないわけですよ。自分のところの選手がかわいいのはわかるけど、こっちは客観的に仕事として見てるわけだから。

——対抗戦のときに、一番非常に印象的だったのは、LLの駒沢大会で全女勢が圧勝したことなんです。

小川　あのときは、会場に向かう車のなかで、俺がみんなに指示出したんです。「今日は秒殺」って。試合が終わったら、全員一人ずつリングサイドで待機して、最後にみんなで手を挙げて見せつけろって。あのとき、風間は控室で泣いたらしいですよ。

——それはそうでしょう（笑）。

小川　だってあんなカードを組むんだもん（笑）。こっちは全女の強さを見せつけるしかないじゃないですか？　でもそういう緊張関係があったから、あの時代はおもしろかったんですよ。

——対抗戦を乱発していた時期、小川さんはこの盛り上がりはずっと続くと思ってましたか？

小川　対抗戦にかぎらず、ブームっていうのはもって2年なんですよ。当時の全女の内部事情を言ってしまうと、借金だったりいろんな問題で、2カ月に一回はビッグマッチをやらざるをえなかった。自分たちの知らないところで、どんどん日程が埋まっていくんですよ。「あっ、ここで愛知県だ、次は大阪城だ」とかね（笑）。マスコミに取り上げてもらうには話題性がないといけないから、当然、

対抗戦が主軸にならざるをえない。

――ビッグマッチを連発するなかで、いつかは飽きられるという恐れというか危機感のようなものは？

小川　やってるときはそこまで冷静には考えてないですよ。ただ、当然、続くわけないとは思ってましたよ。ただ、俺自身としては、乱発だろうがなんだろうが、やるならとことんやったほうがいいとは思ってましたけど。

――団体対抗戦ブームの頂点が東京ドームですけど、さっきのイーグルの件以外にもいろいろあったらしいですね。

小川　いろんなことがありましたね。たとえばバックステージで神取が北斗のボディを殴ったとか。

小川　……あのね、言えない話はいっぱいあるんですよ。あれも言ったらまずいんだよな（ボソッと）。

――そんなに言えない話が？

小川　それはありますよ。だって、俺はこの世界で生きてんだもん。全部書けたらおもしろいかもしれないけど、そういう世界なんですよ。

――まずいんですね。

小川　ドームでいえば、あれは1年前から決まっていた話なんです。ドームの前で豊田、山田敏代、井上貴子、井上京子、長谷川咲恵、伊藤薫の6人が並んだ写真を『週プロ』で独占表紙にしてね。1年後のことを告知するなんて、いまじゃ考えられないですよ。

――あの頃は『週プロ』とベッタリでしたよね。

小川　だって『ゴング』には載らないんだもん（笑）。『週プロ』は、話題性があればページを割いてくれましたからね。だから当時は毎晩のように『週プロ』に電話して相談してましたよ、「ああしようか？　こうしようか？」って。もちろんこっちの答えは最初から決まってるんですよ、そこを『週プロ』側に言わせるように仕向ける（笑）。

――なるほど。『週プロ』には「俺が全部決めてるんだよ」と思っていただく、と。さすがですね。選手だけじゃなくて、メディアまで操っていた、と。

小川　俺がそんなことをしてるなんて、全女の人間はたぶん誰も知らない。松永兄弟はきっと、勝手にモノが動いてると思ってたんじゃないかな（笑）。べつに言う必要もないし、そういうことで成り立つのが自分の仕事ですから。

――下世話な話ですけど、対抗戦ブームのときは功労者として待遇がよくなったりしました？

小川　いや、そんなことないですよ。でも、96年のジュニア・オールスターのとき、会長に「こういうのを大田区体育館でやりたい」って話を持っていったら、「若手だけで入るのか？　だったら500万の利益出せ」って言われたんですね。実際に超満員になって結果を出したら、次の日10万円くれたけど。それだけですね（笑）。

――それだけですか（笑）。もともとプロレスマニアの小川さんは、全女というシステムを最大限に使ってファンの心をギュッとつかむための仕掛けを次々にやってきたわけですけど、それってどんな感覚なんですか？　自分が業界全体を動かしていたっていう充実感はありましたか？

小川　あのね、俺は過去がどうだったってのはあんまり言いたくないんですよ。一番大事なのは「いま」だから。で、当時もその「いま」を一生懸命生きてたってことじゃないですか？　当時はやることがいっぱいあったから、全然余裕がない（笑）。とにかく90年代は盛り上がりすぎましたよ、何年も。だって93年から5年連続で横浜アリーナやったんですから。あのね、自分にとって、対抗戦ブームはこの業界で3度目のピークなんですよ。ビューティ、クラッシュ、対抗戦。これを全部体験してる人はほかにいないですよ。松永兄弟もいないから（笑）。

――まさに歴史の生き証人ですね。90年代後半になると、全女が団体経営に行きづまり、給料が出なかったりして選手が大量に離脱しました。

小川　もちろんお金のこともありましたけど、最終的には人間関係ですよ。そういえば、最近NEOの会場で京子に会ったときに「私はいまでも恨んでるんだ。小川さんはどうしてアルシオンに私を誘わなかったの？」って言われたんですよ。「私は小川さんと親しいつもりだったのに」って（笑）。

――旗揚げはアルシオンよりネオ・レディースのほうが早かったのに？

小川　スタートはね。でも表に出てないだけで、水面下で動き出したのはこっちのほうが早かったから。

――団体対抗戦のブームが終わっても、全女の選手たちのクオリティには凄いものがあった。経営が立ちいかなくなったのは、フロントがヘンなところに投資してうまくいかなくて、本体のプロレスまで立ちいかなくなった。だったら松永兄弟を外して、プロレス頭のあるフロントと選手たちで団体を作ればいい。きっとうまくいくだろうって、僕でも考えます。小川さんもそういう考えでアルシオンを始めたんじゃないですか？

98年に旗揚げしたアルシオン。写真集やビデオ発売など、ビジュアル路線の活動も活発だった。00年以降になると話題作りのため、小川氏は裏方からリング上のストーリーの登場人物になることも。

小川　自分が全女に入ったときにこの団体を辞める理由は二つしかないと思ったんですよ。一つ全女自体がなくなること。もう一つは松永会長が亡くなること。そうならないかぎりは続けていこうと思っていた。でも、対抗戦時代の末期に松永家の二世たちがフロント入りしてきて、自分が窓際に押し出されそうな空気になってきた。そうなるとやっぱり俺の意識のなかにも、「俺は最前線で対抗戦時代を盛り上げてきた」という思いがあるから、「これ以上全女にいても」っていう部分が出てきたんです。選手がポロポロ抜けている状況のなかでいろんな人に相談したときに、「これは何かやらなきゃいけないな」っていう心持ちになった、と。

――決心がついたわけですね。

小川　全女と同じことをやっても全女には勝てない、全女と違うことをやるしかない。そのうえで利益が上げられるプランを考えたときに、とにかくビジュアル的な選手、人気主導でもいいから、と考えてアルシオンを旗揚げしたんです。動き出したのは97年の5月だったと思いますけど。

――最初に声をかけたのは？

小川　タマフカ（玉田凛映&府川唯未）です。当時はあの二人と話をする機会が多くて、「この子たちは足踏みしてるから、なんとかしなきゃいけないな」と思っていたからです。だからアルシオンの最初はタマフカありきだったんですよ。次に、ファンからの好感度が高かった吉田万里子にも声をかけた。結局、新しい団体には新しい色をつけていかなきゃいけないから、もうできあがっている選手だと難しいんですね。だから自分のなかではその3人に魅力を感じた。じ

北斗が俺のことを「私の現役時代を半分作った人」って言ったんです

つはASARIもほしかったけど、当時はタマフカとあんまり仲よくなかったから(笑)。

——小川さんにとって、アルシオンの理想像は？

小川　アルシオンではロックアップから始まるプロレスリングをやりたかったんです。いきなり髪の毛をつかんで投げて、「このやろー、ばかやろー」っていうプロレスじゃなくて。

——「脱・全女」ってことですか？

小川　そうそう。技術を見せるプロレスがやりたかった。だからグラウンドではシビア、スタンドでは派手に、という両極端をやりたかったんです。でも、そういうコンセプトを実現するのは、実際には難しいんですよね。人材も揃わないし。

——クラッシュブームの頃には女子プロの入門志願者は何千人もいましたけど、対抗戦時代のとんでもなく危ないプロレスを観て、私もやろうと思うコは少ないでしょうからね。

小川　そうですね。まず、対抗戦時代はブームとはいえ、一般世間にまで届いたものではなかった。『東スポ』の一面にはなっても、テレビでガンガン露出してたわけじゃないし。でも、あれほどビッグマッチを連発したことはクラッシュの時代にもありませんでしたけどね。

——外部に届かせることはできなかったけれど、プロレスの内部では凄い盛り上がりだった、と。

小川　そうそう。だから、本当にプロレスファンには届いていたと思いますよ。俺にとっては、それこそがこの業界に入ったときからの夢だったんです。昔は女子プロってファンに注目されないプロレスだったんですから。だから対抗戦ブームのときには達成感がありましたよ。

——女子プロレスがプロレス業界内で凄い注目を集めたのは初めてだったでしょうね。

小川　俺、昔は『デラックスプロレス』に自分で原稿書いて、写真撮って、毎回持っていってたんです。そうしないと載っけてくれないから。そうやって1ページが2ページ、3ページ、そしてカラーになっていって。

——小川さんが草の根的にやってきたことが、ついに90年代に実を結んだわけですね。

小川　そうそう！　俺は全女にプロレスファンとして入社した。でも、会社では周りの誰もプロレスに興味ないんですよ。みんな仕事としてやってるだけ。でも、そのなかでコツコツといろいろやってきて、ようやく花開いたなという感じでしたよね。

——小川さんにとっての90年代はどういうものでしたか？

小川　この歳になってきて考えるんですけど、人生ってピークがあると思うんですよ。で、俺にとってのそれは94年なんですよね。

——いま振り返ってみると。

小川　全然違う話ですけど、つい最近、新崎人生と飯食ったんですね。そのときに人生が「小川さんいくつですか？」って聞くんで「今年53だよ」って答えたんです。そうしたら人生が「小川さんまだ、二回勝負できますよ」って言ったんです。彼はいま43歳なんですけど、起死回生でラーメン屋を始めたら当たったみたいでね。それを聞いて俺もちょっと頑張らなきゃなって思いましたよ。

ろっしー・おがわ■1957年5月1日、千葉県出身。昭和53年に全女へ入社し、人気絶頂期のクラッシュギャルズのマネージャーを務める。平成9年にアルシオンを設立。そのほかにもAtoZやJDスターのエージェントを歴任。また、先日引退した風香をサポートし、風香祭を主宰。現在はルチャリブレにも精通するトータル・プロデューサーとして活動中。

——いまは厳しい時代ですけど「もう一度プロレス団体をやろう」とか思ったりしますか？

小川　いや、本音を言えばいつだってやりたいんです。できるできないは別にして。だって、自分のなかでは理想を成し遂げてないんだから。そういう思いがあるからこそ、いまだってやっていけるんだし。

——小川さんの理想ってなんですか？

小川　俺は凄いミーハーなんです。じつはマニアでもコアでもない。だから、国民的とは言わないけど、そういう人気者を育てたい。浅尾美和や浅田真央みたいに、誰もが好きになるようなレスラーを育てたいんです。

——なるほど。90年代は全女のなかでも特別な時代だったと思いますか？

小川　一番充実してたんじゃないですか？　下から上まで充実して。だって長谷川咲恵とか凄くよかったじゃないですか。

——咲恵ちゃんは、僕からするとそんなにピンとこなかったんですよ。才能の塊というのはわかるんですけど、北斗みたいな上昇志向がなさすぎて。

小川　欲がなかったですね。本当は彼女みたいな人がトップにならないといけない。でもそうじゃない人がなるのがプロレスなんだよね。

——長年、業界にかかわっていても、「この選手がくる！」っていうのは予測がつきませんか？

小川　それはそうですよ。予測がついたのは浜田文子ぐらい。まぁ、あのときは「デビュー3年でチャンピオンにする」というレールを敷いて、本人も脱落しなかったから。でも、全女は最初はみんな雑草で、そこから這い上がってきた人のみがスターへのパスポートを手に入れるわけです。いい素材だと思っても、その前に辞めちゃうコはいっぱいいますもん。

——身体能力だけじゃダメだ、と。

小川　ダメ。運もあるし、タイミングもあるし。まぁ、最終的に必要な要素は人間味じゃないですか。人間力。北斗やブル、千種にしても人間的な魅力があったから成功したんですよ。それがないとファンはつかないでしょ。それがトップレスラーになってから磨かれる選手もいるしね。北斗とかはその典型じゃないですか。

——確かにそうですね。

小川　去年か一昨年だったかな、メキシコに風香を連れていったときに、北斗にひさびさに会ったんですよ。北斗が知り合いに俺を紹介するときになんて言ったと思います？　「彼は北斗晶の現役時代を半分作った人！」って言ったんですよ。自分で言うと自画自賛男になっちゃうけど(笑)。

——それはうれしいことを言ってくれましたね。

小川　千種にしても、人に紹介するときは「千種を作った人」みたいに言ってくれるしね。

——それは何事にも代え難い勲章だと思います。

小川　そうですよね。俺には勲章がないですから(笑)。そう言ってくれる人が何人かいるというのはうれしいことですよ。だからこそ、まだこの業界で続けられるんです。

【3月21日／都内・某所にて収録】

日本のプロレスを変えた男
1990年代の
武藤敬司

――武藤さん、今日は「90年代のプロレス」についての話なんですよ。

武藤　90年代？　昔話はあんま発展性ないなあ。

――でも、90年の武藤敬司凱旋帰国から日本のプロレスが変わって[illegible]武藤さん[illegible]自分の帰国がなかったら、90年代のプロレス黄金期はなかった、という自負はあるんじゃないですか？

武藤　それはあるね。何が自負って、俺が帰国したとき、まだプロレス界の主流はUWFだって言われてたときだからな。

――第二次UWFブームの頃ですよね。

武藤　そうそう。プロレスラーがロープに飛ぶこと自体が恥ずかしいこと、みたいな風潮があったんだよな。そんななかで、俺はロープに[illegible]ロープの上に乗っかってムーンサルトやったりとか、Tシャツ投げたりとか、そういうパフォーマンスをやってたんだから。いまでこそみんなやってるけど、その先駆者だっていう自負はありますよ。

――いまのファンには信じられないかもしれないですけど、プロレスファンがプロレスを否定していた時代ですからね。

武藤　ただ、プロレスだけじゃなく何事にも流行っていうもんがあるわけで。おそらく俺が帰国したときっていうのは、UWFの地味プロってもんに、ファンが飽きた頃だったんだろうな。

武藤　[illegible]プロ（笑）。

[illegible]のコンセプト[illegible]スペー[illegible]ス・ロー[illegible]結[illegible]たかな。あのときもUWF[illegible]

――確かにスペ[illegible]ルスとして[illegible]の二度目の凱旋帰国[illegible]阻まれて成功したとは言えない状[illegible]ね

全米でトップを張り、新日本を変えた男のプロレス論

「90年の凱旋帰国が成功した理由？　きっとUWFの〝地味プロ〟にファンが飽きてたんだよ」

90年の二度目の凱旋のときも、UWF[illegible]

90年の二度目の凱旋のときも、UWFブームのなかで帰国するにあたって、またあのときと同じ状況になるんじゃないか……っていう不安はありませんでしたか？

武藤　不安っていうかさ、俺も組織の人間というか、新日本育ちの人間として、先輩や幹部に「やってくれよ」とか言われたら断われない部分があったからな。

――頼まれたから仕方なく帰ってきた（笑）。では、本心では「せっかくWCWでトップ獲ってるのに、もったいねえな」みたいな思いはあったわけですか？

武藤　いや、NWAにそこまでこだわりはなかったからな。あんときはニューヨーク（WWE）に行きたかったわけで、WCWはその前にちょっと立ち寄ったぐらいのつもりだったから、とことん居座ろうという決意もないしね。

――WCWのトップを獲って、周りが快挙だって言っているなか、武藤さん自身は単なる次のステップのために立ち寄った場所でしたか（笑）。

武藤　まあまあ、WCWでの成功も一つの実績ではあるとは思うけど、俺が成功したのはWCWだけじゃねえからな。プエルトリコでもフロリダでもベルト巻いてるし、テキサスではベルトは巻いてないけど、現地のトップであるエリック兄弟とのアングルに入って、1対4のハンディキャップマッチまでやっているんだから。俺1人と向こう4人だぜ。

――そこまでヒールとしてデカい存在になってましたか！

武藤　そのときの俺のフィニッシュ・ホールドはアイアンクローだからな。

――えっ!? なんでエリックの技をフィニッシュにしてるんですか？

武藤　ストーリーがさ、昔俺の親父がエリ

武藤敬司

90年代最高のプロレスラーといえば、やはりこの男、武藤敬司。90年4月に凱旋帰国すると、その華麗で鮮烈な闘いぶりでファンを魅了。UWFブームを終焉に追いやり、90年代の新日本プロレス黄金時代は、武藤の帰国からすべては始まったのだ。しかし、その後は高田延彦戦という歴史に残る試合はあったものの、複数スター制の新日本において飛び抜けた存在とはならなかった。そんな状況を当の武藤はどう思っていたのか？　天才の絶頂期をいまこそ探る！

聞き手／堀江ガンツ　試合写真／平工幸雄、George Napolitano

ックの親父にアイアンクローで負けて、息子がそのリベンジのためにアイアンクローをマスターしてアメリカにやってきたってことだったんだよ。

——親の敵討ちのために、アイアンクローをマスターですか（笑）。

武藤　そこでアイアンクローの難しさも勉強してるからな。ああいう単純な技って、すげえ難しいんだから。

——頭をつかんでるだけの技をフィニッシュとして、観客を納得させなきゃいけないわけですもんね。

武藤　そうそう。エリックの親父は、デカい手をしてるから説得力があるけど、俺なんかデカくもない手でどうやって説得力を持たせるかっていうなかで、自分の手に毒霧を吹きかけて、緑色になった手でアイアンクローをやってね。

——へえ、なんでもないアイアンクローを毒霧と合わせることで、フィニッシュにまで昇華させましたか。素晴らしいですね。

武藤　やっぱりプロレスはそういうアイデアと工夫が必要だからな。

——武藤さんってそういう技に対するこだわりがありますよね。ただ単に技を出すだけじゃ意味がないというか。

武藤　俺たちは技の一つ一つが、役者でいうところのセリフだからな。やっぱり意味あるセリフにしたいというかさ。観てる人の心に残るセリフにしねえとな。

——だから凱旋のときにビックリしたのは、単なるエルボードロップが武藤敬司が使うと、フラッシングエルボーというまったく違った技になってたことですよ。あれはどうやって生まれたんですか？

武藤　どうやってできたんだったかなあ。ちょっと忘れちゃったわ。ま、若干カッコつけしいなんですよ（笑）。

——あの時代にそんなカッコつけが売りになったというのが凄いですよね。

武藤　だから〝地味プロ〟がマンネリだったから、俺が受け入れられた部分はあると思うけどな。

——ファンの心のなかで、武藤さん的なプロレス待望論があったんでしょうね。

武藤　俺はアメリカにいたから、当時の世論というのは完全にはわからないけどね。

——武藤さんの凱旋帰国第一戦、蝶野さんと組んで橋本真也&マサ斎藤組と闘った試合はよく覚えてますか？

武藤　覚えてるよ。あの一発目で俺、ヒザをケガしたんだよな。だからあのあと、1カ月くらい欠場してるはずだよ。

——橋本選手[illegible]クでケガしたんでしたっけ？

武藤　いや、[illegible]あったから、[illegible]ピン[illegible]あのときはジャンプ[illegible]バ[illegible]ック（ローリン[illegible]のときにケガ[illegible]欠場したあ[illegible]

グレート・ムタに変身する前、素顔でフロリダ、テキサスなどを転戦していた頃の武藤敬司。この当時、まだキャリア4年程度ながら、非凡な才能を見せ全米各地でトップを獲ってきたというのだから、やはり天才だ。

俺の唯一の自慢は〝政治〟が使えねえエリアでトップを獲ってきたこと

マッチが立て続けにありましたよね？

武藤　長州さんとシングルでやったりね。

——闘魂三銃士がみんな長州さんと一騎討ちやって、結局、橋本さんだけが〝長州超え〟を達成するわけですけど。あのとき武藤さんプッシュがあったらスーパースター誕生で、新日本の業績もさらに違ったんじゃないかな、とも思うんですけど。

武藤　いや、一瞬そうなってたかもしれないけど、まだ俺も日本でそこまで確立してなかったからな。それに団体としては、複数スター制にして厚みを持たせたいっていうのもあったんだろうし。もしかして、俺がもう一つ古い世代だったら、長州力を潰して、第二のアントニオ猪木みたいなかたちになった可能性もなきしにもあらずだけどな。ま、でも組織はそれを求めていなくて、ましてや猪木さんの組織だったら、俺が取って[illegible]ようなことを求めないこ[illegible]ほかの人たちと[illegible]武藤さん自身は[illegible]か？

武藤　[illegible]あの頃は若か[illegible]くられること自体[illegible]っていう気持ちだったからな。まあ、あとになってからは「三銃士」ってブランドがあるのは、なんか得した感もあるけど（笑）。でも、最初は反発はあったよ。

——当時、「俺をプッシュしたら、もっとビジネスも大きくなるのに」という思いもありましたか？

武藤　どうなんだろうな。昔のたらればの話はともかく、いまの全日本に、〝当時の武藤敬司〟がいたら、すげえ使い勝手いいだろうなっていうのは感じるよな。

——それは全日本にかぎらず、どこの団体も〝当時の武藤敬司〟みたいなレスラーがほしいと思ってますよ。「ハッスル」だって、〝20代の武藤敬司〟がエースになってたら、いまでも繁栄して続いてる気がしますからね（笑）。

武藤　だからさ、俺の人生で唯一、自慢ができることっていうのは、WCWとか〝政治〟の使えないエリアで、自分の腕一本でトップを獲ってきたってことだからな。

——政治力でプッシュしてもらったわけじゃなく、どこでもトップを獲ってきた、と。

武藤　うん。その証拠がどこのテリトリーでもベルトを巻いてきたってことだから。それはどこに行っても。優良ソフトって認められたってことでもあるからね。この団体ではよかったけど、次の団体ではダメだったとかじゃなく、ピュアなまっさらなところから一個のソフトとして結果を出してきたっていう自負があるから。

——確かに、一つの団体だけでトップというレスラーもいますよね。そこのボスな

り、マッチメイカーなりとガッチリいっていたから、よかったという人が。

武藤　だからプロレスっていうビジネスの中で、確かに〝KISS ASS〟するのは重要かもしれないけど、そればっかりで通用する世界でもないからね。

——武藤さんは新日本では〝KISS ASS〟してなかったわけですか？

武藤　それ以前に、当時の新日本には猪木さん派と坂口さん派という見えない派閥があったからな。で、権力を握ってるのは猪木さんであり、俺は坂口さん派だったからダメだった（笑）。あとは若干、普段の行ないとか言動のなかで、猪木さんに対する尊敬の念が足りなそうな気配があったのかなぁと思ったりとか。

——猪木さんに対する尊敬の念が足りませんでしたか（笑）。

武藤　うん、いま振り返るとね。主義主張が違ったからさ。

——「闘魂伝承」を掲げていた破壊王とはまるっきり逆ですよね？

武藤　そうだなぁ。

——武藤さんは長州さんとの仲は、どうだったんですか？

武藤　ん？　いや、いい関係ですよ。ただ、長州さんの政策が合うときもあれば、合わないときもあって。それは人間だから当然だけどね。だから俺だけじゃなく、三銃士っていうのは、世代的にも猪木色や長州色に染まりきらなかったよな、みんな。

——確かにそうですね。

武藤　同じ釜の飯を食ってねえし、べったり教育もされてな[illegible]頃、猪木さん[illegible]っぷりいたわけじ[illegible]ろそろ[illegible]界だ、みたいな[illegible]ろが[illegible]んなんかは、[illegible]は新日本[illegible]いなくて、成[illegible]たから。反[illegible]なってたんだよ[illegible]

——親分子分じゃなかったわけですね。

武藤　だから三銃士っていうのは、ラリアット使うヤツ誰もいないからな！

——そういえばそうですね！

俺たち闘魂三銃士っていうのは誰もラリアット使わねえからな！

敬司

橋本真也vs小川直也の"1.4事変"をはじめ、ドーム大会のためにメチャクチャなことが起こっていた、90年代末の新日本。そんななか、IWGP王者として試合内容で観客を惹きつけていたのが武藤敬司だったのだ

武藤　ラリアット使って、[illegible]の世代は、みんな[illegible]えみたいなレスラ[illegible]その点、俺らは感化[illegible]よかったなって。[illegible]こそ[illegible]銃士はそれぞれ個性が[illegible]まあ、そんななかで[illegible]州力と橋本真也っていうのは、考え方はともかく、波長は合ってたよな。逆に俺とは一番やりづらいらしいから（笑）。

——長州さんもそれを公言してますよね。

武藤　猪木さんもなんかそうじゃない。俺とは一番やりづらいんだろう。どういう理由かはわからないけど。

——プロレスの達人同士がやりづらいっていうのも不思議ですね。逆に武藤さんは猪木さんってやりづらいですか？

武藤　俺はやりづらくないよ。あんま向こうにとって、思いどおりにならないのかもしれねえな。

——武藤さんが一番ノッてるときって、いつでしたか？

武藤　ノッてるっていっても、途中からヒザの調子が悪くなってきたからなあ。一番、技量として充実してたのは、一回目のMVPを獲ったときぐらいだろうな。

——高田延彦戦の頃ですか？

武藤　いや、それは一回目で、そのあといつも東京ドームのメインを締めてたことあるんだよ。猪木さんが仕掛けて、オールキャストで汚していったリングを、いつも一人ぼっちできれいにしてたことがあったんだ。

——1・4の小川vs橋本があった99年ですね。あのとき、武藤さんはスコット・ノートン相手にIWGPの防衛戦でメインをやったんですよね。

武藤　そうそう、いたってシンプルな試合で、因縁とか抜きに結びの一番を締めたっていうのは、やっぱり自分自身の技量だって実感できるじゃん。

——メチャクチャな興行を、ちゃんときれいに終わらせたわけですもんね（笑）。

武藤　そうだよ。全選手が大乱闘でメチャクチャにしたあと、タイトルマッチっていう肩書きだけで、観客を満足させるって、技術が必要なことだからな。だから、あの頃の試合って高評価をいただいたものばっかりだったよ。

だからこそ、MVPを獲得したわけですもんね。武藤さんは小川vs橋本戦のような試合をどう思ってましたか？

武藤　おもしろいんじゃないの？　エキサイティングで。

——あれもプロレスの範囲内で「あり」ですか？

武藤　「あり」ではあるけど、いつもやりっぱなしなのがいけねえな。

——ダハハハ！　やりっぱなしというか、後先考えてないというか（笑）。

武藤　だからある意味、もったいねえよ。あの橋本vs小川戦っていうのも、ちゃんと誰かがコントロールして続けたら、もっと長続きしただろうし、もっといいかたちになったかもしれない。それを猪木さんが投げっぱなしにして、お互いの感情も無視してさ。きっと橋本と小川の当人同士が途中から気遣いあって、なんとかかたちになったんだよな、きっと。猪木さんって責任取らねえから。

それは間違いなくそうですね（笑）。

武藤　組織のトップが責任取らないで、自分のところの商品をけなしてばっかりなんだから。

——いい商品をぶっ壊しておいて、「壊れた商品が悪い」って言ってるわけですから

もし新日本が合理的な考えを持ってたら90年代に俺をプッシュしていただろうな

ね（笑）。

武藤　だからいまの俺にとって、当時の猪木さんっていうのは、もしかしたら反面教師なのかもしれないな。昨日の試合（3・21両国）なんかでも、諏訪魔と河野の試合を観たら良かったし。ああいうのを観たら、俺は苦労が報われるというか、うれしいよ。ああいう若いヤツらを引き上げるっていうのは、いままでの先輩たちにできなかったことかなぁ、なんて思ったり。

——若手を引き上げるんじゃなくて、とにかく押さえつける歴史ですよね。

武藤　うんうん。

——武藤さんは全日本に移るとき、移籍の理由を「野心だ」と言ってるじゃないですか。それって、プレイヤーとしてですか、それとも環境づくり全部ですか？

武藤　そういう環境を全部作るんだっていう野心だよな。だって肉体は滅びるわけであって、現に俺はもう仕事もできなくなって、手術しなきゃならないだし。でも、この業界に携わっていきたいと思ったとき、どうせ携わるんなら新日本じゃないってことだよな。いつコレ（ヒジ鉄）されるかわかんないし（笑）。あそこは合理的じゃない気がするじゃん。

——「俺が俺が」っていうのが優先される場所でしたよね。

武藤　さっきの話に戻ると、合理的に考えるんだったら、俺をプッシュすべきだったよな。それをしなかったということは、合理的じゃなかったんだよ。

新日本vsUインターの全面対抗戦が実現し、空前の大ヒット興行となった95年の10・9東京ドーム大会。しかし、この大成功をその後も求め続けるあまり、ドーム興行を連発したことによる副作用か新日本を苦しめることになった。

——その合理的じゃないところが、ある意味、新日本らしさでファンを惹きつけてた部分もあるんでしょうけどね。

武藤　まあ、時代がよかっただけだよ。あの頃は何をやってもよかったんだよ。

——何をやっても、ドームがいっぱいになってた時代ですからね。

武藤　ただ試合してれば、垂れ流しのごとく、テレ朝で流してくれるんだからさ（笑）。クオリティも関係なくやってくれてた時代だからな。それはもう時代がよか[illegible]としか言いようがねえよ。

——「俺が俺が」でやって、テレビで流してくれた時代だったという。ただ、その新日本にいながら武藤さん的には、「こ[illegible]うプロレスって、なんかもったいない[illegible]」という部分もあったわけですか？

武藤　途中からドームプロレス自体が、新日本の足かせになっちゃってたよな。他団体のことだから、あんまり言いたくな[illegible]けど、ドームをやらなきゃいけないっ[illegible]うプライドが、新日本を苦しめてたよ[illegible]

——なるほど、

武藤　本流のストーリーをカットして[illegible]も、ドームを入れるようなカードを組まざるをえない。プロレスのビッグマッチというのは、半年ぐらい寝かせたストーリーの総決算だからな。俺はそれがプロレスの原点だと思ってるから。だけどドームプロレスは、この原点さえ壊さないと、いっぱいにできない。その矛盾がプロレスをダメにしたよ。

——ドームのために、通常のシリーズが犠牲になってしまった、と。

武藤　そんな明日がないような経営者ってよくないじゃん。所属してるレスラーのためにも、先を見据えたことをやらないとな。

——90年代後半のドーム興行連発によって、黄金期が崩れていってしまった、と。

武藤　もう、かなり早い段階からドーム興行って崩れてたんだよ。たぶん髙田延彦戦をピークに下降していってたんだよな。髙田延彦戦だって、苦しいなかでたまたま飛び込んできたネタだったんだよ。あれが札止めになったっていうのは、新日本の力でなったわけじゃないんだからな。そういう自分たちの以上のことをすること[illegible]によって、[illegible]くな[illegible]vs UW[illegible]たが[illegible]まとな[illegible]。[illegible]武藤[illegible]ん、あ[illegible]あ[illegible]てる選[illegible]だいたい、ビッグマッチのたびに、ほ[illegible]選手連れて、[illegible]プロレ[illegible]のセオリーじゃ[illegible]なス[illegible]いいもしま[illegible]ほうが[illegible]い[illegible]か[illegible]の[illegible]ロ[illegible]トか[illegible]レッスル[illegible]通常のドラマの[illegible]ですもんね。

武藤　そうだろ？　ま、よそ様のことだから「新日本、もっと東京ドームやれよ」って言うけどな（笑）。

——けしかけますか（笑）。

武藤　こっちは教科書どおりのプロレスをやっていくからさ。

——そういう武藤さんの考えが固まったのが、90年代の新日本プロレスだったってことですかね？

武藤　そんなとこだな。とにかく俺は一人でも多くの人に、これからもプロレスを届けていけるようにするよ。

【10年3月22日　都内・全日本プロレス事務所にて収録】

武藤敬司

むとう・けいじ■1962年12月23日、山梨県出身。84年に新日本でデビュー。アメリカで大成功したのち、90年に凱旋帰国。90年代新日本黄金期を支える。02年に全日本に移籍し、代表取締役社長に就任。現在はヒザの手術で長期欠場中。188センチ、110キロ。

おかげさまで10周年
10th
エンターブレイン
enterbrain

「W－1」の仕掛人が語る

バラ色マット界

90年代新日本プロレスは グッズ収益 年間 10億円!!

元新日本プロレス広報／現FEG広報

渡辺秀幸

斉藤　今号は90年代特集なんですよ。

井上　プロレスの特集？

斉藤　いや、格闘技を含めてやろうかな、と。でも、90年代のマット界といえば、プロレスから格闘技への転換期扱いされがちじゃないですか。

井上　いわゆるK－1、UFC、パンクラスの誕生ね。

斉藤　そのダイナミズムにしか注目されてないけど、じつはプロレスの黄金期だったと思うんですよね。

ガンツ　現時点では最後のプロレス黄金期だね。

斉藤　で、その爆発に火をつけたのが1990年4月27日の武藤敬司凱旋帰国じゃないか、と。そこで武藤敬司を語らせたら右に出るものはいないと言われているお二人に……。

井上　（さえぎって）聞いたことないよ、そんなの（笑）。でも、90年の武藤敬司って言われたときは全然意味がわからなかったんだけど、要は武藤が凱旋してきたNKホールのことだよね？　それならあの試合は昨日のことのように覚えています！（笑）

ガンツ　90年4月27日、東京ベイNKホール。"歴史が変わった試合"はいくつかあるけれども、前田日明vsドン・中矢・ニールセンの次に時代が変わったのがあの試合ですよ。

斉藤　その前まではプロレスは"冬の時代"って言われてたわけですよね。

ガンツ　要はあの時代はまだ猪木時代を引きずってて、長州や藤波たちの"俺たちの時代"があんまりうまくいかず、唯一、天龍源一郎だけは燃えてたっていう。

斉藤　そういうなかで、武藤がアメリカのNWA（WCW）で大成功してるっていう話は聞こえてたわけですよね。

ガンツ　やっぱり我々の世代ってなんだかんだ言ってNWA幻想あるじゃないですか（笑）。そのプロレスの本場で武藤がトップでやってるなんて、プロレスファンとしては誇らしかったですよ。あと『週プロ』なんかで見るグレート・ムタはビジュアルが良かったじゃないですか。

井上　それはもう、カッコ良かった

斉藤　で、そのグレート・ムタが1990年2月10日の東京ドームに帰ってくることが決定。NWA世界ヘビー級選手権、リック・フレアーvsグレート・ムタが発表されて

ガンツ　同時にメインイベントがIWGPヘビー級選手権の長州力vsビッグバン・ベイダー。AWA世界ヘビー級選手権試合のラリー・ズビスコvsマサ斎藤を含めた世界3大タイトルマッチと、メキシコでデビューしてスペルエストレージャ（スーパースター）になった浅井嘉浩（のちのウルティモ・ドラゴン）の凱旋マッチが発表されてたんですよ。結局、マサさんのタイトルマッチしか実現しなかったんですけどね（笑）。

斉藤　フレアーvsムタは武藤がケガしたんでしたっけ？

ガンツ　ケガというか、NWA側の都合でキャンセルになったんだよね。

斉藤　あの時点では、いまや伝説の橋本&蝶野vs猪木&坂口は発表されてなくて、シングルで橋本vs蝶野が決まっていたような気がする。

井上　えっ、じゃあ猪木さんは初めは試合に出る予定じゃなかったの？

ガンツ　最初の主要カードには入ってなかった。最後のほうですよね、決定したの。それで武藤vsフレアーが消滅したってことで、これはヤバイ、と。ただでさえチケット売れてないのに。それで坂口社長が馬場さんに「全日本プロレスの選手を貸してくれ」と

井上　それで天龍&タイガーvs長州&ジョージをやったんだ。あとジャンボ鶴田&谷津vs木戸修&木村健悟か！

ガンツ　あのカードが発表されたときがプロレスファン人生で一番うれしかったです（笑）。

井上　いや、あれは俺すっごい冷めた目で見てたけど。「馬場がまた始めたよ」と。猪木じゃなくて坂口なら協力はするよと！

ガンツ　実際そうですもんね（笑）。

井上　「また馬場が当てつけでやってるよ」って凄いムカムカしてたんだよ、高校のとき（笑）。たしかに試合自体はワクワクさせられましたけど。

斉藤　もともと発表されていたカードは、長州力&小林邦昭vs天龍&川田利明だったんですよね

ガンツ　それを直前で長州がパートナーをジョージ高野に変えたんですよ。そうしたら天龍も、三沢に変えた。全日本で三沢は正規軍として天龍同盟と敵対してたわけだから、これって普通はありえないことなんですよね

井上　長州はどういう意図があってジョージに変えたの？

ガンツ　ちゃんとした試合になんなくて勝手なことばかりやるジョージをぶち込むことによって、全日のほうを弱く見せるっていう汚い考え（笑）

井上　それはヒドい（笑）。

ガンツ　だから全日本に助けてもらってるにもかかわらず、試合では「どっちが強い？」っていう闘いはあったわけですよね。

斉藤　そこで三沢を選ぶ天龍もセンスがありますよねぇ

ガンツ　天龍からすれば、一番頼りになる若いヤツが三沢。だからこそ、全日本のアングルを壊してでも、リアルに師弟関係にあった三沢を選んだというね。それぐらいプロレス的に負けられない大一番だったわけですよ

斉藤　それで東京ドームは当然フルハウスだったじゃないですか。

ガンツ　あれね、本当にギッチギチのフルハウスだったんだけども、ちょっと裏話があって。あの大会って冠スポンサーがついてたんですよ。ミスタードーナツ。

井上　ミスド!?

ガンツ　そうなんです。で、関東のミスドでドーナツ買ったらドームのチケットがついてくるっていう凄い状況だった（笑）。俺は熱狂的プロレスファンだったから、もう発売と同時にチケットを押さえたんですけど、しばらくしたら「堀江くん、プロレス好きだよね」って、クラスの女子からミスドでもらったドームのタダ券が俺のもとに集まってくるっていう（笑）。

斉藤　でも、全日本勢の参戦が発表された瞬間に……。

ガンツ　チケットがあんまり残ってなかった。配りすぎちゃって（笑）

斉藤　あの大会って、ゴールデンタイムで流れたんですけど、テレビ局の関係で、外国人のスタン・ハンセ

NWA（WCW）でトップヒールの座を確立していたグレート・ムタ。ジャイアント馬場以来の快挙。当時は雑誌でしかその勇姿は確認できなかったのでムタ幻想はバンバンに膨れあがっていた

プロレスの本場でトップを獲った武藤は誇らしい存在だった

座談会出席者

井上崇宏
ベールワンズ総帥。山本小鉄モノマネの第一人者だが、最近は小鉄になりきれない奇病に冒されてるとのこと。誰か治して！

堀江ガンツ
UWF変態座談会主宰者。北米三銃士の一角。前田日明モノマネの第一人者だが、前田本人に暴行を受けた過去あり。誰か治して！

ジャン斉藤
本誌編集長。"雀鬼"桜井章一の元 内弟子。麻雀は強い。ズントコ興行マニア。とくに誰のモノマネもできません。誰か教えて！

ン以外の全日本の選手は流れずに、それでも番組としてはおもしろかったですよね。

井上　だって、いきなりハンセンvsベイダーの外国人頂上対決でしょ。

斉藤　番組の冒頭はハンセンの暴走入場から始まって。しかもドームの花道が長いからテーマ曲の『サンライズ』が映えるんですよねぇ

井上　凄くカッコイイ!!　あの試合は本当おもしろかったもん（ヨアキム・）ハンセンvsエディ・アルバレスぐらいおもしろかったよね。

斉藤　堀辺先生に　こんな試合をやられたら、格闘技側が困る　と言わしめるほどのド迫力で

井上　ベイダー、試合途中で片目が潰れちゃってるもんね

ガンツ　目が腫れて見えないからマスク脱いでね。ゲスト解説のマーシー（田代まさし）が「これはベイダーやる気ってことですよ」って興奮して。

井上　あぁ、言ってた言ってた（笑）。

斉藤　で、その次に流れたのが北尾光司vsバンバン・ビガロ。

井上　あっ、北尾のデビュー戦！　で、最後が猪木さんの試合か　もう充分でしょ、この3試合で。

ガンツ　現場も最高!!　大会が終わったあと、ドームの周りにプロレスファン大集合で誰も帰らないんだから。みんなでひたすら「ダーッ！」を叫ぶ。その繰り返しですよおおおおお!!

斉藤　イヤすぎる、恥ずかしい（笑）。

ガンツ　高校生多いですからね。飲みに行くっていうような世界じゃなかったんで、大会もどんだけ盛り上がったか。ファンの歓声が凄すぎてジャンボや天龍のテーマ曲が聞こえないんですよ。そんなことってあります？

井上　もう二度とないでしょ（笑）。

斉藤　で、その2ヶ月後の4月13日にWWF＆全日本＆新日本共同開催の日米レスリングサミット。

井上　サベージvs天龍でしょ!?　メチャクチャおもしろかった！

ガンツ　良かったですよねぇ。天龍怒りの水平チョップ13連発！

斉藤　でも不思議なことに最初に発表された新日本絡みのカードが急きょ新日本プロレス提供試合になっちゃったんですよね。本当は長州力vsビッグ・ボスマン、蝶野正洋vsジェイク・〝ザ・スネーク〟・ロバーツという好カードだったのに。

ガンツ　ライガーvs佐野、蝶野＆長州組vsマサ＆橋本に変更になって。要はあの大会って、全日本とWWFのビジネスだったんです　あの大会はチケット売れたんだよね。カードがいまいち弱かったんで空席もあったんですけど、あの頃のWWFって招待券をバラまくっていうシステムがなかったんではぼ実券だったっていう

斉藤　メインはテリー・ゴディvsホーガンだったんだけど、大会2日前に急きょスタン・ハンセンvsハルク・ホーガンになって

ガンツ　俺も当日会場に行って初めて知ったのかな、あれ。

井上　俺もテレビで観ました。たしか徳光さんが放送席にいたよね？

斉藤　シェリー・マーテルに激怒する徳光さん　控室で奇声を発しながら徘徊するアルティメット・ウォーリアーに震える徳光さん（笑）

ガンツ　馬場さんはアンドレと摩天楼コンビを組んで、サ・デモリッションと対戦　あの頃のドームプロレスは良かったな……

斉藤　そのドーム2連発でプロレス人気がガッと戻ってきて。その2週間後ですよね、武藤が帰ってきたのは

井上　私事で恐縮なんですが、2・10で猪木さんが初「1・2・3、ダー！」をやったよね　当時、俺は親父と兄貴の二人と仲が悪くて何年も口きいてなかったの　で、家にテレビは当時1台しかなくて親父も2・10を観てるわけだ。お互いシカトしながら観てたんだけど、猪木さんが、ダーッ！」をやったあとになんか俺、ちょっとウルっときて　横を見たら親父もちょっと涙ぐんでて、そこで目が合ってお互いに「ニヤッ」ってしたんだよ。

斉藤　あのドームで親子仲が修復しましたか（笑）

井上　そうそう　そこからまた仲が戻ったの。で、次はその武藤凱旋のとき。兄貴とは依然仲が悪くて口をきいてなかったんだけど、俺がテレビで武藤の試合を観てたら兄貴がいつの間にかうしろに立ってて、何年も口きいてない兄貴が俺にボソリと「プロレスってこんなにおもしろかったっけ？」って言ったの　つまり、井上家のヒエラルキーだったりパワーバランスをすべて崩壊させるぐらいのテンションが1990年にはあったんですよ。

ガンツ　井上家はなんでプロレスに左右されてるんですか（笑）。

斉藤　でも、武藤登場によってプロレスのおもしろさを再確認できましたよね。

井上　凱旋帰国時の会場のテンション、異常じゃなかった？「あれ、なんでこんな盛り上がってるの？」みたいな

ガンツ　たぶんその二つのドームがあったからだと思うんですよ。

井上　ああ、あれは余韻なんだ

ガンツ　そう　完全にプロレス楽しいっていう気分になってたんですよね。それにもうUWFのブームも余熱の段階で飽きてる人は多かったし。Uの磁場も狂ってるタイミングで武藤が帰ってきちゃった

斉藤　つまり、舞台は温まってたんですよね。あのNK大会はセミも良かったですよね。

ガンツ　長州＆北尾vsベイダー＆ビガロ！　ベイダーとビガロが超強くて北尾をボコボコにするという（笑）。じつはこの座談会のためにあらためてビデオを見直してみたんだけど、ベイダーってマジで強いよ、あれ！

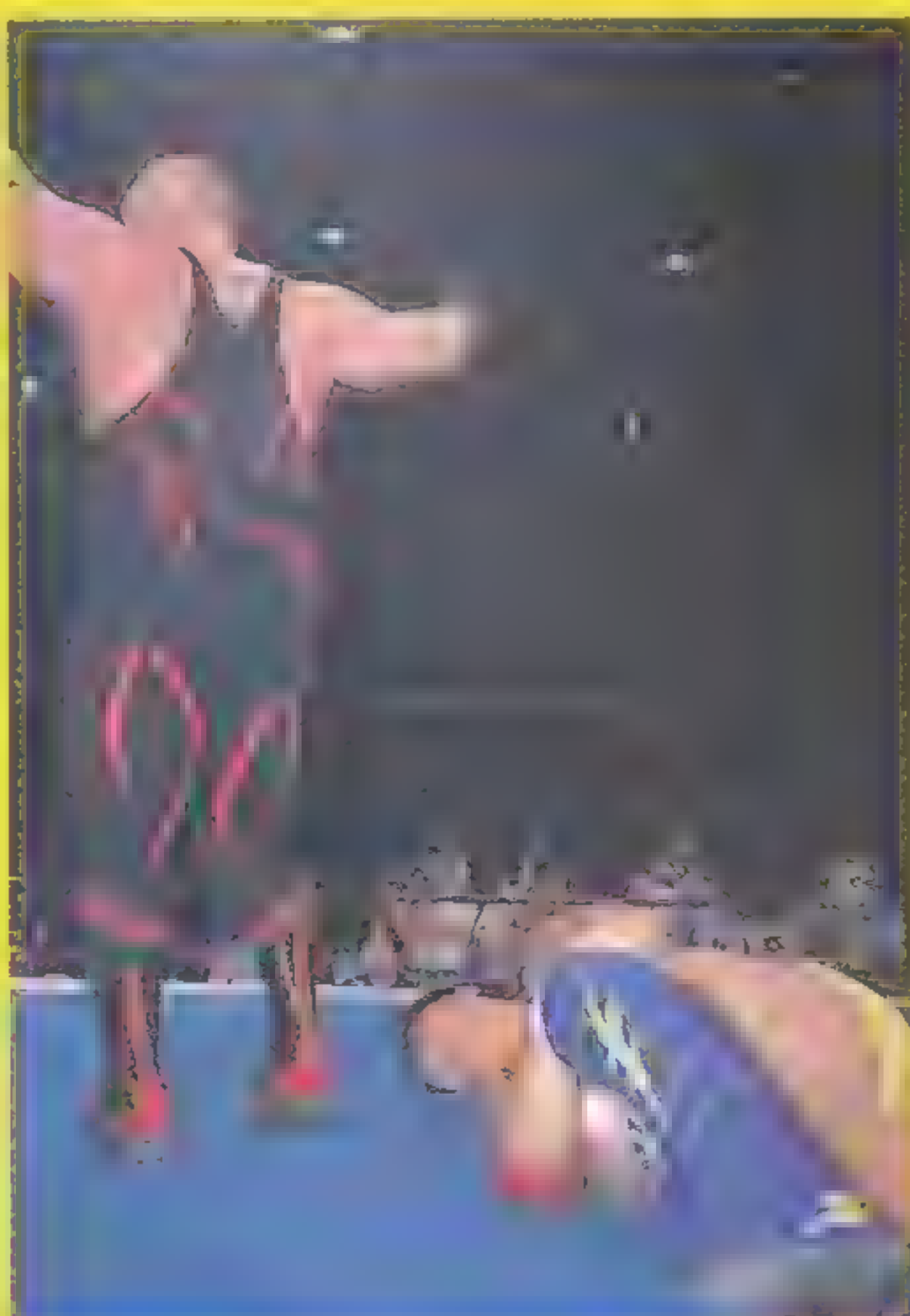
斉藤　ズバリ、レスナーよりできるんじゃないかって。

ガンツ　そんなわけないんだけど、あれ観るとそう思っちゃうよ　晩年のベイダーってトロいイメージしかないですけど、パンチとか超速いんだよ。無表情で「バンバンバン！」って北尾にラッシュを仕掛けるんだから（笑）

井上　なんかああいうときのベイダー、「これ、ホントに入れてんじゃない？」って凄い不思議だったなあ　翌月のNKホールでも似たような試合やったでしょ。

斉藤　北尾＆マサ＆橋本vsベイダー＆ビガロ＆スティーブ・ウィリアムス。ヤバイですよ、あの試合は。

井上　だから、あれは事前にレスラー間でどういうやりとりがあったの

あのときの北尾って、自分が仕掛けられてるのもわかってなかった

1990年4月&5月の北尾光司vs新日本プロレス外人軍団の凄まじさ！　プロレスの範疇を超えた試合となり、北尾がコテンパンにされたのだ　「プロレスとは何か？」を考えさせられる異次元バトル！

かなぁって凄い気になりますよ

斉藤 ですよね。しかも北尾があんな目に遭ってるのに、2ヵ月続けて似たようなマッチメイクをやる新日本の謎(笑)。

井上 あのときの北尾ってプロレスというものを全然わかってないから、自分が仕掛けられてるのもわかってなかったと思うんだよね。「けっこうキツいな、プロレス」っていうくらいの認識で。

ガンツ ウィリアムスなんて北尾を完全に小バカにしてて。それで闘牛みたいにいきり立って北尾がラリアットで向かってきたらヒョイとかわしてね(笑)

井上 北尾は全力で空振りしちゃってすっ転んで観客が大喜びという。でも、どう考えてもマサさんだよね、外国人を操ってるの(笑)。

ガンツ 教育方針は長州じゃないですか。横綱だけど苦しんで這い上がってくるみたいな感じにしようと思ったけど、北尾はただ苦しんでるだけっていう(笑)

斉藤 そんな感じだったらモメるに決まってますよね、長州と北尾。

井上 モメるよ(笑)。

斉藤 のちのちのジョン・テンタ戦のトラブルもそのトラウマがあったとしか思えないですよ とにかくデブでレスリングができる外国人とは闘いたくないんですよ、北尾は(笑)

ガンツ 言えることは、本当の実力が出ちゃう試合が数多く組まれてたんですよね、当時は。

90年代新日本プロレス人気は、武藤のスター性によって導かれ、そして持続していった。ヘビー級であそこまで動けてプロレスもうまいんだから、人気が出ないわけがないのだ！

斉藤 話は戻って、そんなセミの試合があったなかで二つともメインを飾ったのは武藤敬司ですよね。

井上 なにより素晴らしいのは、いまだかつて観たことがない動きっていうの？

ガンツ まさに観たことなかった！ あの頃のファンって、タイガーマスクの時代から熱心なファンが多かったから、たいがいのことじゃ驚かないじゃないですか それでも、武藤の繰り出す技っていままで観たことがないからホントにビックリした。

1990年4月27日の武藤敬司論

井上 フラッシングエルボーなんて凄く速くて！

斉藤 あれ、初めて観たとき何をやったかわかりました？

井上 ああ、わかんない 初めはわかんないよね。

斉藤 あのフラッシングエルボーへの観客のリアクションって小さいんですよ それは武藤が何をやったのかわからないから(笑)

井上 なんか足がすべったのかくらいに思うよね。

ガンツ で、次の長州戦ではフラッシングエルボーは打点の高いバージョン。空中でグチャグチャっと動く。

井上 それはまるでキム・ヨナのように華麗で(笑)

ガンツ あれがザ・ロックのピープルズ・エルボーの原型なんですよね。

そして、最後のムーンサルトプレスにいくまでの流れも凄いんだよね。その後のプロレスみたいにもうひたすら大技が次から次へと繰り出される2・9プロレスじゃなくて、フィニッシュの大技って武藤のムーンサルトだけだったんですね。もうプロレスとして素晴らしい。

斉藤 で、その翌月が長州力vs武藤敬司のシングルマッチ。闘魂三銃士vs長州の3連戦の初っぱなで。

ガンツ あのときのムーンサルトは伝説でしょ 回転途中で体操みたいにマットに手をついて軌道修正したんですから。そんなことできるわけないじゃないですか、普通(笑)。あんなもん見せられちゃあ、もう熱狂しますよ。

斉藤 たぶんいまのファンって昔の武藤敬司がどんなレスラーだったかを知らないですよね。

井上 知らないでしょう。だから何が天才なのかわからないんだよね。「武藤が天才、天才って言ってどこが天才なの？」みたいなね ……天才すぎでしょ!!(笑)。

ガンツ いまはインサイドワークの天才というイメージあるけど、本当に天才だったんですよね。

斉藤 Uインターとの対抗戦のときも動けてましたよね。

井上 全然あとづけだけど、やっぱり新日本としては高田が北尾戦みたいに仕掛けてくるんじゃないかっていう不安があって、だから油断はできないってことで武藤が大将戦に出たんだよね。

斉藤 あっ、それは凄く納得できる話ですね！

井上 それを踏まえて、あの試合を見返すと凄くおもしろい。

斉藤 そうだそうだ、なんだか武藤のフットワークがふわふわしてるんですよ、いつもと違って。「なんなんだろうな？」と思ってたんですけど

ガンツ ズバリ、騙し討ちされないように警戒してるんですよ。あのとき俺は高田を応援してたけど、4の字で負けたことが悔しいんじゃなくて、UWF信者の俺から観ても「これはリアルに武藤のほうが強いな」って心のなかで思っちゃったことなんだよね

井上 いやね、そこなんだよ、我々の心を捕らえて離さないのは。新日本vs旧UWFをやっていた頃だって、武藤はまだ青二才なんだけど、なんか強さを隠しきれてないというか。前田、高田より全然強いんじゃねえか？ っていうさ。

ガンツ っていうか、なんでグリーンボーイが猪木も逃げる前田日明と対等にやり合ってるんだって話ですよね(笑)

斉藤 そういえば、伝説の旅館破壊事件のきっかけも……武藤だ！

井上 そうだよね。前田に「アンタのプロレスはおもしろくない」って言い放って前田とガチの殴り合い(笑)。

ガンツ で、路上で高田とお互いフルチンのまま殴り合って そのまま道路の真ん中でプロレスを語り合って「よし、飲みに行こう」ってフルチンのままタクシーを停めて(笑)。

斉藤 バカすぎる(笑)。

井上 いや、だからね、武藤ってガチンコも相当強いんだよね。

斉藤 だってあれでしょ、新日本にバーリ・トゥード戦士が初めて上がったときも迎え撃ったのは武藤でしょ。

井上 ペドロ・オタービオ戦だ(笑)。

斉藤 バーリ・トゥードと銘打ったプロレスでしたけど、普通はやりたくないですよ。何をされるのかわからないもんじゃないんですから。

井上 あのオタービオとやる前に『日刊スポーツ』の裏一面を飾ったじゃん。

斉藤 台風のなか、武藤がランニング特訓してるやつですか？

井上 そうそう、多摩川で。プロレスの威信を賭けた初の異種格闘技戦に向け猛特訓するということで、嵐のなかを猛ダッシュしてるっていう写真なんだけど、足もと見たらビー

サン履いてるんだよね（笑）。

ガンツ　ガハハハハハ！

井上　あれからちょっと俺もね、「コイツはあやしいな」という。武藤は既成のプロレスを破壊する男なんじゃないかって思い始めてね。オタービオ戦のフィニッシュなんだっけ？

ガンツ　マウントポジションのまま頭を抱えての勘太郎パンチです（笑）。

斉藤　ダハハハハハ！　そりゃ当時の格闘技関係者は怒りますよ！（笑）。

井上　で、のちの猪木軍vsK－1のときに武藤は「出る」って言ってて、たしかギリギリで猪木さんが「ダメ」って言って

斉藤　バンナvs武藤でしたっけ？

ガンツ　いや、武藤は「小川直也とやりたい」って言ったんだよ。

斉藤　……っていうか、グレート・ムタvs小川直也の異種格闘技戦ってありましたよね（笑）

伝説のシュートマッチ１・４事変、橋本真也vs小川直也。もし橋本ではなく武藤敬司が相手だったら小川直也は仕掛けていたのか？　トップスターにしてポリスマン。武藤敬司の幻想は底が丸見えの底なし沼だ！

青木真也に極められる武藤敬司も想像がつかないな（笑）

井上　あれ、ベストバウト！　腕ひしぎならぬ、指ひしぎ十字固めでムタが勝った試合でしょ（笑）。

斉藤　あんなにコケにされてる猪木さんもそうそうないじゃないですか。猪木さんがレフェリーやるはずだったのに、試合直前に毒霧でやられてノーレフェリーマッチに。猪木さんの見せ場なしという（笑）

ガンツ　だから猪木も長州も持て余してたんだよね、武藤というプロレスラーを

井上　猪木さんのファイナルカウントダウンでもコケにしたもんね　ムタがやりたい放題やってさ（笑）。そこでも武藤が猪木さんに見せ場を作らせないから、あの当時の村松（友視）さんがちょっとイラついてるんだよね。村松さんをカッとさせたっていうね、ムタが。

斉藤　『紙のプロレス』でも村松さん、ムタに対して批判気味でしたよね。

怖いわ　本当は怖い武藤敬司

井上　あと武藤が怖いなと思ったのはムタvs白使（新崎人生）戦。白使の凱旋マッチなのにこれまたワンサイドでやっちゃったじゃない

ガンツ　白使が大流血した試合ですよね。

井上　あのときの世論は「また新日が他団体のスターを潰してるよ」という感じだったけど、のちに全日本のリングでもムタはTAJIRIとも同じような試合をやっちゃって。だからあれって新日本の意向じゃなくて、要は武藤個人の意思なんだよね。「日本のメジャーリーガーは俺だけ、ほかは潰すよ」っていう。あのへんの我の強さ。

1990年4月27日の

ガンツ　それはアメリカの文化がそうなんでしょうね　たとえばちょっと自分の色とかかぶるようなヤツがいたら、実力でわからせないとナメられるぞっていう　武藤はずっとそんな世界で生きてきたわけじゃないですか。

井上　で、そんな壊れるおそれがあった試合で最後はきっちりドラゴンスクリューと足4の字をやる。大将戦で足4の字だよ（笑）

斉藤　柔道の強化選手だったし、しかもトップロープから100キロの人間が1回転して、しかも軌道修正する身体能力を持ってる　アントリュース・ナカハラレベルじゃないですよ（笑）。

ガンツ　武藤が最強でしょ、完全に。いまになると「ジャンボ鶴田最強説」ってあやしいじゃないですか。

井上　あやしいよ。それは鶴田が最強だったらおもしろいぞっていうシャレも込みでしょ（笑）。だって若手の小原（道由）と、練習中に道衣を着て柔道マッチやったんだよね。で、小原って若手だけど、国士舘大でずっと柔道をやってたのに、武藤はキッチリ取っちゃうんだからね。

斉藤　ランデルマンとヘンゾでさえ極められなかったのに（笑）

井上　いま武藤最強説みたいな流れになっちゃったから言うけど、武藤より強いプロレスラーって誰がいる？

斉藤　何を言い出してるんですか、いきなり（笑）。それはオールタイムで？

井上　とりあえず日本人限定で

斉藤　藤田は勝てないですかね？

井上　勝てないでしょ

斉藤　普通にスパーリングでやっても必ず藤田が上を取るんだけど、いつの間にか武藤がポジションを変えてしまうって聞きましたね

井上　なんか俺、青木真也に極められてる武藤っていうのも想像つかないな（笑）。

斉藤　そうすると、1・4事変が橋本じゃなくて武藤だったらどうなったんだろうって気にならないですか？

井上　いや、だったら小川はやんないんじゃないの？　武藤相手に仕掛けらんないと思う

ガンツ　まぁ確実に遂行できるのがわかってるからやるわけですもんね、ああいうことって。そんなリスキーなことはしないですよね、仕掛けるほうは

井上　だからUインターvs新日本のメインも橋本だったら、高田は仕掛けてたかもしれない。これは橋本のことを悪く言ってるわけじゃなくて、武藤以外だったらって話で。

斉藤　蝶野はある意味仕掛けられてますもんね、Uインターに。「髙田さんと闘いたい」って発言したら、Uインターがホントに乗り込んできて。

井上　Uインターは完璧に相手を見てるんだよね。あれ、武藤がリップサービスで「髙田さんとやりたい」って言ったら絶対に動かなかったと思うよ。

斉藤　いやぁ、武藤を語るはずがこんな話になると思わなかった

井上　天才レスラーだよ。ルックス良し、ガチ強い、プロレス超うまい、身体デカイ。言うことないよ。あれはアメリカで成功しないわけがないんだよね。

ガンツ　そう考えると、武藤とレスナーってけっこう似てるかもしれない。レスナーはプロレスも天才だけど、UFCが稼げるから出てるって部分もあるじゃないですか。武藤も全盛期にPRIDEがあったら、もしかしたらやってたかもしれないですよね。

井上　いまならUFCでトップ張って、全日本に帰ってくるみたいな

斉藤　なんかUFCで負ける姿が想像つかないな（笑）。

ガンツ　想像つかない。レスナー、ケイン・ヴェラスケス、シェーン・カーウィン、そしてグレート・ムタの四天王ですよ（笑）。

井上　ノゲイラとやっても判定勝ちできそうだし、ミルコくらいだったら極めちゃうかなっていう気がするけどね。極めなくてもまぁ判定まではいくでしょ。塩漬けにしちゃうでしょ。

斉藤　くだらない話になったなぁ（笑）。

井上　結論は武藤敬司、最強!!　ってことで。なんかスイマセン（笑）。

【10年4月某日／都内・某所にて収録】

90年代の〝黒幕〟が語るレスラー教育論

脱ストロングスタイルを図ったこの男は

A級戦犯なのか？

衆議院議員／元プロレスラー

馳 浩

90年代の新日本といえば両国7連戦にドームツアーなど、とにかく我が世の春を謳歌したいい時代！　その新日の実質的な旗頭だったのが馳先生だ。昭和新日ファンからは「新日から殺気がなくなったのは馳のせいだ」と槍玉に挙げられることもあるが、当の本人はどう思っているのか直撃！

聞き手／高崎計三　構成／鈴木佑　試合写真／平工幸雄

本当は恐ろしい

佐々木健介

証言者

小島聡

「初めて佐々木さんが僕を呼んだ言葉は“貴様!”でした」

90年代新日本プロレス道場の真実を言っちゃうぞ、バカヤローーッ！

テレビ番組にファミリーで出演する機会も多く、
いまやお茶の間では、優しいパパのイメージがすっかり定着した
佐々木健介。しかし、平成プロレス黄金期である90年代の健介は、
いまのイメージとはまったく異なる恐ろしい存在だったのだ！
90年代前半に新弟子時代をすごした小島聡が、
90年代新日本道場の真実を語っちゃうぞ、バカヤローーッ！

聞き手／堀江ガンツ

今回の『kamipro』は90年代マット界の特集なんですけど、小島さんには新弟子時代の新日本プロレス道場について語っていただきたいんですよ。

小島　なるほど。ホントに厳しい道場でしたからね。

――ちなみにタイトルは「本当は恐ろしい佐々木健介」なんですけど（笑）。

小島　アハハハハ！　それは僕が佐々木さんの恐ろしさを語るってことですか？

――そういうことですね。

小島　それ佐々木さん読んじゃうじゃないですか！（笑）。

――まあ、昔の話ですから（笑）。でも、いま健介さんってテレビのバラエティ番組にもたくさん出られていて、一般的なパブリックイメージは「いつもニコニコした優しいお父さん」じゃないですか。

小島　そうですよね。

でも、小島さんが新弟子時代の健介さんのイメージとはまったく違うわけですよね？

小島　違うというか真逆ですね（笑）。

――真逆（笑）。

小島　人間ってここまでおっかなくなれるのかって思いました。想像を絶するというか、僕が生まれて初めて感じる恐怖の度合いでしたね。

――最初から怖かったわけですか？

小島　僕が新日本に入門してからしばらくは、口もきいてもらえませんでしたからね。佐々木さんは毎日道場に練習に来られてたんですけど、挨拶しても、ひと睨みされるだけ。

――一瞥するだけですか（笑）。

小島　ホント一瞥のみです。こっちが悪いことしちゃったみたいな感じで。こんなに怖い人がこの世に存在するんだっていうことが驚きでしたね。僕はサラリーマンを経験してからプロレス入りしたじゃないですか。その社会人経験のなかで、どんな偉い人でも、挨拶して睨みつける上司とか目上の人っていうのは、お会いしたことがなかったんで、ショッキングな出来事でしたね（笑）。

――当時の健介さんっていうのは、やっぱり道場でも肩を怒らせて歩いてるわけですか？

小島　いつも身体に力が入ってるというか、ピリピリとしたムードを醸し出していて、同じ空気を吸うだけで怖かったですね。

――同じ空間にいることが怖い（笑）。小島さんは91年に入門ですけど、同時の同期っていうのは誰になるんですか？

小島　いまWWEにいるFUNAKI（カン・フー・ナキ）さんが一緒に入って、あと5人くらいいたんですけど、みんなしばらくしたらいなくなっちゃいましたね。

――厳しさと恐ろしさのあまり（笑）。その頃、合宿所や道場を取り仕切っていたのは、どなただったんですか？

小島　寮長は飯塚（高史）さんで、道場を仕切っていたコーチ役が馳さんと佐々木さんでしたね。

――そのコーチに挨拶すると……。

小島　ひと睨みです（笑）。

――まさに鬼コーチだったわけですね（笑）。そんな健介さんと最初に交わした言葉は覚えてますか？

小島　覚えてますよ。これは忘れもしない、初めて佐々木さんが僕を呼んだときの言葉が「貴様！」だったんですよ。

――ダハハハハ！　貴様（笑）。

小島　僕に対して怒ったんですけど、そのときの第一声が「貴様！」でしたから（笑）。

ヴァーッ！と叫びながら、試合後控室に戻る90年代前半の佐々木健介。その横に付くのは若き日の小島聡だ。「同じ空気を吸っているだけで怖い」というだけあって、試合後の興奮した健介の横にいる小島の表情は、ホントに伏し目がちだ。

僕、そういう言葉はマンガでしか聞いたことがなかったですからね。

——なんで怒られたんですか？

小島　たしか電話の応対がよくなかったみたいで。いま思えばなんでもないようなことだったと思うんですけど、当時はとにかくピリピリしてる方だったので、新弟子に対してはもの凄い怒り方をするんですよね。

——いつカミナリが落ちるかわからないような感じですか。

小島　そうです。そんな感じなんで、ただいるだけでも怖いのに、佐々木さんは練習熱心だから昼も夜も練習のために道場に来るんですよ。

——常に雷雲がゴロゴロ鳴りながら居座ってる感じで（笑）。

小島　で、そんなに頻繁に道場には来るのに、俺たち新弟子とは一切のコミュニケーションはないですからね。

——当時の新日本といえば、錚々たるメンバーが揃ってましたけど、そのなかでも恐ろしさでは健介さんがブッチギリだったんですか？

小島　ブッチギリです（キッパリ）。他の追随を許さない、威圧感、怖さがありましたから。とくに後輩が入ってくるまで、一番下の人間に対するしつけはかなり厳しかったですね。

——それはどんなしつけなんですか？

小島　やっぱり言葉使いが一番でしたね。僕はサラリーマン経験があるので、言葉使いに関しては少し自信はあったんですけど、それでも通用しない世界でしたね。し

当時、風呂掃除で使っていた洗剤の匂いを嗅ぐだけで恐怖がよみがえります

かも、こっちも佐々木さんの前だと萎縮して声が小さくなるんですよね。そうすると怒りが増幅するみたいで「なんだ貴様！（怒）」ってなるんですよ。とにかく怖かったですね。

——昔の新日本の若手は、山本小鉄さんのキャデラックのエンジン音が聞こえただけで震え上がったっていう伝説がありましたけど、健介さんも同じような感じでしたか？

小島　俺は当時佐々木さんが乗ってたMR-2の音が少し聞こえただけで恐怖でしたね。あと、当時は俺、風呂掃除の当番をやってたんですけど、あの頃使ってたバスマジックリンの匂いをいま嗅いだだけで、恐怖がよみがえってきたりするんですよ。

——ダハハハ！　それってトラウマになってるじゃないですか。

小島　完全にトラウマですよ。いまでもバスマジックリンの匂いを嗅ぐだけで、佐々木さんの姿がフラッシュバックするんですから。

——あの当時、新日本道場では橋本さんとライガーさんがタチが悪いっていう話はよく聞きますけど、それとは別次元の怖さなんですか？

小島　佐々木さんの場合、橋本さんたちみたいにイタズラ的なものは一切なかったので、冗談とかが一切ない世界でしたから。

——ひどいイタズラをされるのは、一種のかわいがりですけど、交流が一切なく怖いだけっていうのは、よけいに嫌ですね（笑）。

小島　約20年経って、ようやくこういう話ができるぐらいのレベルですね。10年ぐらいじゃ、とてもじゃないけど怖くて口にできない（笑）。佐々木さんのこんな話をしてるってことが、本人に知れたらどうしようって感じで。

——では、新日本に在籍中は健介さんに対

して、ずっと怖いイメージがあったわけですか？
小島　僕が入って2年ぐらい経ってから、ちょっと変わりましたね。よみうりランドでやった試合で、佐々木さんが足首を折って、靭帯損傷する大けがを負ったときがあったんですよ。そのときは佐々木さん本人もショックで、足を折ったあとはピリピリの度合いがさらに倍増して、とんでもない恐ろしさを醸し出していたんですけど、そのとき僕はあえて精力的にお見舞いに行ったんですよ。
――なるほど。懐に飛び込んでしまおう、と（笑）。
小島　そうです。どんなに冷たくされてもいいからお見舞いに通って、そこから少し関係が変わりましたね。ようやく僕を一人の人間として見てくれるようになったというか。
――やっと人間扱いしてもらえるようになりましたか（笑）。
小島　そして復帰戦が武道館であったんですけど、そのときに若手全員でセコンドに付いたんです。そこから少しずつお話しさせていただけるようになりましたね。もう、自分の気持ちを誠心誠意伝えて、ようやくでしたね。
――そこからは、普通にしゃべったりもするようになったんですか？
小島　いや、人間扱いしてくれるだけで、上下関係の厳しさはあいかわらずでしたけどね（笑）。僕は健介さんの車の運転手をたまにさせてもらってたんですけど、そのときもホントに怖かったですからね。
――密室に二人っきりですからね（笑）。
小島　僕は道を知らないんで、佐々木さんがナビゲーターをやってくれるんですけど、「そこ右！」「左！」「違う！」とか、それだけでビクビクしてましたから。
――でも、健介さんはなんでそんなに厳しかったんですかね？
小島　たぶん、佐々木さんは佐々木さんで、もの凄くつらい新弟子時代を送ってきたって聞くじゃないですか。ジャパンプロレスでたった一人の新弟子で、全員分の洗濯をしたり、やはり上の人からの厳しい教育があったりして　それを下の者に伝える意識が強かったんじゃないかと思いますね。
――新人に対する接し方を維新伝承をしていたわけですか（笑）。でも、あの当時の豪傑揃いのジャパンプロレスで一人新弟子って、確かに想像を絶するものがありますよね。
小島　そうだと思います。当時の長州さんは、それこそとんでもなくピリピリしてたって聞きますからね。

家族や夫婦で多数のテレビ出演があり、いまや国民的理想の家族でもある健介ファミリー。なかでも健介はまさに絵に描いたような、厳しくて頼りがいのあるお父さんだが、小島が新人時代は鬼より怖かったのだ。

本当は恐ろしい

もともと明るい性格だったのに、新弟子時代は恐怖で笑顔も忘れた感じですね

――健介さんの厳しさは長州イズムだったわけですね。小島さんはいまテレビで健介さんの姿を観てどう思いますか？
小島　僕らが新弟子の頃の佐々木さんとは180度違うイメージですけど、やっぱり北斗さんとの出会いで変わったんだと思います。僕自身、北斗さんと出会う前と出会ったあとの佐々木さんはイメージが全然違いますから。
――なるほど。じゃあ、北斗さんと出会わなかったら、いまの佐々木健介とはまったく違ったものだったんでしょうかね。
小島　そうかもしれないですね。
――あと当時の新日本では、健介さん以外に小原（道由）さんの厳しさもハンパなかったって聞きますけど。
小島　ハハハハハ！　いやあ、小原さんも厳しかったですね（しみじみ）。小原さんは国士舘大学柔道部出身じゃないですか。だから国士舘柔道部の上下関係のルールをそのまま新日本に持ち込んでたんじゃないですかね。そして健介さんは健介さんで、ジャパンプロレスのルールがあったと思うんで。でも、僕は東京ガスのルールしか知らなかったんで、ホントに怖くてしょうがなかったですね（笑）。
――一般企業とシャバじゃない世界のルールはまったく違うでしょうからね。
小島　でも、あのときの佐々木さんの厳しさがあったからこそ、いま自分が胸を張って「プロレスラーです」って言えるって思ってることは確かです。あの頃は、ホントに厳しかったし、苦しかったんですけど、あれを通過してるから、もう人生何も怖いものはないって自信になってますからね。
――プロレスラーになるための通過儀礼でもあったんでしょうね。
小島　ただ、当時は人格が変わりそうになりましたけどね（笑）。
――人格まで変わりますか（笑）。
小島　僕はもともと明るい性格だって言われてたんですけど、新弟子時代はいつもふさぎ込んで、下を向いている状態でしたからね。怖くて厳しくて笑顔も忘れたって感じでしたから。それを乗り越えて、いま笑顔で話せるようになってよかったと思います（笑）。
――健介さんの厳しさが、小島聡を強くしたってことですね。今日はありがとうございました。そして、恐ろしい記憶を呼び起こしてすみませんでした！（笑）。
【10年4月4日／東京・後楽園ホールにて収録】

こじま・さとし■1970年9月14日、東京都江東区出身。91年、新日本プロレスでデビュー。90年代後半は天山広吉との「天コジ」タッグで人気を博す。02年に新日本を離脱して全日本入団。昨年、高山善廣から三冠王座を奪取したが、今年3月、浜亮太に敗れ王座陥落した。183センチ、112キロ。

nWo HEY YO!

90年代マット界のドル箱ユニットを語る夕べ

新日本プロレスライセンス事業部

阿部タケシ

YO! YO! YO! ナッシュもホールもカッコよすぎるYO!!（RG調）。
ということで、90年代マット界で一大ムーブメントを巻き起こした、ご存知nWo。
この人気ヒール集団を業界屈指のアメプロマニアである阿部さんと語っちゃいましたYO!!

聞き手／ジャン斉藤

ホーガンとアウトサイダーズはアメプロのおもしろさを体現してました

——今回は90年代特集なんですが、やっぱりそこに欠かせないものといえば、マット界に空前の大ブームを巻き起こしたnWoじゃないかな、と!

阿部 確かにTシャツとかバカ売れしましたもんね。

——そこで今回は新日本プロレスの裏方であると同時に、もともとアメプロマニアとして業界でも有名な阿部さんにお話を聞きたいと思います。

阿部 よろしくお願いします。

——まずnWoが誕生した背景からたどっていきたいんですが。

阿部 そもそもnWoは96年に発足するんですけど、あの当時はライバル団体のWWF(現WWE)のほうがマンネリになって人気が下降してた時期なんですよね。冬の時代というか。

——それはどうしてなんでしょう?

阿部 95年あたりから人気低迷でコストカットの憂き目に遭って、選手のギャラがドが下がり始めたんですね。それで時代のアイコンになるような選手が出てこなくなったんです。ハルク・ホーガン以降が横並びだったんで。

——たしかアルティメット・ウォリアーをプッシュしてもダメで、レックス・ルガーでもファンの支持を得られなかったんですよね。

阿部 いっときなんかはヨコズナをエース級で使ってましたから(笑)。

——迷走してますね(笑)。そういうアメプロがちょっと落ちてる時代に突如出てきたのがnWoだった、と?

阿部 そうですね。まず、WWFでディーゼルだったケビン・ナッシュ、そしてレーザーラモンだったスコット・ホールがWCWにジ・アウトサイダーズとして初登場して。ちなみにホールはWWFを辞めるときに、ビンス・マクマホンに直接言わずに手紙で退団を告げたらしいんですね。その前日にビンスはナッシュと飛行機で席が隣だったもんだから、「なんでそのときに言わないんだ!」ってかなり怒ったらしいですけど(笑)。

96年7月7日、PPV大会「バッシュ・アット・ザ・ビーチ」で結託したホーガンとアウトサイダーズの3人。翌日の「マンデー・ナイトロ」より、黒と白をイメージカラーとしたnWoが結成された。

——「おまえ、知ってたろ?」と(笑)。

阿部 で、あの当時のWWFにはクリックっていう派閥があったんですよ。そのメンバーがショーン・マイケルズ、トリプルH、ショーン・ウォルトマン、そしてホールとナッシュの5人で彼らがバックステージを牛耳って。このメンバーはビンスに意見をガンガン言える立場で、要するに選手の身分で団体をコントロールするくらいの力を持ってたっていうことなんですけど。

——阿部さんの前でいうのもなんですが、一時期の悪い新日本みたいな感じですかね(笑)。

阿部 わ、ひどいこと言うなぁ。

——そういうリング外の政治的な力も持ったアウトサイダーズにホーガンが合流する、と。

97年5月3日の大阪ドーム大会にはアウトサイダーズの二人やシックス(ショーン・ウォルトマン)など大物メンバーが来日。海を越えて日本でもnWo旋風が巻き起こった。

阿部 そうですね。96年フロリダのデイトナです スティング&レックス・ルガー&ランディ・サベージvsアウトサイダースのときにホーガンが乱入という。

——ああ、いいカードですね! なんかべつに試合内容としては凄くないんでしょうけど、絵ヅラだけは抜群に華やかですね(笑)。

阿部 それでお客さんはホーガンが当然ベビーフェイスのスティング組に加担するかと思いきや、アウトサイダースと結託して。そのときにホーガンが「これがニュー・ワールド・オーダー(新世界秩序)だ!」ってマイクアピールしたのがきっかけでnWoが誕生する、と。この「ニュー・ワールド・オーダー」って言葉は当時のブッシュ大統領が演説なんかで使ったフレーズを引用したらしいですけど。

——nWoが衝撃だったのはいわゆるアングルとしての軍団抗争の枠を越えて、団体の構造を変えるとか、政治的な匂いがしたところでしたね。

阿部 そもそも当時のWCWは部屋別制度というか、ユニットを作りたかったんだと思うんですよ。ドラゴンボンバーズみたいな(笑)。で、そのテストケースとしてnWoを立ち上げたんですけど、その人気が大爆発しちゃったんでそれと肩を並べるようなユニットを作れなくなってしまったっていう。

——なんでnWo人気ってそんなに爆発したんですかね?

阿部 それはもうホーガンとアウトサイダーズの色気というか、オーラでしょうね。あの3人はアメプロ本来のダイナミックさ、おもしろさっていうのを体現してたんで。それ以外のレスラーになるとやっぱり身体が小粒だったり、歳を取ってたりして団体側もプッシュしづらかったみたいで、だったらこいつらを軸に抗争させてデカくしちゃおうって感じだったんでしょうね。要するに新日本隊vs反選手会同盟みたいに(笑)

——nWoの抗争ってベビーvsヒールの図式ではなかったですよね?

阿部 当時のアメプロっていうのが、いわゆる絶対的なベビーvsヒールっていう概念が壊れ始めてきたんですよ。悪いことに明け暮れる奴がかっこいいんじゃないのっていう風潮が出てきて。

——アンチヒーローというか。

阿部 そうそう、ヒールなのに支持されるという逆転現象が始まってきて。もうそうなるとWCWも観る側の判断に委ねちゃってましたよね。

——なるほど。でも、そもそもバックステージの権力を握りたかったナッシュとホールが、旧態依然の象徴のホーガンと手を組むというのはどういう狙いがあったんですかね?

阿部 それはやっぱりビジネスじゃないですか? あの二人にどういう野心があったのかわからないですけど、きっと「ホーガンをうまく利用すれば成功できる」っていう読みはあったんじゃないですかね。でも僕はホーガンで育ったクチなんで、ホーガンしか観てなかったですけど(笑)。

——ハルカマニアでしたか(笑)。

阿部 まぁ、nWoはホント新鮮でしたよ。あの絶対的ベビーだったホーガンがヒールになるっていうのが最大の衝撃でしたし。当時はnWoを日本で追いかけようとしてもなかなか情報がなかったんで、僕なんかは池袋の「レッスル」とか新宿の「アイドール」で直輸入の紙ジャケなのに1万円以上するビデオを買い漁ってたクチですから。

——専門誌の情報じゃ満足できなかった、と。

阿部 写真と活字がダメってわけじゃなくて、雰囲気をもっと知りたかったんですよ。そのくらい体感したいと思わせるようなカッコよさがあ

りましたから。のちのちWCWのPPVを「スカパー!」が月曜の朝っぱらから生中継するなんていう奇跡的なプログラムまでありましたけど。

——そのnWoに対抗するために、スティングが1年ぐらいかけてギミックチェンジしたじゃないですか? あの溜めはアングルとして凄いなと思いましたね。

阿部　陽気なキャラから映画の『ザ・クロウ』をモチーフにしたダークなイメージに変身してね。でも、あのあたりで第一次nWoブームが落ち着いちゃって、ちょっと雲行きが怪しくなっていったんですよ。

人気面でもnWoに対抗できる存在だったスティング。しかし、のちに"赤nWo"ことウルフパックに合流。ちなみに90年代前半はたびたび来日していたスティングだが、イメチェンしてからは日本の地を踏んでいない。

——というのは?

阿部　要するにnWoっていうものに、ほかの選手がもの凄く魅力を感じ始めたんです。で、「俺も! 俺も!」みたいにどんどん軍団加入者が増えて、相手側がいなくなっちゃったというか。結局、本隊に残ってる選手は実力も人気もない選手ばかりになり始めちゃって。あとWCWが一番いけなかったのが、nWoの次に何をやるかっていうのをまったく考えてなかったことでしょうね。

——この手を考えてなかった、と。

阿部　平均的にアメリカンプロレスのビジネスで考えたらユニットの賞味期限は2年くらいなもんなんですけど、延々とやり続けましたからね。で、nWo内の抗争にシフトしてきてからはワケがわからなくなってきて。こっちも情報を追いきれないんで、ある日『週プロ』を読んだら突然赤地のnWoシャツを着てるヤツがいてビックリしましたから(笑)。

——まぁ、でもnWoブームは日本でも花開きましたよね。蝶野さんと武藤さんがnWoジャパンを結成してアメリカ本土にも参戦して。

阿部　あの二人がホーガンやアウトサイダーズとウルフポーズをしてる写真を観たときはゾクッとしましたね～(シミジミと)。やっと新日本がインターナショナルになったなって。

——あの当時のトップ2がnWo入りするっていうのはインパクトありましたよね。いまで言うなら五味隆典がUFCに行ってGSPと一緒になんかやるみたいな(笑)。

阿部　ああ、そういう感じかもしれない(笑)。あれはやっぱり橋本真也じゃなかったからよかったんじゃないですかね。

——ダハハハ! 確かに破壊王だとちょっとイメージが(笑)。

阿部　やっぱり蝶野正洋と武藤敬司っていうのは、海外修行で世界のプロレスの洗練した部分を身につけた二人で、そういう選手が向こうに行ってまた色づけされるのは観てても非常に刺激的でしたね。新日本って、WWFとの提携が終了してから当時のソ連と提携してアメリカンな選手が手薄だったじゃないですか? そういう時期を経てまた本場のアメプロとリンクしたって部分では、マニアとしてはたまらなかったですね。

——ベイダーやノートンみたいないわゆる日本製外国人はいましたけど、華がある外国人っていうのはなかなかいなかったですし。アウトサイダーズもnWo全盛期に一回だけ大阪ドームに来てるんですよね。観たかったなぁ、試合はさておき(笑)。

阿部　まぁ、nWoは出オチっていうか入場やマイクがカッコよかったですからね。僕も当時は観れなかったんですけど、去年の1・4東京ドームにナッシュが来たときは本当にうれしかったですよ。前日会見のときに挨拶に行って、こっちがウルフポーズをしたら、ちゃんと返してくれたので感動しましたよ(笑)。

——僕も「ハッスル」にアウトサイダーズが来たとき、インタビュー担当でもないのにノコノコついていきましたからね(笑)。で、ホールが入室と同時にいきなりソファに寝そべってそのまま取材を受けるんですよ!

阿部　ハハハハ! いちいちカッコいいですよね～(シミジミと)。

——でも基本的には日本に来るnWo要員って二軍、三軍の選手でしたよね。

阿部　そうそう。nWoスティングとかマーカス・バグウェルばっかり来て(笑)。いつの間にかノートンもへんな帽子被ってnWoに加入してましたけど。

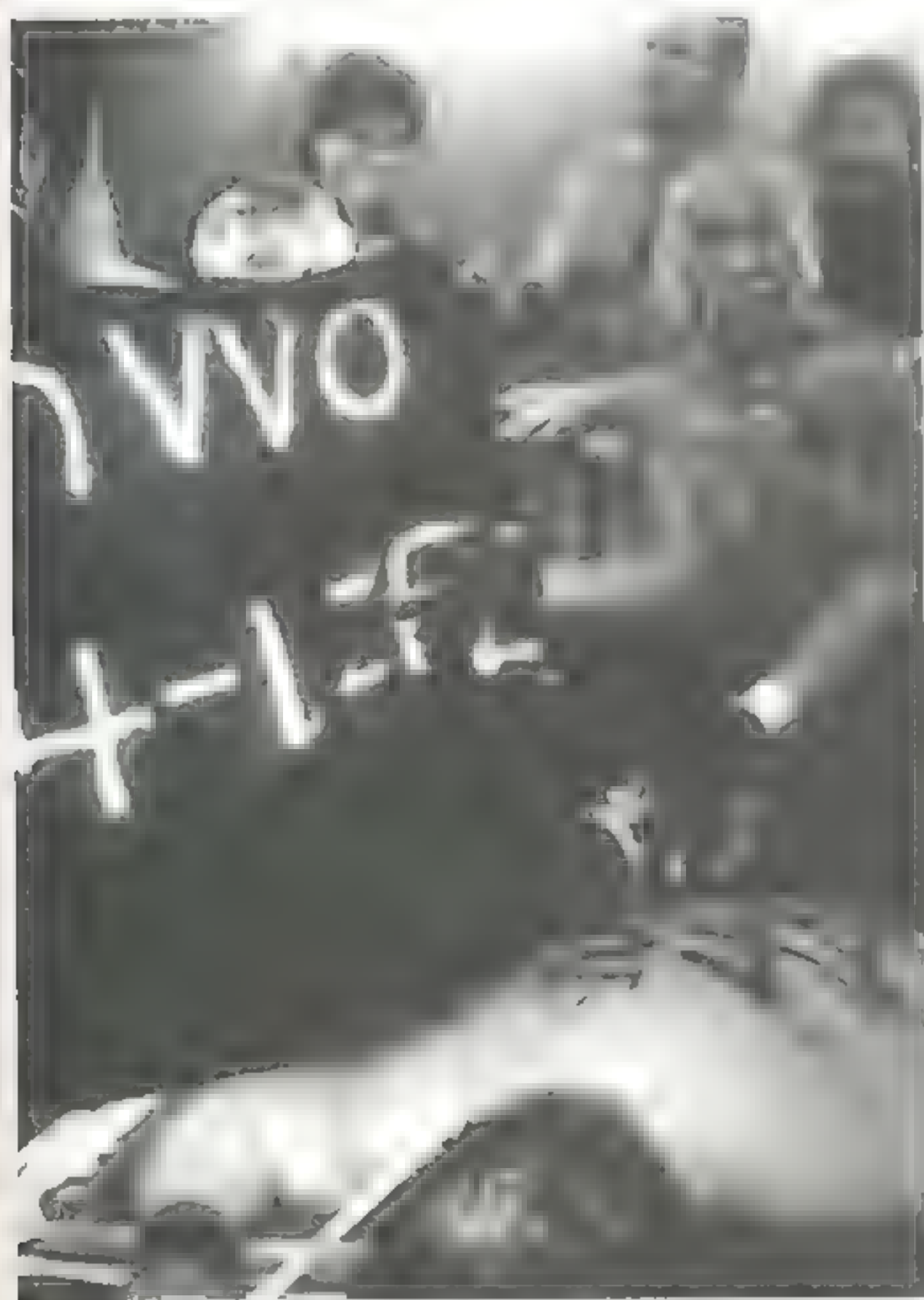
——日本人もヒロ斉藤とか天山とかどんどん加入していって。

阿部　なんか日本でも猫も杓子もnWoみたいになって、その敷居の低さにはちょっと憤りを感じましたね。一部のアメプロマニアにしてみれば、nWoを上陸させてくれた新日本にありがたみもあったんですけど「誰もがnWoTシャツ着れちゃうのはちょっとな」っていう。それこそ蝶野と武藤だけでいいじゃないか、と。

——要はやっぱりカッコいい奴じゃなきゃダメだってことですよね。本場のnWoに比べると、日本はちょっとスケールが小さい感じはしましたね。実況席の辻アナを襲撃するとか、標的が小さいというか(笑)。

阿部　nWoTシャツを着ろ着ないとかね(笑)。ファン時代のあの頃、僕は「nWoと猪木さんと絡んでたら最高におもしろいのに!」と思って観てましたよ。

——確かに猪木さんに「nWoTシャツを着ろ」って要求してたらおもしろかったですね!

阿部　まんまパクリじゃないですけど、猪木さんがnWoの試合に乱入してきて本隊の味方をするかと思い

nWoといえば、目をつけた選手にメンバーTシャツを渡して勧誘するのと同時に、倒した相手の背中に黒のスプレーで「nWo」と書き殴るのが定番シーン。日本では「nWo」以外に蝶野が、小原道由に「おまえは犬だ」と罵りながら「犬」とスプレーしたことも。

きや、Yシャツを脱いだらnWoTシャツを着てたり(笑)。

——それは観てみたい(笑)。でも、蝶野さんはnWoの使い方は絶妙だったんじゃないですか？

阿部 そうですね。嗅覚が鋭いというか「これを日本でやったらウケる」って思ったんでしょうね。実際、僕ら仲間内でもnWoTシャツが日本で輸入販売される前に、「これ、新日で売ったら儲かるだろうなあ」みたいな話はしてましたからね。僕、当時『WCWマガジン』っていうのを海外から定期購入してたんですけど、そのグッズ紹介コーナーとか見ると「このTシャツカッコいいな。どこで買えるのかな」っていつも思ってましたから。

——デニス・ロッドマンのTシャツとかありましたよね。

阿部 ロッドマンっていうチョイスも最高ですよ！ チャールズ・バークレーじゃなくてロッドマンってところが(笑)。やっぱりタレントパワーっていうのもnWoあたりから見直されてきたと思うんです。かつてWWFがシンディ・ローパーとかいろんなタレントを使ってやってましたけど、一時期それがなくなったあたりでポッと出てきたのが、あのお騒がせ者の悪童だったっていうね。

——それもいいセンスしてますよね。

阿部 ホント、最盛期のnWoの戦略はパーフェクトだったんじゃないですかね。nWoTシャツって日本でも一般の人が着てましたから。そういえば僕が3～4年前に名古屋に仕事に行ったとき、ホームレスの人がnWoTシャツを着てましたよ(笑)。

——ダハハハ！

阿部 たぶんその方はnWoのことを知らないかもしれないですけど、そのくらい広まってたってことなんですかね(笑)。

——nWoも、一時期はあまりにも流行りすぎてダサいんじゃないかって感じでしたけど、いまだったら逆に再評価できるというか。

阿部 僕、新日本の仕事に関わり始めたときに、菅林社長が「ようこそ新日本へ」ってnWoのGジャンくれたんですよ。大事にショーケースに飾ってありますけど。

——やっぱりnWoで当時のプロレスが洗練された感じはしますね。

阿部 そうですね、ロゴ一つとってもカッコいいですし。でも、やっぱり名勝負は一つもないんですよ(笑)。

——確かにそうかもしれない(笑)。

阿部 だから完全にアメプロというか、プロレスの概念をぶち壊しましたよね。出てきて騒いで終わりっていう(笑)。テーマ曲なんかもカッコよかったですし。ロックでもヒップホップでもブルースでもない凄く洗練された音楽で。だからnWoは一つ一つがスタイリッシュで、「nWoだったら何やってもカッコいい、何やっても許される」みたいなのが確立されたんじゃないですかね。

あまりの人気ゆえ、そのパロディも多数誕生したnWo。エディ・ゲレロ率いるlWo（ラティーノ・ワールド・オーダー）、ECWではbWo（ブルー・ワールド・オーダー）、そして大日本プロレスではhWo（北海道ワールド・オーダー）が登場。

——ホント、破壊王や健介さんじゃなくてよかったというか(笑)。でも、日本の軍団抗争を参考にして海を渡ったものが、また蝶野さんの手によって戻ってきてっていうのもおもしろいですよね。よくnWoは日本の新日本vsUインターを参考にしたって言われてますけど。

阿部 そうそう。でも、外国人がこの歴史を知ってるわけないだろうし、新日vsUインターなんていってもワケわからないと思うんですよ。だけどそれを観ておもしろいって思ったんだから、それなりのエネルギーがあったんでしょうね。

——なんか長州力&永田裕志vs安生洋二&中野龍雄を観たスティーブン・リーガルやホーク・ウォリアーが控室で興奮してたらしいですね。「今度は俺がやってやる！」って(笑)。

阿部 ああ、それ、永田さんから聞いたことあります(笑)。

——nWoの原点が永田さんだったかもしれないのも凄いというか(笑)。

nWoはプロレスの概念をぶち壊しましたね。騒いで終わりっていう(笑)

阿部 ハハハハ！ でも、新日本もWCWと提携しているなかで最高のタイミングでnWoが生まれたんで、その恩恵は大きかったと思いますよ。蝶野さんの黒のカリスマ路線もnWoで定着した感じですし。

——よく他団体もnWoのパロディとかやってましたよね。

阿部 そうそう、ECWやCMLL、日本の団体でもパクってましたから。その波及効果は凄かったですね。でも、最終的には詰め込みすぎちゃったから本家nWoの人気も長続きはしなくて。スティングとホーガンの抗争が終わったら、観る側のムードも「もういいかな」って感じになってたと思いますよ。ちょうどそれと時を同じくしてストーンコールドの人気がドカーンってなって、WWFが元気を取り戻してきたんですよね。

——WWFにもnWoの影響はあったんですかね？

阿部 やっぱりnWoによってプロレスを観る年齢層って広がったと思うんですよ。それまでは年寄りか子どもしか見てなかったのに、ちょっとハレンチな部分を見せる番組作りになってからは20代後半から40代までの層が増えてきて。そういえばなんかの本で読んだんですけどナッシュとホールが抜けたあと、ビンスがトリプルHに「なんであいつらが辞めることを教えてくれなかったんだ？」って怒って、トリプルHがプッシュされる構想が後回しにされたんですよね。それで代わりにストーンコールドがプッシュされて。だからトリプルHにしてみたらナッシュとホールが辞めたことで、いい迷惑をこうむって出世が遅れたっていう(笑)。

——トリプルHがnWoの被害者に(笑)。

阿部 でもその代わりにプッシュされたストーンコールドがブレイクしてWWFも一気に躍進して。そう考えるとそれを引き起こした遠因がnWoっていうのも皮肉ですよね。

——なるほど。

阿部 しかし、nWo全盛期はプロレスにとって本当にいい時代でしたよ。完全にポップカルチャーとして定着してましたから。日本でももう一回こういうムーブメントになるような仕掛けとかないですかね？(笑)。

——nWoのときは蝶野や武藤のようにトップの選手がうまくつないでくれたからアメリカでの大ブームを実感できましたよね。

阿部 もう、いまこそ『プロレス・スターウォーズ』の時代じゃないですか？ 日米股にかけて活躍するような選手の登場に期待したいですね！

【10年3月25日／都内・新日本プロレス事務所にて収録】

あべ・たけし■1972年7月16日、東京都出身。99年よりWWE関連書物に携わるフリーライターとして活動。06年より株式会社ユークスのグループ会社、株式会社ファインに所属し、新日本携帯サイト、会場演出の進行などに関わる。

第53回

いい作品を観た!

花くまゆうさく **豆リングの汁**

最近一番よかったのは、なんといっても修斗世界フェザー級タイトル戦での勝村周一朗! 試合前のVTRでの発言、意気込みがビンビン伝わってくる試合中での表情、そんでセンセーショナルなフィニッシュと素晴らしいじゃないですか。

すべて引っくるめて、何か作品を観たような感じです。ラバーガードからセットして首を極めたニンジャチョークの流れも美しい。海の向こうでエディ・ブラボーが絶賛してるのもうれしいエピソードです。

同じ日のDREAMの菊野もすばらしかった。青木の腹に蹴りしたら、その後どうなるか観たいとつくづく思う。

この日は、前田を蹴り倒した三角絞め好きの人や長南もよかった（サムライTVなど観てると、長南の発言はいつも好感持てます）。

五味のUFC完敗は残念。でも、やっぱりUFCで闘う姿が一番ノレるとつくづく思った。日本人でも、外国人でも強い人はUFCへ行ってほしい。

Hanakuma Yusaku
◎「息もできない」や「第9地区」もいい作品。

金ちゃんのどこまでやるの?

第45回 トム・バートンの訃報の巻

UWFインターの常連外国人選手だったトム・バートン選手が亡くなったって聞いて、凄く驚いたよ。バートンの訃報は、リングス金原道場の道場生がネットで知って教えてくれたんだけど、心不全だったらしいね。

バートンはUインターの旗揚げ戦から参加してて、しかもメインイベントで高田（延彦）さんの相手をした選手だからね。俺も若手の頃、何度となく闘った相手だからさ、ビックリしたしショックだったよね。

そういえば、俺がガイジン選手と初めてスパーリングしたのもバートンだったよ。バートンが初来日して、旗揚げ戦の前にUインターの道場に来たときさ、宮戸さんに「金原、バートンとスパーリングやってみろ」って言われてやったんだよね。

宮戸さんとしては、初めて来たガイジンレスラーがUインターをナメないように、まずは若手とスパーリングさせて「ウチの選手はグリーンボーイでもこれだけの実力があるんだぞ」っていうことをわからせようとしたと思うんだよね。だからスパーリングをやる前に、宮戸さんに「わかってんだろうな」みたいなことを言われたんだけど、こっちは責任重大でまいったよ（苦笑）。

しかも、俺は当時まだデビューもしてなくて、関節技の極め方とかもよく知らないなかでやってさ、俺も極められなかったけど、バートンにも取られずに終わったんだけど、ボロボロにされたら何を言われるかわからないからね。こっちも必死だったのを覚えてるよ。

あとバートンは、ほかのガイジン選手と比べて子どもっぽいところがあるというか、なんか下級生に対して威張る上級生みたいなところがあったんだよ（笑）。ゲーリー（・オブライト）なんかは大人で、俺たちの兄貴分って感じなんだけど、バートンは俺たち若手に対して威張るんだよね。

当時はUインターの若手がガイジンの世話もしてたんだけど、その雑用ばかりしてる姿を見て、高山くんのことを「ヘイゾーさん」とか呼んでたんだよ。どんな意味かと思ったら、雑用係みたいな意味のスラングなんだって。それで高山くんも怒ってて「あいつだけは許せない」って、試合でボコボコに蹴りまくってたんだよね（笑）。

あと俺と高山くんの試合が第1試合で組まれたとき、メインがバートンvsゲーリーだったんだよ。そしたら「おまえらまた前座か。俺はメインイベントだぞ」とか言ってきてね。俺らから見たら、「メインっていっても、おまえなんかゲーリーの噛ませ犬じゃん」とか思ってたんだけど（笑）。

ホント、バートンはペーペーの俺たちに対して、大人げないヤツだったんだよね。だから、俺たちもバートンと試合が組まれると、普段の新人生活のストレスを爆発させるようにガンガンいってね。でも、バートンは試合ではいくらガンガンいっても、試合後に文句言ってくるようなことはなかったから、そこはプロだったよね。

まあ、クセがあるレスラーだったけど、若手だった俺たちとはよく一緒に練習もしたし、俺にとっては一番試合をしたガイジンだし、思い出深いレスラーであることは間違いないね。数年前にゲーリーも亡くなっちゃったし、一緒にやってたメンバーがこの世からいなくなってしまうっていうのは、やっぱり悲しいよ。

どうか安らかに眠ってください。トム・バートンのご冥福をお祈りします。

Hiromitsu Kanehara
◎本音炸裂コラムほぼ毎日更新中!
金原弘光オフィシャルHP
http://www.hiromitsu-kanehara.com/

kamipro books

驚ガク! 衝ゲキ!! kamipro booksシリーズ! 死闘インタビューの歴史的目撃者になれ!!

PRIDEはもう忘れろ!

フジテレビショックから始まった日本マット界激動の歴史を追う!

フジテレビショックは日本格闘技界に何をもたらしたのか? 本誌でおなじみのライター橋本宗洋が送るMMAクロニクル。本書は、本誌携帯サイト「kamipro Move」で好評連載中の週刊コラムを厳選収録したものである。PRIDE凋落の時期からスタートした連載は、あらためてPRIDEの存在意義、役割を見つめ直し、そしてPRIDE消滅後、それでも生き続ける格闘技のおもしろさを綴っている!

B6変型判 336ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

魔王 秋山成勲 二つの祖国を持つ男

秋山成勲なのか チュ・ソンフンなのか——。

2006年12月31日大晦日「Dynamite!!」秋山成勲vs桜庭和志戦で発生したクリーム塗布事件。この一件以降、秋山は日本では悪質な反則選手、片や韓国では悲劇の元・在日韓国人と、評価が真っ二つに分かれた。本書籍は秋山成勲が、柔道界での挫折ののち、総合格闘技家としてデビューして"魔王"と呼ばれる怪物に至るまでを検証するノンフィクションである。

B6変型判 264ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

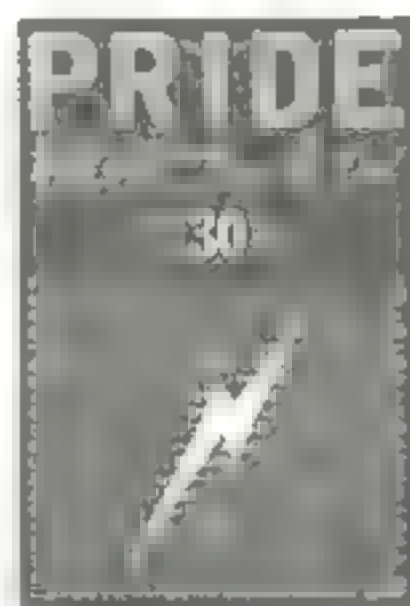
新日本プロレス学習帳

"業界の盟主"の魅力を凝縮したインタビュー12連発!

★鈴木みのる&獣神サンダー・ライガー★小林邦昭★平田淳嗣★金本浩二★山本小鉄★新倉史祐★田中秀和★中西学★天山広吉&金原弘光★マサ斎藤★永田裕志★中邑真輔

「kamipro」に掲載された新日育ちのレスラー&関係者のインタビューが一冊に! これを読めば老舗団体の過去・現在・未来かまるわかり!

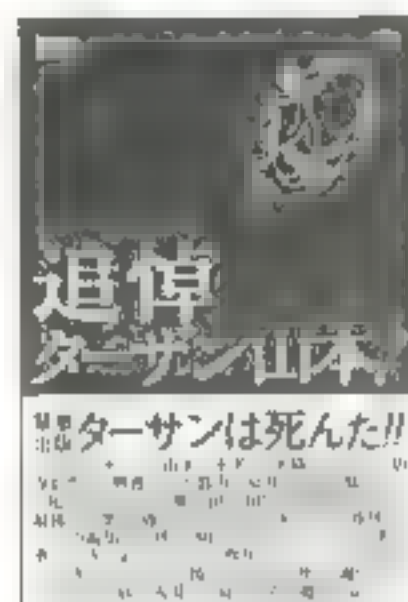
B6変型判 320ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

PRIDE機密ファイル 封印された30の計画

ついにその秘密のベールを解禁!! PRIDE幻の超極秘プロジェクト!!

★高田vsヒクソンの前座に前田日明登場!?★長州力、橋本真也、船木誠勝の参戦計画★ホイスvsケアー消滅の計画★PRIDEが小錦獲得に動いた!?★"皇帝"ヒョードルを二度破った男 ほか

その消滅から早2年——世界最高峰のリングに封印された30の計画を発掘! さらに青木真也、三崎和雄ら6大インタビューも同時収録!

B6変型判 296ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

生前追悼 ターザン山本!

え、ターザンが死んだ!? 90年代プロレスを徹底検証!

★浅草キッド★いしかわじゅん★堀辺正史★更級四郎★松本晴夫★杉山頴男★谷川貞治★山口日昇★金沢克彦★市瀬英俊★小島和宏★菊地成孔★Oka-Chang★原タコヤキ君★椎名基樹 ほか

「週刊プロレス」編集長として辣腕を振るった山本さんの人生を通して、90年代プロレスブーム、はたまたプロレスという生き様を振り返る!

B6変型判 304ページ
定価=1,470円(本体1,400円+税)

八百長★野郎

ミスター高橋本から7年…… "呪いなき"時代のプロレス再入門書!!

★マッスル坂井★大槻ケンヂ★菊地成孔★森達也★杉作J太郎★ミスター高橋★菊池孝★高木三四郎★ハチミツ二郎★鶴見亜門★プロレス業界初"台本"全文掲載!

カミングアウト当事者から元ファンの知識人まで総動員してプロレスを再考! "プロレスの向こう側、「マッスル」"の世界に迫る!

B6変型判 296ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

U.W.F.変態新書

ダメな大人たちへ捧げる "変態"とUWFの晩餐!

★UWF★前田日明★船木誠勝★髙田延彦★桜庭和志★ターザン山本!★キン肉マン★PRIDE★プロレス★変態とは何か?(菊地成孔スペシャルインタビュー)★変態解説

プロレス界の一大潮流となったUWF。そのUWFに人生を学び、人生を狂わされた変態的プロレスファンたちが、UWF神話を語り倒す!

B6変型判 296ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

プロレス狂の詩 夕焼地獄流離篇

プロレス狂がシビれる 凄玉たちのインタビュー集!

★ジェラルド・ゴルドー★後藤達俊★小畑千代★ザ・グレート・サスケ×亜濃潤一郎★中島らも★大槻ケンヂ★シーザー武士★ダニー・ホッジ★高山善廣×金原弘光★真樹日佐夫×三池崇史

メインストリームからはみ出さずにはいられなかったファイターや、リング内外の裏表を凝視してきた関係者へのインタビューがテンコ盛り!

B6変型判 304ページ
定価=1,890円(本体1,800円+税)

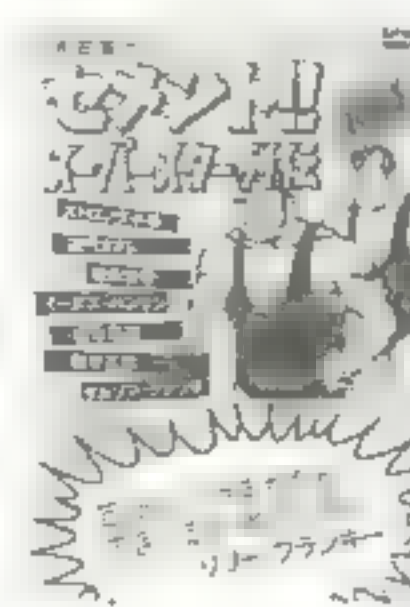
底なし沼 活字プロレスの哲人 井上義啓 一周忌追善本

井上義啓とは底が丸見えの 底なし沼である ——!!

★「週刊ファイト」&「SRS・DX」激筆再録★「猪木は死ぬか」、「不在証明あるいは猪木へのレクイエム」★新間寿★夢枕獏★ターザン山本&吉田豪★「kamipro」ラスト喫茶店トーク ほか

"活字プロレスの父"井上義啓氏の一周忌追悼本!! 氏を偲ぶインタビューや、人生最後の旅模様を振り返るエピソードも収録!

B6変型判 312ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

吉田豪のセメント!! スーパースター列伝 パート1

吉田豪インタビュー11連発!! インタビュー本の最濃傑作!

★ストロング小林★阿修羅原★康芳夫★倉持隆夫★サムソン・クツワダ★猪木快守★イーデス・ハンソン★田中健一★小川宏★鶴見五郎★田代まさし

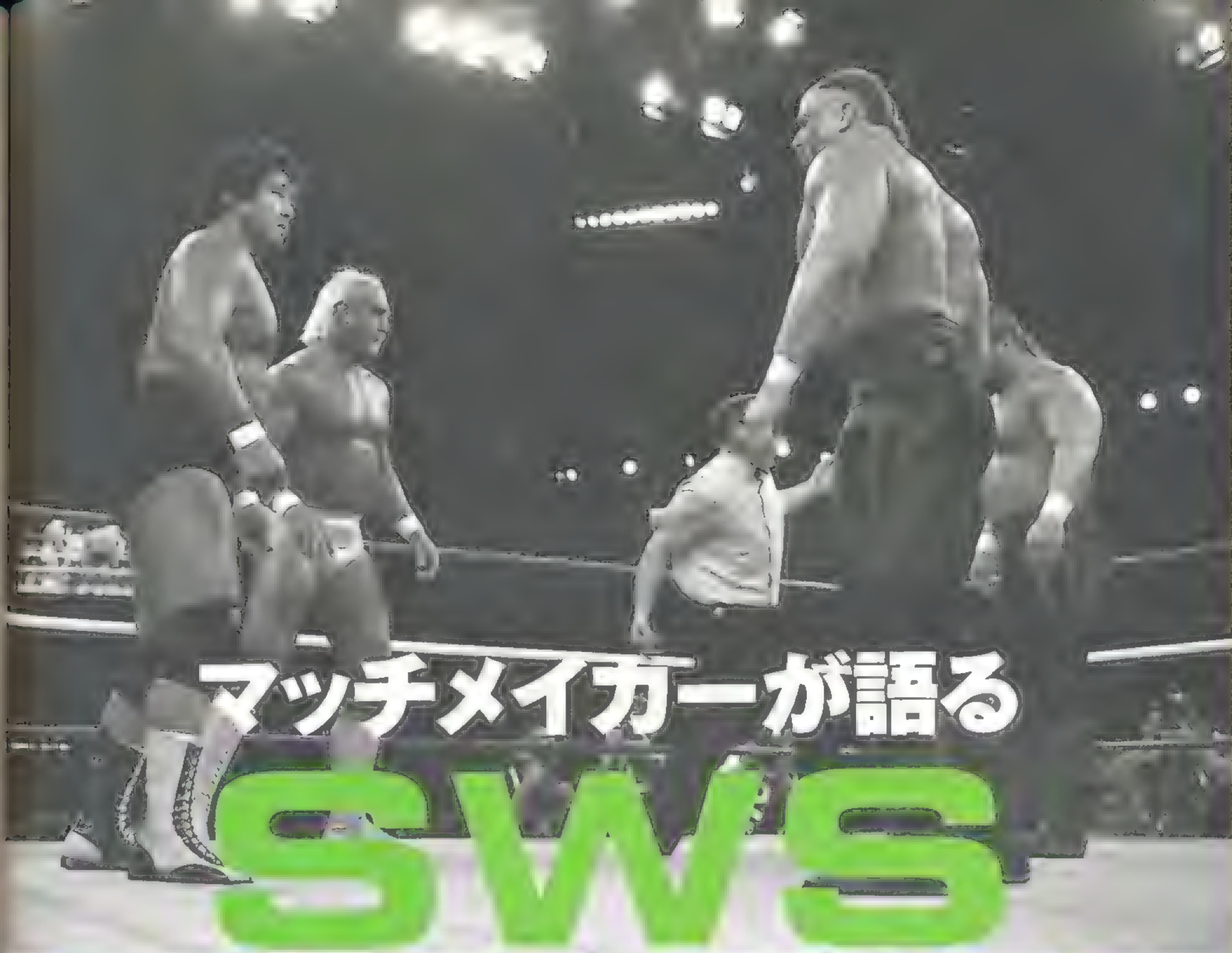
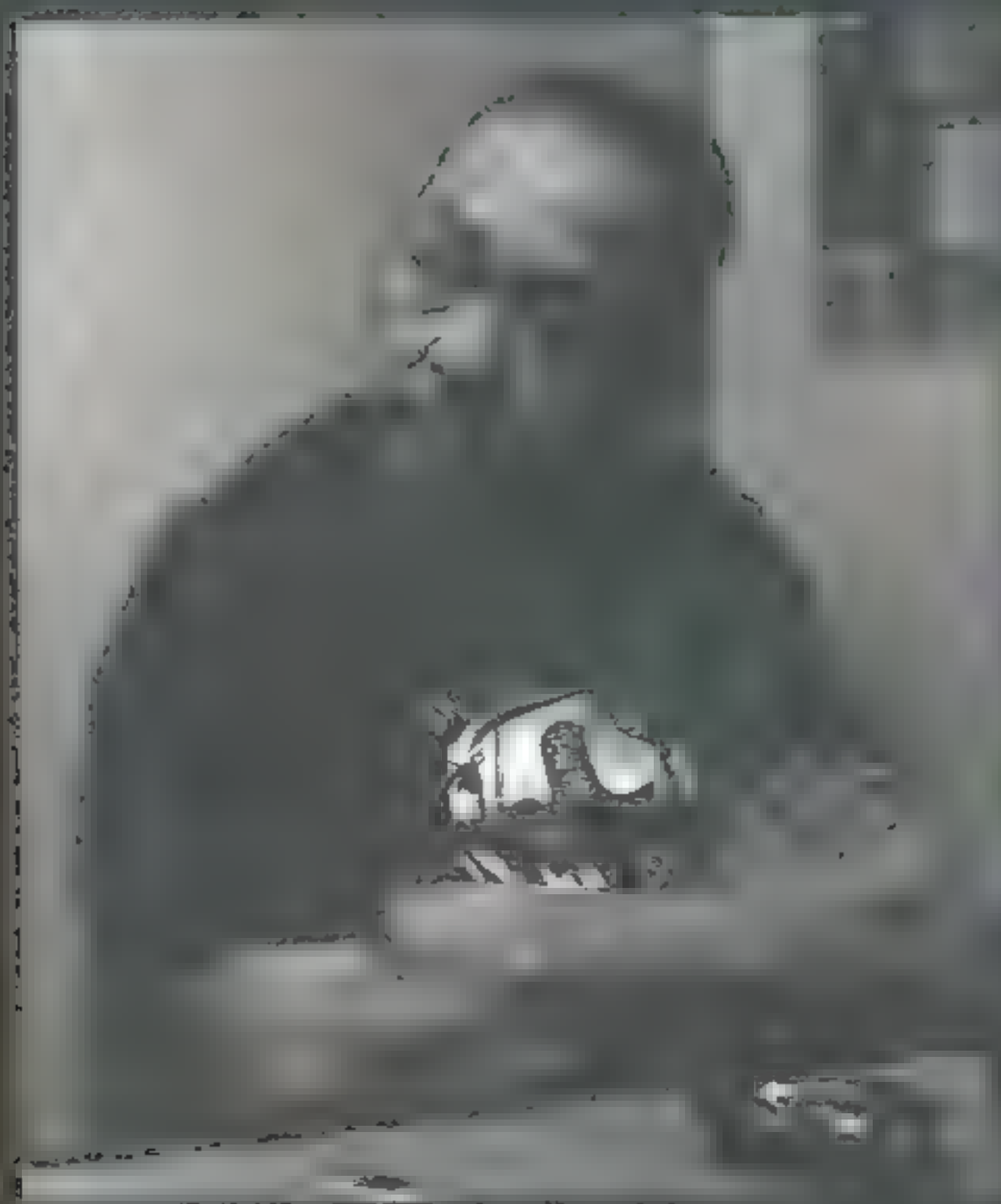
プロインタビュアーの吉田豪が、『紙のプロレスRADICAL』誌上で聞き手を務めたロングインタビューの一部を完全徹底再録!!

B6変型判 344ページ
定価=1,890円(本体1,800円+税)

発行/株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 TEL.0570-060-555(代表)
発売/株式会社角川グループパブリッシング
[エンターブレイン総合サイト] http://www.enterbrain.co.jp/

1990年に突如現われ絶滅した 幻の企業母体プロレス団体

SWS その遺産と後遺症

試合のスタイルでプロレス界を変えたのが武藤敬司なら、
団体のシステムを変えたのは、このSWSだ。一般企業のメガネスーパーが母体となり、豊富な資金を
バックにプロレス界に参入してきたが、さまざまな要因によりあっさりと崩壊してしまったSWS。
ここでは、そのSWSの遺産と後遺症について迫ってみた。

マッチメイカーが語る SWS 舞台裏の真実

ザ・グレート・カブキ

「Sがなかったら プロレスは旧態依然の ままだったよ」

90年代のプロレスを語るうえで欠かせない団体といえば、90年にメガネスーパーが母体となり旗揚げしたSWS。潤沢な資金で選手を集めたが、『週プロ』のバッシングや内部分裂等、ズンドコに次ぐズンドコであえなく崩壊。当時のSWS内部では何が起こっていたのか? マッチメイカーを務めていたカブキに当時の話を聞いた。

聞き手／堀江ガンツ　試合写真／平工幸雄

——今回はSWSについて語ってもらいたいんですけど、カブキさんにとっては、あんまりいい思い出じゃないですか？

カブキ　そうだね（苦笑）。

——すいません（笑）。でも、SWSの誕生というのは90年代以降のプロレスを語るうえで欠かせないとも思うんですよ。

カブキ　最初は希望があったからね。待遇もよかったし、あれがなかったら、旧態依然としたプロレス界のままだったよ。そういう意味じゃ、日本のプロレス界を変えたよね。

——カブキさんがSWS旗揚げを知ったのはいつだったんですか？

カブキ　源ちゃん（天龍源一郎）が全日本を出るっていうとき。（90年4月の）横浜文体の試合後に知ったね。

——天龍さんから直接聞いたんですか？

カブキ　そう。ビックリしたよね。そのとき「源ちゃんが出るなら、俺も出よう」と思ったよ。天龍選手が出たら、あと残ってるの何もないもん。

——何もない（笑）。でも、カブキさんは引き止めなんかもかなりあったんじゃないですか？

カブキ　いや、全然ないよ。ジャンボ（鶴田）と組んでベルトもらったけど（世界タッグ王座奪取）、すぐ返したしね。馬場さんに辞めるって伝えたときも、（馬場ボイスで）「おお、おまえもかあ」って言われただけだよ。

社長に直訴してマッチメイクを変更させるヤツがいたんだよ

——「おまえもか」だけ（笑）。それでSWSに移るわけですけど、カブキさんは最初からマッチメイカーだったんですか？

カブキ　そう。やらされてね。

——「やらされた」って言うくらいだから、一番大変な思いをされたと思うんですけど（笑）。

カブキ　Sは寄せ集めだったから、勝手なことばかりやってる"俺が俺が"ってヤツが多かったからね（苦笑）。そういう面では苦労したよ。それに"職人"が少なかったね。ホントにレスリングができたのは、全日から行った選手だけだった。ほかはひどかったもん。おまえら試合やったことあんのって（笑）。

——そんな感じでしたか（笑）。寄せ集めでプロレスの質や考えが違うっていう意味では、全日本vsジャパンプロレスのときとは違うんですか？

カブキ　全然違う。長州はなんだかんだいって仕事ができたもん。それにジャパンには寺ちゃん（寺西勇）もいたし、浜ちゃん（アニマル浜口）もいたし、職人が揃ってたからね。

——でもSは仕事のできないレスラーがいましたか（笑）。

カブキ　目先の金で来ちゃうヤツとかね（笑）。やっぱり自分がよければいいってヤツばっかりじゃ、プロレスは絶対にうまくいかない。SWSを盛り上げるためにはどうしたらいいかって考えがないヤツらが多すぎたからね。ぬるま湯に入って、ただ試合をこなして給料をもらおうって感じのヤツが多かったよ。

——プロレスラーって自分でお客を呼んで、それでギャラをもらうというのが、もともとの基本ですよね。

カブキ　そう。本来、客が入らなきゃメシが食えないんだから。そのためには、「この会社の誰を持ち上げようと」なったら、それはみんなでやらなきゃいけない。でも、Sはそうじゃなかったんだよ。会社が売ろうとした選手でも「あいつは気にくわないから、俺はやらないよ」みたいなことがまかり通ってた。

——本来プロレスは、誰かを上げることによって、みんなの利益になるっていうことですよね。

カブキ　そういうこと。それがまったくできてない。いまのプロレス界もそうよ。"俺が俺が"ばっかりで。

——それをSは先がけてやっちゃった、と（笑）。そんななかで天龍さんはトップとして団体をなんとかもり立てようとしてたし、カブキさんもマッチメイカーとしてそれをしようとしていたわけですよね。

カブキ　なんとか客が入るようにしなきゃいけないって、そればっかり考えてた。でも、メガネスーパーの田中八郎社長（当時）が理解のある人だったから、それは助かったよ。

——Sはフロントがプロレスを知らない人だったということも問題でしたか？

カブキ　いや、それは問題ない。一番の問題はマッチメイクを組んだあと、自分の都合のいいマッチメイクにしようとして「こんなマッチメイクはダメだ」って社長に言いにいくヤツがいるのよ。

——え～っ!?　マッチメイク変更を田中社長に直訴ですか？

カブキ　そうすると、それを聞いた田中社長が「もう少しなんとかなりませんか」って言ってきてね。マッチメイクを作っては変え、作っては変えの連続よ。

——それはマッチメイカーとしては、やってられないですね。

カブキ　やってられない！

——そういうのって、どこの国、どこのテリトリーでもありえないんじゃないですか？

カブキ　ありえないね。ブッカーが「ブッキングはこれで」って言ったらレスラーはやるしかないんだから。それをこなすのが選手であってね。それをいちいち変えろとかなんとか言ってたら、なんにも決まらないよ。

——マッチメイカーって野球の監督や、映画監督みたいな立場なわけですよね？　それをオーナーや配給会社に選手や役者が文句を言って、オーダーや脚本を変えさせるようなもんですよね（笑）。

カブキ　社長も「マッチメイクは現場に任せてますから」って突っぱねればよかったんだけど、ちゃんと話を聞く人だったからね。

——そんな状況でマッチメイカーをやっていたら、相当な心労だったんじゃないですか？

カブキ　ストレスが溜まって、頭にできものがブァ～っとできてね。そして刺身とか生ものが食べられなくなった。

——体質が変わっちゃったわけですか!?

カブキ　変わったね。あのストレスはひどかった。

——そんな意見がバラバラだったからか、SWSはへんな試合も多かったですよね。

カブキ　多かったね。

——たとえば、北尾光司vsジ・アースクエイク・ジョン・テンタ戦は、なんでおかしくなっちゃったんですか？

カブキ　あれはパラエストラとか道

マッチメイカーが語る SWS崩壊の真実

北尾は周りに焚きつけられたのに テンタにビビッちゃったんだよ

場・撒の連中が北尾を焚きつけて、それでおかしくなっちゃった。

——「やっちゃえ」ってことだったんですかね？

カブキ そうそう。「横綱なんだからジョン・テンタなんてやっちゃえ」って焚きつけてるんだけど、北尾本人はビビッちゃってるわけ。

あ、北尾選手はビビっちゃってたんですか。

カブキ だって相撲なら横綱だけど、ジョンはアマチュアレスリングも強いし、身体だって大きいしね。それで周りは「カブキが横綱を潰すためのマッチメイクを組んだ」とか言ってね。何考えてんだか。

——北尾vsテンタ戦は91年の3月30日に東京ドーム、4月1日に神戸ワールド記念ホールと2連戦でしたけど、神戸の試合前にカブキさんと北尾で揉めたんですよね？

カブキ そう。北尾が「テンタとやらねえ」って言いだしてね。それは焚きつけがあったからなんだけど。

——あの2連戦を組んだ意図はどこにあったんですか？

カブキ 北尾を上げなきゃいけないんだけど、ジョンも殺したくない。またあの頃の北尾には、強いヤツとやって這い上がる姿をファンに見せることも必要だったしね。それに2連戦にして身体の大きい者同士で迫力ある試合を2試合やれば、これからいろんな組み合わせができるのよ。

そういう考えで組んだら、いろんな横やりが入ってね。

——それは荒川さんとかですか（笑）。

カブキ だろうね（苦笑）。わけのわからないことやるのがいっぱいいたから。一回目のドームでは、「藤原と天龍をやらせたら？」みたいな話が来るんだよ。でも、何のストーリーもないなかでやっても客来るわけないじゃない。

——夢のカードといえば聞こえはいいですけど、唐突すぎますよね。

カブキ そういう話もパラエストラとかの連中が社長に直接話したりして。そしたら田中社長が「カブキさん、天龍vs藤原やらないの？」って言ってくるんだけど、「社長、それをやっても客は入らないですよ」って言ったんですけどね。

——お客が入るためのストーリー作り、マッチメイクをしている最中に横やりが入ってきましたか（笑）。

カブキ ガンガン入ってくる。「俺がメインイベントやらないと」なんて言ってたヤツもいたんだけど「おまえで客が呼べるかよ」って（笑）。

——呼べんのかオリャーって感じですね（笑）。

カブキ とにかく、当時は内部がバラバラで、その調整がたいへんだったよ。

——そうやってカブキさんと天龍さんが二人で悩んで、一生懸命やっていたのに、雑誌ではボロクソ書かれてたわけですよね（笑）。

カブキ あれはね、馬場さんがアンダーテーブルマネーでターザン山本に書かせてたんだから。

——そうでしたか（笑）。

カブキ で、社長がその雑誌を見て言いにくるわけ。「雑誌にもっと大きく取りあげられるように、話題を作りなさい」って。

——「話題じゃなくて金だよ」とか思いながら（笑）。

カブキ そのあと『週刊プロレス』を取材拒否したでしょ？ そしたら、媒体が一つ減るわけだから、残った媒体でより大きく取りあげられなきゃいけないってことで、よく社長から「もっと話題作りをしてください」って言われたよ。

これまた無理難題を。

カブキ でも、何かやらなきゃいけないから、Sの終わりの頃に大仁田がやってるFMWの会場に行ってみたのよ。当時は大仁田の人気が急上昇してるときだったから、俺と大仁田が会えば話題になると思ってね。そしたら今度は「カブキが引き抜きに来た」みたいに書かれて。「馬鹿野郎！ こんなしょっぱいヤツら引き抜くかよ！」って思ったけど（笑）。

——また悪者にされましたか（笑）。

カブキ 単なる話題作りのためだって。だから最後はホントにさじを投げる感じだった。あれ以上やってたら、身体壊してたよ。

——でも、SWSはもったいなかったですね。WWEとの提携ができて、大きなスポンサーがいて、プロレスをもっと大きくできるチャンスでもあったわけですよね。

カブキ まあ、メガネスーパーもプロレスに対して、そんなに長い時間をかけられない感じだったから、しようがないけどね。でも、SWSができてよかったんだよ。最終的には、あいうかたちで終わっちゃったけど、Sができたことで、新日も全日の選手も潤うようになったし。業界のファイトマネーの底上げになったんだから。本来はみんな天龍選手には頭が上がらないはずなんだよ。

——確かに天龍さんがすべてのきっかけですもんね。

カブキ やっぱり天龍源一郎が行ったことで、Sっていうのが話題になったんだから。ジョージと俊二、谷津嘉章じゃどうにもならないよ（笑）。

馬場さんも天龍さんが行って、そのバックには企業がついてるってことで、ターザン山本を抱え込むまでやったわけですもんね。

カブキ そうそう。まあ、いろいろあったけど、あんな短い時間のなかで東京ドーム大会を二回やって、その中心で関われたっていうのは、凄くいい勉強をさせてもらったよね。だから田中社長には感謝してるよ。

——カブキさんの知らない新しいアメリカンプロレスが学べた、と。

カブキ 舞台装置だって、一本道の入場花道を最初に作ったのはSWSだから。新日本のドームがやってることは、Sがやったことだからね。

あの入場花道は総合格闘技のビッグイベントでもおなじみですけど、そのルーツはWWEと提携したSWSにあったわけですね。

カブキ 俺自身、SWSでは音響、照明、いろんなことを勉強させてもらったよ。SWSがそういう面を変えたよね。時代を進めたんだよ。

——現代プロレスはSWSから始まった、と。

カブキ そう言ってもいいと思うよ。これで、まともな職人が揃ってたら、もっとうまくいってたんだろうけどね（苦笑）。

【10年3月26日／都内・「BIG DADDY酒場 かぶき・うぃず・ふぁみりぃ」にて収録】

SWSが産み落とした堕天使

高野拳磁伝説

90年代インディーのカルトヒーローを杉作J太郎が語りまくる!

——Jさん、今回は「90年代特集」なんですよ。

杉作　なんでまた「90年代」の特集をしようと思ったんですか？

——やっぱり90年代は最後のプロレス黄金期じゃないですか。

杉作　でもあの頃、僕は目の前が真っ暗な時代でしたけどね（笑）。

——そうでしたか（笑）。

杉作　プロレスも高野拳磁のPWCしか観てませんでしたからね。高野のビデオまで出したりして。

——『野良犬伝説』ですよね。

杉作　いま考えれば、よく出しましたよね。

——では、今日はそんな高野拳磁の話をうかがわせてください。

杉作　高野の話でいいんですか（笑）。

——高野拳磁も90年代を代表するカルトヒーローですからね。90年代のあだ花というか（笑）。杉作さんは、なぜPWCを見始めたんですか？

杉作　当時、東芝EMIの木目さんという方と、よく一緒にプロレスを観に行ってたんですけど、たまたま「PWCに行ってみようか」って話になったんですよね。それで観てみたら、すっごいおもしろかったんですよ。高野のやられっぷりが（笑）。

——やられっぷりにほれた（笑）。

杉作　（将軍KY）ワカマツさん率いる宇宙パワーと抗争してたんですけど、変わったデスマッチが組まれて、そこに興味を持って行ったんですよね。

——どんなデスマッチだったんですか？

杉作　たしか「エイリアンパワーボード・デスマッチ」という形式で、「エイリアンパワーボード」ってどんなもんだろう？って思ったら、単にベニヤ板に有刺鉄線を貼りつけただけのボードが、コーナーに二枚置かれてるだけのデスマッチなんですよ。

——ベニヤ板がエイリアンパワーボードですか（笑）。

杉作　そのベニヤに高野がサンドされて苦しむんですよ。しかも、ベニヤにサンドされたまま、ワカマツさんがそれをガムテープで止めてるんです。もう笑いすぎて涙が止まりませんでしたよ！（笑）。

——高野拳磁って、悲惨な目に遭うのが絵になるんですよね。

杉作　そうなんですよ！　宇宙パワーの火で燃やされたり。でも、身体がでかいために悲壮感がないから、笑えるんですよ！

——観客大爆笑、でも本人大まじめなんですよね（笑）。

杉作　プロレスであんなに笑ったの初めてですよ！　それがきっかけで、しばらくしてから高野に話を持っていったんですよ。「ビデオを出したい」って。そしたら（拳磁ボイスで）「来てたよね」「笑ってたろ」って言うんですよ。

——杉作さん、リング上の拳磁にバレるほど大笑いしてたんですか（笑）。

杉作　高野いわく「俺は観客は全部覚えてる」って言うんですけどね。ちゃんと試合に集中しろよ！って（笑）。それでビデオを撮らせてもらったんですけど、レスラーとちゃんと仕事したのは、これが初めてでしたね。

——初めて一緒に仕事したのが高野拳磁（笑）。

杉作　そこから長い付き合いが始まりましたね。僕の家に来たプロレスラーって高野だけじゃないですかね。当時、女性と暮らしてたんですけど、高野がよく0時すぎに来るんですよ。そうすると「ガストに行け！」って彼女をガストに逃がすんですけどね。

——なぜ彼女とは会わせなかったんですか？

初めてPWCの試合を観たとき涙が止まらないほど笑いました！

杉作　やっぱり今後のPWCをどうしたらいいか、高野をどう売ったらいいのか、という話をするわけじゃないですか。そうすると、どうしてもプロレスの内幕の話をすることになるんで、僕らの話を彼女に聞かれたくなかったんですよ。僕はまじめだったんで。

——ケーフェイを守るために彼女を逃がしましたか（笑）。

杉作　女性の口はどこに漏れるかわかりませんからね。ずいぶんいろんな話をしたんですけど、あるとき「大きな大会をやりたいんだ。東京体育館でビッグマッチをやる」って言うんですよ。

——PWCの東京体育館大会計画がありましたか！　普段は屋台村とかでやってるのに（笑）。

杉作　あったんですよ。それで、そのビッグマッチに誰を呼ぶかっていう話になって、その話し合いのなかで出たのが、高野拳磁vsハルク・ホーガン。

——ダハハハハ！　ホーガンがPWCに来るわけないでしょ！

杉作　でも、高野いわく「俺はアメリカとカナダに顔が利く」ってことだったんですよ。だから「世界のプロレスラー名鑑」みたいなの見ながら「こいつ呼ぼうか」とか、そんな話をしてましたね。実現しませんでしたけど（笑）。

——杉作さんの家だけで盛り上がった計画だったんでしょうね（笑）。

杉作　あと高野の家にもよく行きましたよ。PWCの初期だったかな、高野が借金苦で大変な時期があったんですよね。あるとき夜中の2時頃、高野から電話があって「Jさん、ちょっと来てくれない」って言うんですよ。でも深夜2時ですからね「もう電車もないし、またでいいかな」って言ったら「俺、いま何を見ながら話してるかわかる？」って言うんですよ。で「いや、わかんない」「ロウソクの炎だよ」って。電気が止められたんですよ（笑）。

——ダハハハ！

杉作　それで「食うものも何もない」「水しか飲んでない」「おしまいだ」とか言ってるんですよ。しょうがないから、とりあえず家にあったまんじゅう3個持って、自転車に乗って夜中に高野の家に行きましたよ！

——まんじゅう3個で食いつながせましたか（笑）。

杉作　高野も「これでなんとか暮らしていけるよ」って言ってましたね。そんなわけないだろって思うんですけどね（笑）。そこから5時頃まで「プロレスラーとして今後どうするか」みたいな話をしてね。朝になったんで「じゃあ、帰るわ」って言ったら「Jさん、俺、Jさんが帰ったあと、首吊るかもしれない」って言うんですよ。

——嫌ですねえ（苦笑）。

杉作　しょうがないから、もうしばらくいましたけどね。とにかく一時期は金がなかったんですよ。だから、当時は僕もいろいろやりましたよ。プロレ

なんだかんだでカリスマ性はあり、一部、熱[illegible]
[illegible]臭い大仁田のマイクと違い、キザでナルシストて臭い拳磁のアンテー[illegible]ョンはPWC名物だった

高野vsホーガンが実現してたら プロレス界は変わってましたよ

スの原稿はすべてPWCのこと書いてましたからね。『本島』の連載で屋台村でやるPWCの宣伝をしたこともあったんですよ。ところが、そんなときにかぎって高野が来ない。しかも、屋台村の鍵は高野が持ってるし、お客さんは来ちゃうし。それで何度も電話して、ようやく通じたから「来ないの？」って聞いたら「俺は行かねえ。許せねえ」って言うんですよ。なんか屋台村の社長だかオーナーだかが許せないとかで。「許せないって言っても、お客さん集まってるんだから来てよ」って言っても「行かねえ」って。お客さん15人ぐらい来てたんですよ。

——15人（笑）。

杉作　その高野を待っていた15人のなかに、じつはのちの掟ポルシェがいたんですけどね（笑）。

——ダハハハ！　凄いつながりですね（笑）。

杉作　結局、最後は高野が遅れてきたんだと思いますけどね。この屋台村っていうのは、高野がPWCで会場費踏み倒したりして、試合会場が借りられない、道場も家賃滞納で追い出された、「どうしよう？」ってなったときに、提供してもらった場所なんですよ。

——そうだったんですか。

杉作　高野も屋台村を提供してもらえるって決まったときは「いや～、Jさんよかったよ。若いヤツの練習もさせてあげられるし、屋台村だからメシも食わしてやれるしさ」なんて言ってたんだけど、高野がいなくなった瞬間、ワカマツさんがでかい声で「焼きそばでプロレスラーの身体はできない！」って

——ダハハハハ！

杉作　ワカマツさんはまじめなんですよね。

——やっぱり国際プロレスの吉原学校卒業生ですからね（笑）。でも、拳磁とワカマツさんの抗争っていうのは、最高でしたよね。

杉作　よかったですよ。ただ、いま思うと脇が甘いなって思うのは、屋台村で試合したあと、敵対してるワカマツさんと高野が綱島駅から一緒に電車で帰ってましたからね（笑）。

——宇宙規模の抗争も帰りの電車では一時休戦、と（笑）。高野拳磁とワカマツの渋谷ラブホテル街での乱闘っていうのもありましたよね？

杉作　ライブハウス「ON AIR EAST」でやったときですよね。高野とワカマツさんが会場の外まで出て、客もみんな出ていっちゃって、それでみんな戻ってきたら客が増えちゃってるんだよ（笑）。

——ラブホテル街の通行人まで入ってきちゃって（笑）。

杉作　なんかいい時代でしたよね。

——でも、杉作さんがそこまで深く関わってるとは知りませんでした。

杉作　僕は熊本にも行きましたからね

——それって高野拳磁がほんの一瞬、西日本プロレスのエースになったときですか？

杉作　そうです。それで僕を招待してくれたんですよ。で、一緒に焼肉を食いに行ってね。また、高野は異常なくらいたくさん食べるんですけどね。でも、熊本で焼肉食わせてもらって、ようやく高野にいいことしてもらったなって思ってたら、「ワリカンだ」って言うんですよ。

——まったく割に合わない（笑）。

杉作　「勘弁してくれ！」って思ったんだけど、お勘定のとき店員さんが集まってきて「高野さん、サインしてください」って言ったら、急に高野が満面の笑みになって「Jさん、ここは俺が払っとく」だって（笑）。

——ダハハハハ！

杉作　だから悪いヤツじゃないんですよ。

カッコつけで、スター気取りがいいんですよね。

杉作　焼肉屋といえば、東京で食べ放題の店に一緒に行ったとき、焼いてない肉を大量に持ち帰ろうとして、店員に怒られてましたね（笑）。

——そりゃ怒られますよ！

杉作　高野と店員が「なんでだよ！」「持ち帰りは禁止です！」とか押し問答して。「いいじゃねえか！」って言うんだけど、どう考えてもダメだろうって（笑）。

——食べ放題であって、持ち帰り放題じゃないですからね（笑）。

杉作　相当おもしろい人でしたよね。

——その高野拳磁さんと杉作さんが、あまり会わなくなったきっかけはあったんですか？

杉作　PWC末期に下北のタウンホールを主戦場にしてたときは、もう僕らは若干引いてましたね。なぜかっていうと、資金難が続いてたんで、このまま密接な関係でいると、僕もお金をつぎ込まなきゃいけなくなるから

——PWCにつぎ込んじゃいけませんね（笑）。

杉作　でも、高野とPWCは本当におもしろかったですよ。僕も90年代の頭は、普通に新日本を観てたと思うんですけど、高野拳磁と出会ってからは、高野の試合しか観に行ってなかったですから。

——拳磁オンリーですか（笑）。

杉作　それぐらい高野がおもしろかったのと、ほかの団体を観に行ったら怒られそうだったからね。高野いわく「飼い犬を観に行っておもしろいのか！」ってことでしたから。

——野良犬の主張ですね（笑）。

杉作　高野のマイクアピールは名作揃いですからね。

——〝どうする節〟とかですよね。

杉作　そこに矢沢永吉の曲がマッチしてね。いまでも「ゴールドラッシュ」を聴くと高野を思い出しますよ。残念ながら高野拳磁のゴールドラッシュは来ませんでしたけどね（笑）。

——結局、高野拳磁は90年代プロレスバブルをまったく経験しませんでしたもんね。

杉作　ただ、PWC東京体育館大会が実現してたら、日本プロレス界の歴史が変わってたと思うんですよね。

——高野拳磁vsハルク・ホーガンが実現していれば（笑）。

杉作　やっぱり身体が大きくて、表情が豊かっていうだけでおもしろいですから。僕は99年ぐらいからFMWの仕事を始めて、勉強のためにWWEを観るようになったんですけど、WWEのスーパースターの魅力は高野に通じるものがありましたから。

——そういえば、拳磁のマイクアピールは、ザ・ロックに通じるかもしれませんね（笑）。

杉作　だから高野拳磁はロックとアンダーテイカーを足して2で割ったようなレスラーでしたよ。

——ロック＋アンダーテイカー÷2＝高野拳磁ですか！（笑）。

杉作　一人WWEでしたからね。ホント、一歩間違えたらスーパースターになってたと思うんですけど、一歩も間違わないのが高野拳磁なんですよね（笑）。

【10年3月28日／都内・某喫茶店にて収録】

CDシングルと UWFの魔術が 消えた90年代

音楽家にして文筆家
菊地成孔

前号本誌のツイッター特集のインタビューも大好評！ 毎回切れ味鋭い評論でおなじみとなっている菊地成孔氏は『1990年代』をキーワードに何を語るのか？ 今号も必読です！

聞き手／ジャン斉藤

――今号は90年代特集なんです。

菊地　まあ、バブル中～後期というこ とになりますよね。バブル末期に向かっていく時代。あれはあれで、それなりの感慨に満ちたお祭りみたいなもんだったでしょう。「もうすぐ弾ける、弾ける!!」と言いながら。

菊地　なんだかんだで95～96年までもったんで。２０００年代特集のときも言いましたが、第二次世界大戦が終わったのは１９４５年なんで、年代を5年で刻む考え方がありますよね。『日経』紙的な意味で「バブルが完全に崩壊しました」となったのが95年だから、この刻み方にくみしてると言える。

――菊地さんはどこで区切っているんですか？

菊地　ワタシの独断と偏見では、93年なんだよね。93年から90年代初期が始まる。

――80年代の終焉は93年ですか。

菊地　はい。たとえば93年には『ウゴウゴルーガ』という番組があったんです。「何がおまえのラストバブル、ラストエイティーズか?!」って聞かれれば、あの番組(笑)。

――『ウゴウゴルーガ』というのは、CGを使ったフジテレビの教育番組ですね。子ども向けを装っていましたけど大人向けで。

菊地　そうそう。あの『ウゴウゴルーガ』が終わった94年あたりから悪い予感がし始めてた。そして阪神淡路大震災と地下鉄サリン事件が起きて、そうして２００１年のアメリカ無差別同時多発テロに向かっていくという感じですよね。とはいえ、93年から２００４年までの10年間というのはシングルＣＤが史上最も多く売れた10年なのよ。仕事で調べたことがあるんだけど、日本で一番ＣＤが売れた年は94年。シングルの一覧を見ると、ミリオンシングルが46枚あるの。

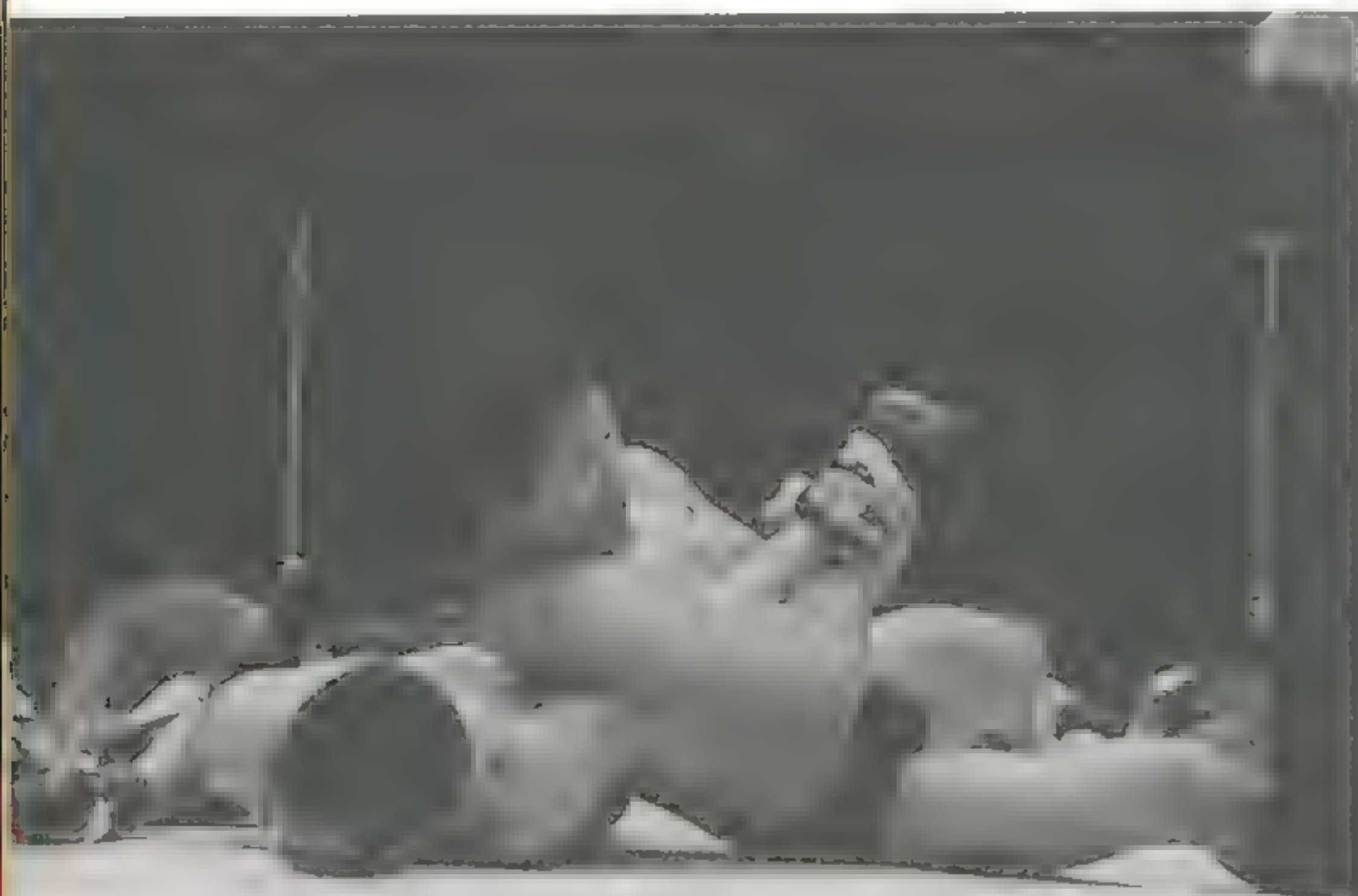
――１００万枚突破が46枚も！

菊地　それがね、だんだんだんだん歯が抜けるように一枚一枚減っていき、10年後の２００５年にゼロになったね。『瞳を閉じて』(平井堅　２００４年)だけになるのかな。

――２００４年には1曲だけ？

菊地　1曲。うん。それに、いまやもうシングルＣＤってないですから。着うたになってるでしょ。

――そうか、もうシングルＣＤってないですね。

菊地　絶滅メディアなんですよ。ＣＤ本体が残ってるから目立たないだけで。これは中原昌也さんという人の言葉ですが、あの人は音楽家でもあって、「小さい頃からアルバムが作りたかった」と。「ミュージシャンになったらＬＰ盤のレコードを作るんだ」と夢見て「大人になっていざ自分がミュージシャンになったら、ＬＰがＣＤになってて悲しかった」というセリフを残したんだけど。でも、「ミュージシャンになってＣＤシングルが出せると思ってたら、着うたになってた……」と発言した人は一人もいないんだよね(笑)。

80年代末期にマット界を席巻したUWFというムーブメント。バブルが弾ける前に、分裂というかたちで破裂したあとも"U"のイデオロギーは脈々と生き続けた。

――確かに(笑)。

菊地　ミュージシャンだけではないですが、メディアの推移で世代が認識されるじゃないですか。じつはワタシもＣＤシングル出してましして(笑)。まったく売れませんでしたが(笑)。ですから、それがワタシにとっての90年代かな。シングルＣＤがガンガン売れるわけなんだから、そりゃあ「Ｋ－１のチケットも売れただろうな」って感じですかね。

――もうＣＤシングルがない時代に、Ｋ－１のチケットが売れるわけがないんですね(笑)。菊地さんは93年頃のマット界はどうご覧になったんですか？

菊地　93年から、それこそ凍結してしまう２００１年までは熱狂的に観てましたね。２００１年からまったく観なくなるんですよね。船木vsヒクソン戦から観てないです。だから93年のＫ－１の立ち上がり、それでリングスとの業務提携。その前にＵＷＦの分裂があるじゃないですか。

――リングス、藤原組、ＵＷＦインターの3派分裂。

菊地　あの第二次ＵＷＦの終焉というのが、ワタシにとっての80年代の終わりです。あの分裂で何かが終わったというイメージが凄く強い。同時にあの3派の立ち上がりというのは、さらに強力に、何かが始まったという感じが凄く強かった。第二次ＵＷＦというものは、言ってみれば企業仕掛けの最初の団体でしょ。代理店と企業が仕込んで作っていくという。

――レーザー光線の演出があって、チケットぴあでチケットを売って。

菊地　代理店が試合のことを「優良なソフト」とか言っちゃったりして(笑)。

――ダハハハハハ！

菊地　興行のことを「使えるソフト」とか言っちゃったりして。まあ第二次ＵＷＦはきっちり終わり、また生まれ変わったという印象がありましたよ。だから分裂したけど希望に満ちてて、ＵＷＦの分裂と3派再生をこじらせるようなかたちで、いろんなものがウワーっと出てきた。それを全部観てました。

――なんでもおもしろかった時代ではありますね。

菊地　その頃と比べると、「いまはつまらない」と言うのは非常にたやすいです。しかし、ワタシの私見では無条件につまらないとかおもしろいといった現象はない。いまはいまで何かがあると思うんですよね。ワタシ個人はつまらないと思っちゃってるけど。93年から２００４年までぐらいも、「人生史上最高」というわけではない。それなりに個性のある時代だったとは思います。さっきも言いましたが、プロレスはストリートとのシンクロ速度が遅

第二次UWFの終焉がワタシにとっての80年代の終わりです

かったんだけど、UWFなんかは音楽や映画を追い抜いたんだよね。その競争で。

――プロレスは、世間との共振という意味では、音楽や映像よりは反応は遅い、と。

菊地　映画も角川映画のブームのときとか、先頭に出たりしたじゃないですか。要するに音楽が巨人みたいな感じで、阪神が優勝すると大騒ぎみたいなことです。最近は、雑誌というメディアが、不況というストリートの状況に最速でシンクロした。競争で勝って廃刊しているという（笑）。

――『小学5年生』が休刊になる時代ですからね。

菊地　ちょっと休刊しないと流行に乗り遅れるんじゃないかぐらいの感じあったよね（笑）。休刊して初めてワイドショーが取り上げる、衆目が集まったっていう。

――まあ、ウチも他人事じゃないですから（笑）。

菊地　笑っちゃいけないんだが、ワハハハハハハハ（笑）。もう20年ぐらい日本人は、チャラい感じで「サバイヴ、サバイヴ」って言い続けてきたんだけど、いまこそ「サバイヴしたな」という言葉が実感としてひしひしと迫ってくる時代はないでしょ。

――ちょっと前はファッション的な意味合いで言ってたけど。いまはシャレになんないから、みんな口にしなくなったところはありますね。

菊地　戦場で「オレ、サバイヴしなくちゃ」なんて口にしてる暇ないよね（笑）。まあ、先走りの感覚として、現実がそうなる前にみんなは口にするんですよ。人間はやっぱり洞察力で生きてるから。

――つまり、早く楽になりたいんでしょうね。

菊地　まあ、そうですね。しかしサバイヴがリアルになったよなあ。ワーキングプアとかって、逆にサバイヴという言葉をはね除けるでしょう。それより『格通』はサバイヴできなかった。が、『kamipro』はサバイヴした。というようなことが異常にリアルじゃない？

――いや、いっそのこと休刊しちゃったほうが楽だったんじゃないかという気が……。

菊地　笑っちゃいけないけど、アハハハハハハ！　いや、まあまあ、そのぐらいに感じるよね。まあどんな業界もそうですよ、いま。

――進むも地獄で退くも地獄で。途中まで偉そうに先導していた人がいつの間にかいなくなってしまったのは解せないんですけど（笑）。

菊地　そんな南方戦線みたいなこと言ったらいかん（笑）。まあ、いまは国自体が自殺対策を立てる悪状況ですから。93年というのはまさに「誰も死ぬわけないし、潰れるわけない」という気分が蔓延していた。そしてやがて「バブルが崩壊したんだよ」と言われ、あんまり実感として感じられない。たとえば人間の死というのは若いときには想像はつかないけど、死ぬわけがないと思

詳しいことはmimiproの「これが噂の重大発表なのか……」編を聞いてもらいたいが、本誌はNo.145で休刊という可能性もあった。なんとか続刊になったけど、どこも大変だ。

いまほど「サバイヴした」という言葉がひしひし迫ってくる時代はない

って生きてたのに、70歳くらいになってみると、だんだん目は見えなくなってくるわ、腰は立たなくなってくる……。やがてその人間のなかで死がリアルになっていく。

――そして死への意識と肉体の衰えが一致したときに……。

菊地　民というのは「まだ大丈夫だ」あるいは「もうダメだ」と過剰に考える人々なんだよね。「まだ大丈夫だ、まだ大丈夫だ」。サリンと阪神大震災があって、腹にドスンと来たけど、「まだ大丈夫。大丈夫」。あるいは「もう終わり、もうおしまいだ」。と、そこに21世紀到来、「よし、なんか大丈夫そう」。と、そこに2001年の同時多発テロが起きて、だんだんだんだん何かがリアルになってきて（笑）。

――ようやく90年代の死の実感を味わうことになって。

菊地　ただまあ「じゃあ何をもって死なのか？」と言われると、そこは漠としてんだよね。資本主義が死んじゃうという人もいますけどね。ただ資本主義は中国とロシアでも生き狂っているという。冷戦当時は共産主義だった国たちが市場経済を突っ込んで、「どうかしら？」つって20年ぐらい様子見たらバブルに（笑）。

――まさにクレイジー・ロシアンという。

菊地　まあバブルの影響かどうかは定かではないですが、ロシアで昨日おとといだけど、都市部のテロで何十人も死んじゃった。要人だけが乗った旅客機が墜落。都市部であんなことが起こるわけだから、相当ヤバイわけじゃないですか。大国がバブルになると、狂い方も凄いわけよ。そういう想像力のなかに現代の我々はいます。それに比べたら、ジュリアナなんて紙と木でできた小さい家に住む、侘び寂びあふれる和の文化です。とはいえ、当事者にとってはバブルは躁病みたいなもんだから、プロレスも格闘技もそこに乗っかったわけだよね。だからそのときに、技術的な断層……。あのときは、つまりプロ（レス）が格（闘技）に変質してガチになったという、セントラルドグマみたいなものがあったんですね。誰もが一応それを信じないと、そもそも話に乗れないという。でも、あの時代でも早くから、「プロやってた人間が格になれるわけない、あれはガチふうのプロだ」と言ってた賢者たちは少数いましたよね。だけど、あの頃に騒いでも聞こえない。賢者の言葉は石に刻んであるわけね。

――今回、山田英司さんに取材してるんですよ。前田日明とヤオガチ話でトラブルになった。

菊地　『フルコンタクトKARATE』の山田さんね。

――山田さんが言うには、プロから格へ移るのを当時のマスコミとして真剣に応援してた、と。

菊地　懐かしいなあ（笑）。まあその、プロから格への移行は、前田さんが早い時期にはっきり口にしてしまっているけれども「暫時移動」ということよね。要するに、だんだんガチにしていくという。最初はガチじゃ食えないから、未来的には完ガチにするんだ、と。比較的、無防備に発言され

てました。ただそれ、最初は半ヤオだったのかっていう（笑）。

——まあ、そうなりますよね。

菊地　前田さんからすれば「本当にそう考えてたから言ったまでや」という感じなんでしょうけど。船木さんを説得した際「いまは完ガチじゃないけど、やがて近いうちに完ガチになるから」と言ったことは有名ですよね。そういう意味で、前田説というのは一貫してて、商売にするためにだんだん取り入れていく。それの何が悪いんだ、と。それを正面向かって「いや、それは悪いよ」と言える人が山田さんだけだったという（笑）。

——まあまあ（笑）。

菊地　相撲みたいな半ヤオで固定してずっとやってという意味じゃなくて、それこそ共産主義みたいに、だんだんと現実化させていって、やがては完全に現実化させるという段階説をとったんだよね。で、ほかのUWFの人たちが、どう考えてたかっていうのが意外と言語化されてなくて、皆さん口が重い。あるいは、うまく言語化できない人たちが多かった。

——Uインターは大まかに言ってプロレス回帰路線でしたし。

菊地　Uインターはロマンティックなルネサンスでしょ。古典に戻って、プロレスの伝統に回帰して、さらにいまよりよくなるという態度をとった。パンクラスは狂信的な改革だった。すでにあったシューティングというものは、佐山さんによる共産主義的世界で、いつか現実に定着させる。佐山さんも段階論だったでしょ。シューティングのルールに関してはかなり発達的な発想だったし。

——順序を踏んで競技体系を作ろうとして。

菊地　完全なノールールはいきなりできないから、まずは組織作り、選手の育成も兼ねて段階的にやって。その段階論は、要するに天才にありがちな、自分に、はるかうしろを走る世間というものが追いつくまでかなり時間がかかるんだっていう発想、というか身体感覚がご自身のなかで根本にあったと思うんです。

きくち・なるよし■1963年6月14日、千葉県出身。音楽家にして文筆家。多数の書籍、CDをリリース。格闘技関連書籍には「サイコ■シカル・ホティ・ブルース解凍 〜■は生まれてから5年間たけ格闘技を見なかった〜」かある。

魔術という領域で一番うまくいくのは半ガチ。半ガチこそが最強なんです

——で、その一方でK-1という格の流れも90年代にはあったわけですよね。

菊地　93年の段階では、ワタシはK-1のハイキックによる失神というのはすべて信じてたけどね。いや、べつにK-1のハイキックがヤオとか言ってるわけじゃなくて、80年代に『ザ・力道山』など力道山の映画を観たときに、50年代の映画だから30年経ってるわけでしょ。30年後にK-1の初期のヘビー級を観たときに、「ああっ……」っていうことはありえないのかな、と。「あれを信じてたんだって日が来るのかな」って自分の本に書いたんだけど。「来ないかもしれないな」っていう（笑）。

——サップの試合はいま観ても「ガチなのか？」って観て思っちゃいますからね（笑）。

菊地　昔の日本人は、力道山をガチだと思ってたわけよ。試合結果が『朝日新聞』にまで載ってたんだからさ。

——いまとなっては凄い話ですね。

菊地　ほとんどの国民が信じていたんだろうけど、いまとなれば、「どうして信じてたんだ？」という気持ちでいっぱいでね。だって「やられた〜」といって倒れたりしてるわけですよ、シャープ兄弟は（笑）。だけど、「なんか凄くヘンなものでも人間は信じるんだ」というのは人類史なんですよ。どうしてドイツ人はあんなに賢明なのに、ナチスドイツを支持してしまったのか。それはドイツにかぎった話じゃない。

——UWFもいま観たら……という。

菊地　魔術という領域で、一番うまくいくのは半ガチだよね。半ガチが一番色あせない。半ガチこそが最強なわけです。たまにはガチがあるわけだから。それは、プロレスみたいな"事故ガチ"じゃなくて、「今日はガチでいこうな！」という日があったり、「今日は抜いていこう」って日があるということを、ごっちゃにされちゃうと判断できなくなるんで、魔術として一段高くなるわけね。「あの人は真っ正直な人だといって、絶対ウソはつけない人」だと壊れるし。「あいつはウソばっかりついているやつだ」という人は、ある意味正直だし。一番魔術があるっていうのは、「あいつはたまに言うことは本当だからさ」という。

——ちょっと目が離せなくなるますよね（笑）。

菊地　なんか魅力があるからついていっちゃうというのが、魔術の完成形というか基本形であって。だからその、あの頃のUWFの半ヤオ加減というのは凄くよくできています。その魔術がキープできなくなり、変質していった過程ですよね。シングルCDがなくなったと同じように。まあでも90年代って『紙のプロレス』の時代だよ。掘り返すなら自分の足もとからだ。と魯迅も言っています（笑）。

【10年4月1日　都内・菊地氏の事務所にて収録】

ファンキーでクレイジーなアイツが
読者のメッセージを
Check it out!!

"読者ペイジ" ジャクソン

谷川さんと水道橋博士の対談がおもしろかった。博士はツイッターのことを研究しすぎていて、もうツイッター教師になっても稼げるんじゃないかと思います。それに対して谷川さんは、しるこサンドのことばかりつぶやいてるのはどうかと、あらためて思いました。もっと勉強してK-1やDREAMを安泰させてください。【東京都・ツイート800さん・フリーター・25歳】

Ⓓこれはサダハルンバに厳しい意見だぜ。しかし、サダハルンバのフォロー数は8000人を超えてるんだぜ。[illegible]博士は約7万人……ウーム……確かにサダハルンバはユーの言うとおりにしたほうがいいかもなぁ。

青木真也vsギルバート・メレンデス決戦座談会がよかった。五味選手は個人の挑戦だが、青木選手は、DREAM&日本格闘技に影響してくると言われ、同じ感覚ではないんだなとあらためて思わされました。ある意味、日本の未来はこの二人にかかっているといってもいいですね。【福島県・紺野春樹さん・会社員・30歳】

Ⓓパルキはきっとタカノリ・ゴミのUFCデビュー前にこのレターを送ってくれたんだろうな。もはやジャパンの未来はシンヤ・アオキが背負うことになってしまった。この『kamipro』が発売されている頃にはすでに結果もわかってるだろうから……[illegible]

師匠・吉田秀彦の引退が間近なのに、のんきにおでんについて語っている中村カスのトークはゴキゲン極まりないです。ここはぜひおでん好きで知られるネクロ・ブッチャーとの異次元対決を希望します。レフェリーはこれまた熱々おでん芸のダチョウ倶楽部、上島竜兵で! 次回、ASTRAのメインは決まり!【福島県・[illegible]さん・[illegible]主義者・38歳】

Ⓓユーはおでん妄想が走りすぎだ。しかし、カスはもうおでんの話ばかりに夢中になっている場合じゃなくなってきたじゃないか。まさかヒデヒコの引退試合をおでん[illegible]じゃなかったカスが請け負うとは。こりゃたいへんだぜ。

渡辺師範の記事がよかった。現代社会に金銭感覚に捕らわれずに生きている人がいるなんて驚きました。こういう人のツイッターこそ見たいと思うのが人間の心理なのでしょうか。ぜひ師範にツイッターに挑戦してもらいたい。【茨城県・熊谷暁さん・自営業・36歳】

Ⓓミスター・ホリベにまでツイッターを勧めにいくなんて[illegible]『kamipro』の連中は何を考えているんだい? しかしユーの言うとおり、そういうアナログ人間のツイッターは読みたいよな。よし、オレもツイッターやろうかな[illegible]え? 読みたくないって?

[illegible]座談会がおもしろかった。ドラゴンのファンでいることは、人間力を試されることとつくづく思いました。僕は藤波さん、大好きです!【神奈川県・[illegible]さん・会社員・[illegible]歳】

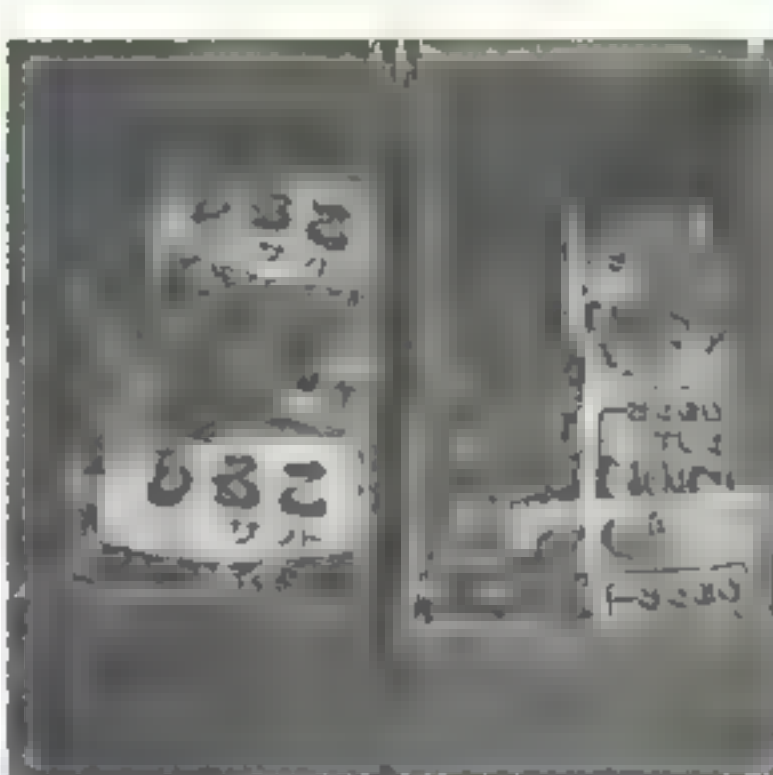
Ⓓミスター[illegible]との対談の[illegible]「ドラゴンファンはだんだん考え方もドラゴンに似てくる」という話をしていたな。しかも考え方もドラゴンに似てくるというのは、それはそれで問題だとオレは思うぜ! クックック。

kamipro145号 おもしろかった記事 RANKING

前号のツイッター特集はやけに評判がいいじゃないか。聞くところによると、サダハルンバも興味津々で読んだらしいぜ。やったな! しかし、今回はツイッターのどの企画よりもドラゴン特集ってのがずば抜けて凄かったぜ。2010年になっても色あせないおもしろさには完敗だ!

しるこサンドが 大[illegible]に[illegible]き[illegible]した

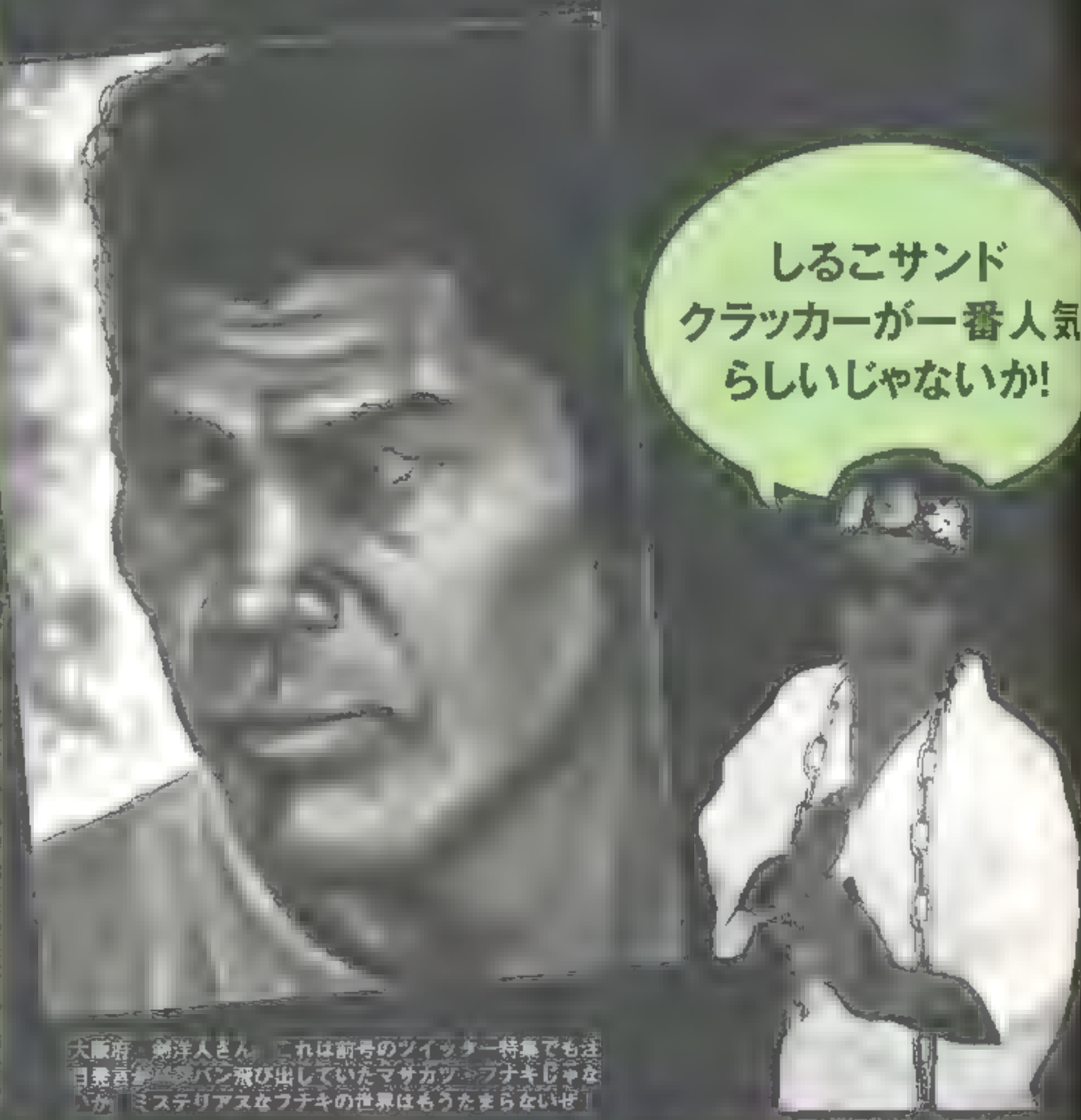
Oh! なんと『kamipro』No.145にて取材していたしるこサンド工場から編集部宛てにしるこサンドシリーズが大量に届いたという話じゃないかい! なんともグラッドな話じゃないか。……ん? ちょっと待てよ。しかしオレは一つも食わせてもらってねえな。編集さんよお、それはないんじゃないのかい?(涙)。

大阪府・剣洋人さん これは前号のツイッター特集でも注目度[illegible]パン飛び出していたマサカツ・フナキじゃないか ミステリアスなフナキの世界はもうたまらないぜ!

おハガキ募集!!

おハガキ、どんどん送ってくれよ!
ケータイからでもOKだぜ!!
どんな意見、感想、苦情、抗議、お悩み、ダメだしでも、せーんせんキャッチするから安心しろって! 待ってるぜ!
こんな情報も24時間どんとこい! ってヤツだ。
- 譲ってほしいもの
- タレコミ情報
- 選手に対するコメント、試合の感想
- その他、オールOKだ!!

以上、すべてのお便り・イラストのあて先は

〒162-0805
東京都新宿区矢来町41-1
ザ・フタガミハウスNo.1
kamipro編集部「分室」係まで。

携帯サイト『kamipro Move』からの投稿もできます。

マットに青春をかける"若き変態"を発見!

高校生プロレスとは何か?

『プロレスリングゼロ』代表 川越一磨

君は「高校生プロレス」を知ってるか!?
学プロよりもさらに若い、少年と言っても
差し支えないような"変態"たちが、
たぎるプロレスLOVEをマットにぶつける……
それが「高校生プロレス」なのだ!
今回は代表を務める川越くんに、
その全貌を直撃! 飛び出せ! 青春!!

聞き手・撮影/鈴木佑

——今日は「高校生プロレス」という耳慣れない言葉を聞きつけて取材したいなと思ったんですけど、川越くんはもちろん高校生なんですよね?

川越　はい、91年生まれの18歳です。この春に卒業するんですけど。

——ということは……平成生まれ! でもその若さでプロレス団体の代表を務めてるとか?

川越　そうですね、高校生で結成した『プロレスリングゼロ』という団体を運営してます。ちなみに名前は「プロレスへの偏見をゼロにする」「ゼロからのスタート」が由来です。まぁ、僕なんかがおこがましいんですけど。

——いえいえ、しっかりしたお考えで(笑)。まずは川越くんのプロレス観を探っていきたいんですが、そもそもプロレスを見始めたきっかけは?

川越　もともとはいま一緒に団体をやってる友だちの影響なんです。その友だちから何度も「とにかく会場に行こうぜ、おまえならハマるから」って言われていたので、高校1年のときにとりあえず後楽園に全日本プロレスを観に行ったんですね。でも、その時点ではプロレスの予備知識は一切なかったんですよ。知ってたのは武藤敬司くらいで。というか、武藤もどんなことをやる人なのかわからないくらいだったんですけど。

——その初観戦でハマってしまった?

川越　そうですね。人と人とがぶつかり合うなかに美しさみたいなものがあるって思ったんです。事前の認識としては「プロレス=ガチじゃない」っていう考えもあったんですけど、そんなレベルで語るものじゃないっていうか。

——それを超えたものがあった、と。あの、2000年に高橋本が出たじゃないですか?

川越　タカハシボン……?

——ミスター高橋本を知らない!(笑)。新日のレフェリーだった人がプロレスの裏側を書いた暴露本なんですけど。

川越　ああ、なんか聞いたことはあります。でも、その本が出た頃に僕は8歳なんで(笑)。

——なるほど(笑)。で、その高橋本と平行してPRIDEみたいな格闘技の人気もどんどん上がっていったんですけど、そっちに興味は湧かなかったですか?

川越　確かに周りではPRIDEとかK-1が好きな人もいたんですけど、僕には殴り合いというイメージしかなくて「それならケンカと変わらないな」って思っちゃったんですよ。それよりはお互い技を受け合って駆け引きする姿のほうに引き込まれたっていうか。プロレスにいわゆるガチ以上の面白みを感じましたね。

——ほ~。ちなみに「ノアだけはガチ」とか思ってました?

川越　ハハハ。いや、個人的にノアは大技ばかりで疲れちゃうんですよ。最初に観たからっていうのもあるかも知れないですが、団体で一番好きなのは全日ですね。

——とくに好きなレスラーとかいます?

川越　やっぱり武藤ですね。間の取り方とか技の一貫性とか凄いなって思います。毎回同じことしかやらないのに、あんなにいい試合が作れるのは見事っていうか。

——着眼点が鋭いです。

川越　でも、全日だけじゃなくインディー団体とかも好きですよ。アパッチプロ

高校生と侮るなかれ、その試合スタイルはジックリとしたグラウンドから始まる重厚なもの。そして決めるときにはビシッと大技を繰り出す、非常にプロレスのセオリーに合ったものなのだ。高校生のキミたち、とても輝いているよ！

レスにはよく行ってましたね、当時は真壁刀義なんかも上がってて。

――インディーのよさってどういうところに感じます？

川越　やっぱりアットホームな感じに凄く親近感が湧きますよね。選手との距離が近いっていうか、試合後に金村キンタローの号令でファンがリングサイドに集まったりして。金村の呼びかけでファンが一斉にパイプイスをリング内に投げ込んだのなんか観て「なんだ、この世界は？」って思いました（笑）。あ、あとはアイスリボンなんかも観ますよ。

――アイスリボン！　守備範囲が広いですね～。

川越　その僕をプロレスに引き込んだ友だちが相当なマニアなんですよ。ちなみにアイスリボンの会場は、僕ら以外に若いファンがいなかったのでちょっと恥ずかしかったですけど（笑）。

――客層はおじさん中心ですからね（笑）。そこからどういう経緯で実際に自分でプロレス団体をやりたいと思ったんですか？

川越　最初は高校1年のときに文化祭でプロレスをやろうと思ったんです。でも、ウチの学校は規則が厳しいこともあってか、どうしても許可がもらえなくて。こっちもいかに安全かってことを学校にアピールするために、全部台本書いて出したんですけどね。

――ダハハハ！　高校生がプロレスの筋書きを書いて学校に提出しましたか（笑）。

川越　はい、「僕たちのは演劇の一種だと思ってください」って（笑）。だけど、それでも認められなくて……。それで最終的に仲間内5～6人で集まって、「ここまでしてダメなら、自分たちで興行やるしかないだろう」ってなったんです。

最初は学園祭でやろうとしたんですけど
学校側の許可がもらえなかったんです

――へ～、それは意地になったところも？

川越　というか、ダメということになってけっこうシュンとしちゃったんですね。それで高校2年になったときに友だちと「ここで何かやっておこうよ」という話になって。もちろん高校生活の思い出っていうのもありましたし、学校に受け入れてもらえなかったっていう悔しさもあったんで、「だったら外で本気でプロレスをやってやろう！」って思いました。

――熱いですね～。それで実現に向けて動きだした、と。

川越　はい。で、いろんな会場や値段を調べた結果、やるならマットも常設されてる新木場1stRINGがベストだっていうことがわかったんです。あそこは平日の昼間なら12万円で借りられるんですよ、だから高校生の僕らにもなんとかなりそうだなって。

――しかし、高校生だけでプロレスを興行としてやろうとは、またずいぶんおもいきりましたね。

川越　もちろん、レスラーだけじゃ興行が成り立たないので、音響や照明のスタッフは同じ学校の有志に手伝ってもらうことにして。よく、高校のバンドやってる友だちがライブハウスでチケット売ってイベントやったりしてたんで、自分たちでもなんとかできるんじゃないかなって思ったんです。

――チケットが売れるめどは立ってたんですか？

川越　旗揚げ大会は夏休みの平日にやったんですけど、「これは話題性もあるしお客さんも来るだろうな」とは思ってましたね。学校内の人脈を活かせば200人は堅いんじゃないかなって。で、ドリンク代込みでチケットを1000円に設定したんですけど。

――そういう活動自体は学校的にはOKなんですか？

川越　いや、それはいまだによくわからないです（笑）。だから基本的にはシークレットでやってましたね。ただ、理解のある先生には観に来てもらいました。

――で、肝心の試合なんですけど、練習はどういうかたちで？

川越　ＵＷＦ（関東学生プロレス連盟）っていう学生プロレスの団体に「練習に参加させてください」ってお願いしたんですよ。でも、最初は何回も門前払いされたんで、快く思われてなかったみたいです。いまは学プロの先輩たちとも仲良くさせてもらってるんですけど、最初は「面倒くさい高校生が入ってきた、なめやがって」くらいに思ってたらしいんで（笑）。

――ちなみに試合までの練習はどのくらい？

川越　5月から練習を始めたんで、大会までは3ヵ月しかなかったんですね。とにかく準備期間がないということで、最初の練習から3時間ぶっ通しで受け身の練習をやったんですけど、ヒジから血を流してる仲間もいましたね。でも、やっぱりこれくらいやらないとダメなんだなってみんなで覚悟を決めて。それに何より先に新木場を予約しちゃったんで引き下がれないんですよ（笑）。

――いまさらやめられない、と（笑）。いまや学プロ出身のプロレスラーも多いですけど、OBとして指導を受けた人はいました？

川越　GENTAROさんに教えていただいたことがありました。

――たしか学プロ時代はハヤブサをモチ

ーフにしたレスラーだったんですよね。

川越 その当時から空中殺法が凄かったみたいです。学プロの先輩から聞いたんですけど、GENTAROさんがデビュー戦なのにファイヤーバードスプラッシュを使ったらしいんですね。そしたら先輩に呼び出しを受けて説教されて、4年になるまでタイトルに挑戦できなかったらしいです（笑）。

――ダハハハ！　前座から大技を使うんじゃない、と（笑）。

川越 でも、僕はGENTAROさんに教わって初めてプロレスのディテールを知ったんですよ。たとえば、ロックアップはなぜあのかたちなのか、ヘッドロック一つとってみても見せ方とか顔のどの部分を締めたら一番痛いかとか、あとは技のつなぎ方にはいかに理由付けが必要かってことを教えてもらって。GENTAROさんの指導がなかったらいまの僕のプロレス観はなかったと思います。

――なるほど。で、実際にリングに上がるわけですが。

川越 いや、もう前日は寝れませんでしたよ！　そのまま会場に入ったら吐き気も尋常じゃなくて（笑）。あそこまで緊張したのは生まれて初めてでしたね。

――ちなみにチケットはどれくらい売れたんですか？

川越 前売りで150～160枚売れたんで、なんとかかたちはつきました。でもハプニングもありましたよ。ハイキックで意識飛んじゃったヤツがいたり。まぁ、でもなんとか当時できるものは見せられたかなという感じで終わったんです。実際、お客さんの反応もよかったんですよ。「凄いね、こんなこと高校生でやるヤツいないよ」みたいな感じで声をかけてもらって。当日の9割は初めてプロレスを観る人たちだったんですけど、「プロレスで充分に人を引きつけられるんだな」って思いましたね。学校の先生も半分あきれながら「たいしたもんだ」って言ってくれましたし（笑）。

かわごえ・かずま■1991年6月24日、東京都出身。08年8月に「プロレスリングゼロ」旗揚げ。今年3月に「卒業プロレス」と題して新木場1stRINGで第2回興行を開催、210名の観衆を集めた。183cm、115kg。リングネームはKAZU。

――じゃあ大成功だったんですね～。

川越 いやぁ、もういままでにない満足感でしたね。自分のプロレスファンとしての夢をかなえちゃったというか。当日は学プロの先輩たちがセコンドを買って出てくれたんですけど、試合後に皆さんが「大学生になったらUWFに入ってな」みたいな声をかけてくれたのもうれしかったですね。

――当日は親御さんも来たんですか？

川越 いや、来てないですね。うちの親、プロレス大嫌いなんですよ。で、プロレスをやるってこともずっと黙ってたんですけど気づいてたみたいで、当日の朝に「死なないでね」って言われました。たぶん、いまも僕がプロレスをやることは快く思ってないんですけど、僕がプロレスのおかげで大学に合格したもんだから文句も言えないみたいで（笑）。

プロレスのおかげで大学に合格したので親は僕に文句も言えないみたいで（笑）

高校生プロレスとは何か？

――そうそう、川越くんのことを事前に調べたら、プロレス経験を慶応大学合格の糸口にしたってことに驚いたんですけど、なんでプロレスで有名大学に行けるんですか？

川越 えっと、まず僕はAO入試（一般入試とは異なり、志望理由書や面接などで出願者の個性や適性に対して多面的な評価を試みる入試）で受験したんですね。で、通ってた塾で志望理由書のイロハを学んだというか、論文力を養ったんですけど。

――その理由書のネタとしてプロレス経験を活かした、と？

川越 でも、初めはプロレスを売りにする気なんてなかったんですよ。フランス留学の経験があったんで、最初はそれをベースに書いてたんです。でも、なんか自分でもいまいちというか、担当の先生からもピンとこないって言われて、それでおもいきってプロレスのことをメインにして書くようにしたらスパッとハマって。まず書きだしが「私はプロレスの魅力に取りつかれた人間だ」ですからね（笑）。

――それはインパクトありますね（笑）。

川越 で、論文では「興行をやることでビジネスとしてのプロレスを体験したので、将来的に人々を喜ばせるようなことを起業してやっていきたい」っていう主旨のことを書いたんです。具体的には留学経験を通してヨーロッパには日本食が流行る土壌があると感じたので、いつか向こうで食のビジネスをしたいなと思っていて。

――若いのにしっかりしたビジョンを持ってるんですね～。プロのレスラーになろうとは思ってない？

川越 それは全然思ってないですね。自分としてはアマチュアでやっていくのが好きなんですよ。ゼロの理念に通じるんですけど、草の根的な運動を通してプロレスのファンを獲得していこうという活動に、やる意義を感じるというか。もちろん憧れがあるからこそ、プロのリングは簡単に上がれるものではないとも思ってますし。

――ちなみに「高校生プロレス」をやったことでプロレス界とのつながりはできました？

川越 なんか高木三四郎さんやさくらえみさんに興味を持っていただいてるっていう話は聞きました。ツイッターでつぶやいてたとか（笑）。

――プロのアンテナにも引っかかってるんですね。

川越 それは凄く光栄なことですよね。僕はプロレスと出会えて本当によかったと思いますし、これからもずっとアマチュアとしてプロレスを続けていきたいですね。

――もちろん大学でも学生プロレスをやる、と？

川越 そうですね。高校では禁止されましたけど、大学ではおもいきってやってやろうと思ってます（笑）。

――わかりました。思う存分にプロレスでキャンパスライフを楽しんでください！

【10年3月4日／都内・某所にて収録】

これぞセーソクの法則？

ロック＆プロレスから考える 80's/90's比較論

日本のHM／HR界のオピニオンリーダー

伊藤政則

「80年代最高！ 90年代最悪！」と言ったのは、
映画『レスラー』でのミッキー・ローク演じるランディ・ロビンソン。
そこで音楽評論家にしてプロレスにも造詣の深い伊藤氏に、この時代の
移り変わりについてタップリと語ってもらったってわけよ！（伊藤氏調）

聞き手／高崎計三　構成／鈴木佑

ロック&プロレスから考える

80's/90's比較論 伊藤政則

伊藤　（さっそうと現われ）今日はよろしく！（渡された見本誌を見て）「紙プロ」って、感じ変わったよね？　前はもっと小さくてさあ。

――ああ、A5判だった頃のことですかね。もうこのかたちになって長いんですよ。

伊藤　オレが知ってるのはその頃だもん、「紙プロ」は。もっといかがわしかった頃な。で、今日はどんな話なんだっけ。

――今回、90年代を特集しているんですが、そのなかで伊藤さんには80年代の魅力を説明していただきたいと思いまして。そもそも伊藤さんはプロレスにも造詣が深いとうかがってるんですが。

伊藤　プロレスは昔から好きなんだけど、オレは岩手だったんで日テレ系は映らなかったんだよ。中学の頃にUHFで日テレ系ができるまでは、近所のプロレスファンが見たこともないような巨大なアンテナを立てて仙台の放送を受信しようとするんだけど、それでも4メートルぐらい離れないと動いてるかどうかわかんないような映像なんだよね。それで観てたよ。

――執念ですね（笑）。

伊藤　オレが最初に観たのは60年代末かな。BI砲とデストロイヤーと誰だかの試合だったね。ライブで観たのは大学進学で東京に来てからで、新宿にあったロック喫茶で知り合った人と日大講堂にデストロイヤーvsマスカラスを観に行ったの。音楽業界に入ってからは、新日本の主要な試合はほとんど観てた。全日本も行ったよ。最後に観戦したのがいつかはわからないけど、新日本vsUインターは観たなあ。

――仕事としての関わりもあったとか？

70年代後期から世界のHM/HR事情を日本に紹介するなど、このジャンルのパイオニア的存在である伊藤氏だけに、数多くの世界的バンドと交流がある。上はジョン・ボン・ジョヴィ、下はメタリカのリーダーであるラーズ・ウルリッヒ。

伊藤　76年にマガジンハウスで「POPEYE」が創刊されて何十万部も売れるようになるんだけど、そこで「プロレスの記事を書かせてよ」って言ってたんだよね。編集部の石川次郎さんとかからは「バカヤロウ！」って言われてたんだけど、でもそのうちにおもしろいんじゃないかってことになって「ゴング伊藤」って名前を勝手につけてプロレスの企画ページを作ったんだよね。

――「ゴング伊藤」！　またベタな名前ですね（笑）。

伊藤　そのうち、高田馬場でマスカラス・ファンクラブ主催の8ミリ上映会があって、取材を頼まれて行ったんだよね。あのときは凄い人数が来てたよ。「すげーな」って言いながら取材してたら、抽選会で一番凄い試合用のマスクがオレに当たっちゃってさ。場内からは「こいつ、誰なの？」って感じだよ。もう捨てちゃったけどさ。

――捨てたんですか！（笑）。

伊藤　珍しいからさあ、みんな遊びに来るたびに被るわけだよ。そしたら、あるとき見たらカビが生えててさあ！　だから捨てたよ！

――なるほど。プロレスはどんな部分がお好きだったんでしょう。

プロレスとロックには凄く相通じるものがあるんだよ

伊藤　ロックと相通じるものがあるんだよ。コンサートは始まる前のざわめきとか、始まったらいきなりピークにはなるけども、照明とかSEでイントロダクションから組み立てていって、それでクライマックスがあって、ある程度落ち着いて、またエンディングにかけて盛り上がってアンコールという計算されたコンサートが多いわけだよね。あるいはそうじゃなくて、80年代末に出てきたガンズ・アンド・ローゼズみたいなバンドって、約束がないから機嫌が悪いと2曲でやめて帰っちゃって暴動が起きたりするわけ。こういうのもプロレス的じゃない？

――確かに（笑）。プロレスでも暴動は起きてましたしね。

伊藤　つまりプロレスのなかにも凄くロックっぽいもの、エンターテインメントだけど真剣勝負の部分もあって、ロックもの凄くシリアスにやっているんだけれども、アクションとかどこかにセンス・オブ・ユーモアがあって。なぜならエンターテインメントだからどこかに魅せる要素がないといけないわけでね。じゃなきゃべつに、坊主頭だろうが短パンだろうが、寝巻きでやったっていいわけで。そういう意味でプロレスと相通ずるものがあるなというのは感じてたな。

――確かにプロレスとロック、両方好きだというファンは多いですからね。さて、80年代といえばプロレス界では81年にタイガーマスクがデビューして、前半は一大「プロレスブーム」を迎えました。音楽界、ロック業界の80年代はどうだったんでしょう？

伊藤　同じじゃない？　すごく乱暴な言い方をするとさあ、社会とか人間界には大きな時の流れみたいなものがあって、80年代っていうのはバイオリズムがもの凄く上り調子で、上昇気流を描いていた時期だと思う。プロレスでタイガーマスクがデビューした頃って、アメリカ発で考えたら音楽の世界では「MTV」が誕生してる頃なんだよね。マイケル・ジャクソンの「スリラー」とかが一躍もてはやされたわけ。

――プロモーションビデオという概念が時代を席巻した時期ですよね。

伊藤　それまで音楽を楽しむっていうのはレコード、雑誌、ラジオ、実際のコンサート。テレビってのはほとんどなかったんだけど、そこに24時間、音楽のさまざまなものを流す局が出てきたときに、お茶の間でロックンロールを楽しめるようになったわけ。これによってどういうことが起こるかっていうと、いままでグレーゾーンって呼ばれてた一般層までが音楽シーンをごっそりさらっていくことになるわけよ。だから、70年代はアメリカ市場で100万枚売るっていうのはけっこう大変なことで、プラチナディスクを獲るってのは凄

80年代はエンターテインメントが新しい局面に突入していった時代

いことだった。ところが、『MTV』が開局して1～2年後、83年ぐらいになると、やおら300～400万枚のレコードが売れてしまう。それで音楽的な構造が変わるわけ。なぜなら不特定多数の人にアピールするようになったから。

――いきなり商売のスケールが大きくなった、と。

伊藤　それともう一つは、ロックというものに胡散くささを感じていた若い女の子たちがブラウン管を観ていて、プロモーションビデオのなかで「あ、この人カッコいい！」とかいうことに気づいて、いままではむさ苦しいヤツとかオバチャンしかいなかったロックコンサートに、若い子が来るようになるんだよ。これが80年代の特徴な。83～84年頃からで、85、86年あたりにピークだよ。

――ブームの基本ですね、若い女の子に火がつくというのは。

伊藤　同じように、83年になるとイギリスのデフ・レパードが600万枚くらい売って、84年にはボン・ジョヴィが出てくる。その頃になると、LAからモトリー・クルーが出てくる。つまり若くて、ビジュアル的にいろんな要素を持ってる。つまりモトリー・クルーは毒々しい。ちょっとメイクも入れて、髪の毛ツンツンで凄いと。ボン・ジョヴィはボン・ジョヴィで、プロモーションビデオの映像をお客さんを入れた擬似ライブとして撮るようになると、「ライブが凄いんじゃん！」ってことになってそういう若い世代がドーッと入ってくるわけ。86年にはアメリカはピークを迎えて、いいバンドは200万枚はあたりまえ。ボン・ジョヴィの『スリッパリー・ウェン・ウェット』なんかは600万枚とか。デフ・レパードの『ヒステリア』が1000万枚とか。ケタが違ってくるわけだよ。

――まさにゴールドラッシュ。

伊藤　80年代のロックが凄かったのは、そういう若い力が『MTV』によって掘り返されて、もの凄く出てきて世界的に広がっていったってことだよ。世界中でロックの大ブームが来るわけ。それに引かれるようにベテランと言われるバンドも、たとえばディープ・パープルは70年代黄金期のメンバーで84年に再結成する。当然そういう機運が世の中にあって、勝算アリとなるからやるわけよ。

――いまならイケる、と。

伊藤　そうそう。そういうことでベテランも次々に再結成して、若いバンドもいっぱい出てきて、とにかく異様にシーンが盛り上がるわけよ。まああとになってみれば、実際にライブ観るとドヘタなんじゃないのってバンドも、プロモーションビデオのなかではプリティで、凄く映像も強烈だとワッと100万枚ぐらい売るわけ。だから成功したバンドがすべて実力を持ったバンドばかりではなく、そういうラッキーチャンスのものだっていっぱいあったわけよ。それをあとになって80年代はどうだったって分析するわけだけど、あの当時はあんまりそんなことは考えてなくて、ただ狂喜乱舞してた時代だった、と。

この写真は伊藤氏が音楽評論家の立川直樹氏と後楽園ホールの猪木の楽屋を訪問したときのもの。ちなみにこの日、ブルーザー・ブロディがスーツ姿でベートーベンの「運命」をBGMに新日本初登場。場内は騒然となったが、楽屋は意外にも冷静な空気が漂っていたとか。

――みんなで浮かれてたわけですね。

伊藤　うん。それはミュージシャンだけじゃないでしょ。レコード会社はレコードが売れる、Tシャツやらマーチャン（ダイズ）も売れる、コンサートは客入る、プロモーターは儲かる、ファンはいろんなバンドが観られる、来日もいっぱい増える。そういう勢いは日本にもフィードバックされてくるわけよ。当時のCBSソニーっていう会社が「『MTV』が成功してる」って聞きつけて、日本でもそういうシステムができないかって考えたのが、ソニー本体が一社提供になってテレビ神奈川（TVK）で「ソニー・ミュージックTV」って番組を始めることでね。そうこうしているうちにテレビ朝日が『MTV』の権利を買い取って「MTVジャパン」って番組を始める。小林克也さんの「ベストヒットUSA」はすでに人気があった。僕なんかも86年ぐらいからTVKで「ミュージックトマトワールド」を始めて、そして87年か88年にはTBSで「ピュアロック」っていう1時間枠のメタルの番組まで始まる。これはもう、勢いがあって何がなんだかわからない、とにかく「ウォーーー！」っていう時期なわけよ。

――とにかく勢いがあったことはよくわかりました（笑）。

伊藤　つまり何が言いたいかっていうと、そういう音楽界のダイナミズムがあった、と。プロレス界も同じ興行の世界なわけで、基本的にどう見せてどうやるかっていうことをものすごく考えていて、ご存知のとおりWWEもロック的な要素をどんどん取り入れていくわけじゃない。それも結局は80年代のあの音楽のもの凄いものがあったから。最初はロックだけじゃなくてポップスのシンディ・ローパーとかも出てたでしょ？　まあ、結局ニューヨーク近郊の手っとり早く知り合いで使えるヤツを登場させただけなんだけど。

――あ、あれはそういうことだったんですか！

伊藤　そういうかたちで、ロックの凄いところをなんとかほかのエンターテインメントにも取り込もうとしてたわけ。つまり、あんまり凄いから「ロックをちょっと持ってくれれば客が来るに違いない」と考えるわけだよね。それでプロレスもそうなってたんだよな。で、日本のプロレスだけがそうならないわけはなくて、81年のタイガーマスクのデビュー以降、勝負的にも70年代よりシリアスに見せるということはあったにせよ、さっき言った社会のバイオリズムみたいなものに少なくとも音楽や経済と一緒に乗ってたんだと思うんだよ。

――単一のジャンルごとじゃなくて、全体を乗せた大波だったわけですね。

伊藤　つまりあの時代はもう、何をやっても成功したとは言わないけれども、基本的にはそういう社会の動きのなかでエンターテインメントが新しい局面に突入していった時代なんだよ。だからいまから考えたら何が新しかったんだって言うけど、当時からしたら充分新しくて、タイガーマスクがデビューしたり長州vs藤波の闘いだったりっていうのは対外的な敵ではなくて身内のなかでの敵

なんだけど、これだってその5～6年前には考えられない試合の持っていき方してたでしょ。ロックだって『MTV』の登場によってめちゃめちゃ新しくなった。いま思うちょっと新しいのって、当時は「めちゃ新しい!」だったわけ。それはロックもプロレスの世界もまったく一緒だったんだよ。

――当時、どれだけの新鮮さをもって迎えられたかは、いまの物差しでは測れないですからね。

伊藤　だけど、このロックとプロレスのバイオリズムが変わってくるのが、91年なんだよ。90年までは80年代の余韻を受け継いでた。ロックシーンではだいたい10年が一つのパッケージになって、10年ごとにシーンが変わると考えられていたんだけど、91年の頭ぐらいまでは80年代の余韻が色濃く残っていて、誰もこの流れが変わるとは予想もしてなかったわけ。「このまま行くよなー」と思ってたんだ。ところが、バイオリズムは一気に違う方向に行ってしまった。オレはアメリカの興行でそれを間近に見てるんだけど、すべてのカギは湾岸戦争なんだよ。

――ああー、なるほど!

伊藤　あそこで、80年代の華やかな音楽とか、きらびやかなエンターテインメントが、突然テレビを通じて湾岸戦争が映し出されたことによって「リアル」に向き合わされることになるわけ。そうすると、俄然「リアルってなんだ?」ってことになる、と。プロレスだってリアルなものへ向かってるでしょ?

――91年はUWFが解散して、「U系」の分派が始まる年ですね。総合格闘技の芽が出てくる時代です。

伊藤　音楽では91年の湾岸戦争を境に、アメリカのメディアが「80年代のものを捨てていこう」というのを打ち出してきたのね。「古いものを捨てて新しいものを」っていうのが「リアル」だから。80年代は素晴らしい時代だったけども、いつの時代もつまんないものもあるよね。ブラウン管のなかで着飾って、もの凄くいいイメージのものだけを提供してたわけ。だけどあるヤツが湾岸戦争を見ながら、「音楽はあれがリアルだったのか?」って言うわけよ。

――「浮かれててよかったのか?」と。

伊藤　そのキャンペーンのなかで「リアルってなんだ?」ってなったときに、91年ぐらいにシアトルからニルヴァーナっていうバンドが出てくる。まったく着飾ってない寝起きみたいなヤツが、まったく練習してないようなギターで「こいつ、ヘタじゃん」っていうような演奏をする。ヘタが「リアル」なんだよね。ヘタだから3分ぐらいの曲しかできない。金もないから着飾ってない、それが「リアル」なんだよ。

――なるほど。

伊藤　それで今度は80年代の華やかだったものを、「あれはもう終わったものだ」としちゃう。だから80年代に活躍したバンドはどんどん契約を失なっていっちゃうんだ。レコード会社が「ダメだ」って言って。ここで一番ポイントなのは、91年以降、ロックシーンからかわいいオネエチャンたちがどんどん減ってくるんだよね。

――シーンがしぼんでいくサマが目に見えるようです(笑)。

伊藤　ブスばっかになっちゃう。「リアル」だから。

――リアルだからブスー(笑)。

伊藤　このへんが痛いところで、当時のかわいいオネエチャンたちはロックのコンサートに来なくなっちゃうんだよ。90年代全部とは言わないけど、そういう意味では相当ロックシーンにアングラ臭が漂って、レコードの売上もかなり落ちてくるわけだ。

ロック&プロレスから考える 80's/90's比較論 伊藤政則

90年代初頭を席巻した、グランジ・ロックを代表するバンド、ニルヴァーナ。MTVではシングル「スメルズ・ライク・ティーン・スピリット」がヘビーローテーションで流され、当時のロックシーン、そしてバンド自身に大きな影響を与えた。

セーソクさんオススメの「黄金の80's」HM/HRアルバム入門編

ヴァン・ヘイレン
『1984』
イギリス主導だったHMブームを一気にアメリカに引き戻した一枚であり、No.1ヒットになった「ジャンプ」はあまりにも有名。

ボン・ジョヴィ
『SLIPPERY WHEN WET』
87年の全米アルバムチャート年間第1位となり、同バンドの世界的人気を決定づけた一枚。名曲「リヴィン・オン・ア・プレイヤー」を収録

AC/DC
『BACK IN BLACK』
AC/DCの1980年発売の6枚目のアルバム。その総売り上げはマイケル・ジャクソンの『スリラー』に次いで世界第2位!

メタリカ
『MASTER OF PUPPETS』
メタリカが86年に発表したサードアルバムで、スラッシュメタルというジャンルそのものを広く認知させた名盤

アイアン・メイデン
『THE NUMBER OF THE BEAST』
英国が世界に誇るメイデンが82年に発売した3枚目のアルバム。王者の風格すら漂わせた完成度の高い一枚として知られている。

湾岸戦争によって、90年代は一気に「リアル」なものへ向かっていった

——「一般大衆のもの」じゃなくなってくるわけですね。

伊藤　レコード会社は次々にバンドを売らなきゃいけないからいろいろやるんだけど、結局80年代ほどじゃないんだよな。オレなんかは90年代を「失なわれた10年」って言ってんだけどね。経済みたいなもんだよ。実際、日本もバブルが弾けるとか、いろいろあるわけじゃん。だからまさに80年初頭に「MTV」ができてエンターテインメントが盛んになる。だけども90年代に突入して湾岸戦争が起こり、バブルも弾けてバンドも汚くなる。でもそれこそが「リアル」だという人々が出てくる。そうなると「おまえら、それは頭がちょっとハゲあがってたのを坊主頭にしただけじゃん！」っていうぐらいに、坊主頭のアーティストがすごく増えるんだよ。長髪じゃなくなるんだよ。

——ああ、確かに「長髪＝80年代」という認識はありますね。

伊藤　見たときに、そのへんにいるヤツなんだよ。選ばれたスターじゃなくて、そこらへんにいるヤツ。そういう意味で90年代は、プロなんだろうけども見た目は素人っていう人たちがやたら多くなって華やかさがなくなってるから、なんかこう、プロフェッショナルっていうものをどこで感じたらいいのかわからずに時代がすぎていく。それが90年代だったんじゃないかな。だから80年代がよかったんじゃなくて、90年代に入って失なわれたものが大きいだけなんだよ。

——その90年代の象徴だったニルヴァーナも、ボーカリストのカート・コバーンが自殺することによって閉塞するわけですよね。

伊藤　まあドラッグうんぬんで自殺するんだけども、彼らは心の準備ができてなかったわけよ。スターになろうと思ってなかったから。逆に80年代のバンドはスターになりたいと思ってたわけだよ。だから何百万枚とレコードが売れてワーッと人が来た時代と違って、心の準備ができてないから、重圧の中で自分の居場所を見失なったんじゃない？

——それも「リアル」……なんですかね？

伊藤　べつにスターになりたかったわけじゃなくてミュージシャンでいいんだとか、そんなことを言うんだけども、常にどこの世界もスターをほしがってるわけだから、カート・コバーンはスターだったんだよ。だけど本人はスターじゃなくて「ただそこにいられればいい」という感覚だった。そういうエンターテインメントの波のなかで、「なんでオレはこうなっちゃったんだろう」と思っちゃったんじゃないかなあ。

——80年代はスターになりたい人たちがいて、それをスターにする仕組みがあって、さらに大きな商売にする勢いがあったっていうことですね。

伊藤　まったくだね。フレンドリーでポップな曲があって、スター性があってルックスもよければいい、と。でも、それだけじゃないんだよ。そこが80年代の凄いところで、「MTV」のおかげでスターたちがどんどん花火のように打ち上がる一方、そうじゃないバンドもいたわけじゃない？　メタリカみたいな。彼らは「MTV」にビデオを提供したのは、ずいぶんあとになってからだよね。ほかにもメガデス、スレイヤー、アンスラックスあたりは、俺たちはガチンコ系だという気概を持ってやってたよね。

——いわゆる「スラッシュメタル」というムーブメントですね。

伊藤　彼らみたいに真のメタルを求めるバンドもいたわけだから、80年代は多様性があって、その多様性を全部飲み込むだけの力が時代にあったんだよ。それが80年代。

——ただ、そうやって頑張っていたメタリカも、90年代にはグランジの影響を受けてグダグダになった印象が強いんですが。

伊藤　なったねえ。でもそれはメタリカだけじゃなくて、多くのバンドは90年代を「逆流」って言ってるんだよ。飲み込まないと死んじゃうわけだから。だけど音楽ってモダン性が重要で、そういうものも常にやっていかなきゃいけないわけだよ。メタリカは91年に発表した通称「ブラック・アルバム」で1000万枚ぐらい売ってしまってるのね。そこで彼らも燃えつき症候群みたいになってたんだと思う。ボン・ジョヴィもそうじゃん。彼らも一回は解散説が出て、88年あたりのアルバムで売りつくして、でも客は入るからって2～3年もツアーやってりゃ、そりゃ燃えつきるよね。メタリカも売りつくしてツアーやって、その後の2枚は決して悪いアルバムじゃなかったけど、そういう背景はあったからね。

——求めすぎるのは酷、ということですか。

伊藤　まあ、何か変わったことをやれば反発は来るじゃん。逆にポップだからできるんでね。一番下のヤツが変わったことやっても、誰も見ないから。

——確かに（笑）。

伊藤　目立ったっていう意味では、メタリカなんかがリーダーシップを取ってたおかげで、90年代もメタルっていう音楽は逆流のなかでも沈没しないでなんとか生き残って、次の時代につながった、と。オレはそう読むけどね。

——辛抱の時代だったってことでもあるわけですね。

伊藤　だろうねえ。90年代、決して悪いバンドばかりじゃなかったんだけどね。一方、日本ではミスター・ビッグに代表されるような、アメリカでは人気がないけど日本では大スターっていう「ビッグ・イン・ジャパン」と呼ばれるようなバンドもいてね。でもこれって、どこの国でもあるんだよ。ドイツだけでしか人気ないとか、イギリスだけとか。ミスター・ビッグって、ベストだと日本で80万枚ぐらい売ってるんだよ。そうするとアメリカのレコード会社もおもしろくないから、「なんだよ、日本だけじゃね

©Niko Tavernise for all Wrestler Photos

映画「レスラー」のなかでもインパクトが大きかったのが、40代の男女が揃って「80年代は最高だった！ 90年代にニルヴァーナがすべてをぶち壊した！」とバーではしゃぐシーン。

ロック&プロレスから考える

80's/90's比較論

伊藤政則

えかバカヤロウ」なんつって難癖つけるわけよ。雑誌とかも。「オレらが載せても日本でしか売れない」とか。単にやっかみだよな。でもそういうバンドがポッポッ90年代にいたっていうのは事実だよね。そうやってそこに若いファン層がついていったから、終わることはなかったわけよ。

――ただ、グランジや大物のグダグダのせいもあって、90年代って「暗い」イメージがありますよね。

伊藤 だって、もともと音楽的に暗いもん！　誰かが言ってたけど、家族にいじめられてるとか、親に暴力を受けたとか、そういうことばっかり歌ってるわけ。そんな「おまえのことは誰も聞きたくねえよ」って！（笑）

――「リアル」だ（笑）。

伊藤 80年代は、「さあみんなで酒飲んで、パーティ行っちゃう？」ってノリじゃん。それが「リアル」になったらそんな内容で、そんなのは誰も聞きたくない。そうすると、今度は社会に対する「怒り」でしょ。でも怒ってるのはおまえだけじゃないっていうね。まあ実際、社会全体も明るくはないから。暗かったのはルックスだけじゃなくて、「みんなで一緒に肩を組んで悲しもう！」っていうとこにもあったんだよ。だから当然、暗いよな。

――みんながそういうムードだった、と。

「90年代の何がよかったの？」ってオレは逆に聞きたいんだけどさ

伊藤 プロレス・格闘技界だって、90年代に入って湾岸戦争以降、殺伐としたものを求めてくるじゃない。そういう部分でも音楽とプロレスはリンクしてるんだよな。

――ちょうど93年はパンクラスが旗揚げしたり、UFCがスタートした年になりますね。

伊藤 91年頃に出てきたニルヴァーナやパール・ジャムといったバンドたちがピークを迎えるのがやっぱり93年頃で、そういう人たちの影響はいろんなところに出てたんだと思う。オレはよくわからないけどファッションとかね。そういうことも全部含めて、まき散らされて影響受けてるんだと思うよ。

――WWEでもベビーフェースとヒールという構図が完全に飽きられて、アンチヒーロー的な選手やグループが人気を得ることになります。

伊藤 それもやっぱり湾岸戦争とかそういうバンドとかが暗い曲をやってるのがテレビに映るなかで、茶の間で観るプロレスが一つだけ80年代的だったらもう受け入れられないと思う。それにWWEは相当練られてるから、世の中の動きとか流れを逐一、当てはめていかなきゃいけないんだよ。だからビンスなんかもそういうのを察知してやらざるをえなかったんだと思うよ。

――逆に、80年代否定派の言い分は「軽い」とか「チャラチャラしてる」になりますよね。

伊藤 うん。「リアル」じゃないからだろ。

――そこにつきる、と（笑）。

伊藤 べつに80年代だってチャラいバンドばっかりだったわけじゃない。その言い分は半分ぐらいしか当たってなくて、じゃあさっき言ったメタリカとかはどうなるのって話じゃん。だから全部が全部そうだってことじゃないんだけど、時代が廻ってたってことに対して「ひとこと言いたい」ってのはあるんじゃないの？　じゃあ「90年代の何がよかったの？」って逆に聞きたいんだけどさ、オレは。

――（笑）。

伊藤 悪いことばかりじゃないんだろうけど、実際、暗くなり始めていたんだろうからね。最近、映画なんかでやおら80年代の曲がかかったりしてるんだけど、それだけ遠くなってきたんだろうね。でもいい曲がたくさんあるわけでさ。何か華やかなものがあったりとかさ。そしてまた、90年代には、80年代を総括するにはまだ早かったんだよ。

――なるほど。

伊藤 まだ進行形だから。2000年代に入ったから総括できるようになったんだよ。じゃあなんでかっていうと、いま20代ぐらいの若い子たちにとって、逆に言うと90年代初頭ってよくわかんないんだよ。これから音楽やりたいって子たちは当然、カッコいいことがやりたいわけだから、だからアマチュアバンドのときってプロよりむしろ派手なカッコしてること多いじゃん。

――確かにそうですね。

伊藤 だってバンドやってカッコよくなって女の子にモテたいわけだから、90年代はスキップなのよ。そこを飛ばして80年代に戻ってるんだよ。時代はいつの世もそうだけど、やっぱりいまになって「90年代はつまんなかった」っていう人たちがやたら出てきて、80年代に帰ろうとしてる。だからヨーロッパの若いバンドの多くは80年代を目指してる。でもまんまじゃなくて、いいとこを取って自分たちの表現に足してるわけ。それがここ3～4年の傾向。だからこの先、「80年代回帰型」が増えてくるよ。少なくとも音楽は、テクノロジーは進化するけども、ソングライティングは何も変わらないわけだよ。ビートルズの昔から。そうなると80年代のいい時代にソングライティングを戻していこうとなるよね。

――明るかったあの頃に帰ろう、と。

伊藤 それから、グランジでもパンクでもいいんだけど、だんだん年取ってくるでしょ。そうすると楽器もチョイいいのを持てるようになる。曲も20年も作ってくると、いい曲を作るヒントがわかってくる。そうなると、若い頃のはできないようになるんだよ。成熟しちゃうから。そうなると、成熟した音楽を作るようになる。グリーン・デイなんかもそうだけど、かなり成熟しちゃってる。そうなるとどうなるかっていうと、70～80年代の音楽をいま「クラシック・ロック」って呼ぶようになってるんだけど、ミュージシャンのクラシック・ロック化が始まってるわけ。まだいまは90年代の音楽はクラシック・ロックになりえないから、やっぱり70～80年代に戻ってるんだよ。メタリカもそう。やっぱり一番いい時代に戻るんだよな。

――やっぱり「80年代万歳！」ってことですね。ありがとうございました！

【10年4月1日／都内・代々木にて収録】

いとう・せいそく■1953年7月10日、岩手県出身。アルバムのライナー・ノーツ、音楽専門誌、ミュージシャンの伝記など幅広い執筆活動を展開。またエフエム・ラジオのDJとしても活躍中。海外のアーティストからの信頼が厚く、"MASA"の愛称で親しまれている。

プロレスと音楽の変革

目覚め1990

RATTの1980年代名曲「Round and Round」が流れる昼間のバー。

「80年代が最高、ガンズ・アンド・ローゼズ、モトリー・クルー、デフ・レパード」

「でも、ニルヴァーナの登場で楽しさがぶち壊し」

「90年代は大嫌いだ。90年代最低」

映画『レスラー』を観て、このセリフに納得した80年代ハードロックやヘヴィメタル（以下HR／HM）のファンも多いのではないだろうか。

おそらくいまの20歳代洋楽ロックファンはニルヴァーナがきっかけで洋楽が好きになった人も多いので、その人たちには「?」なセリフだったかもしれないが。しかし、90年代初頭においてニルヴァーナは既存の音楽をあきらかに「ぶち壊した存在」だった。どこが「ぶち壊し」だったのか？　簡単に言うと二つ。「ギター」と「ファッション」だ。

それまでの若者が聞くハードな音楽といえば当時ビジネス的にも全盛だったHR／HMが中心。このジャンルにおいてギタリストの見せ場である間奏は「速弾き」が定番というのがリッチー・ブラックモアやイングヴェイ・マルムスティーン、リッチー・サンボラらの活躍によって80年代までにすっかり定着していた。

そんな流れのなか、90年代初頭ニルヴァーナのヴォーカル＆ギターである故カート・コバーンは代表曲「Smells Like Teen Spirit」においてまったく速弾きをしないどころか、メインのメロディをただ繰り返すという「禁じ手」ともいえるプレイを敢行。

その感覚は当時のプロレスにたとえると「ロープに振られたら返ってくるもの」なのに返ってこないぐらいの「ありえない」ことだった。しかも、そのギター・サウンドはハードで歪んでいながらもHR／HMの音とはまったく違う、商業的に加工されていない「リアルな音」だった。

粗々しさで言えば近いのは70年代後半のパンクだろうが、楽曲自体のテンポはそこまでの疾走感はなく70年代パンクが「怒り」だったのに対して、こちらは「脱力感」を感じるという意外にも、とにかく既存のジャンルには収まらない表現の難しいタイプのサウンドであった。

そしてファッション。80年代HR　HMバンドがあたりまえに着ていた皮パンやヒョウ柄のジャケットに加え「ヘアー・メタル」と揶揄された色とりどりの「何流?」と問いただしたくなる生花的髪の毛を一切排除し、機能の限界を超えて破れたジーンズを着こなす感覚も当時としてはありえなかった。

いまでこそ、それが「グランジ」というジャンルで語れるのだが、当時は「○○じゃないもの」としか言いようがなく、ジャンル分けするのが既存リスナーには本当に大変だった。だからこそ新しいリスナーには素直に届いたのかもしれない。

この「○○じゃないもの」の感覚は日本マット界でも近い時期に起こっている。それが「第二次UWF」という現象ではないだろうか。既存の「プロレスとはこうあるべき」という、それこそロープワークや、従来のプロレスでは見せ場である飛び技などを排除したUWFは当時のファン、とくに若い世代に「本当の闘いはこうだ」と「リアル」を感じさせていた。既存のプロレスで多用されていたブレーンバスターやなんとかロケット砲という（美しき）「無駄」がなくなったことイコール、ファンは「リアル」だと感じたのだろう。

1990年代の初頭とはそういう時代だった。なぜそこまで「リアル」を求めるのかといえばやはり80年代に音楽もプロレスも商業的に盛り上がり、結果万人にウケるアーティストや選手が多く出すぎたからその反動が生まれたのだろう。

いつの時代も特定のジャンルが盛り上がれば絶対に反動が生まれるのだから。単純にビジュアルだけを考えると当時のWWFのアルティメット・ウォリアーは音楽でいうところの「ヘアー・メタル」のビジュアルとカブるのも興味深い。

ちょうど、この「1990年周辺」は89年U-COSMOS、90年湾岸戦争、91年ニルヴァーナ「NEVER MIND」リリース、93年UFC開催と偶然にも「目の覚める」時期だったのかもしれない。当初のUFCもフィニッシュの残忍さや膠着が非常に「リアル」でWWFを見慣れたに人たちには大きな衝撃を与えた。

そして、音楽の世界では変化の波を感じ取った80年代を生き抜いてきた鋭利な感覚を持つミュージシャンにも影響をおよぼしたのか、世界的ロックバンドであるU2は1991年から一気に路線を変えた実験的3部作を90年代に発表したり、かのマドンナも新進気鋭のプロデューサーを積極的に起用して次々に新しい音を模索するなど時代に対するアクションを起こしており、非常に実験的な面を持った時代でもあった。

そして、「変革」というのはよく「ジャンルは10周期でらせん状に進化する」と言うが、それは正解かもしれない。

1980年前後のタイガーマスクのデビュー、パンク。1990年前後のUWF、UFC、ニルヴァーナ。2000年前後の桜庭vsホイス、ガレージ・ロック再興——。

そして今年は2010年。そろそろ「ぶち壊す」何かが現われるのだろうか。

（buggy）

PRIDE、K-1を立ち上げた"キーマン"たちの人間模様とは!?

格闘技界の礎を築いたのは谷川貞治、榊原信行そして柳沢忠之だった!

FIELDS K-1 WORLD GP 2008

FEG代表

谷川貞治

格闘技界における90年代は、K-1やPRIDEが誕生したまさに革命の時代だったが、
その裏で"暗躍"していたのはなんとサダハルンバだったりする。
[illegible]かにもいまの格闘技界[illegible]重要人物"が一人。
[illegible]に出てくる柳沢忠之とはいったいどんな人物なのか!?
[illegible]同時期のキーマンである榊原信行、ついでに山口日昇についても聞いてみた。

聞き手／[illegible]斉藤　試合写真／乾晋也、平工幸雄

谷川　今日はなんの話だっけ？

――今日はですね、今号の特集テーマが「1990年代」ということで、谷川さんにも90年代の話をおうかがいできればと思ってます。

谷川　90年代？　なんかあったっけ？

――いろいろありますよ！　90年代は『週刊プロレス』も絶好調でしたし、格闘技のシーンもいわゆるK－1、パンクラス、UFCと、プロレスから格闘技に転換をはかるダイナミズムがあったじゃないですか。そのなかで谷川さんの存在というのも欠かせなかったと思うんですよ。

谷川　あ、そうだねえ！　ボク、活躍したもんね！（身を乗り出して）。

――ええ。で、谷川さんが『格闘技通信』編集長として大暴れしてたということはわかるんですけど、そこからなぜいまK－1イベントプロデューサーに就任してるのかということはあまり知られてないような気がするんです。それこそ、なんでベースボール・マガジン社を辞めたんでしょうか？

谷川　えーっとね、勘！

――か……、勘!?　それだけですか。

谷川　うん。「辞めたほうがいいなぁ」って。ボクね、たしか90年頃に編集長になって、アンディ・フグがK－1で優勝したのを載せた号が編集長の最後の仕事だったと思う。だから95年に突然辞めたんだよね。当時はちょうどターザン山本！さんが新日本プロレスに取材拒否される、されないでゴチャゴチャやってた時期だったんですよ。山本さんは絶対に新日本プロレスから取材拒否されるはずがないと高をくくってて、それほど山本さんが絶好調な時代だったんだけど、ボクはさすがに山本さんが負けると思ったんだよね。

実際、谷川さんの勘は正しかったことになりますね。

谷川　で、それと同じぐらいの時期に「スカパー！」で格闘技専門チャンネルができるから、「その立ち上げを手伝ってくれないか」という話が三井物産からあったんです。だから、いま思い出すとその二つをきっかけにして辞めましたね。ボク自身はアナログ人間だけど、「これからは活字からテレビ格闘技の時代になるんだ」と思ってたし、それにボクは〝焼け野原〟の開拓が好きだから

こうして闇市場を作ったわけですもんね（笑）。

谷川　でも、辞める1週間ぐらい前までは、ホントに誰にも言わなかったです。で、山本さんから始まって、編集部員一人ずつに「オレ、辞めるわ」って言ったんだよね。

97年に旗揚げされたPRIDEも、じつは当初はサダハルンバと柳沢氏が関わる話があったのだそう。そのほかにも、90年代の主だった格闘技イベントに二人はほとんど関わっていたというから凄い!!

――ターザンに話したときは、ぐでんぐでんに酔っぱらってたという話を聞いたことがありますよ。

谷川　そうそう「今日言おう！」って意を決して山本さんを待ってたんだけど、馬場さんとメシを食ってるか何かでなかなか山本さんが帰ってこなかったんですよ。で、待ってる時間があったから「どうやって言おうかなぁ……」とか考えてるうちに急にソワソワしだして「よし！　酒でも飲もう」って、一升瓶買ってきたんだよね。気がついたらその一升瓶を空けちゃったんだよ！

――んあ～！　飲みすぎですよ!!

谷川　そんな状態で夜中の1時頃に山本さんが帰ってきたんで、そこで「山本さん、ボク辞めます」って言ったんです。そしたら「なんでだ!?」って言われたんで、いろいろと説明して。……でもボク、人前で泣いたのはあれが初めてだなあ。

いい話ですね。

谷川　なんか涙が出てきたんだよ。ボロボロ、ボロボロって。逆に山本さんも相当ショックを受けたと思うんだよね。「オレが谷川に苦しい思いをさせてたんじゃないか」って。だから、あれは山本さんの磁場が狂った第一弾だと思う。

――その後、谷川さんは『サムライTV』の立ち上げに関わるわけですね。

谷川　うん。『（FIGHTING TV）サムライ！』という名前自体もボクらが考えたんですよ。で、三井物産が格闘技専門チャンネルを作るということで、それで最初にやったのがホテルオークラでのプレ開局記念パーティですよ。猪木さんも来るし、松井館長や石井館長も勢揃いで、あれは凄かったなあ。

それは元ダブルクロスだった柳沢（忠之）さんも関わったんですよね？

谷川　ああ、そうだね。だからもともと『サムライ』は石井館長の後輩で芦原道場の井田さんという、初代の『サムライ』の代表になった方がいるんだけど、その井田さんからボクが声をかけられた話で、そのとき柳沢に相談して「絶対にやったほうがいい」って言われたんですよ。で、「だったら一緒に手伝って」という話になったんだよね。

当時、柳沢さんはダブルクロスでちっちゃい『紙のプロレス』を作ってましたよね？

谷川　だから「『紙のプロレス』はどうすんの？」って聞いたら、「それは会長（山口日昇）に任せる」と。本格的にはそれから柳沢と仕事をすることになったんですよ。

――それまでの柳沢さんと谷川さんの関係というのは、『紙のプロレス』編集者と出演者というか。

谷川　要はいまのボクと斉藤くんみたいな関係だよね。ただ、ボクは業界のなかで柳沢が一番頭がいいと思ってて、彼が言うんだったら間違いないと思って踏み切ったんですよ。へんな話、そのときにほかにもいろんな人を辞めさせちゃったんだよね。でも、結果的にボクはベースボールを離れてよかったと思うし、いまとなっては柳沢もダブルクロスから離れてよかった

『サムライ』の件は柳沢に相談して「絶対にやったほうがいい」って

んじゃない？ ボク自身、いちサラリーマンで終わらず、世の中を見られたという意味では凄くよかったと思ってるし。

――柳沢さんと一緒に『紙のプロレス』を作っていた山口日昇さんはなぜその輪に入ってこなかったんですか？

谷川 それは、ボクは知らないんだよね。柳沢と山口さんのあいだの話だから詳しくも聞いてないし、聞くつもりもなかったし。でもまあ、あの二人もお互いにあのとき別れたかったんじゃないの？

――簡単に言うと、みんなで山口日昇さんを裏切ったわけですね（笑）。

谷川 んあ～！ ただ、『サムライ』はすぐ挫折したんだけどねぇ。それは三井物産がボクらに〝商社マン〟をやらせようとしたからなんだけど。というのは、三井物産ってやっぱりお堅い会社なんで、格闘技を扱ううえでいろんな団体なんかと直接交渉はしたくなかったんだよ。だから柳沢の昔の休眠会社を使って、そこをあいだに挟むようにしたんです それが適当に名前をつけた「ローデス」なんだけど、

――ダスティ・ローデスから取ったんですよね。

谷川 当時、メディアEと言われてたルパート・マードックを意識して、「マードックとタッグを組むには、ローデスしかいない！」という理由でつけただけなんですけどね。

――んあ～！（笑）。

谷川 そうしたら、そのままローデスが切られちゃったんです。それはなぜかというと、ボクらは格闘技ニュースを含めて番組を作りたかったんだけど、三井物産はお金がかかるから制作はせずに映像を買いましょうと言いだしたんだよ。つまり、ボクらに「営業をしろ」ということだったんだよね。

――谷川さんとしては、「それは話が違う」と。

谷川 で、実際にテレビ朝日と新日本プロレスの映像の交渉をしたりもしたんだけど、「こんなことやってでもしょうがない」ってことで辞めたんです。だから『サムライ』は開局前に辞めることになったから結局1年もやってないですね。それで僕らについてきた関係者も30人近く辞めちゃったから、そのコたちをどうやって食わせるかで頭がいっぱいで、雑誌をやったりテレビの制作をやったり、いろいろやりましたね。

――その〝いろいろ〟のなかに、やがてK－1やPRIDEの仕事も入ってくるようになったということですか？

年末の格闘技イベント Dynamite！を計画したのもサダハルンバと柳沢氏。ちなみに、〝重要人物〟柳沢氏の写真はどの媒体にもほとんど掲載されていないので、どんなお姿なのかはご想像にお任せします！

PRIDEに猪木さんを呼んだのも吉田秀彦をスカウトしたのもボクら

谷川 まあ、そうだね。で、たしかPRIDEの仕事が先だったんだよ 桜庭vsホイラー戦をやった頃だったから。だから猪木さんをPRIDEに呼んだのはボクらだったし、吉田秀彦をスカウトしたのもボクらで、そういう仕事ぶりを見て石井館長も「K－1を本格的にやってくれ」ってそれが2000年くらいかな。

――そもそもPRIDEにはどういうきっかけで関わるようになったんですか？

谷川 えーっとね、もともと『PRIDE・1』の髙田vsヒクソン戦というのはバラさん（榊原信行・元PRIDE代表）が石井館長に相談してたという経緯があるんだよね。

――そのとき榊原さんは東海テレビ事業の社員だったんですよね。

谷川 で、ボクらはK－1名古屋大会を手伝ったこともあって、バラさんとはすでに一緒に仕事をした仲だったんだけど、『PRIDE・1』の髙田vsヒクソン戦が決まったときに、バラさんが一番最初に石井館長に「この興行をやりたい」と話を持ってきたんですよ。で、石井館長は「やる」って言ったんだけど、途中でテレビ局が決まらないからって降りちゃったんです。でも、館長が「やる」って言ってたときに、谷川さんとバラさんでやって」って言われてたんですよ。でも、途中で館長が降りたからボクらが降りざるをえなかった。『PRIDE・4』まではバラさんが自力でやったんだと思います。

――で、『PRIDE・5』から新体制になって。

谷川 だけど、さすがにお金が苦しくなっちゃって その先は石井館長を通さず、バラさんから直接ボクらに「手伝ってくれ」って話をしてきたんです。そのときに「猪木さんを巻き込もう」とか「桜庭中心にやっていこう」とか方向性を決めてマッチメイクを中心にお手伝いしたんですよ。フジテレビでの放送もボクらが決めたし。

――それはちゃんと対価のある仕事だったんですか？

谷川 固定費みたいなかたちで月々にお手伝い費をもらってたよ。でも、それまではまったく無償で頑張ってたなあ。だから、1990年代のボクは石井館長らをはじめとする人たちの「格闘技界の黒子」だったという感じですよね。で、どっちかというとK－1にてこ入れしたのがボクで、PRIDEにてこ入れしたのが柳沢だったという感じかな。

――そう考えると、谷川さんと柳沢さんは格闘技界の歴史のなかで相当なキーマンですね。

谷川 へんな話、この15年ぐらいの格闘技界はボクらがほとんど作ったと思うよ。『サムライ』もそうだし、地上波放送だったり、『Dynamite!!』とか年末の格闘技イベントもボクらが企画して始めた感じだし。でも、いま考えても90年代後半は苦しかったなあ。とくに『サムライ』がうまくいかなかったのがホント苦しかった。

――あそこで『サムライ』が続いていたら、柳沢さんや谷川さんもここまで精力的に

趣味の違いから『ハッスル』は一度も観たことがないというサタハルンバ　ちなみに柳沢氏と違って、山口日昇氏の写真はこれまで何度も出てるのでもういいでしょう!

柳沢はプロレスを格闘技にもできるし格闘技をプロレスにもできるんだよ

PRIDEやK-1に関わっていたとはかぎらなかったんじゃないですか？

谷川　いや、黒子としては関わっていたと思う。だって、K-1ができるずっと前から『格闘技オリンピック』[番組]や佐竹vsニールセン戦とか、いろいろお手伝いはしてましたからね。でも、ボクらのスタンスはあくまでマスコミだったから、もしかしたら表には出てこなかったかもしれない。石井館長の脱税と森下社長の自殺がなかったらね。

――なるほど。ところで当時、山口日昇さんというのはどういう存在でした？

谷川　ええっと、ボクは山口さんのことは好きだし、しゃべってても楽しいんだけど、じつはあんまり一緒に仕事をしたことがないからよくわからないんだよね

――ええーっ!?　あんだけ『紙のプロレス』に登場してるのに(笑)。

谷川　でも、直接関わってはいないんだよなあ。だからボクのなかでは他人から聞く山口日昇像しかないんですよ。すぐにいなくなっちゃうとか

――的確な印象ですね(笑)

谷川　会長のことでボクは一番思うのは、「『週刊プロレス』の編集長になったほうがいい」と思ったんだよね。当時の『週プロ』で山本さんに代われる人はいないと思ったんだけど、でも、山口日昇だったらなんかおもしろいことするんじゃないかなっていう勘があったというか。というのは、山口さんってやっぱりプロレスの人だと思うんですよ

――谷川さんや柳沢さんは違うんですか？

谷川　ボクはプロレスの人じゃないと思ってるんです。存在はプロレスっぽいけど。

――ダハハハハ！　柳沢さんはどっちですか？

谷川　柳沢はどっちかといえばプロレスの人だろうなあ。でも柳沢が一番バランスがいいんじゃない？　プロレスを格闘技にもできるし、格闘技をプロレスにもできる。山口さんはそこまではなくて、やっぱりプロレスっぽいよ。

――谷川さんにおける「格闘技っぽい」ってどういうことですか？

谷川　ええっと、信じられないかもしれないけど、ボクは競技の部分でも格闘技を楽しめちゃうんだよ。柳沢や山口さんは全日本キックとかシュートボクシングなんかは見れないと思うけど、ボクは見れちゃうんだよね。だからへんな話、立嶋(篤史)まで認めちゃうのがボクなんです。でも、柳沢は、立嶋は範疇に入らない。山口さんはまったくの別世界。だからボクは逆に『ハッスル』なんかは別世界に思うんですよ。結局、『ハッスル』って一回も観なかったもんね。

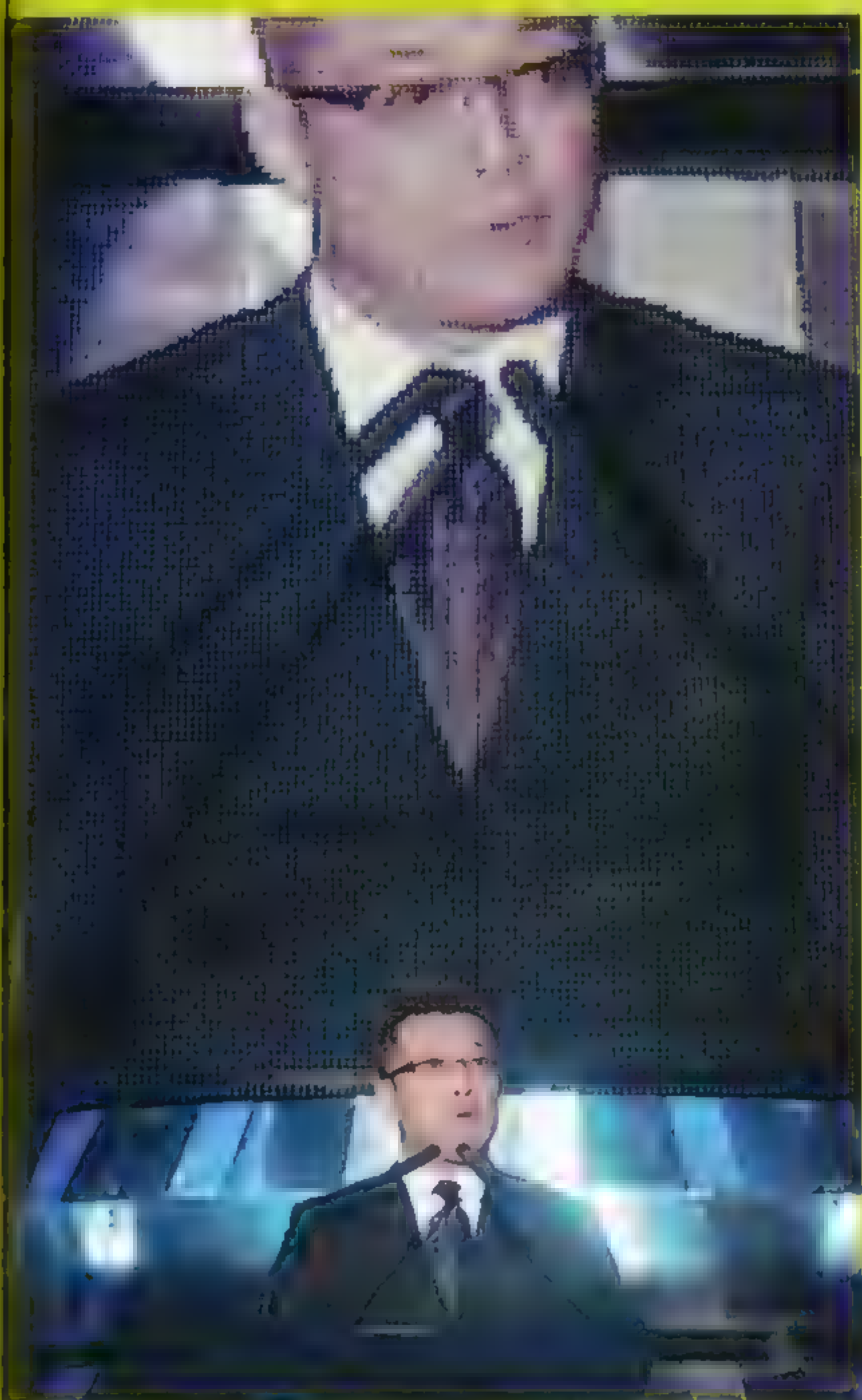
――ああ、なんとなくわかります

谷川　そこはべつに嫌いだとかバカにしてるとかではなく、趣味の領域が違うんです。そういう意味では、ホントに山口さんとはあんまりしゃべったことがないんですよ。語るべきことがないというか。

――じゃあ『紙プロ』には、柳沢さんを挟んでなんとなく世界観が共有できたって

柳沢は、山口日昇は自分と一緒にいたらダメだと思ったんじゃないかな

わけですね。
谷川　そうそう。で、ボクがプロレスで一番興味あるのってやっぱり猪木さんで、猪木さんでいうと、柳沢の猪木さんの楽しみ方がボクは一番心地いいんだよね。だから『猪木とは何か？』を読んだときに、「あぁ、このセンスはいいなあ」って凄く思ったんだよ。
　そう言われると、確かに03年にK－1とPRIDEが分かれてから、谷川さんと山口日昇さんもまったく接点がなくなりましたよね。『kamipro』にも僕が編集長になるまではほとんど出演してないですし。山口さんが『サムライ』に一緒に行かなかったのは、谷川さんとの相性の問題もあるんですか？
谷川　それはわからないなあ。でも、『kamipro』に出なくなったのは、たぶん山口さんはボクに声をかけづらかったからだと思うよ。ほら、03年にPRIDEとK－1が割れたときに、山口さんはやっぱりバラさんのほうを選んだからね。まあ、いろんな事情があるからそっちに行くのは全然いいんだけど、一つ引っかかったのは、そのときに山口さんはボクらとの会話から逃げたんだよね。「いや、オレわかんない、わかんない」って。
　ダハハハハハ！
谷川　で、僕らは山口日昇は仲間だと思ってたから、いろんな話をしちゃってたの。
――ところが、じつはPRIDE側だった、と（笑）。
谷川　あの印象じゃあ、島田（裕二）とよく似てたなあ。
　あの二人は凄く周波数が合いそうですもんねぇ（笑）。
谷川　じつは、それってけっこう心に残ってるんだよ。とくに、島田にはずいぶんお世話したからねえ！　クッソー、島田の野郎!!
　だからいまだに「島田だけは許せねえ！」って言ってるわけですね（笑）。
谷川　でも、本当は凄く島田のことも評価はしているし、根は好きなんだよね。それはPRIDEスタッフに関しても一緒で、ボクはバラさんに対してもPRIDEスタッフに対しても悪い感情がまったくないんですよ。でも、そういう経緯があるから島田とか山口さんに関してはちょっと引っかかってんだよね。「PRIDEに行く」って正直に言ってくれればそれでよかったのに。
――じゃあそれ以降、柳沢さんと山口日昇さんもあまり連絡を取ってないんですかね？
谷川　いや、あの二人はお互いに好きだからね。飯とかはよく食ってるよ。それは不思議な関係なんだよねえ。ただ山口日昇はボクへのコンプレックスはまったくないけど、柳沢忠之には凄くコンプレックスがあるじゃない？
――柳沢さんが関わりだしてから『紙プロ』のカラーも変わりましたし、山口さんもあとを追うようにインサイダー業を手がけるようにもなりましたし。
谷川　柳沢は山口日昇のことは好きだけど、「自分と一緒にいたらダメだ」と思ったんじゃないかな。一緒にいると、自分が山口日昇を殺しちゃうというかさ。「いやいや、会長それじゃダメなんだよ」みたいなことを柳沢は山口さんに言っちゃうんだよね。山口さんはそれを真に受けちゃって、何をしたらいいのかわかんなくなるんですよ。「柳沢が笑うところしかおもしろくないんじゃないか」とかね。
――なるほど、よけいに混乱しちゃうわけですね（笑）。谷川さんと柳沢さんの関係とは違うんですか？
谷川　うん。そこはお互いに活用し合ってるから。
――柳沢さんは「谷川貞治」の役割しか求めないし、谷川さんは「柳沢忠之」の役割しか求めない。そこは「お互いに依存してない」ってことですか？
谷川　そうだね。だから柳沢はボクといるのはラクだと思うよ。で、ボクは重要なところを柳沢に頼ってるけど、依存はしないんだよ。ただ行動として、柳沢との接点がボクはないんだよね。たとえば飲みに行くとかさ、一緒にスポーツをやったとかさ。
　えー、まったく画が思い浮かびませんね（笑）。
谷川　だから役割なんだよね。柳沢が苦手な人間に対してもボクは平気で付き合えるし、柳沢の苦手な仕事もボクは全然できちゃうんだよ。だからバランスはいいんです。それが山口さんだときっとバランスは悪いのかもね？　だからちょっと違うんだけど、ボクとターザンの関係に似てるのかもしれないよね。ボクもターザンの部下として仕事をすると萎縮するもん。
――谷川さんのカラーが消されてしまいそうですね。
谷川　でも、『SRS・DX』の山本さんはいいんですよ。山本さんのよさをわかって、山本さんに「表紙やってくださいよ」とか「巻頭（原稿）書いてくださいよ」とかお願いするのは凄くやりやすい。それが、上司と部下の関係で山本さんに「おまえはこうだ！」って指示を受けると、ボクは「う

TANIKAWA

2000年代、桜庭和志の活躍や世界最高峰路線でPRIDEを大成功に導いた榊原信行・元PRIDE代表。「石井館長や柳沢のいいところを全部吸収していた」というサタハルンバの話を聞くと、あの成功はどこか納得できるような気がするぞ

ーん……」っていう感じで自分の磁場が狂っちゃうというか。

――同じように、山口日昇さんも柳沢さんに磁場を狂わされている、と。

谷川 そうなんじゃない？ だから『ハッスル』のときなんかは、山口さんは一人でやっていたからラクだったんじゃない？ でも、バラさんが山口さんに柳沢の役割を求めたら絶対に失敗すると思った。だって、柳沢や石井館長のノウハウを一番吸収してたのは、山口日昇じゃなくてバラさん本人なんだもん。

――なるほど

谷川 これもたとえが悪いかもしれないけど、バラさんも"ボク的"なところがあるんだよ。「柳沢だったらこう考える」「館長だったらこう考える」ということをちゃんと考えられるというか。バラさんがそういう、他人のいい部分を自然と吸収してたからPRIDEが成功したんだと思うし。

（石井和義＋谷川貞治＋柳沢忠之）÷3＝榊原信行ですか（笑）。榊原さんは03年に社長に就任するまで、舞台裏でずっと基礎体力をつけてたんでしょうね。

谷川 バラさんはそれだけ動いて仕事してたしね。それにやっぱり抜群に調整能力あったんだよ。だから柳沢にとっては「谷川とバラさんはけっこう似てるかもしれない」と思ってるかもしれない。自分の発想を実現できるというか。柳沢は軍師タイプだからね。

――ああ、軍師という評価は凄くわかりやすいです。

谷川 バラさんもじつは軍師だったんだけど、急に君主になったんだよ。だからそこもわりとボクに似てるんじゃない？ ボクもどっちかといえば君主のタイプじゃなくて、副キャプテンみたいなタイプだからさ。

――ふ、副キャプテン!? 軍師や君主とは全然単位が違います（笑）。

谷川 （聞かずに）だから石井館長がキャプテンで、ボクが副キャプテンで全然いいんですよ。猪木さんがキャプテンでもいいし。

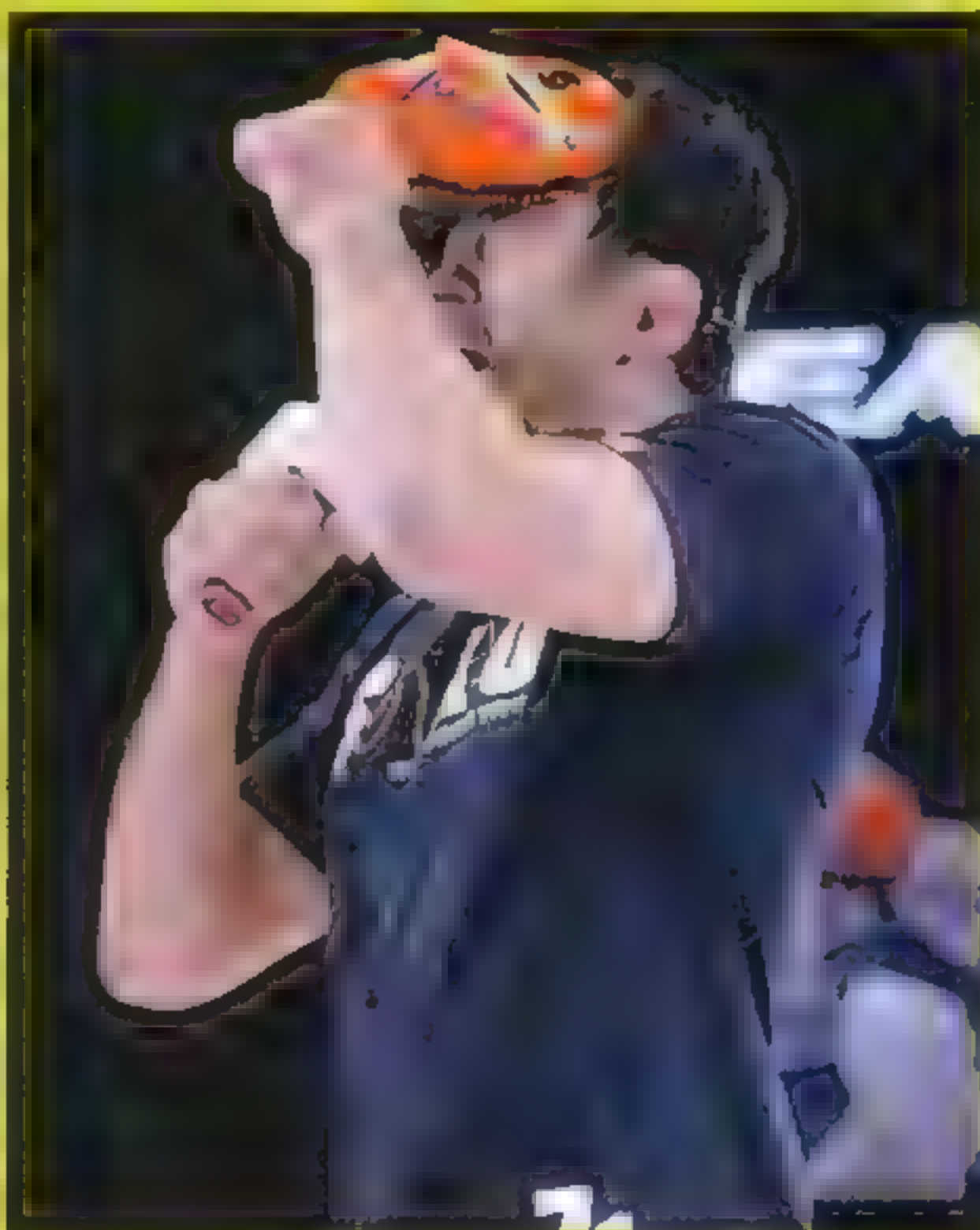
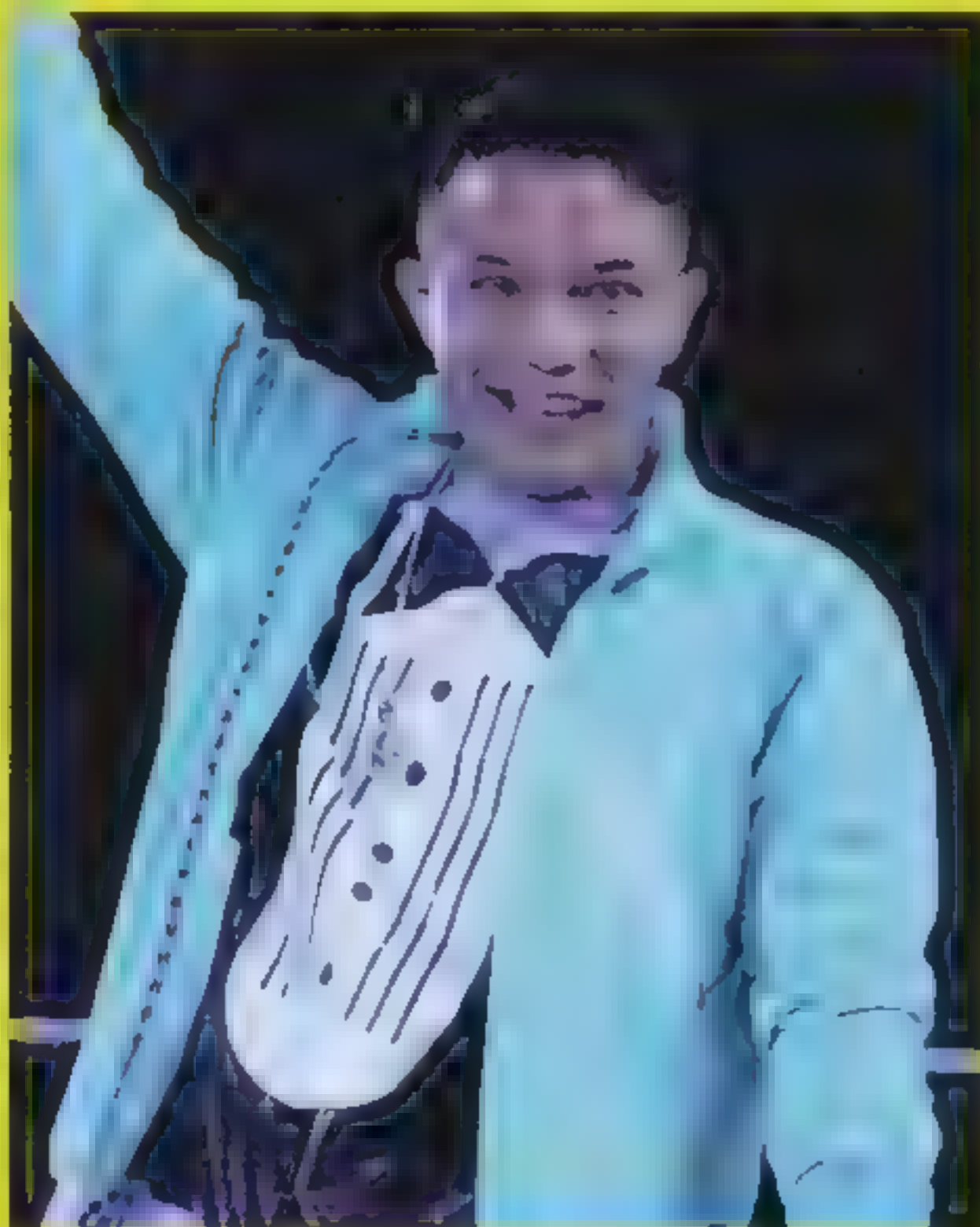
――そう考えると、高田本部長をうまくキャプテンにしたのもバラさんですもんね。なんか話をうかがっていると、格闘技界の礎を築いたのは谷川さん、柳沢さん、榊原さんの3人だと言っても過言ではないですね。

谷川 90年代だったからボクらはそれができたというのはあったかもしれない。編集者として誌面をどう構成するかというところで、自分から動いてネタを作らなきゃならないという時代だったから。でも、いまはそういう人間が君主として表に出なきゃいけない時代というか。

――いまは君主がいないですもんね

谷川 魔裟斗とか、ちょっと種類が違うかもしれないけど桜庭とか、KIDとかが君主になってくれるといいんだけどね。で、バラさんやボクみたいなのは今後、どんどん黒子に徹するべきだと思うよ

――でも、いまって業界が縮小してるせいか、どうしても谷川さんが前に出て行か

ボクらの世代が背負いきらないと最低10年は立ち上がれないですよ

「副キャプテンはいるけど、君主がいない」というサダハルンバ。桜庭和志や魔裟斗、KIDら、象徴的な選手らにはぜひ"君主"になってほしい

そのあいだにサダハルンバには"負の遺産"をなんとかしてほしい!

ざるをえないですよね。

谷川 ボクらが頑張らないとこの業界はなくなっちゃうと思うしね。だからボクらの世代って力道山、馬場、猪木、UWF、石井館長からいろんな遺産を背負わされてるんですよ。そう思ってるからボクはいま次の世代にちゃんとバトンを渡さないといけないと思って必死にやってるんですよ ボクらの世代が投げ出すと格闘技界はなくなっちゃうか、もしくは斉藤くんや笹原くんたちがそのまま負のほうだけ遺産を受け継ぐことになったら本当に死ぬ思いをするからさ。でも、ボクらは一度もいい思いはしてないんだよお（笑）。

――すでに『kamipro』の負の遺産は背負ってるんですけどね（無表情で）。なので、業界の負の遺産はどうか、谷川さんが背負ってください（笑）。

谷川 いや、ホントに背負いきらないとダメだと思ってる。じゃなきゃ暗黒時代に入るし、最低10年は立ち上がれないよ。でも、ここで沈んだら絶対にボクのせいになるもんなあ。

――あ、それは絶対にそうなりますよ。やっぱり石井館長じゃないとダメだ」とか言われる（笑）。

谷川 そうだよねえ……。はあ……。でもさ、神様はきっと見てると思うんだよ。苦労をした人を神様は見捨てるわけないっていうかさあ（遠くを見つめて）。

――あ、まさかの神頼み。谷川さん、その発想が一番ヤバイですよ!!（笑）。

谷川 （聞かずに）ああ神様、ボクだけは見捨てないでください。島田は一番あと回しでいいですから。

――ダハハハ！ そんなこと言う人は絶対に救われないと思います（笑）。

【10年4月7日／都内・某ホテルにて収録】

「時代を超えて残すモノがある！」（闘道館・館長）

『MMA Legend』No・3桜庭和志編の表紙には、〝栄光への献身〟というまさに桜庭の格闘技人生を言い表わした秀逸コピーが躍っているが、裏を返して表4のプロレスショップ闘道館の広告コピーもなかなかどうして僕の胸にズサリと突き刺さった（ような気がする）。

「4月発売の『MMA Legend』は桜庭さんでいこうと思ってるんですが……」

「ボーウィー・チョーワイクン!!」

1月に『kamipro』編集部の松下女史から編集協力の依頼を受けた僕は、間髪入れずバンコク行きの意思を告げた。この間合い、タイミングは〝宮崎学の兵法〟でいうところの「ケンノミを取る」というもので、相手の機先を制することがいかに喧嘩に勝つために有効な手段であるか。つまり、絶対にやりたい仕事もいかにクライアントからケンノミを取れるかが重要となるのである。

「それとエンセンとレスリングの安達さん！ これはマストで!!」

「ヒイ〜ッ！ わ、わかりました〜！」

電話越しにもかかわらず、女史がしたたか小便をちびったことぐらいは容易に確認ができた。僕はこの喧嘩をあっさりと制し、自分がやるべき仕事をきっちり確保したのだった。

Uインターを語るとき、または語られるとき。その話題の中心はいつだってエース・髙田延彦のカッコよさであり、陰日向に咲く安生洋二のポリスマンぶりであり、美声ゆえ言葉の信ぴょう性が無条件に3割増しとなる宮戸優光の冴えわたる兵法（アングル作り）であろう。

だが、Uインター（およびキングダム）時代の桜庭和志を語るとき。1997年12月『UFC−J』のリングに上がった時点で、すでに「本当は強いプロレスラー」だった桜庭の〝強さ〟が語られる際に登場すべき人物とは、Uインター道場に嬉々として出稽古に通っていた柔術マスターのエンセン井上、バルセロナ五輪日本代表にしてレスリングコーチの安達巧、ムエタイ戦士であり打撃コーチを務めていたボーウィー・チョーワイクンの御三家で間違いないのである。いずれもプロレスラーではない腕に覚えのあるマエストロたちだ。

「Uインターで指導をしていたときに感じたことは〝選手たちが技術に飢えてるな〟ということ。やっぱりみんな桜庭にやられていたからなんです」（安達）

「俺とスパーリングしてたのは金原、桜庭、垣原、松井の4人。●●なんて道場にいるの見たことないヨ。日焼けサロンにでも行ってたんじゃない？」（エンセン）

「当時桜庭とスパーリングしたがる人間がいるわけないんですよ。やっぱり後輩の桜庭にやられることはみんな嫌がってましたから」（安達）

「修斗のみんなは、俺が一回行ってプロレスラーを全員ボコボコにして帰ってくると思ってたみたい。とんでもない。〝わかってないな〟と思った」（エンセン）

「桜庭も僕には愚痴ってましたからね。〝真剣勝負たったら百発百中で先輩をやっつけられるけど、それやると練習が長引いて面倒くさいんですよ。だからわざと取らせるんですよ〟って」（安達）

どうだろう、たとえばプロレスラーに取材をしたとして、こんな真実を聞き出すことができただろうか？ いや、美声から繰り出されるプロレス言語にうっとりさせられ、なんだかちょっといい話を聞かされて終了がオチだ。それはそれで有意義ではあるのだが。

「ボーウィー！ 好きなの食っていいぞ」

「タッ、髙田サン!?」

2月下旬、都内でエンセン、安達氏の取材を終えたのちに2泊3日のひとりバンコク取材を敢行した。二日目の夕刻、約束の場所と時間に無事ボーウィー・チョーワイクンと会うことができ、取材を滞りなく終えることができた。

「キモ戦はプロレスだけど、あとで桜庭〝キモ、あんまり強くないよ。本気でやろうかと思ったよ〟って言ってた」（ボーウィー）

「桜庭は最初から強かったよ。わかるでしょ？」（ボーウィー）

翌最終日。ボーウィーと僕はバンコク最古の寺院、巨大な黄金色の寝釈迦像が横たわるワット・ポーを訪れていた。

日本滞在中、医療ミスにより右半身が

プロレスは強かった。とくに桜庭は天才だった

ENSON INOUE エンセン井上

ナショナルで
のか？

4月2日に発売された『MMA Legend』No.3桜庭和志編〜栄光への献身〜では、
かつて桜庭が所属したUインターの“実態”に迫っている。
プロレスと格闘技が枝分かれする時代に存在したUインターでは
いったいどんなことが起こっていたのか？ 90年代特集にふさわしいこのお題、
その中身は知れば知るほど“底が丸見えの底なし沼”なのだった！

文 井上崇宏

不随となってしまったボーウィー。それもいまでは杖がなくても日常生活に支障がないくらいには回復をしている。だが猛暑の中、軽く右足を引きずるしぐさはまだまだ痛々しく、なのにフライトまでたっぷり時間の余っている僕を観光に連れ出してくれたその気持ちが本当にうれしかったし、やっぱり申し訳がなかった。

「しかし暑いネ～。ところで井上サン、お腹すかない？」

「はい、メチャクチャすきました！　何か食べましょう」

避暑と空腹を満たすために僕たちはワット・ポー近くの適当な食堂に駆け込んだ。ボーウィーにしてみれば、昨日初めて会ったばかりの僕に対して当然ながらリラックスした態度を見せず、二人のあいだにはまだまだ軽い緊張のムードが漂っていた。ここでタイラーメンをおいしくすするためには、ボーウィーのハートを華麗にパスガードしておく必要がある。それにはやはり髙田ボイス、つまり必殺のモノマネしか僕には手持ちの術がなかったのだ。

「さっきの髙田サン、似すぎだヨ～。もう一回やって」

「え～、インターと！　応援してくれるファンのために！　勝ちました!!」

「ウキャキャキャキャ～！　髙田ッ！　髙田ッ！」

「タイ人はですね、効いてると逆に笑うんですよ。ここは一気に攻めたほうがいいですよ。いまのは効いたなぁ～」（解説の谷川さん）

「え～、北尾の印象は……、とにかく大きい!!」

「ドドドドーッ！」（足踏み）

「いやいや、ボーウィーさん、早く注文しましょうよ」

「……もっと髙田サンみたいに言ってヨ」

吉田戦車か！

そして3月中旬、今回の取材のオーラスである桜庭のインタビューを収録するために大森のラフター7を訪れた。もちろん髙田のモノマネは封印であるが、案の定、桜庭の取材はいつものように聞き手としての力量が試されているような緊迫感あふれる現場の空気の中で〝精神の闘い〟を強いられた。

『MMA Legend』No.3桜庭和志編とは、その表紙コピーが示すように桜庭の〝栄光への献身〟ぶりが大テーマであるが、プロレス団体でありながら、その実、若手たちが道場でやっていたことは完全にMMA志向の練習であったというUインターの特異性も、ここでは伝えておきたかった。そこで前述の御三家に登場していただいたという次第である。結果、そのことで当時の練習風景やリアル実力番付までがそこはかとなく浮き彫りとなる内容となった。

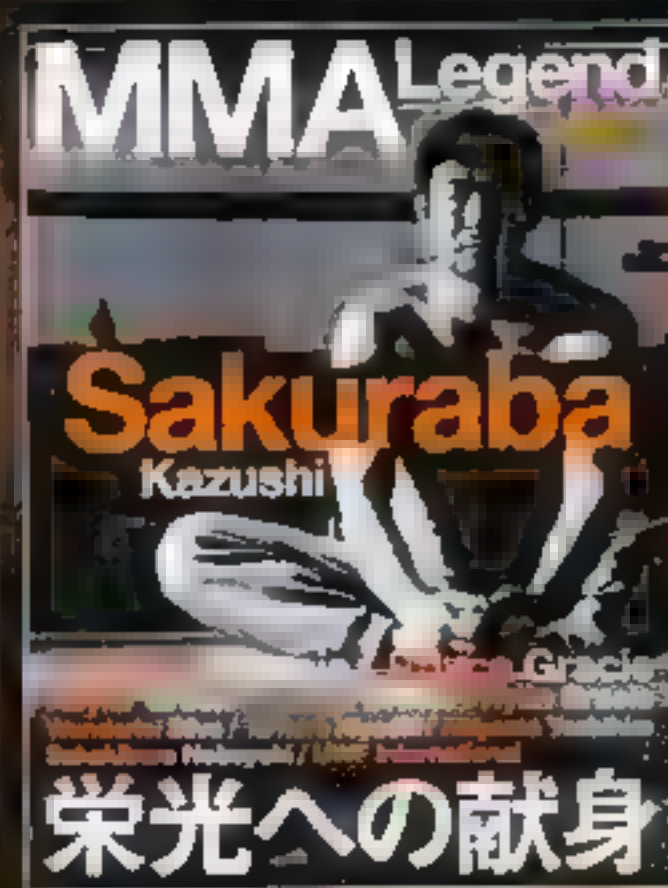
と、ここまで原稿を書き進めているところで、『kamipro』編集部では当事者からのさらなる新証言を入手したらしい……！　これはもうキリがねえ！

じゃあ、どこまでがアレで、誰がソレで、何がコレなのか？　またまた格闘技と地続きであった1990年代のプロレス、とくにUインター探求の旅には終わりがない。ああ、その結末までの気の遠くなる道のりを想像するにつけ、僕は寝釈迦像のごとく、今日も床に横臥するしかないのである。

闘道館の館長さん、次は俺、何をしたらいい？　ってか、2010年代の頭に僕はいったい何をやっているのだろうか……。

祝・『MMA Legend』No.3 桜庭和志編～栄光への献身～発売！

プロレスと格闘技の分岐点

UWFインター
何が起こっていた

4.10「UFC112」で、終始、対戦相手のデミアン・マイアを挑発し、4ラウンド以降は足を使ってサークリングし、試合を流したことで物議を醸しているアンデウソン・シウバ。「俺がUFCの仕事を始めて以来最悪だ!」とダナも激怒しているが、このタチの悪さは逆に興味が湧いてきたりもする。

今月は『UFC111』、『UFCファイトナイト』、『UFC112』とオクタゴンづくしであった。まったく忙しいったらありゃしない。

一番、衝撃的だったのは、『UFC111』のシェーン・カーウィンvsフランク・ミア。オレ、まったく間違っていたよ。戦前の個人的な予想は、ミアが勝つと、しかも極めて勝つと思っていた。でも、カーウィンのほうが全然つえーんだもんね。自分の見る目のなさと古い考えを実感。格闘技とは、現実を見せつけるものなり、です。

ノゲイラどころではなく、ミアまで次の世代に追い抜かれてしまったのだから、「旧PRIDE勢が一番!」的な筆者の見方は滑稽ですらあるのだなあ。皇帝の最強幻想すらも、UFCのヘビー級戦線に加わって証明しなければ、「あーそー」って感じになってきた(もちろんまだまだ皇帝ファンですがね)。

これでカーウィンがブロック・レスナーとの王者決定戦に駒を進めた。圧倒的身体能力で勝ってきたレスナーが、初めて自分と同等のパワーの持ち主と対戦するのだ。WOWOW解説によると、UFCのオープンフィンガーグローブの最大サイズを使用しているのが、レスナーとカーウィンのみだそうだ。MMA史上最もおっかない試合になるだろう。

それにしても、いまのところMMAで最も強いとされているのが、WWEのチャンピオンだというのだからおもしろい。過去の日本にあった、格闘技vsプロレスの確執が、いまとなってはなんと馬鹿らしいことだろう。「プロレスラーは本当に強いんです」どころのレベルではない。

だが、レスナーがUFCでブーイングを浴びるのは、彼が元プロレスラーであるからだと思うのだ。動画サイトでレスナーのプロレス時代の試合を見ると、コメント欄に「FAKE」の文字が並んでいる。要するに、アメリカにもファンのあいだに、日本にあった「プロレスvs格闘技」の図式が存在するのではないだろうか。PRIDEはその確執を燃料にしてビッグイベントになったはずだ。きっとレスナーの存在は、UFCをさらに大きくさせることになるだろう。レスナーは、ただの選手じゃなく論点である、つーやつだ。

話はカーウィンvsミアに戻るが、MMAの打撃は、やはりキックボクシングとは違うんだなあと痛感した試合であった。フィニッシュは、おでこを相手のアゴに押し当てながら(このポジションはクートゥアーが編み出した。立派!)金網に押しつけて、片腕でクリンチしながら、余った腕でアッパーだった。こんなフィニッシュ、MMA以外であるはずもない。

TKいわく、金網に押しつけた状態は、スタンドとグラウンドの中間だと考えているそうだ。なるほど、金網を床に見立てているのか(ドリフの無重力コントのように! 世代的にわからない人は各自調査)。となれば、ミアはハーフガードからのパウンド(それも足のバネも利いた)でKOされたようなものだ。

ミアは、まさかあの体勢から意識を飛ばされるほどの打撃をもらうことはないと高をくくっていただろう。まだ歴史が浅いMMAにおいて、大丈夫と高をくくっていた者がやられるシーンを多々見てきた。フロントチョーク、下からの蹴り上げでKO、ランペイジvsアローナのスラム、下からのパンチでKO、そして、矢野卓見の洗濯ばさみ(!)。それはMMAの醍醐味そのものだ。

『UFC111』にはGSPも出場しタイトルマッチを行なった。GSPは素晴らしい。これだけテイクダウンを取るのが難しい時代に、ひょいひょい軽々と相手を寝かしてしまう。強いというか、達人の技を見ている印象だ。

しかしだ、キムラロックを取って、極めきれず、「止めてくれよ」と言わんばかりに(田村が美濃輪戦でしたように)レフェリーに視線を送るGSPを見て、やっぱ青木は立派だわ、折っちゃうんだから、と思った次第だ。なにも腕が折れるところを見たいわけじゃない。つーか気持ち悪いから見たくない。ただ、どうしても腕関節は折るつもりでかけてほしいと思ってしまうのだ。

レフェリーが見込み一本を取って、その後相手がぴんぴんして抗議するなんて、やっぱへんだ。それでいて、関節技は1センチ違えば極まらないなんていうし。折ることができない関節技なんて、ただの強めの整体じゃないか!

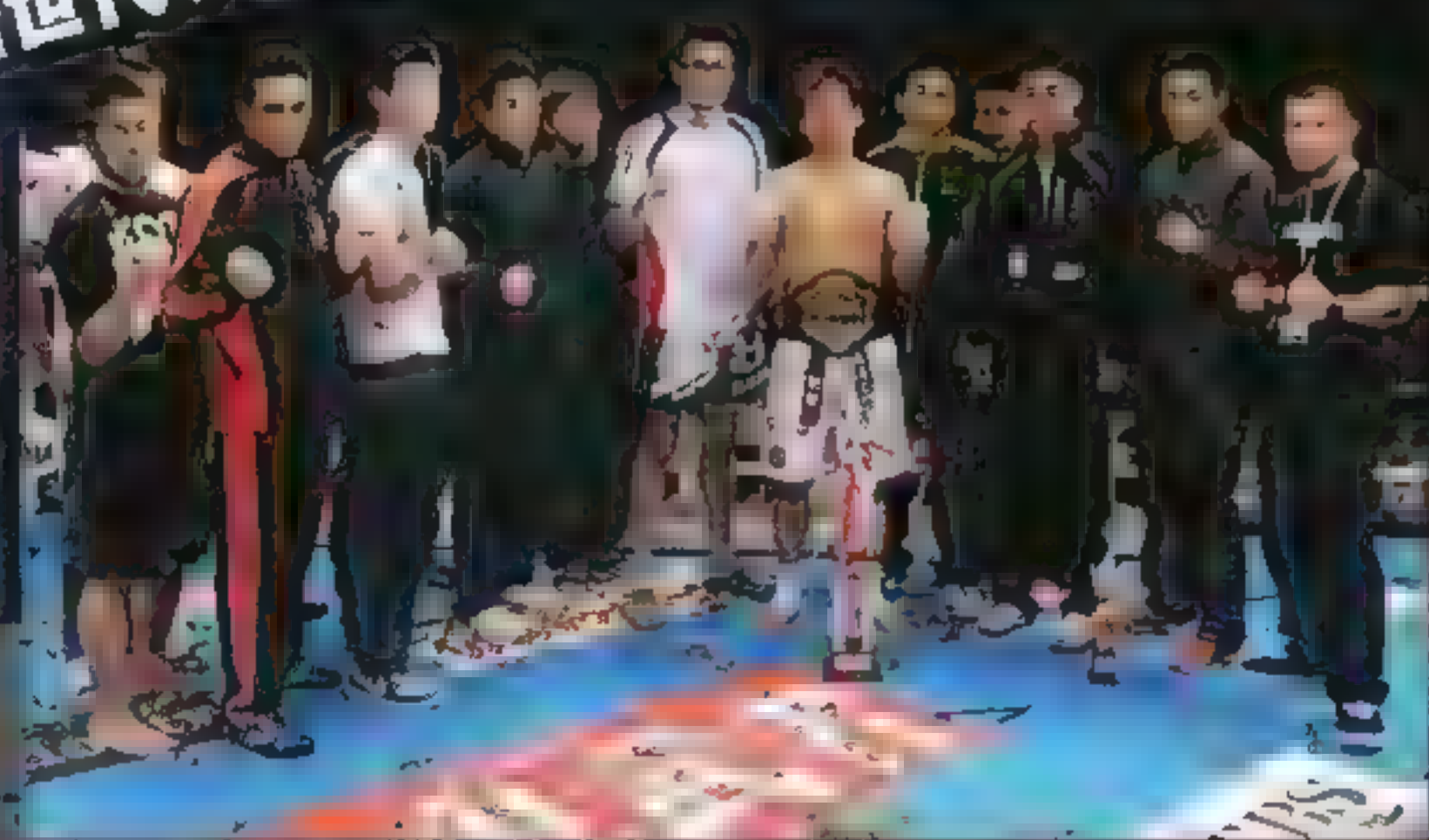
『UFCファイトナイト』は、試合以上に秋山の解説に心を奪われた人が多いのではないか。そして、秋山意外といい奴じゃねえ? と思った人も多いのではないかと想像する。どう?

そして、『UFC112』、アンデウソン・シウバvsデミアン・マイアのタイトルマッチをとても楽しみにしていたが、凡戦に終わってしまった。とにかくレフェリーは、シウバを黙らせるべきだ。試合中に言葉で相手を煽るなんて、フェアじゃない。口喧嘩じゃないんだから。そんなの当然じゃないか。そして、もちろんもっとファイトをかけてアグレッシブに闘わせなければダメだ。

UFCはこうしたスタンドで距離をとったままの凡戦が多くなってきている。改善すべきだろう。と、遠く離れた日本の雑誌で言ってもしかたないか。張り合いないね、まったく。とほほ。

でも、日本の謎のイエローカードルールはダメだよ。前にも言ったけど、ファイトマネーを減額ってなんだよ。リング上も金持ちが有利なのかーッ!

4・17 ストライクフォース in ナッシュビル
ライト級タイトルマッチ

勝負のギルバート・メレンデス戦へ！

闘龍門とみちプロで日本マット界を変えた二人が語る

1990年代のジュニアヘビー級

ジュニア黄金時代のルーツはユニバにあり!

――今回は「90年代特集」なんですけど、そのなかでもとくに人気が大爆発したジュニアヘビー級に大きな影響を与えたお二人に、いろいろとお話をうかがいたいと思います。

サスケ　いやいや、私なんかよりホントに大きな[illegible]浅井（嘉浩＝ウルティモ・ドラゴン）さんですから。90年に浅井さんがユニバーサルに凱旋帰国して、そこからいまのジュニアはスタートして[illegible]

――いまのルチャが主体のジュニアヘビー級は、まさに[illegible]サルから始まってますもんね。

ドラゴン　ジュニアの先駆者はやっぱり藤波さんじゃないですか。そこから佐山先生が一気に花開かせて、80年代末からジュニアを牽引したライガーという人[illegible]日本プロレス伝統のジュニアを引[illegible]た人ですよね。そこで俺は90年にファンが観たことがない本場のルチャリブレを輸入して、いまのジャパニーズ・ルチャと呼ばれる[illegible]思うんですけど、それを進化させた[illegible]スケだと思いますね。

――どちらも原点はやはりユニ[illegible]なわけですね。あれからもう20年[illegible]たわけですけど。

サスケ　いつの間にかそうなんで[illegible]私も「ka[illegible]

ドラゴン　あとはミル・マスカラスぐらいだよね。

サスケ　ルチャドールのライセンスっていうのは、素顔の写真が貼ってあるんですけど、サントはライセンスもマスク姿なのかなって。そんな幻想すら抱きましたから。だから、私が普段からマスクを被っているのは「日本に帰ったらこれをマネしよう」って思ったのが原点ですね。

ドラゴン　俺は日本のゴールドジムの会員証はマスク姿だけどね（笑）。

サスケ　（ゴールドジム会員証を見て）おぉ～、これは凄い！　私が県議会議員になったとき、あれだけ「マスクは脱がない！」とかやってたのに、県議会議員証は素顔でしたけどね（笑）。

――マスクを指して「これが私の素顔です！」って言ってたのに（笑）。

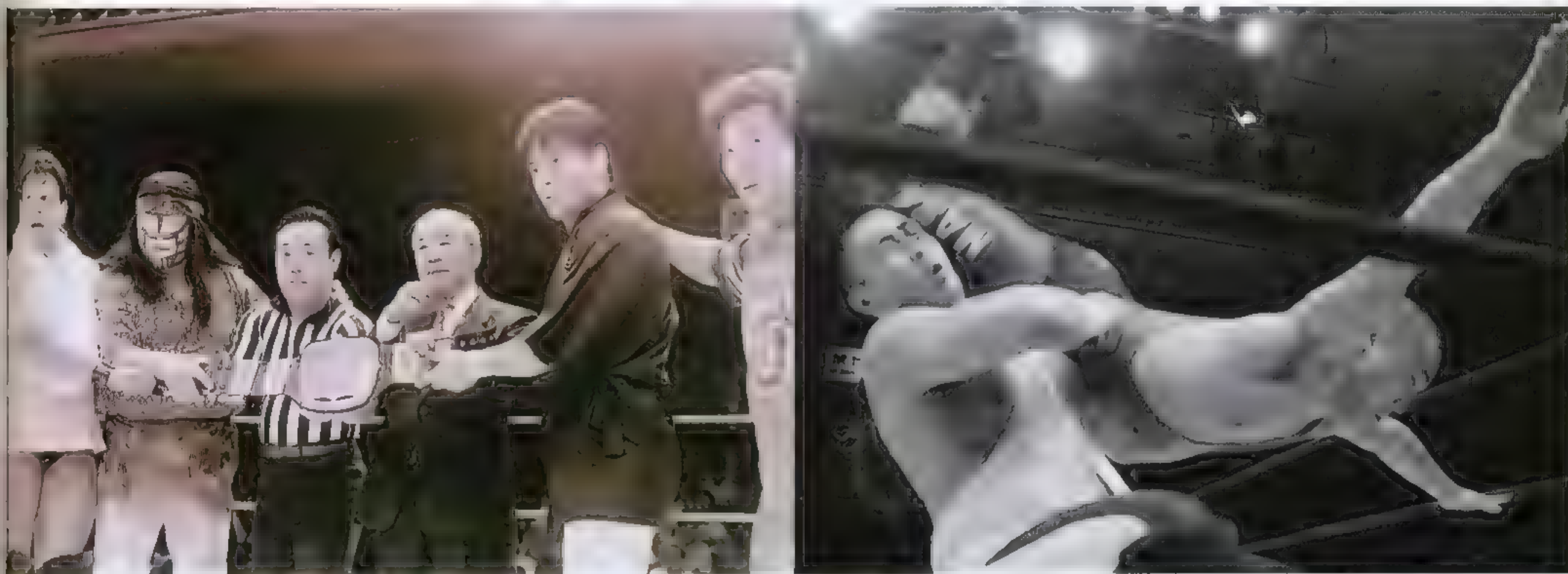
ドラゴン　でも、マスク議員になったっていう、あのインパクトは凄かったと思うんですよ。彼が知名度上げてくれたおかげで、俺が合コンとか行くじゃないですか。

サスケ　やっぱりいまだに行ってるんですか（笑）。

ドラゴン　いや、合コンというか食事会に行くと、俺を知らない女の子たちに「普段はマスクを被ってるプロレスラーが来るよ」って周りの人は言ってるわけですよね。で、そこに行って紹介されたとき「初めまして。グレート・サスケ……ではありません」って言うと、ウケるんですよ（笑）。

サスケ　ガハハハハ！　ウケるんですか。

ドラゴン　それだけサスケの知名度があるってことですよね。これがほかのマスクマンの名前を言っても、ジョークにならないでしょ。

――「スペル・デルフィンです」じゃダメなわけですね（笑）。

ユニバのエースとして、ルチャのおもしろさを日本のファンに伝えた浅井嘉浩。写真・右はユニバ初期、ザ・グレート・サスケに変身する前のMASAみちのくの勇姿だ。

浅井さんがユニバを辞めるとき「あとは頼んだぞ」って言われました

サスケ　ガハハハハ！　そうそう（笑）。

ドラゴン　もういまやサスケが覆面レスラーの代名詞になってるんですよ。

――そんなお二人の出会いはいつだったんですか？

ドラゴン　ユニバーサルの後楽園だよね。

サスケ　旗揚げ1戦目か2戦目でしたね。

ドラゴン　なんかね、控室の外のベンチに下向いて座ってるヤツがいたんですよ。こっちと目を合わせようとしないし、誰だこいつ？って思って。秋吉（邪道）に、「あの子、誰？」って聞いたら、「村川！　浅井さんに挨拶しろ！」とか言って。挨拶もできないヤツなのかなっていうのが、第一印象でしたね。

――そんな第一印象ですか（笑）。それは緊張されてたってことですか？

サスケ　もちろん、そうです。どう振る舞っていいかわからなかったんですよ。プロレスのしきたりもわからないし、文字どおり自分の立ち位置がわからなくて。「自分が浅井さんに挨拶に行くのも失礼だよな……」とか思って。

ドラゴン　そういうのはあるよね。俺なんかも偉い人が集まるパーティなんかに行くと、話しかけるのも失礼かなって思うもんな。

サスケ　「もう下を向いて、目を合わせないようにするしかない」って思ってましたね。

――それがどのようにして近い関係になったんですか？

ドラゴン　サスケが俺の付き人をやってくれてたんですよ。俺が一番思い出に残ってるのが、ユニバーサルでいろんな嫌なことがあって、後楽園の試合後に辞めようっていうとき、リング上でマサ（サスケ）に抱きついたんだよ。覚えてる？

サスケ　はい、覚えてますね。「あとは頼んだぞ」って言われたんですよ。でも、私はホントに辞めると思わなくて、「浅井さんは何を言ってるんだろう」って思ってたんですけどね。

ドラゴン　ただ、結果論として言うけど、俺が辞めてサスケがブレイクして、みちのくプロレスが旗揚げされるきっかけになったんだから、辞めてよかったんだよ。これは『kamipro』だからホントのこと言うけど、ユニバーサルってあれは団体じゃないよ！

サスケ　うん、そうですね。

ドラゴン　べつに道場があるわけじゃないし、みんなに給料が出ていたわけじゃないし。あれは単発イベントのグループだよね。でも、いまのプロレス界を見て、サスケは大きな存在になってるし、邪道と外道は新日本のブッカーをやってる。デルフィンも沖縄で頑張ってるし、TAKAみちのく、ディック東郷、新崎人生、どんだけの人材を輩出したか。あれがちゃんとした団体で、あのあとも続いていたら、逆にみんなブレイクしてないと思う。だからあれは終わってよかったんだよ、役割が終わったからユニバもなくなったんだから。

――でも革命的な集団でしたよね。

ドラゴン　プロレスが本当に好きな子た

俺はこのまま日本にいてもサスケに勝てないと思ってWCWに行ったんだ

ちが集まってたからね。

――当時はプロレスが好きで才能があっても、身体が小さくてプロレスラーになれない人がたくさんいたんですよね。

サスケ そうなんです。その壁はホントに大きかった。

ドラゴン それをさ、ユニバーサルからみちのくができて、俺が闘龍門を作って、そこからどんどん広がっていってさ。へんな話、大仁田さんや俺たちがいなかったら90年代のプロレスはあんなに盛り上がらなかったと思うんですよ。

――あんなにいろんなプロレスが花開くことはなかったですよね。

ドラゴン だから、あのときに俺たちがレスラーとして出てきたのは運命ですよね。俺たちがあと10年あとに出てきてたら、埋もれていたと思う。いま空中殺法だけでいったら、サスケより飛ぶヤツなんていくらでもいるじゃん?

サスケ たくさんいますね。

ドラゴン そこにサスケがいても、ただの飛ぶ人でしょ？ サスケはあの時代に登場したからよかった。俺もそうだよ。

サスケ だから初めて浅井さんのケブラーダを見たときは、ホントに衝撃的でしたからね。

――それで浅井さんがユニバーサルを辞める最後の後楽園で、それまで前座だったMASAみちのくが、空中殺法解禁って感じで〝みちのくスペシャル〟をやったんですよね。

サスケ いまのサスケスペシャルですね。

ドラゴン あれはね、俺も使いたかった技だったんだよ。でも、できなかった。だから正直、悔しかったよ。俺にできないことをやられたから。

サスケ いやいや、私は試合ではかなわないんで、とにかく飛ぶしかないって感じでしたから。

ドラゴン そのあとサスケがみちのくプ

90年代のジュニアヘビー級で最もブレイクしたレスラーといえば、やはりサスケ。あの泣く子も黙る、新日本プロレス現場監督時代の長州力も、サスケやTAKAみちのくのことは高く評価していたのだ。

ロレスを作って大ブレイクしたとき、もの凄く華やかでしたよね。そのとき俺は自分のこと落ち目だなって思ってたんですよ。当時はWARに所属していて、『週プロ』はみちのくプロレスをプッシュしていて、でも僕らのボスはその人と大ゲンカしてたんですよね（苦笑）。

サスケ そうでした、そうでした（笑）

ドラゴン だから俺がどんなに頑張っても、『週プロ』にはほとんど載らなかったんですよね。そのあと、新日本が各団体のジュニアのチャンピオンを一堂に集めて、ジュニア8冠トーナメントというのをやって、俺とサスケで決勝戦やったよね？

サスケ 両国ですよね。

ドラゴン でも、やる前から俺とサスケじゃ勢いが違うから、俺の勝ちはないと思ってた。あのへんからアメリカに行こうと思ったんですよ。みちのくプロレスとWARは、ファンの支持率が全然違ったし、時流はもう完全にサスケのほうだったから、このまま日本にいても勝てない。それでWCWに行ったんですよね。

――では、ウルティモ・ドラゴンのWCWでの成功には、サスケさんが間接的に影響を与えてたんですね。

ドラゴン だからライガーと俺とサスケは、直接闘うんじゃなくて、精神的なライバルだよね。

サスケ でも、浅井さんの切り替えの速さが凄いですよね。そこでメキシコじゃなくてアメリカに行くっていうのが凄い。

ドラゴン マサ、俺思うんだけど、メキシコっていうのは俺のベースであり、一番大事な場所なんだけど、プロレスラーはメキシコで成功しても所詮メキシコなんだよね。そして日本で成功しても所詮日本なんだよ。でも、アメリカで成功したら、世界で成功したことになる。

サスケ そうなんですよね。それをわかってる日本のレスラーってほどんどいませんよ。

ドラゴン だから俺はWCWでベルトを巻いて、WWEにもちょっとだけいたから、いまだに世界中からオファーがある。それは俺の財産だね。

――それにしても、ジュニアの統一王者を決める8冠トーナメントの決勝が、他団体のサスケvsウルティモで行なわれたっていうのは、新日本も懐が深いですよね。

ドラゴン だから、あの頃の新日本は商才に長けてたんでしょうね。普通だったら、なんとしてでも片方は新日本のレスラーが決勝になる組み合わせにするじゃないですか。

――あれはライガーさんプロデューサーだったんですか？

サスケ いや、じつはですね、いまだからしゃべっていいと思いますけど、あれは長州さんなんですよね。

ドラゴン そう、全部長州さん。

――あ、そうなんですか。

サスケ 長州現場監督、ジュニアはライガーさんってよく言われてましたけど、プロデューサー、マッチメイカー的なことをやってたのは全部長州さんですね。

ドラゴン 俺は長州さんというか、永島（勝司＝ゴマシオ）さんなんじゃないかと思うんだけど。

サスケ 長州＆永島コンビですよね。その頃は冴え渡ってたんですね。それが時代が変わって、WJプロレスになると冴えなくなっちゃいましたけど（笑）。

ドラゴン それはしょうがないですよ。いいときは何をやっても大丈夫だったりするから。

ULTIMO DRAGON
THE GREAT SASUKE

ジュニア黄金期のプロデューサーはじつは長州さんだったんですよ

サスケ　あの頃、凄いなって思ったのは、長州さんが控室にモニターを持ってきて、試合を常にお客さんの目線で観てたんですよ。

ドラゴン　やってたね。

サスケ　とにかく全部の試合を真剣に観てて「これはおもしろい!」とか「しょっぱい!」とか、全部チェックしてるんですよ。お客さん目線というのを長州さんは重要視してたんですよね。いまのプロレスに欠けてるのは、その部分なのかなって思ったりしますよ。

ドラゴン　長州さんはブッカーとか、現場監督として素晴らしいと思いますよ。あれぐらい強烈な人がやらないと、再生は無理だと思う。

――あの時代の新日本プロレスを仕切ってたわけですからね。どんだけ豪腕なんだっていう。

ドラゴン　そりゃそうでしょう。だから、もちろんいま長州さんがやっても、時代が違うかもしれない。だったら、いまの時代に合った、長州さんに代わる強引な人が出てこなきゃいけないですよね。うまく円滑にやるようにじゃダメだと思う。

サスケ　いい意味で独裁者ですよね。でも、そんなジュニアの黄金期っていうのは、やっぱり浅井さんの凱旋帰国から始まってるんですよ。ホントに浅井さんの登場は衝撃的でしたし、あそこから扉は開かれましたよ。

ドラゴン　俺はね、ウルティモ・ドラゴンという名前で、メキシコでもアメリカでもトップ獲ってきましたけど、俺が一番輝いてたのは、やっぱり素顔でやってた3年間ぐらいだったと思いますよ。

サスケ　ほお～。

ドラゴン　だって俺は「ルチャリブレ界の若きプリンス」ですよ(笑)。

サスケ　UWA時代ですよね(笑)。

ドラゴン　ずっとプロレスラーになりたくて、その夢がようやくメキシコで実現して、心からプロレスをエンジョイしてたのが素顔でやってた時代だね。

サスケ　浅井さんはデビューからいきなりセミファイナルですから、これはとんでもなく凄いことなんですよ。私なんてメキシコ修業時代はずっと第1試合でしたからね。普通、日本人があそこから這い上がるのは不可能です。それで二度目の修行に行ったときは、ウルティモ・ドラゴンに変身されたあとで、そのときはもう凄い大スターなんですよ。

ドラゴン　あれもタイミングがよかったんですけどね。

サスケ　オクタゴンという国民的大スターとコンビを組んで、人気が大爆発してたんですよ。ホントに国民的英雄でしたよ。だから私がみちのくプロレスを旗揚げしたときは、メキシコの浅井さんを意識してましたよね。私はメキシコであんな大スターにはなれないから、日本でなんとか頑張ろうって。凄く意識してました。

――浅井さんはユニバーサル時代からサスケさんの才能はわかってましたか?

ドラゴン　いや、最初は「なんでこんな子がレスラーになれたんだ?」って思ったんですよ。

サスケ　ワハハハハ!　やっぱり(笑)。

ドラゴン　でも、ある日ユニバーサルの新間代表がマサに「こんな技できるか?」って言ったとき、エプロンで側転してムーンサルトみたいな技をやったんですよ。それを見たとき「なんでこんなことできるんだ?」「こいつ凄いヤツなんじゃないかな」って思ったんですよ。

サスケ　いやいやいや。

ドラゴン　あれ、もうできないの?

サスケ　できないです(笑)。

――サスケさんは、「浅井さんがいるあいだはケブラーダは使わない」っていう気持ちがあったんですか?

サスケ　もちろん、団体のエースの必殺技ですから、絶対に使いませんし、やってみたこともなかったんですよ。でも、いなくなったら使っちゃおうみたいな。

ドラゴン　団体側の意向もあったんだと思うよ。本人は嫌だったんじゃない?　あのときのネームバリューは俺のほうが上だったから、テーマ曲を同じにして、技も同じにして。でもグレート・サスケが凄かったのは、浅井嘉浩の後継者じゃなくて、想像を超える成功をしたってことだよね。

――テーマ曲の『セパラドス』もただ使うだけじゃなく、自分で歌っちゃいましたからね(笑)。

サスケ　ガハハハハ!　あれを企てたのはテッド田辺だったんですけどね(笑)。

ドラゴン　やっぱり俺たちは90年代に生きて、サスケがいまも頑張ってることで、俺も火がついたよね。サスケがまたみちのくの社長になったことで、俺なりの尻の叩き方をしようと思ってる。これからもリング内外でサスケと闘っていこうと思っているよ。

サスケ　なんか、浅井さんがまとめに入っちゃいましたけど(笑)。90年代はプロレス界も東京ドームを埋め尽くすパワーがあって、私も浅井さんもいい思いをさせてもらいましたよね。もしかしたら、そのあとの2000年代は冬の時代だったかもしれませんけど、これからの10年はまた一回りして、プロレスが熱くなる時代が来るんじゃないかと思う。そのためにも、私はさらに頑張りますよぉ!

――では、今後のさらなる活躍に期待してます!

【10年4月3日　都内・『ルノアール』渋谷東口駅前店にて収録】

ざ・ぐれーと・さすけ■1969年7月18日、岩手県出身。本名・村川政徳。90年にユニバでデビュー。93年に日本初のローカル団体・みちのくプロレスを旗揚げし、大ブレイク。03年には岩手県議会議員選挙にトップ当選した。180cm、88kg。

うるてぃも・どらごん■1966年12月12日、愛知県出身。本名・浅井嘉浩。87年メキシコでデビュー。90年にユニバのエースとして凱旋。WARを経て、WCWでも活躍。97年には闘龍門を設立。現在も世界中のリングで活躍中。172cm、85kg。

ULTIMO DRAGON
THE GREAT SASUKE

どす黒い“何か”

[10.4.10 UFC112 INVINCIBLE]
アラブ首長国連邦アブダビ、フェラーリワールド
○アンデウソン・シウバ vs デミアン・マイア×
(5R終了 判定3-0)

アンデウソンはマイアのパンチとタックルをひょいひょいかわしながら、変幻自在の打撃でペースを握り、棒立ちやノーガードになりながら挑発。そして、試合を完全に支配したあとは、ほとんど自ら攻めることなく、余裕で試合を流し、5ラウンド終了。

挑発行為にダナ大激怒！
波紋が広がる4.10『UFC112』デミアン・マイア戦!!

悪のファンタジスタ

アンデウソンの

UFC112 INVINCIBLE
ANDERSON SILVA vs DEMIAN MAIA

フランク&ロレンゾのフェティータ兄弟とダナ・ホワイトという幼なじみ3人によって完全にコントロールされていたUFCは、今年1月にアブダビの国営イベント会社フラッシュ・エンターテインメント社に株式の10パーセントを売却。

そのフラッシュ社のお膝元であり、UFCに対して最大の支援を行なっているアブダビ首長国で初めて開催されるUFCの大会が「UFC112」だった。つまり「UFC112」アブダビ大会は、UFCにとって決して失敗することが許されない、UFC史上最も重要な意味を持つ大会であったのだ。

それゆえこの大会には、アンダーカードに全階級のアグレッシブなファイターの試合を配し、メインにはアブダビで最高の人気を誇るヘンゾ・グレイシーを最恵国待遇で迎えて、元ウェルター級王者であるマット・ヒューズと対戦させ(ヒューズはヘンゾの従兄であるホイスとヘンゾの愛弟子であるマット・セラを撃破していることから因縁もテンコ盛り)、さらにBJペンとアンデウソン・シウバという、UFCが誇る最高のフィニッシャーによるダブルタイトルマッチが組まれるという、かつてない陣容のマッチメイクで臨んだ大会であった。

アブダビという最高にエキゾチックなロケーションで、最高の演出と最高のファイターによる最高の試合を提供する。おそらく企画段階でも内容的に大爆発間違いなしの大会として計画された大会のはずだった。事実ダナ・ホワイトは大会前に、初の野外イベントであることから「心配なのは天気だけ」と断言している。

しかしヘンゾvsヒューズはロートル同士のグダグダな試合となってしまい、BJvsフランキー・エドガーの試合は、エドガーがスピードを生かして徹底的にポイントを奪い続ける試合をし、誰もが予想だにしなかったアップセットを成し遂げたもののエキサイティングとは言いきれない、なんとも煮えきらない試合となってしまった。

それでもメインが締まればすべて大団円だったかもしれない。しかし本当の大問題はこの日のメインイベントで待っていたのだ。

アンデウソンは昨年8月の『UFC101』以来の試合。しかもその闘いでは、元ライトヘビー級王者であるフォレスト・グリフィンを完全に子ども扱いし、衝撃的なKOで勝利を収めている。

そして対戦相手のデミアン・マイアも驚異的なサブミッションの連続によってUFCで異彩を放つファイター。どちらが勝ってもKOか一本とUFC首脳陣は考えていたのだろう。

そして試合開始直後からアンデウソンは軽快なステップでマイアを翻弄。相手を挑発するかのような動きで的確にパンチをヒットさせていく。しかし2ラウンドに入るとマイアが敬愛するヒクソンの真似をしながら侮辱の言葉を吐きかけるなど、あきらかにマイアをバカにする行為を連発しだす。さらに中盤以降は広いオクタゴンをサークリングし、まるで試合を成立させることを拒否しているかのような闘いを展開したのだ。

アンデウソンの意図はなんであれ、観客は盛大なブーイングを浴びせ、大「マイアー」コールとともに、嫌がらせとしてこの日会場に来場していたもう一人の絶対王者のジョルジュ・サンピエトールへのGSPコールが巻き起こるなど、会場は暴動寸前の不穏な空気に包まれていく。

しかしそんな空気などどこ吹く風でアンデウソンは闘い方を変えず、最後までマイアと観客を挑発し続けたのだ。

試合終了後の勝ち名乗りでは選手に気を使うことで有名なレフェリーのダン・マイグリオッタが、憮然とした表情でアンデウソンの腕を軽く上げただけでさっさとオクタゴンを去り、王者にチャンピオンベルトを巻くはずのダナ・ホワイトはオクタゴンに入らなかった（ダナは怒りのあまりアンデウソンのマネージャーにベルトを投げつけて会場をあとにしていた）。

勝者を祝福すべきスタッフにこのような扱いを受けた王者は、全世界のMMAイベントを見てもおそらくアンデウソンだけであろう。ダナ・ホワイトはことあるごとに、アンデウソンこそがパウンド・フォー・パウンドであり、パトリック・コーテやターレス・レイチとのチャンピオンシップで、今回のような非スポーツマン、非武道家的な試合をした際も積極的にかばってきた。しかし決して失敗することが許されないアブダビ大会で、すべてをぶち壊すかのような闘いをしたアンデウソンに対し、ダナは決して許せない思いだったに違いない。

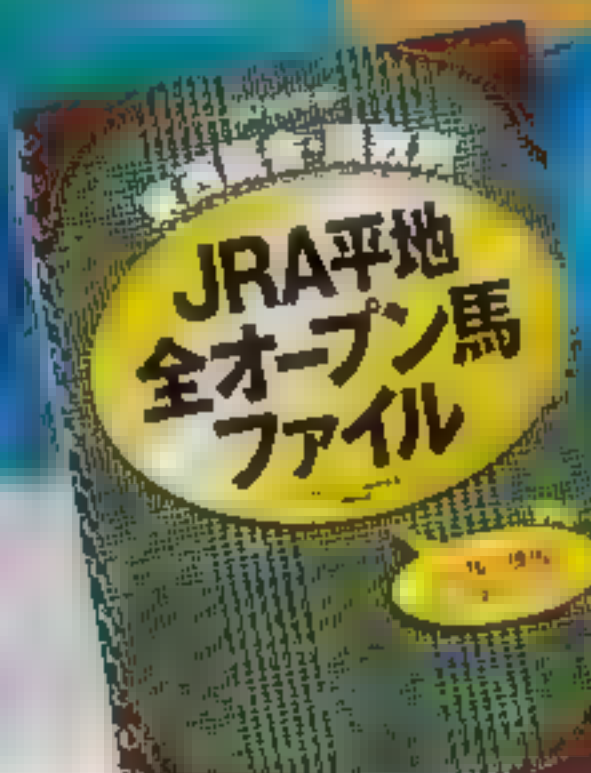
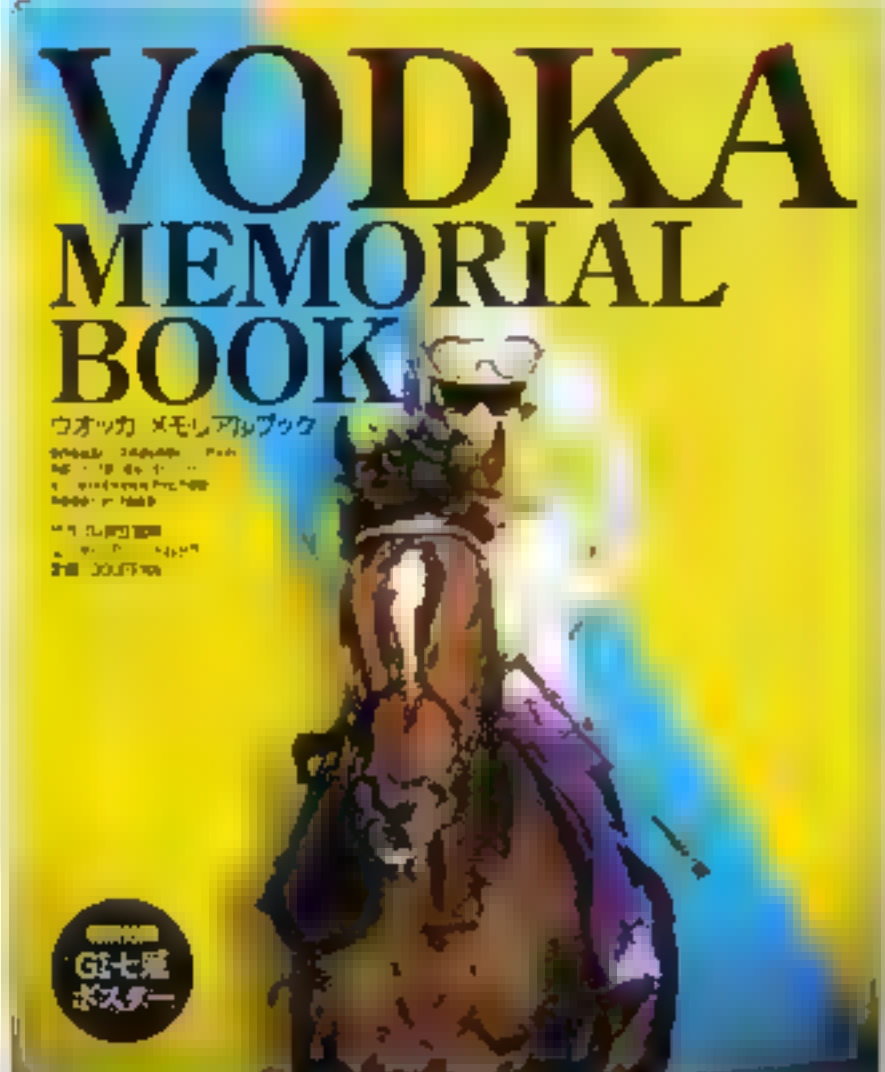
しかしアンデウソンほどUFCで謎に満ちたファイターもいない。アンデウソンは誰をも激怒させる無気力試合をしたかと思えば、目の覚めるような衝撃的な試合をいとも簡単にやってのける。リング上で謝罪した直後の記者会見では誰にも謝る気はないと暴言を吐く。また英語がしゃべれるのに、わざとしゃべれないふりをしていると言われている（記者会見でも通訳を待たずしてポルトガル語で答えだしたりする）。そしてアンデウソンはPPVの販売実績から最も不人気なUFC王者経験者でありながら、現在MMAで最も尊敬されるファイターの一人でもある。

この男は、はたして神なのか悪魔なのか？　いや、単にそのどちらかではなく、MMAの神と悪魔がアンデウソンの中で同居して交互に顔をのぞかせているかのような、アンデウソンはそんなファイターに見えてならないのだ。

このような二面性は、アンデウソンの歩んできた複雑なMMAキャリアの結果のような気がしてならない。UFCファイターの多くはダナ・ホワイトを「ボス」と呼び、世界最高峰の舞台に忠誠を誓っている。それに従わぬ者は、ダン・ヘンダーソンのようにUFCを去ってほかの団体と契約するのが常だ。

しかしアンデウソンは、所属していたシュートボクセを離脱したせいでPRIDEを干され、世界レベルの実力を持ちながらメジャーマットから3年も離れざるをえなかった経験がある。その経験からUFCの待遇に不満を持ちながらもUFCを離脱することもできず、王座に挑戦するに値しない相手との試合であっても指定されればその試合をこなしていく。

UFCに忠誠を誓いたくても、PRIDEで使い捨てられたトラウマから、心の底から忠誠を誓うこともできない。そんな表に出せない不満が、納得できない試合になると表面に出てしまうのではないだろうか。

しかしUFCにとってアンデウソンは何者にも代えがたい絶対無比の最強王者であり、アンデウソンにとってUFCは自分の実力を正当に評価する世界最高の団体である。この不幸でいびつな関係が解消されないかぎり、アンデウソンの表に出ないどす黒い何かが、またUFC首脳陣を悩ませることになるであろうことは間違いないと思われるのだ。

「オッケ〜! ナイスだ!」な読者プレゼント

kamipro PRESENTS

応募要項

ハガキに応募券を貼り、①〜⑧の質問の答えをご明記のうえ、下記の宛先まで郵送してください。応募多数の場合はそれぞれ抽選で決定いたします。ただ、雑誌公正競争規約の定めにより、懸賞に当選された方は、この号の他の懸賞に当選できない場合がありますのでご了承ください。なお、当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます。商品は2010年5月26日（水）頃発送予定です。

【質問事項】①郵便番号・住所・電話番号②氏名③年齢・職業④希望商品⑤おもしろかった記事&その理由⑥つまらなかった記事&その理由⑦90年代の名勝負といえば?⑧あなたがkamiproに望むことは?

【宛先】〒162-0805
東京都新宿区矢来町41-1 ザ・フタガミハウスNo.1
（株）ツー・スリー内「kamipro」編集部
「一打席目は空振り三振」係まで

※応募締切は2010年5月12日（水）当日消印有効

PRESENT*01

1名様

アブドーラ・ザ・ブッチャー直筆サイン入りフォーク
※ポートレート付き
［闘道館］

ブッチャーのトレードマークであるフォークに直筆サインを入れてプレゼント! これで血のしたたるようなステーキを食べるもよし、人の額を刺すのはダメ!

闘道館 http://www.toudoukan.com/

PRESENT*02

1名様

CD
『盗んだバイクで天城越え』
ロマンポルシェ。
［ミュージックマイン／¥2,700（税込）］

「萌え萌え女々苑」でおなじみの掟さんが4月21日にニューアルバムをリリース! 間違った劇団四季的なジャケットがバツグンです

ロマンポルシェ。 http://roman-p.jimdo.com/

PRESENT*03

1名様

NNNニットキャップ WHITE
［NO NEED NEW／¥2,625（税込）］

NO NEED NEWのロゴを刺繍したニットキャップ。素材は綿100%なので秋冬はもちろん、オールシーズン活躍する優れモノです。サイズはフリー

NO NEED NEW http://www.no-need-new.com/

PRESENT*04

1名様

単行本
『声に出して言えない日本語』
［KKベストセラーズ ¥840（税込）］

変態座談会でも活躍中の浅草キッドの玉ちゃんが執筆した、大人のための言語辞典! 思わずニヤリとする言葉の数々、きっと学校や会社で使いたくなること請け合い!

KKベストセラーズ http://www.kk-bestsellers.com/

PRESENT*05

1名様

単行本
「PRIDE」最後の日 「殺し」の継承
［幻冬社／¥1,470（税込）］

あの"Show"大谷泰顕が執筆。風の噂によると、kamipro booksの「PRIDEはもう忘れろ!」を意識してるとかしてないとか。

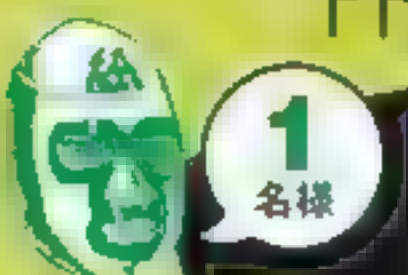
幻冬社 http://www.gentosha.co.jp/

PRESENT*06

1名様

単行本
『ザ・グレート・サスケの飛ぶ教室』
［エンターブレイン ¥1,890（税込）］

サスケのプロレスデビュー20周年記念出版にして、マッスル坂井の編集者デビュー第一弾となる一冊! サスケ流「2010年代のプロレスのあり方」を学べ!

エンターブレイン総合サイト http://www.enterbrain.co.jp/

PRESENT*07

1名様

ハリケーンミキサーTシャツ
［アートジャンキー／¥3,990（税込）］

フロントの「猛」と「ハリケーンミキサー」の文字がインパクト大なバッファローマンT! これを着れば1000万パワーになること間違いなし? サイズはS

アートジャンキー http://www.artjunkie.jp/

PRESENT*08

1名様

ギルバート・メレンデス モデルTシャツ
［リバーサル／¥5,040（税込）］

青木真也との対決が話題沸騰中のメレンデスのTシャツがリバーサルより発売! 往年の石立鉄男ばりのカーリーヘアがチャーミングです。サイズはL

PRESENT*09

1名様

DVD
『ロシヤ戦闘護身術 二人掛りの拘束と連行の方法』
［クエスト／¥5,880（税込）］

第二次世界対戦においてソ連軍参謀本部情報総局の中で採用された、究極の戦闘護身術を紹介。さまざまなトレーニングから心理学的方法など超絶テクが学べますよ!

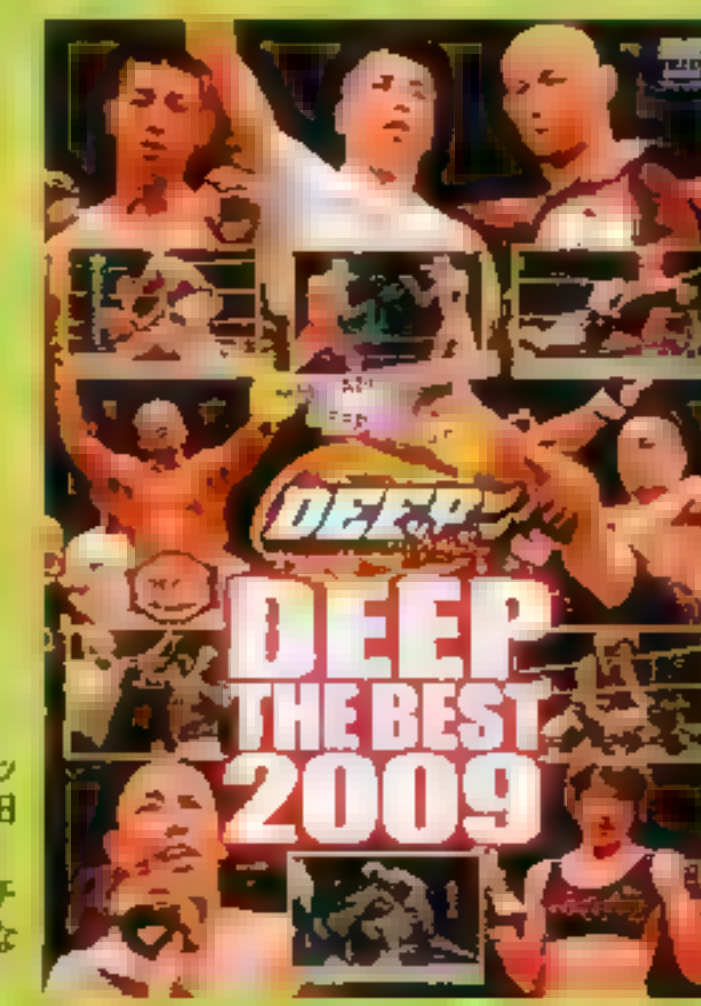
PRESENT*10

1名様

DVD
『DEEP THE BEST 2009』
［クエスト／¥5,880（税込）］

長南亮の日本マットカムバック、さらに菊野克紀、帆田力、大塚隆史の王座戴冠そしてDEEP初の金網マッチ「CAGE IMPACT」開催など見どころ満載!

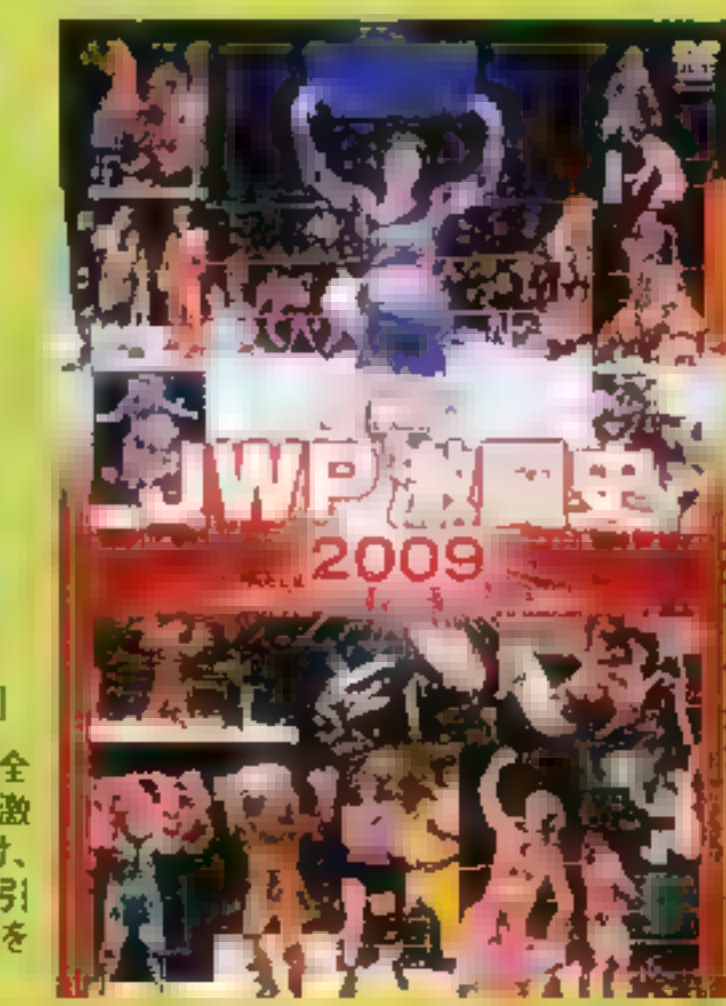
PRESENT*11

1名様

DVD
『JWP激闘史 2009』
［クエスト／¥5,880（税込）］

09年にJWPで行なわれた全タイトルマッチや対抗戦の激闘、JWPを15年間支え続け、12月27日に惜しまれながら引退した日向あずみの軌跡を

kamipro 紙のプロレス

No.146
2010年5月7日 発行

発行人
浜村弘一

編集人
斉藤慎一
青柳昌行

編集統括本部長
ジャン斉藤

編集スタッフ
堀江ガンツ
阿修羅チョロ
松下ミワ
スズキィ
八木賢太郎（合宿準備のため非番）

終身名誉バイザー
吉田 豪

助っ人
ジャイ子

編集次長（暗黒の90年代）
松林 貴

デザインGM
出田さん（TwoThree）

デザイン班長
金井ヒサくん（TwoThree）

デザイン
松坂マツくん
廣田ブンちゃん
野口ノグッチー
鐘田やっちゃん
白木みのる（以上、TwoThree）

カメラマン
乾 晋也
菊池茂夫
平工幸雄
吉場正和
山口比佐夫
戸成嘉則
タイコウクニヨシ
梅木麗子
金山フヒト
丸山剛史

お勘定
工藤ちゃん

無事保護
入江オットセイ（TwoThree）

雑誌営業
堂前秀隆
中村宣忠

業務部
櫛本"CTP開始"義之

編集庶務
原 正典
山内ユリコ

編集チアガール
金川"ナツコ"奈津子
白倉"クララ"明子
安部"クリン"悠子

90年代バリバリマダム
廣橋久美子

発行所
株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1
☎0570-060-555（代表）

発売元
株式会社角川グループパブリッシング
〒102-8177東京都千代田区富士見2-13-3

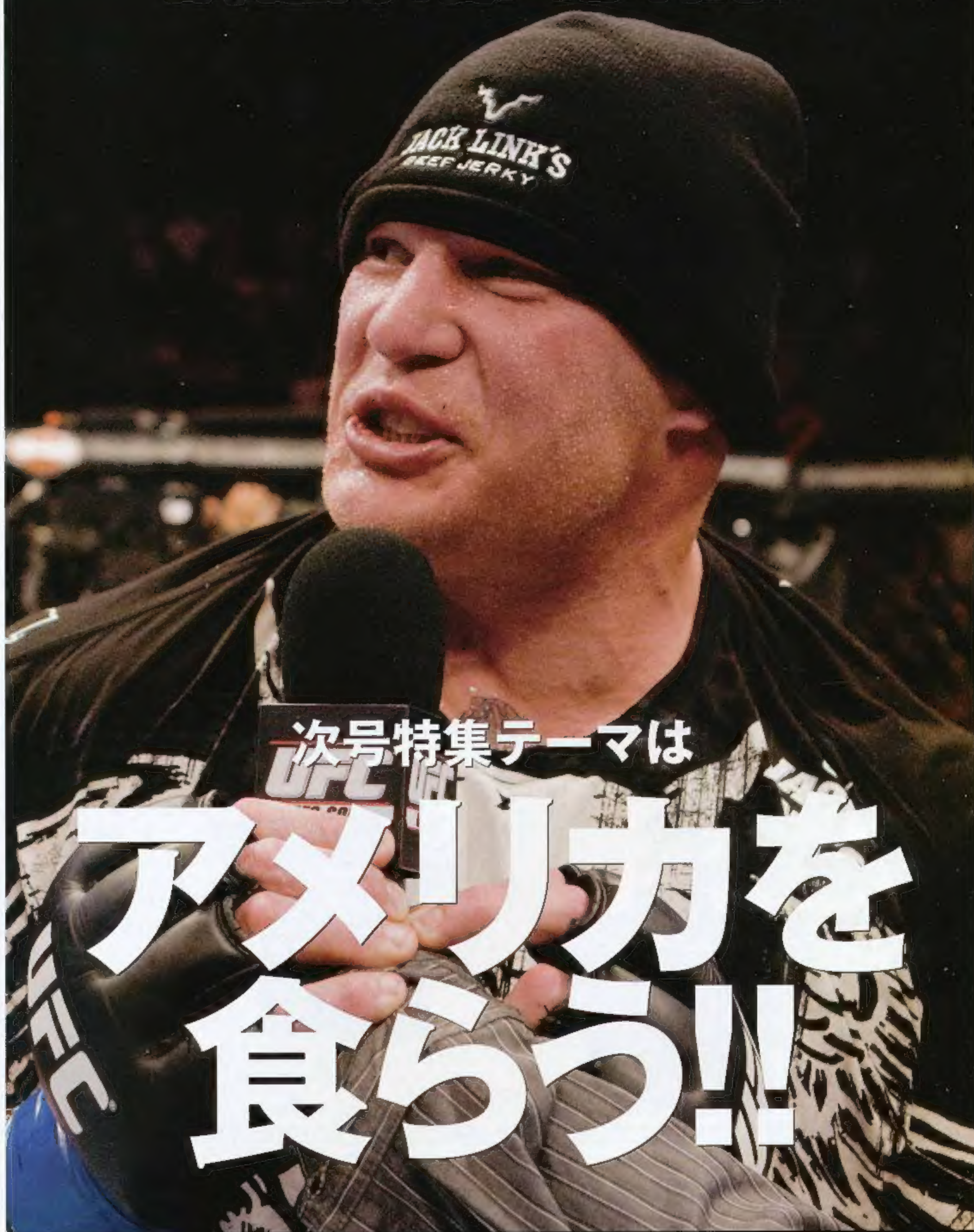
印刷
図書印刷株式会社

協力
BUSHIDO KOVOTOJO KELIAS
FightSport

■広告掲載のお問い合わせは下記まで
株式会社エンターブレイン
スポーツ企画編集部 ☎03-3265-7166

本書の内容、不良品交換等についてのお問い合わせは下記の窓口までお願いいたします。なお、内容につきましては記載以上の詳細につきましてはお答えできませんので、あらかじめご了承ください。

[カスタマーサポート]
☎0570-060-555
（受付時間／土日祝祭日を除く 12:00～17:00）
メールアドレス support@ml.enterbrain.co.jp

●個人情報の取り扱いについて
本書にお寄せいただいたハガキ、各種のお問い合わせに関連してご提供いただいた個人情報につきましては株式会社ダブルクロス、および株式会社エンターブレイン（URL: http://www.enterbrain.co.jp/）、それぞれのプライバシー・ポリシーの定めるところにより、取り扱わせていただきます。

NEXT ISSUE

4.17青木真也vsメレンデス戦、徹底詳報!!

kamipro Special 2010 JUNEは5月7日（金）発売予定!

5.29 DREAM.14直前情報満載!

No.147は5月22日（土）発売予定!

※地域によっては多少発売が遅れることがあるガオ!

ka
No.146
2010年5月7日
発行人
浜村弘一
編集人
斉藤慎一
青柳昌行
編集統括本部
ジャン斉藤
編集スタッフ
堀江ガンツ
阿修羅チョ
松下ミワ
スズキイ
八木賢太郎
終身名誉バイサ
吉田豪
助っ人
ジャイ子
編集次長(暗闘
松林貴
デザインGM
出田さん
デザイン班長
金井ヒサく
デザイン
松坂マツくん
廣田ブンち
野口ノグッち
鎚田やっち
白木みのる
カメラマン
乾 晋也
菊池茂夫
平工幸雄
吉場正和
山口比佐夫
戸成嘉則
タイコウクニ
梅木麗子
金山フヒト
丸山剛史
お勘定
工藤ちゃん
無事保護
入江オットセ
雑誌営業
堂前秀隆
中村宣忠
業務部
樽本"CTP
編集原稿
原 正典
山内ユリコ
編集チアガール
金川"ナツコ
白倉"クララ
安部"クリン
90年代バリバリ
廣橋久美子
発行所
株式会社エ
〒102-843
☎0570-06
発売元
株式会社角
〒102-817
印刷
図書印刷株
協力
BUSHIDO
FightSport
■広告掲載のお
株式会社エ
スポーツ企画
●本書の一部
ら文書による許
複写、複製する
本書の内容、不
記の窓口まで
記載以上の詳
かじめご了承く
[カスタマーサ
☎0570-0
(受付時間/
メールアドレス
●個人情報の
本書にお寄せい
運してご提供い
ダブルクロス、
http://www.en
ポリシーの定め
©2010 ENTER
Printed in Jap

年代マット界に学ぶガオ!

kamipro

『1993年の女子プロレス』に真打ち登場!

国民的主婦がデンジャラス・クイーンと呼ばれていた頃——。

北斗晶

激しかったゴールデン時代

199X

武藤敬司
福澤朗
小島聡

金原弘光×
高山善廣×
エンセン井上

U・ドラゴン×
T・G・サスケ

玉ちゃんの

大会速報、選手ブログは携帯で!
kamiproMove

kamipro 2010 146

明るく、楽しく、激しかったゴールデン時代

199X

「負けるような相手じゃなかったんだけどな……」(五味隆典)

2010年5月7日

発行人/浜村弘一　編集人/斉藤慎一、青柳昌行
発行所/株式会社エンターブレイン　〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 ☎0570-060-555(代表)
発売元/株式会社角川グループパブリッシング　〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3

enterbrain

特別定価：本体895円 +税

雑誌 61971-64 ⓗ2010.08

Printed in Japan 図書印刷株式会社